
~銀魂しんちゃん~ 大嵐を呼ぶ！踊る暇がありや映画を救え！！

虹純晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「銀魂しんちゃん」 大嵐を呼ぶ！踊る暇がありや映画を救え！－

【Zコード】

Z1846D

【作者名】

虹純晶

【あらすじ】

人気アニメのクレヨンしんちゃんと銀魂がコラボ！クレしんの映画を見ようとしていた銀さんたちは、どういうわけか映画の中の世界に取り込まれてしまう。おまけにお妙や真選組まで……。実は映画に、恐るべき危機が迫っていたのだ！みんなのしんさんたちを守るため、頑張れ銀さん！

その壱・子供の時興味なかつたアニメが大人になると妙に面白かつたりする（前

クレヨンしんちゃんと銀魂といつ、一大下ネタアニメを「ハボさせた、めちゃくちゃな作品です。読み終わつたら是非感想をお寄せ下さい

その妻・子供の時興味なかつたアニメが大人になると妙に面白かつたりする

「おーー、神樂ちゃんどビデオ買つてきたかあ？」

「大丈夫アル。録画用ビデオ買つてきたアルヨ。」

「ここは、江戸・かぶき町の一角にあるスナックの一階に位置する「萬事屋銀ちゃん」の中。主の坂田銀時とバイトとして働く神楽の会話を耳に止め、神楽と同じくここで働いている志村新ハは顔を上げた。

「銀さん、今夜見たいテレビもあるんですか？」

時刻はもう夕方。新ハは今日は万事屋に泊まるつもりだつたが、時々は姉のお妙がいる^{たえ}亡き父の道場へ帰るようにしている。

「おう、今日はどーしても見逃せない番組があるんでな。なあ神楽。

「ハイアル。」

「で、何を見るんですか。」

「これだ。」

銀時は新ハの前にテレビ欄を突きつけ、ある一箇所を指差した。新ハは顔を近づけ、読んでみた。

『午後7：00～ 映画クレヨンしんちゃん 伝説を呼ぶ！踊れ

！アミーヴー』

「……」

「な？見逃せねーだろ。」

「銀さん、神樂ちゃんはまだしも、その年でこんなもの見たいんですね。恥ずかしいと思わないんですか？」

「るせーな、お前だつてお通ちゃんのライブに変な格好で出かけて何か大声で叫びまくつてバカなことして、恥ずかしくねーのか。」

「バカとは何だ！僕らはお通ちゃんを守る聖軍なんだ！！」

「黙つてろ、ダメガネ！」

「てめーも黙つてろ！ていうかあんたら、いつもはそんなの見てないじゃないですか。どうしてまたいきなり…」

「あー、神楽が先にハマつちまつてよお。何か主人公のちんのすけとかいうやつの、大親友つていうガキのファンになちゃつて。何だつけ、風見くん？」

「風間くんアル！それにちんのすけじゃなくてしんのすけアルヨ、銀ちゃん。いい加減覚えるアル。」

「いや、俺ネネちゃん以外の名前は大して覚える気ないから。」

「ネネちゃんって誰ですか。」

「しんのすけのお友達アル。銀ちゃんはその子のファンアルヨ。はつきり言つてあんな性格悪い暴君女のどこがいいか、私分からないネ。」

「つるせーー！その暴君っぽくてでもウサギのぬいぐるみ殴るとこがちょっと可愛かつたりするのがいいんじゃねーか！大体てめーだって、あんなエリート気取りのマザコンオタク幼児のどこがいーんだよーお前オタク嫌いだらうが！」

「マザコンもオタクも、6歳未満ならOKアル。エリート気取つてるけどやっぱ普通の男の子みたいなとこが可愛いアルヨー！」

「何だとテメー、ネネちゃんはなあ…」

「あのちょっと、二人とも…」

「部外者は黙つてろ、ボケエー！」

「いや、そうじゃなくて……」

新ハは困った顔で、時計を指差した。

「いいんですか？もう7時5分前ですけど。」

「大丈夫か、新八？ちゃんと録画してるか！？」

「大丈夫ですってば、しつこいなあ。僕の言うこと信用できないんですか。」

「新八みたいな地味顔は、頼りなく見られやすいアルヨ、覚えておくアル。」

「余計なお世話だ！」

新八が言い返した時、CMを流していたテレビ画面がぱっと切り替わった。

『今日は2時間スペシャル！2006年公開の映画踊れ！アミーゴをお送りするゾ！最後にお楽しみがあるかも知れないから、見れば見れ』。

「これがしんのすけアルヨ、新八。」

「『見れば』って、何かいい加減そうな感じの子ですね。」

「仕方ねーよ、そういうキャラが売りなんだから。それより映画始まるぞ。確か始めは、よしなが先生たちが…」

「そうアル、よしなが先生がニセモノに捕まるアル。」

もはや話についていけない新八は、黙つてテレビ画面を眺めていた。

といひが。

「あれ？」

「どうしたアルか。」

映画が始まるどころか、テレビには何も映らず、さあと白い光を放ち始めたのである。

「おい新八、やっぱお前何か間違えたんじゃないのか。」

「間違つてないですよ。大体おかしいのはビデオじゃなくて、テレビの方でしょ。」

などと言ひ合ひついでに……。

ビカアアアアアン！

「うわっ、まぶしつ！」

「田え開けられないよお、銀ちゃん！」

「何かで顔隠せ……って神楽てめ、どこに顔突っ込んでんだ」「アーッ！」「

「一体どうなつて……」

そこまでだった。あとは目を潰すような閃光に頭の中を塗り尽くされ、銀時たちの意識は逆に、闇の中へと落ちていった。

三人とも、まるで予想していなかつた。これが命がけの戦いの、序章であることを……。

その武・回じものが好きな奴は自然に寄り合ひもとだ（前書き）

『銀魂』のあのキャラもあのキャラも登場して、ますますにぎやかに！銀さんたちは一体どうなつてしまつたのか！？第2章の始まりです！！

その武・同じものが好きな奴は自然に寄り合つもんだ

新ハは意識を失つた時と同じく、強い光の中で目覚めた。ただし、今度は真っ赤な光に照らされて。

「うう…ん？」

うめきながら起き上がりて、新ハは愕然とした。どこだ、ここ? ついさっきまでは万事屋でテレビを見ていたというのに…何で、こんな狭い路地の中には寝てるんだ?

辺りを見回し、今度は少しほっとした。新ハは一人ではなかつた。すぐそばに銀時がだらしない格好で横たわつており、神楽も銀時の服の中に顔を突つ込んだまま、倒れつている。一人とも盛大にいびきをかいしているので、怪我をしたりとかいうことはなさそうだ。

「ちょっと銀さん…起きて下さい、ほら起きて。」

「あー…?」

銀時はぼんやりした声と共に目を開け、そして新ハと同じように起き上がりて辺りを見回し、新ハと同じようにびっくりした顔つきになつた。

「おいっ、新ハ! 何でオレたち、こんなところにいるんだ!…」

「知りませんよ。僕が逆に知りたいですよ。」

「んもあー、何アルか。一人でギャーギャーやかましいアル…アレ、こいじこアルか?」

「あ、神楽ちゃん気がついた?」

「俺たち三人まとめてこんなとこ… 一体何でだ?」

「全く分かりません。確かにみんなで、テレビを見てましたよね。何かを録画しようとしてたような。」

「はつ、そうアル! クレヨンしんちゃんの映画はビックりなつたアルか! ?」

「やべー、俺あの映画大好きなのに。歴代映画の中で一番好きなのに。借りるのも買うのも金かかるんだよ。」

「いや、そんなこと気にしてる場合ですか。」

新八が冷静に突っ込んだ。

「今はもっと考えなくちゃいけない」とあるでしょ。僕らは何でこんなことにいるのか、そもそも何が何だのか…」

「かぶき町じゃないみたいアル。『』もないしきれいだし、建つてる建物も違うアルヨ。」

神楽の言つ通りだつた。かぶき町の路地はビルの空き缶やら色んなものが落ちていて汚らしいが、ここはそんなことがない。両側に建つ家々も、木造の日本式家屋よりコンクリート製の近代的住居の方が多じようだ。

「おいおい、かぶき町じゃないとすると、『』なんだ？」

「あ…それに、時間も変じやありませんか？僕らがテレビを見ていたのは、夜の七時頃。でも今は、明らかに夕方ですよね。夕日出でるし……」

そつ、新八の目を覚まさせた赤い光の正体は、夕日だったのである。「新八、まさか俺ら、一日近くここに寝てたんじゃないだろうな。」

「いや、それはないと思いますね。そんなに寝てたら誰かに見つけられてしまいますよ。神楽ちゃん、どう思う？」

「うーん、クレしんの録画は大丈夫アルか…心配アル。」

「まだ気にしてんのかい！」

新八がまたまたツツコミを入れた、その時だった。何やら重い、しかし柔らかい足音が聞こえてきたのだ。
しかも、近づいてくる。

「ん？ 何だ？」

音がする方を振り返ると、まさにとんでもないものがやつて来るところだった。

でつかい白い犬。一言で表してしまえばそうなるが、それにしてもでかさが半端でない。ライオンよりも熊よりもでかく、恐らく中型の象くらいはあるのではと思わせるぐらこの正体だ。

こんなものがのっしのっしと近づいてきたら、誰でもびっくり仰天

するだろ？が、この万事屋に限つてそんなことはなかつた。

なぜといふに…この「デカ白犬」は、万事屋のペットだったからである。

「あ、定春。さだはるお前も来てたアルカ。」

「そういえば、僕らと一緒に後ろでテレビ見てましたつけ。」

「じゃああのテレビ見てたせいでこんなとこ来たつてのか？わけ分

かんねーよ。」

「こつちだつてわけ分かんねーですよ。でもさうと考へる以外に…

…」

「新ちゃんの言つ通りよ。私もそれを見ていてここに来てしまつた

んだもの。」

万事屋一行は思わず顔を見合させ…それからおそるおそる、定春を見上げた。今の声が、明らかにそちらからしたからだ。

「さ、定春がしゃべつたアル…！」

「おい、そりやあねーだろ。大体こいつはオスだぜ。女の声でしゃ

べられてたまるかつてんだ。いくら宇宙生物だからって…」

しかし銀時が最後まで言わないうちに、またさつきの声がそれを遮つた。

「やだ、バカね。違うわよ、あたし、あたし。」

定春の大きな耳と耳の間から、ひょこつと突き出した顔があつた。新八が目をまん丸くした。

「あ、姉上！？」

「驚いた…姉上までここに来ているなんて。」

「私だつて、ここで新ちゃんたちに会うなんて思つてなかつたわ。」

「姉上も好きだつたんですねか？クレヨン姉上。」

新八はできるだけ丁重な口調で言つた。姉・お妙は新八より一歳年上の18歳。いつもにこにこした優しそうな美人だが、それとは裏腹にかなりの凶暴性を持つ、恐るべき女性でもある。怒らせでもしたら、それこそ手のつけようもない事態になるだろう。

「ええ、そうなのよ。最近ハマっちゃつて。私、風間くんが大好きなの。」

「姉御もアルカ！」

神楽が嬉しそうな声をあげた。なぜか神楽はお妙を尊敬しており、『姉御』と呼ぶ。

「そうなのよ。だつて新ちゃんの小さい頃にそつくりなんだもの。ああ、思いつきり抱き締めた後、女装させてみたい。」

「いや、何考へてんですか、姉上。」

「まあとにかく。」

銀時が割り込んだ。

「俺たちはクレジンの映画を見ようとして、そしたらここに来ちまつたわけだ。どうしてだ？一番肝心な謎が解けてねーぞ。」

「それに、あの映画を見てた人はまだいっぱいいたはずですよね。どうして僕らだけなんでしょう？」

「…おめーらだけじゃねーよ。」

「！？」

一同は突然降つてきた声に、ぱつと顔を上げた。

声の主は、銀時の真後ろにたたずんでいた。しかも、一人ではなかつた。

「うー、おやかこなんと」でも、てめーいらでくわすとはな……

「ひ、土方さん、沖田さん、山崎さん…」

いつも何かと関わり合つてゐるのに、江戸の警察・真選組の三人だつた。

「一体どひじて…あ、もしかしてあなたたちもクレヨンしんちゃんを見てて?」

「そーだ。」

「あーあ、マサオくんの活躍を楽しみにしてたの。わけ分かんねーや。」

沖田がぽつぽつ頭をかいている。

「マサオくん?」

「しんのすけの友達アル。泣き虫で弱虫でネネちゃんに振り回されつぱなしの、オニギリ頭少年ネ。」

「オニギリ頭?」

新八は一人、理解に苦しんでいた。

「お前、マサオくんのファンアル力。ホモアル力。」

「いや、俺はただ、マサオくんをいびつて楽しんでみたいだけださア。」

可愛い顔立ちに似合わずドジな沖田は、やうつと残酷なことを言った。

「土方さんはネネちゃん派。そつとスよね、土方さん?」

「つるせー、黙つてる。」

「銀ちゃんとおんなじアル。」

「何イ、てめーもネネちゃん好きかよ。ネネちゃんのリアルおままで」とに惹かれたクチかよ。」

「いや、俺はネネちゃんがウサギのぬいぐるみを殴るシーンに惚れた派だ。おい、お前もネネちゃんファンか?」

「え?いや、俺は違いますよ。」

と、山崎が慌て氣味に首を振る。

「俺は近藤局長にバレないよう、土方さんと沖田さんの後ろで見張りしてただけで……」

「……おいお前、何だそのラケットは。」

「……ハツ！ しまった！』

「山崎イイイ！ てめーまたミントンしてやがったのか！」のヤロオオ！』

「ギャアアアアア！』

土方にボコボコにされるミントン好きの山崎。いつものパターンである。

「そういえば近藤さんがいませんけど……。」

近藤勲こんどういさおは部下たちの信頼を一身に集める真選組局長であり、そして、お妙のストーカーでもある、お人好しの豪傑だ。土方と沖田が、彼なしで一緒にいるのは珍しいことだった。

「ああ、近藤さんには内緒でさ。この前クレしんの漫画を見てたら、『そんなもんを幕府を守る警察が読んでるって知れたら、江戸の民の信頼を失うだろーが！』ってどやされちゃいまして。」

それは真選組局長としては、当然の気持ちと言えよう。

「それなのにとんでもないことになつちまつたぜイ。ねえ土方さん。

「まったくだ。せつかく買づのメンズへせーから録画してたつとうのに……。」

「いや、あんたらもそっちのことはどうでもいいですか。」

いい加減ソッコミ疲れてきた新ハであった。でも少なくとも、近藤がいないことでは少々助かつた。姉がブチ切れるシーンを見なくて済むからだ。

「そーいやお前、何でうちの定春に乗ってきたんだ？」

銀時がお妙に尋ねた。

「あら、それはほんの偶然よ。テレビを見てたら急に画面が光り出して氣を失っちゃって、氣がつくとこの子の上に落ちてたってわけ

……あら？ あのワソちゃんは？』

その時新ハたちは、初めて気がついた。定春の姿が見えないことに

……。

「オイイ！ヤベハゼ！あいつが外に出て暴れでもしたりえりここと
だぞ！高層ビル崩しちまつぞ！」

「ゴジラジやないんですから。」

こんなところでもツツコミが出るのは、さすが新ハである。

「とにかく野放しが危険なのは確かですから、早く捜しに……。」

その時、新ハの後ろに誰かが立つ気配がした。

「あのお、すみません。この子あなたたちの飼つてるワンちゃんで
すか？」

その武・同じものが好きな奴は自然に寄り合つもんだ（後書き）

銀さんたちの前に現れた人影は！？次章からは銀魂とクレしんのキャラクターがいよいよ本格的に接触（？）！お楽しみに！！

その参・あたふたするより事実を受け入れろ（前書き）

銀さんたちの前に現れた人影の正体は？読んだら感想、是非よろしくお願いします！！

その參・あたふたするより事實を受け入れろ

「はい？」

振り向いた新ハは、目の前に巨大な鼻面が突き出されたのでぎょっとしてのけぞつた。

「おーう、定春、帰つてきたか。」

「定春がまたしゃべつたアル！」

「いえ、違いますけど。」

定春の後ろから、小さな人影が進み出た。定春がでつか過ぎて気づかなかつたのだ。5、6歳ぐらいの男の子である。

「ああ、そなんだよ。この子つちの犬なんだ、どうもありがとうございます。」

「どういたしまして。」

そう言つて、少年が頭を下げる。年齢の割に礼儀正しい子だな、と、新ハは感心した。

「にしても、大きい犬ですね。僕初めて見ました。」

それはそうだろう。

「ごめんね、連れてくるの大変じやなかつた？」

「いえ、別に。ここを通つて帰ろうとしたらうるうろしてて、邪魔だからといってよつていつたらここに来たんです。だから僕が連れてきたわけじやないですよ。」

「そうか…良かつたですね、銀さ……」

言いかけて、しかし新ハは口をつぐんだ。

銀時の顔が固まっている。神楽もお妙も真選組の三人も、みんなみんなその場に凍りついて、何も言わずに少年を見つめている。何があつたんだ？

戸惑つたのは少年も同じらしく、ちょっと後ずさりして、顔をしかめた。

「えー…あの、僕の顔に何が、ついてますか？」

神楽が叫んだのは、その時だった。

「風間くん！」の子、風間くんアルヨーー！」

「はあ？」

「えつ？ 何で僕の名前を……」

少年が最後まで言い終わらないうちに、神楽が新ハを押しのけて前に飛び出し、ぱっと傘を広げた。

「ちよつ……神楽ちゃん、何すんのー？」

新ハは慌てて神楽を止めようと手を伸ばした。神楽の傘は、実は鉄砲になつていて、彼女が少年を撃つつもりなのかと思つたのだ。

しかし、神楽の次の言葉は意外なものだつた。

「サインちょうどいいアル。」

「へ？」

新ハと、少年の声が重なつた。

「ここんとこに名前書いてほしいアル。 風間トオルつて。」

「あ、ちよつと待つて、神楽ちゃん。」

突然お妙が割つて入つた。さすが姉上、姉御らしく神楽ちゃんを叱つてくれるのか…と思つた新ハだったが、間違いだつた。

「ごめんなさい、私にもサインをいただけないかしら？ 紙がないから下駄の裏で…」

なんと少年の目の前に、自分の履いていた下駄を裏返して差し出したのである。

「姉上エエエエ！」

新ハは大慌てで一人に飛びかかり、何とか少年の前から引き離した。

「何よ新ちゃん、せつかくサインもらおうと思つたのに。」

「邪魔はいけないね。」

「こきなりあんなことしちゃダメでしょ、子供相手に…ほら、何か困つてゐるじゃないですか！大体あの子、誰なんですか？」

「だから風間くんアル。」

「いや、僕知りませんよ、そんな人。」

「んもお～、新ちゃんつたら鈍いわねえ。クレヨンしちゃんの風間くんに決まつてんじゃないの。」

「ええつ…？…でもクレヨンしちゃんつて…アニメでしょ？風間くんつてあくまで架空の人物なんじゃ……」

「あー…やつを、でもここにいるんだからしゃーねーだら。」

銀時がようやく言葉を発した。

「銀さん…まさか銀さんまで、この子を風間くんだと…」

「だつてどう見ても風間くんだもん、この子。そつくりなんだもん。」

「ああ、間違いねえ。」

「正真正銘の風間オトルくんですか。」

「トオルです。」

土方と沖田の言葉に、少年の怒つた声が重なつた。

「もう何なんですか、あなたたち。何で僕の名前知つてるんですか。クレヨンしちゃんつて何なんですか。とりあえず早く帰りたいんで、そじどいて下さい。」

「あつ、ちょつ…！」

新八が呼び止める間もなく、少年は銀時たちを押しのけてずんずん歩いていってしまった。神楽が名残惜しげに叫ぶ。

「ああーん、待つてえー。サインしてアル！」

「もうやめなよ、神楽ちゃん！怒つちやつたじやないか。」

「だつて本物の風間くんアルヨ。今度いつ会えるか分かんないアル。」

「だから、その子はアニメの中の人物なんでしょ？実在してゐるわけないじゃないですか。きっと偶然似てたか何かですよ。」

「でも名前も同じだつたみたいだぞ。」

銀時が頭を搔きながら言った。

「あれは間違いなく風間くんだ。新八の眼鏡をかけてもいい。」

「何で僕の眼鏡！？かけるもの間違つてんだろーが！」

「でも確かに新ちゃんの言う通りだわ。」

「姉上！」

新八はほつとした。やはり姉はしつかり者だ。

「私もあの子はどう見ても風間くんだと思う。でもアニメの中の登場人物が目の前に現れるなんて、絶対にありえないことよね。一体どうして……？」

「サンタさんからの贈り物じゃねーのか。何ならネネちゃんもここに連れてきてくれよな。」

「何でクリスマスでもないのにサンタさんがプレゼントしてくれるんですか。もつと眞面目に考えて下さい。まだここがどこなのかも分からんんだし……あ、あそこに電柱がある。もしかしたら住所が書いてあるかも知れないから、ちょっとと見てきますね。」

「お願ひね、新ちゃん。」

お妙が声をかけるより早く、新八は立ち上がり小走りで、電柱に近寄つていった。しばらくそこに書かれたことを読んでいたかと思うと、今度はますますわけが分からなくなつたという顔をして戻ってきた。

「どうした？新八。」

「いやそれが、どうもこ^レは江戸ですらないみたいなんですよ。見たこともない地名で。」

「だから、何ていうとこなんだ。」

「ええと、確か……春日^{かすが}市、^{べし}双葉町^{ふたば}だとか。」

「な、何だとお？マジでか！？」

「本当アルカ、新八！」

「はあ……え、二人とも、何か知ってるんですか？」

新八は他の面々を見回して、またしても自分一人が、話についていくことを悟つた。全員一様に驚いた顔をしている。

「説明しても、うえませんかね。春日部って、一体どーなんですか？」
新八の問いに答えたのは、お妙だった。

「春日部は実在するけど、双葉町はね、新ちゃん。実在しないはずの場所なの。…クレヨンしんちゃんの、舞台になつてる所なのよ。」

「…………え？」

あまりに予想外な、そして理解しがたい答えに、新八は田を見開いた。

「冗談でしょーうー？」

「本当よ。ねえ、銀さん。」

「ああ。」

「じゃあ、どーして、一体僕らは……？」

もはや新八、わけが分からなくなつてきている。

「うー、もしかしたら映画の中なんぢやないですかね、土方さん。」
沖田が発言したのは、その時だった。

「何だと？」

怪訝そうな表情をしたのは土方だけではなかつた。銀時たちも一斉に、沖田の方を見る。

「いやですからね、ここはクレヨンしんちゃんの映画の中ぢやないのかなアつて…どつしてか知んねェが、俺たちが見てたあの映画の中に、引き込まれちゃつたんぢやないんですかイ？」

「總悟…お前よく、そんなことを思いつくな。」

土方が感心とも呆れともつかない顔で、沖田を見つめる。

「でも俺はその考え方、いい線行つてると思ひぜつ。」

銀時が言つた。

「何でかはまるで分からねーが、多分俺たちはクレしんの映画の世界に入り込んでしまつた。だからここは埼玉県春日部市双葉町で、クレしんの中のキャラも実在してゐつてわけだ。」

「でも…どつして？」

「だから分からぬーって銀ちゃんが言つてんだろーが！」
新八はいきなり神楽の肘鉄を食らつて、地面に沈んだ。

「ううつ…………おいつ、何なのこの理不尽な暴力は！？」

「イラッときたアル。何回もおんなじこと繰り返すからイラッときたアル。」

「とにかくだな、今から俺たちがやるべきことは…」

銀時が億劫そうに立ち上がつた。

「…ネネちゃんのサインをもらいにいくぞ。」

「やらんでええわアアア！！！」

新八、神楽、お妙の三人分のアイアンキックを食らつて、銀時は夕焼け空をバックに3メートル吹っ飛んだのだった。

その参・あたふたするより事実を受け入れろ（後書き）

ちょっとだけ次回予告……クレ shin の映画に入り込んでしまった
らしい銀さんたちが、さらなる騒動に！？映画のストーリーと違つ
て、なぜか風間くんにいきなり危機が迫る……！？どうぞお楽し
みに！

その四・犬は耳と鼻がめちゃいいけど田が悪い（前書き）

偶然にも風間くんと遭遇してしまった銀さん一行。そして家に帰つた風間くんに迫る危機…………！？そして定春が、ちょっとだけ（？）役に立つちゃいます！？？

その四・犬は耳と鼻がめっちゃいいけど田が悪い

その夜、ベッドの中で、風間トオルは悩んでいた。

理由は一つある。母親のこと、そしてもう一つは塾の帰りに出会った、あの妙な人々のことだ。

本当に変な人たちだつた。格好もおかしかつたし（チャイナ服や和服、袴はかまを着ている人もいたようだ）、一人はなぜか、まだ若いのに髪が完全に銀色だつた。染めるにしても、普通ならあんな老人っぽい色に染めたりはしないだろうに。あのでっかい白い犬も気になるし…。

それに何で、自分の名前を知つていたのだろう？と考えれば考えるほど分からなくなる。

そして…………ママのこと。

もえエを見ていた時、トオルは見つめてしまった。はつきりと田にしたわけではないが、不気味な、何か引きずるような音と共に、赤黒い長い物体が、母親の切つていたチキンの一切れを持ち上げていくのを……。

その後振り返つた母親は何の変わりもない様子だつたものの、トオルは不穏なものを感じずにはいられなかつた。今もその気持ちは、消え去つていらない。

（…つたぐ、一体何なんだよ……）

勉強は得意だが、こういう未知の、意味不明な現象について考えるのは好きではない。幼稚園でも二セモノとやらの話を聞かされたし

…。

（ふんつ、そつくりさんか…ばかばかしい。）

そう考えて嫌な気分も捨て去ろうとしたトオルだつたが、うまくいかなかつた。これではとてもじゃないが眠れない。何か冷たいものでも飲むか……。

それにして、あの変な人たち。どうしてか分からぬが、見覚え

がある気がする。会つたよくな感じはしないのに……。心にしてだ?
……ダメだ、これじゃいつまでも頭がこんがらがつたまま。もうやめ
にしよう。

早く水を飲んで……寝なきや……。

考え込んでいたせいで、トオルはいつのまにか後ろに立った影
に気がつかなかつた。

足音がなぜか重なることに気づき、反射的に後ろを向く。それが幸
運だった。黒い影が、すじい勢いでつかみかかってきたのだ。
身をよじるよじるにして逃れるのと同時に、トオルは大きく悲鳴を上
げていた……。

「ちくしょー、腹減つたぜ…………」

「まづいですね。誰もお金持つてませんからねえ。」

「いひなつたら、私の身体で払うしかないアルナ。」

「神楽、早まるなーとにかくだな、戻る方法が分からぬ上に、金がないとなると…何とかここで、仕事を見つけるしかねーな。」

銀時たちは、夜の春日部を闊歩していた。

もちろん定春がいるのだから、表通りを堂々と歩くわけにはいかない。あくまで目立たぬよう、最初田覓めた時にいたような路地裏を選んでいるのだが、定春がでかいだけにあまり楽なことではなかつた。

そして全員、春日部に来てから何一つ口にじていいない。これが何よりこたえるのである。

「いひなりやどつかへかつぱらこにでも行きますかイ、土方さん。」

「早まらないで下さこいつ、沖田さんも！」

田に殺氣が宿つてきた沖田を、山崎が必死でなだめている。

「困りましたね、本當に…………」

「今はとつあえず、寝る場所を探さなくひやこけないわ。」

新ハとお妙がため息混じりに話しかつているとその時、思いもかけないことが起きた。

定春が顔を上げ、耳をピンと立てた。しばらくその態勢で固まつていたかと思うと、

「わん！」

大きな吠え声を上げ、一直線に走り出した。こんなでか犬が狭い路地を駆け抜けしていくのだから、当然色んなものが次々と倒れ、跳ね飛ばされ、どんがらがっしゃんと音を立てる。たまつたものではない。

これにはさすがの銀時たちも度胆を抜かれた。

「さ、定春う！待て、ちょっと待て！！」

「定春！何かおいしいもの嗅ぎつけたアルカ！？」

全員慌てて定春について駆け出した。定春が嗅ぎつけたのが何か、

知る由もなく。

「ううう…………くわ…………！」

トオルは悔しげなうめきを上げたが、どうにもならなかつた。
まるで悪夢のようだ。いや、いつそ悪夢であつてほしい。自分の母
親に襲われ、抵抗した挙句「うやつて押さえつけられているなんて

。……。

こんなの、現実じゃない！

頭上から、母親の息づかいが聞こえる。何とも不気味な呼吸音だつ
た。

「フシュウウウウ……全く、てこずらせてくれたわね。」

そう言う声も、何だかおかしい。今のママは、一体どんな顔をして
いるんだろう。想像したくないのに思い浮かべてしまい、トオルは
身震いした。

「本当はもっと遅かったんだけどね…………あなた方に感謝しなくち
や。こんな楽しい思いをさせてくれたんだもの。」

「…………？」

トオルには、その言葉の意味がまるで分からなかつた。何が言いたいんだ？

「まあいいわ、とにかく私と…………。」

ドガシャーン!!!!

「…………？」

母親の、慌てた声が響いた。

「何なの！？」

押さえつけられたままの体勢で、トオルも音のした方向へ顔を向けてた。

あんぐりと口が開いた。

ベランダに通じる窓のガラスが割れ、そこに人影がたたずんでいる。月光と街灯に照らされたその姿から、少女と判断できた。傘を持ち、中国風のドレスをまとつた少女……。

トオルは目をしばたかせた。え？ 中国服？

「あ、あんた、何者よっ！」

母親の問いかけに答える代わりに、少女の身体がこちら田がけて飛んだ。信じられないスピードで。

「ほあたアアアアアア！」

威勢のよいかけ声と共に、傘が大きく振られた……。

「大丈夫？」

「は、はあ……」

眼鏡をかけた少年の心配そうな問いに、トオルは困惑氣味に答えた。今風間家は、この時刻にしては異常なほどの人口でにぎわっていた。しかも全員、あの時出くわした変な人たちばかりだ。銀色の髪の男、眼鏡に袴の少年、チャイナ服と傘の少女、和服を着たきれいな女人、人、制服みたいな同じ服装をした三人の男に、そして……巨大な白い犬。

本当ならここはペット禁制なのだが、助けてもらつたからには文句は言えなかつた。

さつきまでトオルを押さえていた母親は……完全なまでに叩きのめされた上に縛り上げられ、制服みたいな服を着た三人のうち一番若そうな茶髪の青年に、さんざんいじめられているところだつた。今は小さなチューブ入りマヨネーズらしきものを顔に突きつけられ、なぜかさるぐつわの下から悲鳴を上げている。何であんなに怯えているのかと不思議に思つたが、よくよく見ると……赤いキャップの上に火が灯つていた。

（えつ…………何で！？）

その時、突如怒鳴り声が響いた。

「総悟オ！ てめつ何俺のライター持ち出してんだアア！！」

怖い目つきの、茶髪の青年と同じ服装をした男が怒つた顔で走つて

くる。たちまち逃げ出す茶髪。部屋の中がますます大騒ぎになつた。「おいやめろ、お前ら。他の住民さん方に聞かれたらビーするよ。またトオルくんに説明させる氣か。」

銀髪が、たしなめるように言った。そうなのだ。あの窓ガラスが割れる音を聞きつけたマンショソの住人に、トオルはいちいちもつともらしい説明をせねばならず、大変だったのである。一度もするのはごめんだ。

そして……彼らには聞きたいことが、たくさんある。

「あの……。」

「ん？」

「聞きたいことがあるんです。どうして僕を、助けにきてくれたんですか？」

どういうわけか、それを聞いた眼鏡の少年の顔が、すこしほつとなつたのをトオルは見逃さなかつた。

「ああ……こいつのおかげさ。」

銀髪が、巨大犬の頭をぽんぽんと叩いた。

「定春が……あ、こいつ定春っていうんだけどね……何か感じたらしくてさ、一目散にここまで走ってきて、お前んちの窓を見上げて吠えたんだ。それで神楽が助けに行つたってわけ。」

「神楽？」

「私のことアル。」

チヤイナ娘が振り返つた。きれいな青い瞳をしている。

「そうですか……」

はつきり言つてまだよく分からなかつたが、トオルはそれ以上突っ込んでは聞かなかつた。もっと大事なことがある。

「じゃあもう一つ聞きます。……何で僕のことを知つてるんですか？」

そう聞いた瞬間、眼鏡の少年の顔が変わつた。しまつたぞー!といふ表情に。

「ええ……え、どうしても説明しなきゃダメ?」

「はい。」

「もえ♪の特製ストラップあげるからさ、それで勘弁してくれない？」

「え、本当…………て、何で僕がもえ♪好きなこと知ってるんですか…ちょっと…！」

…このままでは、いくら頑張っても会話が泥沼化してしまうだけだと悟ったのだから。眼鏡の少年がため息をつき、銀髪の男の肩を叩いた。

「銀さん、やめましょうよ。この子、賢いんでしょ？」「まかしてもダメですし、多分説明すれば分かってくれますって。」

その四・犬は耳と鼻がめっちゃいいけど田が悪い（後書き）

風間くんを助けた銀さんたちは、彼に真実を語ることに…。それを聞いた風間くんの反応は？そして、次回はなんと銀さんが、幼稚園の に…？どうぞお楽しみに…！

その伍・幼稚園の先生志望の男って意外と多い（前書き）

風間くんを助けた銀さんたちだが、彼らの関係はどうなつていいくのか？そして銀時に加え、あのキャラまでに……！更新遅れてしまい、申し訳ありませんでした。では第5部、どうぞお楽しみください！

その伍・幼稚園の先生志望の男つて意外と多い

朝の双葉幼稚園は、昼間からは想像できないほど静かだ。ここで起きする、組長…ならぬ園長だけが知っている、しんとした静けさ。しかし、今日の園長は何だかいつもと違った。一人早々と起き出して何やら考え込んでいる。

（これで春日部の半分以上が我々の手の内に入った……）

その怖い顔に、あまり気持ちのいいものでは笑いが浮かんでいた。（フツ…まつたくあのお方は素晴らしい。あの人のおかげで、サンバを踊りまくるだけのバカバカしい人生などより、はるかに楽しい未来が我々を待っているのだからな。）

（しかし、命令が来るまではおとなしくしてろということだつたが…それまでは少し、退屈だな……）

ため息をついた時、後ろに何かの気配を感じた。てっきり自分の妻が起きてきたのだと思った園長は、

「ああ、おはよう…。」

と言いながら振り返った。

そして次の瞬間には、ちつとも退屈でなくなっていた。

幼稚園で顔を合わせるなり、トオルは予期していたが、なるべく避けたかったこと しんのすけたちからの質問攻めに襲われるこ

とになった。

「風間くんち、昨日の夜大変だつたんだって？」

一番最初に聞いてきたのは、やはり桜田ネネだつた。恐るべき情報収集能力と好奇心を合わせ持つ彼女の耳にいつたんこいう噂が届いたら、1時間後には幼稚園中の子供たちに知れ渡つていると思つた方がいい。

「は、はあ……まあ、ちょっとね。」

トオルは無理やりな笑みを浮かべて応じた。

色々と大変なことがあつたのは確かだが……。

「ドロボーに入られて、風間くんのママが乱暴されて入院中らしいわね。」

「ええ！？」

その時トオルは、もう一つ大切なことを思い出した。ネネには聞きつけたことに関して勝手な想像を膨らませるという、たちの悪い癖があつたのだ。

「ち、違うよ！泥棒なんかじゃなくて、誰かにいたずらで石を投げ

込んだらしいんだ。だからママも無事だよ。」「何だ。」

と、ネネががっかりして（ー）、でも風間くんの家つてかなり高い所だつたでしょ？よく届いたわね。」

こうこうこうこうで鋭いのも、ネネの困つたところだ。

「う、うん、確かにね……でも本当にただのいたずらだつてば。」

「でも今日は風間くんのママ、いなかつたみたいだけど。」佐藤マサオが、突然口を挟んできた。追い打ちをかけるよ、うに、しんのすけも言つ。

「今日風間くんと一緒にいたおねいさん、若くて可愛かつたゾ。あの人誰？」

「あ、ああ、あの人はね、僕の従姉で……妙子さんつていうんだ。今まで春日部じゃなくて、もつと遠い所に住んでたんだけど、ママが旅行に行つてる間、僕といってくれることになつてさ。」

「へえっ、風間くんのママ、旅行中なの？それに従姉がいたなんて、聞いたことないけどなあ。」

マサオが彼にしては珍しく、不信感をあらわにして言つた。ネネも、ボーちゃんも眉をひそめている。トオルは冷や汗が顔に出ないようになつて、必死になつていた。

ただししんのすけは、一人別のことについて怒つていた。

「風間くんつ！」

「な、何だよ。」

「ひどいゾ、あんなに素敵なおねいさんをオラにしょーかいしてくれないなんて……オラたち、大親友なのにいー！」

「うるさいつ！誰が大親友だー！」

「じゃ、小親友！」

「何だよそれ？とにかく、そつする暇がなかつたんだから仕方ないだろ！」「

実際、紹介する暇など全くなかったのだ。

なぜといつに、彼女は実に昨日の夜にできたばかりの従姉だったの
だから！

（昨夜）

「じゃ、要するにあなたたちはこことは別世界の人間で、どうこう

わけが映画の中の世界である春日部の中に入り込んでしまったというわけですか？」

銀時と新八から話を聞かされた時、そのあまりの内容にトオルはとても信じることができなかつた。

「そう……だから俺たちは、田頃からテレビでお前らを見ているために、お前のことを持つていて。お前の友達のしんのすけやオニギリくんや鼻水も……そしてネネちゃんの」とはとりわけよ～く、な。

「マサオくんとボーチャーんアルヨ。」

神楽という名のチャイナ娘が横から口を挟んだが、銀時は無視した。

「どうだ、信じたか？」

「正直あんまり。」

「だらうね。」

眼鏡少年・新八がうなずいた。

「銀さん、いきなり自分の住んでいる世界がアニメの中だなんて言われても、信じられるわけないですよ。何か証拠がないと……」

「証拠ねえ……でも俺今、クレしん関係のもの何にも持つてねーんだよな。おい、お前ら何かねーのか。」

銀時は神楽やお妙、真選組の三人の方を向いて尋ねた。しかし全員一様に、残念そうな表情で首を振つた。

「そーか、困つたな……どーすればいいもんだか……」

銀時が首をひねる姿を見つめていたトオルの脳裏に、何かがぱつとひらめいたのはその時だつた。

（ま、まさか……！）

会つたことはないのに、どこかで見たような感覚。その原因に、今突然思い当たつたのだ。

「ちよつとすみません。」

一応ことわつて、トオルは今まで銀時たちと向き合つて話していた床から立ち上がり、テレビの前のテーブルへと走つた。

「おー、どうしたんだ？」

銀時の言葉を無視して、テーブルの下を覗き込む。田畠のものは、予想どおりそこについた。

『テレビチャンネルガイド』

用ごとに、家へ送られてくる雑誌だ。新聞に載つてゐるようなものはわけが違う、注目の番組や映画などを取り上げて、見所や内容を紹介したりしてくれている。トオルの母親もお気に入りで、気になる番組の載つたページに赤いしおりを挟むようにしていた。

トオルも同じように、青いしおりを挟むことにしていたが、大抵はもえPや魔女っ子マリーちゃんの載つているアニメページに挟むことが多い。今月号のも一つ、マリーちゃんの番組内容が取り上げられているページに一枚挟んであつたのだが……。

そこを開いた時、トオルは鼓動が痛いほど激しく打つを感じた。マリーちゃんのせいではない。そのまま隣に載せられた番組のせいだ。

(あつた……でもそんな…………)

「どうしたんだい、大丈夫？」

新八の心配そうな声がした。トオルは慌てて顔を雑誌から引き離した。

「は、はいっ、大丈夫です！……あの、ちょっとこれを見ていただけませんか？」

「んん？ どうした？」

銀時がトオルの方に身を乗り出した。

「何だそれ、チャンネルガイド？ あ、それマリーちゃんの番組じやん。お前ほんとにおタクな……ぶつ……！」

「風間くんをバカにする奴は許さないネ。私の傘でお仕置きアル。『いてえな、つたく……』で、トオルくん、見てほしいもんつて何よ？」

「ええ…実は……」

トオルはしばしめためらつていたが、やがて決心したように雑誌を銀時たちの方へ突き出した。

「…！」に、あなたたちが載ってるんです。」

「へ？」

銀時の死んだ魚みたいな目が、一瞬見開かれた。

「何言つてんの？そんなわけ……」

言い返しかけた銀時の言葉が、雑誌の開かれたページに目を落とすと同時に消えていった。他の面々も、息を呑んでそれを見つめている。

マリーちゃんの項目の横にあるアニメの項目。そこの題名には『銀魂』と書かれ、それについての説明が書き連ねられている。そして、その隣のアニメの絵の中には……。

「僕がいる…」

新八が、無意識に眼鏡を上げ下げしながら言つた。

「私もいるわ。」

「私……実物の方が美人あるナ。」

「ふうん、なかなかうまく描けてるじゃねえか。なあ総悟。」

「どうだかねエ……あ、近藤さんもいらっしゃア。」

「俺は…いない」（泣）

「そんで…これが何だつて言つの、風間カオルくん？」

「トオルです。」

明らかに動搖している銀時であった。

「つまり、あなたたちの方が、アニメの中の人物だつてことですよ。僕たちじゃなくて。」

「はつ？ははははは…！」

銀時が笑い出したが、やや引きつった声だった。

「何言つてんだよ！アニメの中の人物が実在するわけ……」

「さつきまで僕に対して、あなたたちがそう言つてたんですけど。」

「で、でも、証拠が……！」

「この雑誌が証拠です。僕も信じたくなりませんけどね。」

「……」

トオルの論理的な意見に、銀時は言い返せなくなってしまった。神楽たちも互いに顔を見合させた。今まで自分達がアニメの世界に来たつもりだったのに、その逆ではないかという事実を突きつけられたのだ。さすがの彼らも、ただ混乱して黙り込むしかなかつた。

ただ、一人を除いては。

「トオルくん、こんな考えはどうつかな？」

落ち着いた聲音に、銀時たちは驚いて顔を上げた。

新八だった。

「ここでは僕たちがアニメになつてゐみたいだけど、僕たちのいた所では君たちがアニメになつてゐるんだ。つまりどっちもアニメなんだけど、そのアニメの中の世界というものがお互に独立してできている……別の時空に存在しているとでも言えればいいのかな。その独立した世界が、何でか知らないけどお互いのアニメをその世界で放送することによって繋がつていた。そしてこれもどうしてか分からぬけど、僕らはその繋がりを通してここへ来てしまつた……。」

しばらくの間しんとして、誰も、何も言わなかつた。やがてトオルが、ぽつつと呟くように言つた。

「僕らのいる世界も、あなたたちのいる世界も……両方お互にアニメの世界で、実在していると言つんですか。」

「そなんだけど……納得できないかい？」

「全然アル。もつと分かりやすく説明するヨロシ。」

神楽がきつに口調で言つた。もともと眼鏡嫌いな神楽は、新ハに少々厳しい。

しかし、トオルは「こう言つた。

「いえ、論理的でとても分かりやすい説明でした。どうもありがとうございました。」

「あ、そう？」

「はい、僕も新ハさんの言う通りじゃないかと思えてきましたよ。」

銀時を始めとする男たちは、一様にショックを受けた顔をした。彼らのうち誰一人として、新ハの言うことを理解できなかつたのである。それなのに、五歳児のトオルが納得したと言うのだ。

いい大人の彼らが落ち込むのは当然であろう。神楽とお妙はトオルに対する日の輝きを、さらに増しただけだが……。

「じゃあ僕らのした話も、信じてくれるかい？」

トオルがうなずくのを見て、新ハは大いにほつとした。

しかしすぐに、別の心配事が頭をもたげてきた。

「しかし、これからどうしましよう、銀さん。帰る方法も見つからないし、何とかここで暮らしていくには……まさか段ボールに住むわけにもいかないでしょ。」

「そんなこと言われてもよ~。」

銀時の声には、いつもに増して生気がなかつた。

「俺、IQ五歳児以下だし。」

「ちょっとオ~ひねくれてないで真面目に考えて下さ~よ~。」

「あの~。」

トオルが口を挟んできた。

「もしよかつたら、僕の家で暮らしませんか？」

「えつ~？」

新ハたちは一瞬、聞き間違えたのではないかと思つた。

「もちろん全員がここに住むことはできないけど、実は今、両側の家で売りに出されていたのが一つあるんです。つい最近、何かに使えるかもってママが両方買つたんで、僕たちが自由に使つていいん

ですよ。」

「ひょーっ、マジかよー。やつぱ金持ちは違うねー。」

沖田が感嘆とも皮肉ともつかない声を出した。新ハが、ふと思いついたように言つた。

「最近つて……それつて君のママが、ニセモノに替わられる前、それとも後?」

「それは……分かりません。……あれ?ママのそつくつさんは?トオルが思い出したように田を見開いた。

「あつ!」

沖田が口を押さえて叫ぶ。

「やべー、もつと色々するつもりで縄ほどいて、そのまま忘れちまつてた!」

「んだとオ!」

慌てて一同が戻ってきた時には、当然ながらトオルの母親のニセモノの姿はなくなつていた。見れば、ドアが少し開いている。そこから外へ逃げ去つてしまつたのだ。

「総悟オオオ!てめつ、何でほどいたりしたんだバカヤロオ!」

「すいやせん、土方さん。でも俺はもつと……」

「分かつた分かつた、もーしゃべんなー分かつた!」

土方は荒々しく遮つた。サディスティック星から来たサド王子である沖田が実際に縄をほどいてから何をするつもりだったのか、聞くつもりはない。

「ちつ、奴らのアジトがどこか、聞き出すつもりだったのに……。

「残念だつたアルナ、姉御。」

「ぶしを『キバキ鳴らす』一人を見ながら、ある意味逃げたのは正解だつたかも知れないなと山崎はひそかに思つた。

「まー逃げちまつたもんは仕方ねーが……」

銀時が言いかけて言葉を止め、ちょっと眉をひそめた。

「?どうしました、銀さん。」

「…………あ、いや……。」

「ほーっとしないで下さいよ、まつたく…………や、それじゃこれからの「」と云つて、話してから寝ましょ。なるべく早く済ませな
くちや。」

「……風間くん？風間くん、びうしたの？」

「…………ん？あ、な、何？ネネちゃん？」

「何？じゃないわよ。ちゃんと人の話聞きなさいよね。」

トオルは頭を振った。それで何とか、回想から現実に戻ることがで
きた。

「ごめん……で、何の話をしてたの？」

「それがねえ、よしなが先生が今日から少しの間お休みになつて、

代わりに新しい先生が来るそつよ。」

「ええっ！？ 本当！？」

トオルは思わず聞き返したが、こういう情報に関して、ネネはガセネタを持つてきたことがない。現実の問題が、束の間頭の中から吹つ飛んだ。

「よしなが先生がどうして……昨日はあんなに元気だったのに。」
実際、元気過ぎるくらいだつたのだ。

「それは分からぬけど……新しく来るのは、男の先生らしいわよ。」

「なーんだ。」

五歳にして無類の女好きであるしんのすけは、目に見えてがっかりした。

「かつこいい人だといいのに……。」

夢見口調で言うネネに、

「椎造先生みたいな？」

と、マサオが柄にもなくからかつようと言つた。一度教育実習として双葉幼稚園に來ていた熱繩椎造あつくるしいぞうを、ネネは当初嫌つっていたのだが、あることをきつかけに大好きになつてしまつていたのだ。

「やだ、マサオくんつてば、変なこと、言わないでよ。」

ネネの顔が、ぽつと赤くなつた。

「と、とにかく、どんな人かはもうすぐ分かるわ。園長先生が、園庭で集会をするらしいから……。」

ネネの言葉が終わらないうちに、ばら組の担任、まつざか梅先生が園庭へ出てきて、大声でふれ回つた。

「みんなー、園庭に並んでちょうだい！ 大切なお知らせがあるからーーー！」

「大切なお知らせって…多分新しい先生のことだよね。」

「ええ、それによしなが先生のこともよ、きっと。」

ネネとマサオが、ひそひそ話しあっている。一人共何だか不安そうのは、よしなが先生のことを心配しているからだろう。トオルも心配だった。何しろ昨日の夜あんなことがあつたばかりだ。僕みたいな目に合つた人が、他にもいるかも知れない……。その時、しんのすけが話しかけてきた。

「ねーねー、風間くん。」

「ん? 何だよ、しんのすけ。」

「なんかまつざか先生と上尾先生、困つた顔してるゾ。」しんのすけの言つ通りだつた。二人とも困惑した、戸惑いの表情を浮かべている。やはりよしなが先生に何かあつたのではと思つたが、それならもつと深刻そうな顔をしていそうなものだ。

しかしその原因は、すぐに判明した。

「…ん? あれがもしかして、新しい先生かな?」

幼稚園から出てきた人物に氣づき、マサオが首をかしげた。その人物　若い男は、ためらいもなく子供たちの前に進み出て、こちらをじろりと見下ろした。

「うわっ、あの人、髪が真っ白よ。すごい悩みでも抱えてんのかしら。目なんか全然活気がないし……」

「死んだ、魚みたいな目。」

「そうそう!」

トオルはひまわり組の列の一一番後ろに座つていた。それが幸運だつた。酸欠状態になりかけているところを、誰にも見られなくて済んだからだ。

今、自分たちの前に立つてゐる男。それはまぎれもなく、昨日の夜

家に乱入してきた者たちの一人の、銀髪の男、坂田銀時だったのだ！（なんで？なんで？なんで？）

何でこの人が、こんな所にいるんだ？朝になつたらいいと思ったら……。

「何で園長先生、出てこないんだろ？」

トオルの心境に気づかないマサオが言つと、それが聞こえたかのように、とりあえず眼鏡をかけて服装も先生チックに決めた

銀時が答えた。

「どーも、今日から臨時の園長になりました、坂田銀ハです。銀ぎんハ先生と呼んで下さい。」

「ええ～つ～？」

子供たちの仰天の叫びが、園庭に響き渡つた。

「組長は…怖いお顔の園長先生はどーしちやつたのーー？」

さすがのしんのすけも、これには驚いたらしい。すると銀時は頭をかきつつ、かつたるそとに答えた。

「あー、お前らの園長先生はな、どっかの天然パーマに襲われて行方不明だそうだ。」

沈黙と共に、それ明らかにお前だる的な空気が流れ出したが、銀時は見事に無視した。

「あとよしなが先生も行方不明になつた。でも二人とも、命に別状はなかつたらいいのにな～。」

「あれ？ その言い方つてただの願望じやないですか？」

「まあとにかく。」

マサオの言葉も完全にシカトされた。

「ひまわり組に新しい先生が来ることになつた。…おい、出てこい！ 何してんだボケ！！」

幼稚園からもう一人、男が出てきた。

トオルの背中をいや～な感触が走つた。もしかして……もしかして

！

「えー、熱烈マヨラー先生の、
土方十四郎ひじかたとうじろうくんだ。
」

トオルは失神寸前だった。

その伍・幼稚園の先生志望の男って意外と多い（後書き）

銀さんと土方が、幼稚園の園長と先生に！しかしこれにはある真面目な理由があつた…………。そして次回はしんのすけと、あの意外なキャラが接触！？今まで登場機会のなかつたしんのすけの暴走ぶり（？）が見たい方、どうぞお楽しみに！！あと、どうぞ感想をお寄せください。あまり送られてこないので悲しいです…………。ぜひお願いします！！

その六・老化せぬ肌と髪のモカド（前編）

久しぶりですー。いつも申し訳ありませんでした。では第6話、どうぞー！

その六・老化はお肌と髪の毛から

「一体、どーいうことなんですか！」

誰にも見咎められる心配のない茂みの奥深くで、トオルはできるだけ声を低めて叫んだ。相手はもちろん、勝手に幼稚園に居座つてしまつた一人の先生　　銀ハならぬ銀時と、土方である。

「まあ待て。落ち着け。」

「落ち着けるわけないでしちゃうが！」

トオルの興奮は、高まる一方だった。

「朝になつてから隣の部屋に行つたらいなくて、心配していたのに心臓止まるかと思いましたよ！」

トオルは両側の空き部屋二つを、銀時、神楽、真選組たちに貸してやることにしていた。

ちなみにトオルの家に住むことになつたのは、新ハとお妙の二人。彼らはトオルの従姉兄という設定になつていて。そしてさつきしんのすけたちに説明したように、母親は旅行中でしばらく帰つてこないということにしておいた。

そして翌日になるといきなり、銀時と土方の姿が消えていた。神楽や沖田に尋ねてもさつぱり要領を得ず、気がかりに思つていたのだが……。

トオルは自分を落ち着かせようと、大きく深呼吸をした。

「大体、よしなが先生たちをやつつけたのつてあなたたちでしょ？」

「何つ！？」

二人はとても驚いたような顔をした。

「何で分かつたんだ？」

「誰だつてそう考えますよ。だつてもろに怪しいですもん。」

実際、ネネは一人の素性に非常な興味を抱き始めている。これはよくない兆候だ。

「ネネちゃんに嗅ぎつけられたら、あなたたちの正体は瞬く間にバ

レちゃいますよ。」

「ふーん、そりや困るな。」

他人事みたいな銀時の返事。

「何ですかその言い方。第一職を得るにしても、もつと目立たなくて適切な仕事があるでしょう? 何でよりにもよつてこんな…………。」

「まあ待てつて。別に俺たちだって、遊びでこここの先生になつたんじゃねーよ。」

銀時が、鼻をほじほじしながら言つた。千歩譲つたとしても、幼稚園の園長と言えるような格好ではない。

土方など、タバコを吸う気満々でライター（マヨネーズ型）とタバコの箱を取り出しているのだから、論外である。

「そーは見えませんけどね……ていうか、遊びのつもりでここに来たら、死にますよ、あんたたち。」

「えつ、死ぬの?」

「何? 実は手榴弾とかミサイルとか隠し持つてる子がいんの? なかつたぜ、そんな設定。」

「いや、そういう意味じやなくて。」

新八ほどツツ「ミミ慣れていないトオルは、一人をさばくのに苦労していた。

「しんのすけみたいな問題児がいますからね、そういうのに付き合つてたら、疲れ切つてしまつてことですよ。死ぬつていうのは、あくまでたとえですから。」

「あ、そう。」

簡単に返事して、再び鼻ほじを始める銀時。見れば、ほじつている鼻の穴から赤い液体が…………。

「……銀時さん、鼻血出でますけど。ほじり過ぎじゃないですか?」

「あー? いや、じつや違つよ。この前板チョコ30枚食つたせいやよ、きつと。」

「さ、30枚い!?」

前代未聞の板チョコ消費量に、トオルは目をむいた。

「ダメでしょ、そんなに食べたら！ ていうか鼻血ぐらこじや済みませんよ、糖尿病になりますよ、絶対！」

「心配すんな、もうなりかけてるから。」

「余計にダメでしょーが！… って土方さん？ ちょっとオ、タバコ吸つちゃダメですよ、幼稚園で！ 即刻クビになりますよ！ 第一タバコは体に毒だし、それに何そのライター？ どこで売つてたんですか！？」

「つっこむところが、いくらでもあるのだ。」

「ちつ。」

土方は舌打ちしたが、一応タバコはポケットにしまった。

「ちょっと待てや、トオル。そもそもお前は最初に、何で俺たちが幼稚園の先生になつたのかつて聞いたな？ つまりは、それが一番知りたいことなんだろ？」

「あ…は、はい、そうです。」

冷静な言葉に虚をつかれた形になり、トオルはたじろいだ。でもおかげで、頭の中の混乱と興奮が少しおさまってきたようだつた。

「じゃあ教えてやるつ。いいか、こじが『クレヨンしんちゃん』というアニメの、『踊れ！アリーナ』の映画の中の世界らしこうことは昨日話したよな？」

「はい…。」

「でもな、何だかおかしいんだよ。」

「え？」

あんたたちがこじに来たこと自体がおかしいんですけど、と言つてやりたいのをこじらえ、トオルはもう一度聞き返した。

「おかしいって？」

「お前は登場人物なんだから知らねーだろうがな、実際の映画のストーリーと、今こじで起つてることが違つんだ。」

「？？？」

「つまりだな、実際の映画では、あらすじは大まかに言つて、こじになつてゐる。」

銀時が、箇条書きを読み上げるみたいな感じで説明を始めた。

- ・ まづよしなが先生が誘拐される。
- ・ 翌朝、よしなが先生のハイテンションに、みせえと園長がドン引
 め。
- ・ 明らかにおかしいあいちゃん。マサオくんに優しい。
- ・ ボーちゃんがしんのすけたちにそっくりさんの話をして、びびら
 せる。
- ・ よしなが先生が園長先生を、今夜会おうと誘つ（怪しい意味じや
 ないからね）。
- ・ 風間宅にて、風間くんがもえPを見ると料理中の母親の顔が怪
 物化。風間くんはその後ろ姿を見て、不穏なものを感じる。
- ・ 野原家はいつも通り。
- ・ 翌日幼稚園で悩む風間くん。
- ・ よしなが先生ががびょうを踏むが、何も感じてない。
- ・ 怪しい園長先生も出現。風間くん大ピンチ！
- ・ しんのすけが助ける（本人無意識）。
- ・ ママは本物だと言い放つ風間くん。でも母親の顔がまた…。
- ・ 野原一家、新しいデパートへ。そこで謎の美女を見かける。
- ・ 全員ばらばらに。しんのすけが謎の美女をナンパ。
- ・ そこへみせえ登場。妙に優しいと思つたら、やはりニセモノ。
- ・ 謎の美女、ニセモノを撃退！ニセモノは物体X化して逃亡。
- ・ 謎の美女、サンバホイッスルを拾う。
- ・ みせえとひろしは自分に見られていた気がすると不安げ。
- ・ 翌日、しんのすけはみんなにそのことを話す。
- ・ 春日部音頭のカセットがぐちゃぐちゃにされて放棄。
- ・ しんのすけの大人マンモス発動。
- ・ サンバの曲がかかつた途端、ニセモノたちが踊り出す。
- ・ 曲をかけている間に逃げよつとするも、ニセ黒磯の誘惑で上尾先
 生捕獲。

- ・マサオくんも「セあ」ちゃんの誘惑を受けるが、振り切る。
- ・門をふさがれ、まつざか先生は自分を犠牲にしんのすけたちを逃がす。

- ・川口の異変に気づき、帰りの電車内で怯えるひろし。
- ・風間くんが帰宅決意。
- ・春日部駅で待ち受けていた川口の「セモノ」。追っ手をかけられ、ひろし逃亡。
- ・しんのすけたち帰宅決意。
- ・風間くんニセ風間親子に捕獲される。
- ・みんな家へ帰る。
- ・ひろし、ひたすら逃亡中。といひが…。
- ・野原家にて、しんのすけとひろしが入浴中。ひろしはやたらと上機嫌。
- ・そこへひろしが帰宅! どつちが本物だ?
- ・結局アソコを痛がるかどうかで決着。「セモノ」は追放。
- ・一安心する間もなく、家を取り囲む川口たち「セモノ」の群れ。シロを中に入れようとするが、入らない。
- ・このひろしもニセモノかと思いきや、「セモノ」はなんとしんのすけでした。ハイ、フェイント
- ・「セしんのすけもいなくなり、車で家に突っ込まれ、敵に囲まれた野原一家(しんのすけ不在)。
- ・そこへさらに車が突入! 乗つてたのは本物のしんのすけと、あの時の美女。名前はジャッキー。車で野原一家逃亡!
- ・ニセ風間くんたちに捕まりかけていたネネちゃんたちを救出。
- ・春日部、春日部山と大爆走。でも結局ジャッキーとシロ以外は捕まる。
- ・春日部山の「ノンニヤク芋畠」の中にある地下アジトへ連行されるしんのすけたち。
- ・ニセモノの正体は、コンニヤクを元に作られる「ノンニヤクローン」でした。

・ラスボス、アミーゴスズキ出現。目的は世界をサンバ一色にすること。

・ジャッキーが、シロと仲間と一緒に現れる。

・変なピンクの液体でニセモノを撃退。ジャッキーは水着姿でアミーゴスズキとサンバ対決へ。

・しんのすけたちはニセモノを蹴散らしつつ大爆走。勢いつき過ぎて扉に激突する。

・中には捕われてサンバを踊らされる春田部の人々。曲を止めて踊りも止める。

・ジャッキーはサンバ対決で劣勢に。そこへしんのすけたちが駆けつける。

・みんなでサンバを踊り、春田部音頭も踊つて、アミーゴスズキを圧倒。

・アミーゴスズキの部下に撃たれ、ジャッキーが倒れるが、胸に入れたサンバホイッスルのおかげで無事だつた。

・アミーゴスズキの正体は男で、しかもジャッキーの父だつた。

・しんのすけはジャッキーから、例のサンバホイッスルを渡される。・最後はニセモノたちが次々と花火となつて舞い上がり、みんなでサンバを踊つて終了。

「……と、いう感じだ。何か質問あるか？」

「はあ……何というかその、めちゃくちゃですね、内容が。何でサンバなのかも分かんないし、大体こんなのに文章費やすの無駄じやないですか？」

「いーんだよ、もつといつぱい文章書いて、目立たなくすればいいだけの話だ。」

筆者に思いやりのない銀時であつた。

「大体何ですか、しんのすけのニセモノのところの『ハイ、フェイント』って。なんかムカつくんですけど。」

「あれは演出だよ、話を盛り上げるための。」

「いらっしゃるわ、そんな演出！」

「まあとにかくな、トオル。」

土方が、うまいこと会話の舵を握った。

「お前が母親のニセモノに捕まるのは、もつと後の日のはずなんだ。それなのに、つい昨日に襲われた。それだけじゃねえ。」

土方は自然な動作で、再び取り出したタバコに火をつけ、吸い始めた。あまりにその動きが自然だったので、トオルは注意するのを忘れてしまっていた。

そして土方は、急に改まった様子で、地面に座り直し、トオルを真正面から見た。

「お前、覚えてるか？母親のニセモノに捕まつた時、何を言われたか。」

「何つて……」

あまり思い出したくない記憶を無理やり呼び起し、そしてト

オルは思わず、あつと声を上げた。

『本当はもつと遅かつたんだけどね……あのお方に感謝しなくちや。』

「思い出したか。」

土方が、にやつと笑つた。

「あの時、俺もあいつの言つてたことを耳にした。『本当はもつと遅かつた』ってな。気になるじゃねえか、え？」

「……」

「しかもあいつは『あのお方』とも言つた。ところとは、トオル、分かるか？奴らニセモノを支配してゐる誰かがいて、そいつが映画の本来の話とは違うように事を運ぼうとしていると考えられるんだ。何のつもりかは知んねーがよオ。」

トオルは頭がややここんぐらがつてきたが、何とか持ち直そつと努力した。

「どうこつ」とです？映画の話じや、アリー「ゴスズキつて人がサンバで世界を支配しようとして、二セモノを作ったんですね？それがどうして変わつちやうんですか？」

「分からねえ……。」

土方が眉を寄せた。

「でもあの二セモノは…今奴らを使つている敵は、サンバで世界を支配なんて平和なこと考えちやいねえと思うんだよな。なんかもつと、じす黒くて危険な香りがする……。」

土方の開き気味の瞳孔が細められ、鋭い光を放つてゐるのを見て、トオルは背筋が寒くなつた。この人、向こうでは警察みたいな仕事をやつてたつていうけど、こんな怖い警察の前なら、どんな凶悪犯も降参して捕まつちやうだらうな……。

それにひきかえ、銀時は相変わらず死んだ魚みたいな目をして青空を見上げていたが。

「じゃあ園長先生や、よしなが先生は……？」

「それまでの話の筋に従えば、一人共確実に替わられている。もしかしたらお前の母親みたいな、狂暴な奴に取つて替わられてるかも知れねえからな、先手を打つたんだ。二セモノに色々吐かせようと思つてたんだが、足が予想以上に早くてな、逃がしちまつた。」

「昨日のよしなが先生…いつもとは違つたけど、別に危険な感じじや……」

「お前の母ちゃんもそだつたんじやねーのか？」

銀時にそう言わると、トオルも返す言葉がない。しばらく考えてから、小さく言った。

「じゃあ…僕たちを、守つてくれますか？僕を助けてくれたみたいに、二セモノから守つてくれますか？」

「は？」

銀時と土方が、同時に口、惑いの声を上げた。トオルはひるまず、続けて言つた。

「子供たちを危険から守るのは、先生の仕事ですよ。できないんですか？」

「はあ、そりやあ…………それぐらい、できるか、なあ？」

「つたりめーだろ、俺を誰だと思つてゐ。お江戸を護る真選組副長だぞ。」

「え？ 何組ですか？」

トオルが聞き返したが、その件はそれ以上追求されずに終わった。マサオがこちらへ走つてきたのである。

「先生っ、大変ですっ！」

「ど、どうした？」

茂みをかきわけ現れるマサオに見られる前に、土方は慌ててタバコを地面に落とし、ひたすらぐいぐい踏みにじつて火を消した。幸い（？）マサオは取り乱していく、土方の不審な行動に気がつくどころではなかつた。

「 shinちゃんが…いなくなりました！」

「えええええ！」？

銀時、土方、そしてトオルの叫び声が、見事重なつた。

「何でえ！？誘拐？かどわかし！？」

「土方さん、最後の言い方古いです！かどわかしなんて、今時の子供は知りませんから！…！」

「お前知つてんじゃねーかア！」

「マサオくんが悪いのよ…」

突如甲高い声が割り込んできた。マサオの後ろからやつて来た、ネである。

「マサオくんがネネの打つたシャトルを、ちゃんとキヤッチしなかつたからよー！」

その時トオルは、一人がラケットを持つてゐるのに気がついた。テニスのものにしては軽くて、細い。バドミントンのものだらう。「だ、だってネネちゃん、あれ僕の倍の高さぐらい飛んだよ？あんなの取れっこないじゃん…！」

「そんなことないわ！おもつきりジャンプすればいけたわよ、絶対！」

「そーだ、マサオくんが悪い…！」

ネネちゃんラブの銀時と土方が声をそろえて叫んだので、トオルは慌ててマサオくんに質問を向けた。

「それで、何でしんのすけがいなくなつたの？」

「そ、それが……ネネちゃんの打つたシャトルが塀を飛び越えて、すぐ横に停まつてた車の上に乗つちゃつたの。それをしんちゃんが取りに行つて……。」

トオルは顔をしかめた。話の展開が、分かつた気がしたからだ。「しんちゃんが車の上に乗つた途端、車が動き出したの。それでそのまま…」

やつぱりやつやつ來たかああ…！…

「どうしよう…。」

マサオはおろおろするばかりで、ネネはそんなマサオをこらみつけている。トオルは先生方一人を振り返つてみた。

「てめーが探しに行け、俺はネネちゃんとおままでしてるから。」「あア？何言つてんだてめえ、ネネちゃんの夫役は俺だ。」

トオルは頭が痛くなつてきた。気絶しかけたり頭痛を起したり、忙しい一日である。

「困ったなあ。」

全然困つてなさそうな口調で、そう呟いた小さな人影があった。

そう、我らがヒーロー（…？）、天才おバカ五歳児の、野原しんの

すけである。

前述の通り、バドミントンのシャトルを取ろうとして上に乗つた車に運ばれ、何とか飛び降りた時には幼稚園から大分離れた所に来てしまつていた。

でもいつでもマイペースなしんのすけのこと、バドミントンのラケットを背負つたまま、ひょこひょこと当てもなく歩き出した。別に

どこという当てもなかつたのだが……。

しんのすけは不意に、なじみのある場所が目の前に現れたので驚いた。

いつも防衛隊のみんなと一緒に遊ぶ公園だ。当然ながら、しんのすけの思考は『遊ぼ遊ぼ！』という方向に向かつ。

しかし足を公園の中へ進めたしんのすけは、再びぴたつと立ち止まるようなものを田にすることになった。

公園は、無人ではなかつた。

「フンッ、フンッ、フンッ！」

荒い呼吸音と共に、汗みずくになつてラケットを振つてゐる男。それも一人きりの。

しんのすけの田には、それが怪しい人物の姿としか映らなかつたようだ。

しかしじりじりと、公園から出て行こうとしたその時、二人の視線が見事にかち合つてしまつた。

「おわッ！」

「うわッ！」

仰天したのは、男も同じだつたらしい。お互に大声を上げてしまつた。

しかし男の方は、相手が子供だと分かると明らかに安堵の表情を浮かべて胸をなで下ろした。

「何だ……副長かと思つた……。」

そして、しんのすけをまじまじと見つめる。しんのすけはその場に固まつたまんまだつた。

「…君、どうしてかちんこちんになつてるんだい？」

男に首をかしげて尋ねられ、しんのすけはようやく声を発した。

「お兄さん、怪しいゾ！」

「えつ、俺のどこが？」

男は本当にびっくりしたらしく、自分の身体を上から下まで眺め回している。しんのすけが追い打ちをかけるように言葉を続けた。

「だつてさつきから変なもの持つて振り回して、フンフン言つてゐんだもん。気持ち悪いゾ！」

「き、気持ち悪い！？」

完全に面食らつた様子で、男は自分の手にあるものを見た。

「別にこれは変なものじゃないよ。ミントンの時に使つたラケットや。つてあれ？ 君も持つてない？」

「お？ これ？」

と、しんのすけは背負つていたラケットを眺めた。

「おお、確かに兄さんのとおんなじ奴だゾ。」

「へえ、じゃあ君もミントンをやるんだね。」

「違うもーん、オラたちそんなのしてないもーんだ。」

「えつ？ ジヤ、何に使うの？」

「えーとね、羽根みたいな変なのをこれで打ち合つて。落としたら負け。」

「いやそれだよ…それミントンじゃん…！」

「お？」

ついついまれで、目をパチクリさせるしんのすけ。

「ミントンって…何？」

「バドミントンのことだよ。」

「バドミントン？ それってクリキントンの一種？」

「君、知らんとやつてたの？」

男は心の底から呆れた声を出した。

「でもやっぱり一人でやつてるのは変だゾ。そういうのはみんなでやるもんだゾ。」

「うん… それはまあ… そつなんだけね…」

「あつ、分かつた！」

しんのすけがぽんと手を叩いた。男がきょとんとしてしんのすけを見る。

「お兄さん、友達がいないんだな？だから一人ぼっちでそんなことしてるんだ！」

「はあ？」

「んもー、それならオラがお友達になってあげるゾ。しょーがないなー、じゅ、一緒にキントンやろつー。」

「…//ントン、だからね。」

最後に男が一言、弱々しくジッコミを入れた。

何なんだ、この子は？

山崎退は戸惑っていた。

彼は土方や沖田と違い、クレヨンしんちゃんのアニメをほとんど真面目に見ていない。だから目の前にいる少年が、あの人気アニメの主人公だということなど分からなかつた。

それでも、変わった子供だということはよーく分かつた。

（困ったな…でもまあ、やってあげるか…。）

向こうは親切心から行つてこるので、それをむげに断るJとはない。山崎はミントンの体勢をとるJとした。

が、すぐに田をむいた。

「…君、どこにラケット挟んでんの！？」

少年は今まさに、自分のラケットを自分の尻の間に挟んでいたJころだつた。もちろん尻は、丸出しである。

「さあ、オラのケツをばきを見せてやるゾ！」

ラケットを尻に挟んだまま、しんのすけがやる気満々の様子で叫ん

だ。

「……」

みるみるやる気の失せていく山崎であった。

「どーしたの、お兄さん、早く始めてよーー。」

「…その格好、きつくない?」

「んー、正直きつにけど、老化は尻からつていりし…………。」

言わねーよ。

山崎は内心、大きくシッコミを入れたが、言つても通じないと感じて何も言わなかつた。

「お、そうだ! オラお兄さんのお名前聞いてないゾー。」

「え? 名前?」

「そうだゾ! オラが剣道の試合に出た時も、ちゃんと名前言つてからだつたんだゾ!」

剣道とミントンは全然違つけどな、と思いつつ、山崎は笑みがこぼれてくるのを感じた。まあいいか。相手は子供だものな。

「俺は山崎。山崎退つてこいんだ。」

「ふーん。」

しんのすけは何か納得したようにうなづき、言つた。

「オラ、野原しんのすけ5歳。最近おケツが割れて、困つてるんですう~。」

しんのすけも、山崎も、まるで気づいていなかつた。二人の出会いが、これから展開に大きく影響していくことを……。

その六・老化はお肌と髪の毛から（後編）

おバカなしんのすけと真面目な山崎が、マントンを通して遭遇…。次の話では、沖田が職業探しに遁走します。そして彼にも、素敵（！？）な出会いが…。感想も待ってます…。

その七・就職活動つて時々大学受験より苦しい（前書き）

久しぶりの投稿です。今回は沖田がメインな感じですが、ちょっとキャラが変わってるかも…。あとクレしんのあのキャラが沖田と遭遇します。映画アミーヴを見てないと、イマイチ分からないところがあるかも知れませんが、そこは受け流してください（汗）。

その七・就職活動つて時々大学受験より苦しい

風間家の夜は、これまでにないほどにぎやかなものになっていた。

「新ハさん、お料理上手なんですね！」

「え？ あ、うん。まあね…」

「新ちゃんたら、一人でご飯作るつて言つて聞かなかつたのよ。私も手伝つてあげようと思つたのに…」

「いやいや、姉上は掃除とかお買い物を頑張つてくれてるんですから。」

なんて言いながら、新ハの本心は別のところにあつた。

姉・お妙は、驚異的なまでに料理が下手なのだ。どういうわけか、お寿司を握つても黒焦げにしてしまうという破壊的腕前の持ち主なのである。

住む所を用意してくれたトオルに、そんなものを食べさせるわけにはいかない！

「ん？ 神楽、お前今日はあんま食わねーな。どーした？」

「え…いや、銀ちゃん、私いつもこのくらいアルコ。」

「ここのくらいこじやねーよ。こつもはその千倍ぐらいい食つてるよ。」

銀時の言つ通り、今夜の神楽の食欲は異様なほどにおとなしかつた。食べる物の嗜好は地味な神楽だが、その身体のどこにそれだけの量が入るんだと思えるぐらいよく食べる。それなのにまだご飯のおかわりを一回しか頼んでいないばかりか、えらくちびちびと食つているのである。

「あれれ、本当にこじこも悪くないの？ 神楽ちゃん。」

「大丈夫アル！ これでいつも通りアルヨ…！」

なぜか怒つたように言い返す神楽。新ハはおや、と思つた。神楽の視線が、ちらちらとある人物の方を時折向いていたからだ。銀時もそれに気づいたらしく。

「ん？ 神楽おめ、何わつせからトオルの」じじりじり見てるんだ、
おい。」

それを聞いた途端、神楽ときたら白い顔を真っ赤にしてしまった。
そこへさらにたたみかける銀時。

「ははーん、お前さては、愛しのトオルくんの前で醜態をさらすま
いと、猫かぶりの努力を……」

バシン！

銀時の言葉はそこで止められた。

神楽のどびきり痛い平手打ちを食らい、椅子から転げ落ちてしまつ
たのである。

「いてえええええ！」

「お、女の子をそんなふうにからかうなんて、サイテーアル！」

「神楽さん！ 食事中にケンカはやめて下さいー！」

間接的な原因が自分とはまるで知らないトオルが、神楽を控えめに
叱つた。

「ハイアル！」

にこにこ顔で応じる神楽。どんな状況であれ、トオルに話しかけら
れるのはとても嬉しいらしい。新ハは誰にもバレない程度に苦笑を

漏らした。

「おーいて……」

頬に赤い手形をくつきりと残し、鼻血を垂らした銀時が再び食事に参加した横では、山崎がこれまでにないほど食べっぷりを見せていた。土方が目を丸くしている。

「山崎、お前……今日はよく食べるな。どうした?」

「いえ、別に……なんともないですよ。」

「ふうん……」

内心、こいつまたどこかでミントンにいそしんでたんじゃねーかと思っていた土方だったが、あえて言わないことにした。五歳の少年の前で暴力を振るうのは、いかに鬼の副長といえども気がひけるし、何と言つても山崎はちゃんと仕事を見つけてきたのである。お妙の言い方を借りれば『チンカスみたいな』給料しか出ない、コンビニのバイトとはいえる。

そう、お妙と新八がトオルの保護者代わりとなり、銀時と土方が幼稚園での、神楽と定春が日常生活でのボディーガード（？）役となり……そして山崎に課せられた役目とは、適当な仕事を見つけて生活費を稼ぐことであった。

トオルの家はかなりお金持ちな方だが、さすがに金にはがめつい銀時も、母親がいなくなってしまった子供の脛^{すね}をかじって生きようとするほどプライドを失つてしまつたから皆無であり（まつざか先生たちに銀時が園長になつてしまつたから皆無であり）、しかし幼稚園の方の稼ぎは、は自腹で何とか払うことにしている）、誰か他の奴が働かなくてはならないのだ。何とも地味な役回りだが、もともと地味なことで定評がある山崎にとつては、別に不満でもなんでもなかつた。

あと念のために言つておくと、山崎がミントンをしていてしんのすけと会つたのは、ちゃんと仕事を見つけてからである。

そんなふうにして、銀時ファミリーと新選組を加えた風間家での夕食時間は、のどかに過ぎていこうとしていた。

いや、一人だけのどかにしていられない人物がいた。

「総悟…おめえはもつと食つたらどうだ?」

土方が言つ横では、沖田が食事にほとんど手をつけようとせず、とある冊子を丹念に眺めていた。

トオルもそんな彼に向かつて、少し心配げに言つた。

「あの、沖田さん。そんなに懶けなくてもいいですよ。明日だって搜す時間はたつぱりあるし…。」

沖田は山崎と同じく、何かの職に就いて家計を助ける役目をおおせつかつたのだが……。

まあ自己中心的な沖田の「こと、やうすんなりと性に合ひ仕事が見つかるわけもなく、すゞすゞとここへ舞い戻ってきたのである。

それまではいつもどおり、へらへらしていた沖田だったが、山崎が首尾よく仕事を見つけてきたことを知ると、態度が一変した。

ともかく沖田にとっては、部下である山崎にそういう面で負けたのが悔しかつたらしい。何としても（山崎より）いい仕事を捜してやろうと、さつきからひらくにご飯も食べず、熱心に求人雑誌を読みふけつているのだった。

「ねえ、沖田さん…。」

「トオル、ほつとくアル。このアホがからつぽの頭を回転させてくる貴重な時間をつぶすのは、もつたいたいネ。」

いつもならば神楽のその言葉に反応し、なりふりかまわず大ゲンカをおっぱじめる沖田だったが、今夜はもう何も耳に入っていないのか、雑誌のページから田をあげようともしていなかつた。

「まあ、そうかもな…。」

土方も何やら納得（？）し、『飯の上』、さらにつづつとマヨネーズをかけまくつた。

気にくわねエ。

沖田は川原をぶらぶらしながら、むしゃくしゃした気持ちをもてあましていた。

畜生、山崎のやつ。俺より先に仕事を見つけてきたからって、あんなに得意そうな顔をしやがって……。

別に山崎としては得意げにしているつもりはなかつたのだが、沖田の目にはどうもそのように映つてしまつようだつた。

しかし、仕事に就けないのが自分の性格のせいだといふ」とも、何となく分かっている。これまで新選組一番隊隊長として、何も考えずに犯罪者相手に剣を振り回していればよかつた。普通の店とかと違つて、警察は潰れる心配がないからだ。

でも、ここでは違つ。沖田は警察でも何でもない、ただの18歳の青年だつた。

「ハアーア、だりイ…。」

結局今田も、収穫はなしだつた。らしくもなぐため息をつきながら、ぼんやりと道を歩いていく沖田は、気がつくとでっかい塀の前に立つていた。

「…………? 何だ、ここ?」

どこか、大きな家の塀らしいといふことは分かる。ここの春田部で、そんな大きな家に住んでいる奴といえば…。

塀に沿つて歩いていき、やがてこれまた巨大な門の前に出た。やつぱりだ。これには見覚えがある。

「酢乙女邸か…………」

しんのすけに一方的な恋心を抱くお嬢様・酢乙女あいのお屋敷だ。でもこの映画の中では、彼女はもう二セモノに替わられているはず。

…………。

「あのお…」
「あア?」

後ろから聞こえてきた声に、沖田は顔だけねじ曲げて振り返つた。

びっくっして、床の間声が止なくなつた。

「あ、お前は……

「オーライくん！」

「えつ？ どうして僕のことを……………」 ていうか、僕そんな名前じゃないですよおー佐藤マサオです！」

「あ、そうだよな……」めん。」

「……とこりでお兄さん、どうして僕のこと知ってるの？」
さて困った。考えるより先に身体が動くタイプの沖田は、こういう時のうまい言まかしが思いつけないので。土方への嫌がらせ方法を考え出すのは得意だが……。

「そ、それはだな……俺の妹が、お前と同じひまわり組だからで。」
「ふーん……」

どうこうわけか、マサオはじーっと沖田の顔を見つめてくる。不愉快な視線ではなかつたが、沖田は思わず後ずさりした。

「な、何だ？」

「いや……お兄さんの顔に、なんか見覚えはあるから。どこかで会つたことあるつけ？」

会つたことはあるけど毎週テレビでお前の顔は見てるぜ、なんて言えない沖田は、黙つて答えなかつた。頭の中ではどうやってこの状況から抜け出そうか、彼なりに必死で考えていたのだが。

幸いなことに、二人の会話はここで打ち切られた。

門の所に取りつけられたスピーカーから、聞き覚えのある声がしてきたのである。

『あらマー様、来て下さったんですね。そちらの方は、どちら様

ですか？』

そちら様？

一体誰のことだと一瞬考えて、沖田さよりややく自分のことを言つて
いるのだと理解した。こんなだから銀時や土方や神楽に『頭が力
ラッポ』と称されるのだ。

「あ、俺は通りすがりの沖田つてもんだから、気にせんでいいです
ぜ。そんじや。」

マサオを残し、さつさと歩み去つていく沖田。その背中を見つめな
がら、マサオは少し首をかしげた。

「沖田……？」

やれやれ、あんなところでマサオに会つとは。

沖田はだいぶ離れた所まで来ると、もつて一度酢乙女邸の方を振り返つた。

門が開いている。もうマサオの姿はそこから消えていた。

門が閉じていくのを眺めながら、沖田は次第に、何とも言えない不安な気持ちに襲われるのを感じた。

酢乙女あいはマサオのことを、『マー様』と呼んだ。といつゝとは、

やはり彼女はニセモノにとつてかわられているのだ。

そしてマサオが、酢乙女邸に一人で呼ばれている…………。

どうも引っかかる。映画の中には、こんなシーンはなかつた。それとも単なる偶然だらうか。いや、それか…………。

沖田は頭を振り、再び歩き出そとしたが、数メートルも進まないうちにまた立ち止まって振り返つた。

そして、辺りに誰もいないことを確かめると、酢乙女家の屋敷の高い塀の一角へ、踵きびすを返して走り始めた……。

「沖田さん、大丈夫かな……」

神楽にああ言われても、トオルはまだ沖田のことを心配し続けていた。

（無理しないでくれるといいけど……）

窓から外を見下ろして、ため息をつく。日曜日の空は、彼の心の中

とは裏腹に、きれいに澄み渡っていた。

トオルはもう一度、沖田がいい仕事を見つけられますように、と祈

つた。

当然、彼が職探しよりもっと厄介なことへ首を突っ込もうとしていることなど、まるで知る由もないのだった。

その七・就職活動つて時々大学受験より苦しい（後書き）

風間くんの心配をよそに、酢乙女邸へ走る沖田…………。その中では、一体どのような展開が？ 肝心の仕事探しはどうなつちやうのか！？ 次回は沖田とマサオくんが、大活躍の予感！…どうぞお楽しみに！ ！久しぶりでしたが、感想もどんどんお願いします。これまでにも暖かい応援メッセージ、ありがとうございます！！

そのハ・・どうせ選ぶんなら儲かる仕事に就け（前書き）

酢乙女邸へ招待されたマサオくん…。それを曰にして酢乙女邸へ潜入する沖田…。彼の仕事探しにも決着が？第8部、スタートですっ
!!

そのハ・ビツセ選ぶんなら儲かる仕事に就け

巨大な広間に通されながら、マサオは嫌な胸騒ぎを押さえ切れずにいた。

ずっと恋焦がれてきたあいの家に呼ばれたといつのに、あまり喜べないのにはわけがある。ここ最近のあいの様子が、明らかにおかしいからだ。

いつもはしんのすけに夢中で自分になど目もくれないあいが、やたら優しくしてくれる。これまでとは打って変わって……。

そんなの、僕の好きなあいちゃんじゃないつ！

それにどうして、しんのすけたちと一緒にではなくたった一人でここへ呼ばれたのだろう？ マサオはただ招待に応じただけで、その目的までは知らなかつた。

何であいちゃんは、僕だけに来てほしかつたんだろう？
ふかふかした豪華なソファに下ろした腰を、マサオはもう早々に上げてしまいたい気持ちになつていた……。

「おい、何者だ貴様！」

酔乙女邸の庭先では、あいも予想せぬ大騒ぎが繰り広げられていた。

一人の青年が、何人もの男たち相手にこぶしを振るい、足を振り回して暴れまくっているのである。

そうしながらも彼は、着実に屋敷の方へと近づきつつあった。

沖田総悟である。

「待てーっ！」

怒鳴りながら追いかけてくる男を飛び蹴りで片づける。

それでもまだ押し寄せてくる男たちの集団を見やりながら、沖田はため息をついた。

（ちつ…あの堀に、あんな厄介な仕掛けがあるとは思わなかつたぜイ。）

酔乙女家を守る堀を難なく乗り越え、首尾よく屋敷に潜り込めるかと思っていたのに、実は堀にセンサーらしきものが仕掛けてあったのだ。それに見事引っかかった沖田は、今こづして追われていると、いうわけであった。

それにもしてもキリがない。何とかしてこいつらを振り切らなければ。沖田は屋敷の方をちらりと見て、マサオが今どんな接待を受けているのかと思いをめぐらした。

「……」

「…………」

「…………？」

振り返った沖田の目に、黒いバイクに乗り自分目がけて走つてくる男たちの姿が映つた。

ちょっとだけ驚いた表情を見せた沖田が、すぐに口の端を吊り上げて性悪な笑みを作つてみせた。

「沖田さん、遅いですね…」

「そうか？まあ気にはすんな。あいつなら心配せんでも大丈夫さ。」

時刻は既に、三時を回ろうとしている。

おやつの時間にはいつたん帰つてくると言つていた沖田がいつまで現れないでの、トオルは気をもんでいた。

しかし銀時たちの反応は、何とも冷めたものであった。

「トオル、来ないんならあいつのクッキー、食べてもヨロシ?」「ダメですよ! 沖田さんが帰ってきた時に可哀相でしょ!…!」「ハイアル…」

しゅんとして引き下がる神楽。なにげにこの子す"じ"いな、と、新八はトオルを眺めていた。宇宙でも恐れられる夜鬼族の怪力娘に、一言で言うことを聞かせられるとは……。

そんなことができるのは、じつちではお妙だけだ。

「でも心配だな、確かに。」

「土方さん!」

トオルがほつとしたように、土方を見る。

土方はクッキーの上にいちいちマヨネーズをかけながら（生クリームではない）、低い声で続けた。

「今頃あいつ、やけになつて強盗でもしてんじやねーかな…」

「そつちの心配ですか!?」

トオルは沖田という人間の評判の悪さに、あらためて驚いた。

「…でも心配するな。場所の分かる方法ならある。」

「…本當ですか?」

「ああ。ほら、これに……」

と、土方が取り出したのは、小さな液晶スクリーンのついた装置みたいなものだつた。画面上で、ピコン、ピコンと赤い点が点滅している。

「ここの赤い点が、あいつだ。」

「へえ……何で分かるんですか?」

「最近から、あいつの髪に高性能の小型発信機を取りつけたんだ。風呂に入つても大丈夫なやつをな。やつとその性能を試す時が来たぜ…」

土方の言葉を聞きながら、トオルは考えていた。

土方さんに発信機をつけさせるほど用心させる沖田さんつて、一体

普段、どんな性格なんだろ??

トオルの頭の中にも少し、別の心配が頭をもたげてきた……。

「むっ！？」

土方が、眉をひそめてうなつた。

「ここは、もしや…………！」

「た、助けて……」

マサオはまさに、絶体絶命のピンチといつかづつに陥っていた。
屋敷内のサングラスをかけた男たちに捕われ、床に押さえつけられ
ているのである。

目の前に立つて顔色一つ変えずにそれを眺めるあいの姿が、今の状
況をさらに悪夢的なものにしていた。

「あ、あいちゃん…………これは……一体……？」

「『めんなさい、マー様。』

あいが変わらぬ口調で言った。

「でも、あいはマー様を捕まえなくてはなりませんの。本当はもつ
と遅いはずだったんですけど、仕がないですわ。」

「…何を言つてるの？」

「そのうち分かりますわよ。」

「あいはくすくす笑うと、男たちに命じた。

「マー様をアジトへ連れていきなさい。」

「はい。」

男たちはうなづき、マサオを乱暴にかつぎ上げようとした。抵抗するマサオを、一人が殴りつける。マサオは床に倒れ、痛みにあいだ。

あいの呆れた声がする。

「もう、力もないくせに抵抗したりして。まったくなんて下等な動物なのかしら、人間は……」

マサオは目をつぶり、涙を流しながら祈った。誰でもいい、何でもいい、助けに来て下さい。悪魔でも大魔王でもかまわなさいから……。

バイクであつた。

ブロロロロロロ...!

ドガアアアン！

「...ええつ！？」

祈りが通じたのか、突如扉がぶち破られて何かが飛び込んできた。
悪魔でも大魔王でもない。目の前に現れたそれは.....。

「な、何なの！？」

金切り声を出すあいだつたが、そんな場合ではなかつた。進み続けるバイクが、こちらの方へ向けて突進してきたからだ。

「あつ…ちょ、ちょっと待つて！止まつて！…」

「ええー、そんなこと言わわれても…」

バイクにまたがり、顔をしかめる茶髪の青年。

沖田であつた。

「止め方、分かんね。」

「いやあああああ！」

あいの絶叫が、部屋の中に響き渡つた。

ドガッ！

跳ね飛ばされたあいは、壁に叩きつけられて動かなくなり、そしてバイクはまだ止まらない。爆進を続けている。

「ああもう、めんどくせえなア。」

沖田はそう呟くと、ひょいとバイクから飛び降りてしまつた。

操縦者のいなくなつたバイクは、壁へと激突し、ようやく動かなくなつた。

しかも見事、あいの倒れていた場所で。

「き、貴様…！」

男たちが一斉に沖田めがけて殺到したが……。

ドゲドゲドゲ、ドゲン！

数十秒後には、全員床とお友達になっていたのだった。

「あ、あの……」

マサオは、自分を助けてくれた（？）謎の青年に、おそるおそる声をかけてみた。そして青年がこちらを向くより早く、気づいた。

「あ！さつき門の所にいた……」

「ああ……大丈夫だったか？」

「は、はあ……」

殴られた所が少し痛いが、別に我慢できないほどでもない。（誰なんだろう、この人……別に泥棒って感じでもなさそうだし……それにどつかで……見たような……）

「お兄さん、名前は何て言つんですか？」

「ん？えーと……沖田総悟。」

「えつ！」

マサオが驚愕して目を見開いた。

「もしかして……『銀魂』の真選組一番隊隊長の、沖田総悟?」

「なっ!…お前なんでそんなことを…」

「今日は沖田が驚かされる番であった。」

「信じられない!僕、あの漫画とアニメ大好きなんですよーー…ちょっと下品なところあるから、ママとかみんなには内緒にしてるんだけど……」

「へえ……」

「そういうわけで、俺たちの世界の出来事がアニメとして放送されてるんだっけな、と、沖田はトオルの言っていたことを思い出した。漫画まであるのか、知らなかつたぜ。」

「そして何より意外なのは、マサオが『銀魂』のファンであるらしいことだつた。」

「でも何で…」

「ゴッ！」

背後から飛んでくるものを感じ、沖田はとっさにマサオを抱いて横に飛びすさった。

「危ねエ！」

ドガアアアア！

「な……何なの！？」

マサオが震えている。さっきまで一人のいた所の床に、大きなえぐれができていた。

「よくもやつてくれましたね……」

扉のところに、黒磯が立っていた。

いや、これはどう見ても二セモノだらう。人間ですらないようだ。腕の部分が盛り上がり、巨大な鉄砲みたいな形を作っていた。

「……何だ、その腕は。」

沖田の言葉に、黒磯は答えず、大砲型に変化した右腕を向けた。

「ドン！」

先端の穴から、目には見えないがものすごい圧力を持つた弾が放射された。マサオを抱えたまま、素早く横に転がつてよける。またしても床に穴が開いた。

なるほどな、と、沖田は妙に納得していた。ドラえもんに出てくる、空気砲みたいなやつか……。

とにかく、狭い室内では不利だ。外へ逃げようと、窓に向かつて走った。

「させない！」

「うおわっ！？」

「間一髪だった。

今度は何か細長いものがいくつも飛んできて、もうちょっとで沖田の足に刺さるところだったのだ。何とか横ざまに倒れるようにして、

回避する。

酔乙女あいだつた。

可愛い顔に似つかわしくない憎悪の笑みを浮かべ、沖田をにらんでいた。そして黒い髪の毛がざわざわと伸び、今沖田を串刺しにしようとした細長い刃物状のものに変化しつつあった。

嘘だろ？何だ、この化け物は……。

「許しませんわよ……よくもあいの腕を……」

バイクを押しのけ、あいは立ち上がった。

「あつ……」

マサオが思わず、叫び声を発した。

バイクが激突した時に吹っ飛んでしまったのだろうか、あいの左腕がなくなっている。それでいて、一滴の血も流れていなかった。

それだけではない。付け根から、肉の芽とでも言ひべきものが植物のように生え出してきて、みるみるうちに腕を再生していくのである。

さすがの沖田も、言葉を失うより他になかった。

「お返しは……百倍にさせてもうけますわよー！」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、やつきの細長い刃が恐ろし

スピードで襲いかかってきた。

「…………！」

次の瞬間、沖田の身体が風のよう動き、すれすれで全ての刃をかわした。かなり息が上がっている。

その時、沖田に抱えられているマサオが悲鳴をあげた。

「沖田さんー後ろーー！」

一セの黒磯が、巨大空氣砲を構えていた。

しまった…よけきれない！

沖田は歯噛みした。バズーカ砲か、せめて刀が一本でもあれば…！

ズガアーン！

轟音が響き……しかし何も起こらないので、とつさに目を閉じて
いた沖田は首をかしげた。

（あり？そーいえばさつきと発射音が違うよーな…）

目を開けて黒磯のいる方を向き、そして、束の間息が止まつた。

「土方さん……」

「つたく……相変わらず好き勝手なことして大暴れしてんだなア、このガキ。」

バズーカ砲を構えた土方が、もくもくと煙が立ち込める中で、煙草をくわえて立っていた。よく見ると、左足で何か黒焦げになつたもの踏みつけている。

バズーカ砲撃を背後からまともに浴びた、ニセ黒磯のなれの果てだつた。

「あ、あんた、よくも……！」

ニセのあいが怒りの叫びをあげ、刃を土方に向けようとしたが……。

ドガアアアツ！

「あやあああああ！」

本日、一度目になるバイク突入に（今度は窓から飛び込んできた）、
ニセあいは再び跳ね飛ばされたのであった。

「どうも、万事屋でーすっ！ 本日は人助け参りましたあーー！」
銀時が、ヘルメットを上げてにやりと笑ってみせた。

「本当に知らないのよー」

「嘘つけ！！」

今、傷だらけ、穴だらけになつた酢乙女邸の居間では、ぐるぐる巻きに縛り上げられたニセあいの尋問が行われていた。

いくらなんでも刀とバズーカ砲を突きつけられた状態では、もう抵抗するわけにはいくまい。ここには万事屋と真選組のメンバーを加え、トオルまで勢ぞろいしていた。

トオルと新八は、混乱気味のマサオを部屋の隅に連れていき、これまでのことの説明をしてやつてはいるところだった。

そして残る面々は尋問というわけだが……。

「アジトの場所を知らねえわけねーだろーお前らの本拠地だろーがーー！」

「残念だけど、あたしたちは自分の記憶操作が自由にできるのよ。だから忘れないと思ったことを、完全に忘れ去ることができるの。

敵に知られちゃ まざいこととかもね…」

「何だとてめえ、いい加減なこと言つてやがる…」

沖田がバズーカ砲をむりに近づけたが、ニセあいはせせら笑うだけだった。

「殺したいんなら、どいつ。別にかまやしないわ。また酔乙女あいの代わりが新しく作られるだけ……どいつにしき、あたしからアジトや黒幕の正体を聞き出すのは、あきらめないとね。」

「ちつ…」

敵が本気で言つていると分かつたのか、沖田は舌打ちと共にバズーカを少し引つ込めた。

一方マサオは、トオルと新ハの話をどいつにか理解することができていた。

「へえ、あるんだねえ、そういうことって…。」

「うん……でも知らなかつたよ。マサオくんが『銀魂』のファンだつたなんてさ。」

トオルの言葉に、マサオはすりと照れ笑いを浮かべた。

「えへへ、みんなには内緒にしてたんだよ。ちょっとお下品なところがあるから……でもいつも古本屋さんとかで、漫画の立ち読みしてるよ。」

「僕たち、漫画にもなつてるのか…」

いまいち実感のわかない新ハであった。

「ねえ、よかつたら風間くんも今度一緒に行かない? すりへ面白いんだよー。」

「ほんと? じゃ、暇があつたら行くよ。」

こんなに個性的な人たちが活躍する漫画なのだ。それが面白いに違いないとトオルは思った。

それに、銀さんたちのことによつよべ知ることにもなるしな……。

「銀さん、姉上。どうでしたか。」

新八の問いに、残念そうに首を振るお妙。

「ダメよ…ケツの穴にコンパスぶち込むつて斬しても言わないの。本当に忘れられるみたいね……。」

「ちょっとお妙さん、そんな下品な言い方…あれ? それ僕のコンパスじゃないですか! 返して!」

「まあとにかく、今の問題はこいつをどうするかだな。」

銀時が二セまいを、あごで示した。

「そうだな…野放しにするわけにもいかんしな。」

と、煙草の煙を吐く土方。まともに浴びた山崎が、げほげほ言つている。

「やっぱり殺つまうしかないアルヨ、銀ちゃん。」

「そうでさア、旦那、土方さん。俺アこいつのせいで職探しを邪魔されたもんです。」

「いや、だからそれはお前が勝手に首突っ込んだんだが。」

「あの、ちょっと待つて下をこ。」

「?」

おずおずとした声に、銀魂一行は話をやめて振り返った。
マサオがみんなに見つめられ、もじもじしながら言つた。

「あの…総悟さん、仕事を探してゐるんでしょう?」

「? そうだけど。」

沖田も他の面々も、マサオが何を言おうとしているのか分からぬ。
そこでマサオは、思い切つたように言つた。

「じゃ、この一セモノのあこちゃんこ、セキココトヤーポリスことして雇つてもらつたらどうですか? だって、黒磯さんの一セモノは…やられちやつたみたいだし。」

マサオの田は、黒焦げになつてしまひてこる一セ黒磯の残骸に向けられていた。

「給料もいっぱいもらえると思いますけど。」

マサオのこの言葉に、沖田たちは初めてのうちほ驚きの眼差しで互いを見つめ合つてゐるだけだったが、やがてそれぞれの顔に、あまり人のよくない笑みが浮かんできた。

「なるほどなあ、」こんな豪勢な家だから、金もたんまりあるだろ？
しなあ……」

「なつ……」

銀時の不気味な咳きに、一セのあいがぎくつと目を見開いたが、無視された。土方も重ねて言つ。

「こいつを見張ることもできるしな。」

「お前、案外悪知恵働くじゃねえか？」

沖田に言われて、マサオは顔を真っ赤にした。

「いえ……ただの思いつきですよ。それに、助けてもらつたんだ
し。」

「ちよつと、ふざけないでよ！誰があんたなんか……！」

一セモノのあいが最後まで言えないうちに、沖田のバズーカ砲が顔面に押しつけられた。

「嫌つてんならこれ食らわせる前に、さつきのお返したつぱりさせてもうひげや。身体で払つか金で払うか、どっちにする？」

「ねえ、あいちゃん。」

双葉幼稚園で、ネネがあいに話しかけた。

「ボディーガードの人が変わってるじゃないの。黒磯さんは? あの

人だあれ?」

「ええ、その……黒磯が急用で実家に帰ることとなりまして。臨時に雇つたなんですの。」

そう答えるあいの表情が、微妙に引きつっている。

「ふうん、そーなの……でも、結構イケメンじゃない? 良かつたわね。」

「……いいのは顔だけでして……」

「あん？ あいお嬢様、今何かおっしゃりましたかイ。」

臨時のボディーガードなる茶髪の若者が、茂みの中から顔を出した。あいの身体がびくっと緊張する。

「い、いえ、何も…」

「ダメっすよお嬢様、言いたいこと黙つてちや。わざ、一人でじつくり話でもしましょうや。」

「え…あつ…ちよつ…！」

茂みの中へ引きずり込まれるあい。それを見送りながら、しんのすけ、ネネ、ボーちゃんの三人は腑に落ちないという顔になっていた。

「何か、変…」

「そうよね…ボディーガードって感じがしないわ。」

「なんか脅かされてるみたいだゾ。」

「やあね、しんちゃんてば、嫌な」と言わないで。」

後ろの方で見守っていたトオルとマサオは顔を見合せ、そして思わず、ふっと吹き出した。

そのハ・ビツセ選ぶんなら儲かる仕事に就け（後書き）

マサオくんも仲間に加わり、沖田も無事仕事（？）を見つけてようやく一安心…………と思いまや、いよいよ敵が本格的に動き出す！？次回からはテパート編に突入予定！アミーゴを見てない人は予習しておいた方がいいかも…。お楽しみに…！

その九・似てないもの同士の方がうまくいくことが多（前書き）

今回から、敵が本格的に姿を現していく予定です。この話はまだ序章っぽい感じですが、これまでボケ役でしかなかつた銀時たちも活躍していきますので、お楽しみに！

その九：似てないもの同士の方が「うまくいく」ことが多い

沖田の収入　　というか脅迫金（？）のおかげで、風間家の財政は充分以上に潤っていた。

おかげでますます地味な役割になってしまった山崎だったが、別に不満はない。幼稚園に出ている昼間は土方の目が届かないの、好きなだけミントンにいそしむことができるからだ。もちろん仕事も真面目にやっているが……。

しかも最近は、一緒にやつてくれる相手が見つかったので、ますます熱が入っている。

言つまでもない。しんのすけのことだ。

今日の夕方も二人は、人気のない公園で打ち合っていた。

「ふう…今日はこれぐらいにしておいたが。」

「ほーい。」

しんのすけも山崎も、汗だくだくなっている。山崎にとっては驚いたことに、ミントンでのしんのすけの『ケツやばき』は、悔れぬほどのものであった。時には山崎から、一点を奪はほどだ。ただし本人は、自分のやっていることがミントンだとこいつと自体、あまり分かつていなかつたが。

「おおつ、もうこんな時間！オラ、そろそろ帰らなきゃ、母ちゃんに怒られちゃう。」

「へえ…今日はまた、素直に帰るじゃないか。」

いつもなら、山崎が困るくらいにもつとやりたいとせがむしんのすけなのである。

「何があるの？」

「うん！」

しんのすけがうなづく。なぜか、とつても嬉しそうだ。

「明日ね、休みの日で暇だから、家族みんなで新しいデパートにお買い物に行くの！」

「ふうん、そうなんだ。」

山崎も、そのデパートのことは知っている。確かに最近できただばかりの、とても大きな所で、新ハガとても興味を示していた。

「オラ、絶対お菓子いっぽい買ってもらうんだ！あと新しいアクション仮面のおもちゃも……」

「あんまり欲張らない方がいいよ。買ってくれるものも買ってもらえないくなるかも知れないからね。」

山崎は苦笑しながら、しんのすけの頭をなでた。

ちなみにまだ彼は、しんのすけがクレしんの主人公であることを、知らないのであつた……。

「山崎、今日もよく食つた。」

「え？…あ、はい。仕事で色々大変なもんで……」

「それだけじゃねえだろ？。」

「は？」

土方の声が、突如淒みを増した。

「楽しいか？毎日ガキとミントンするのはよお。」

山崎は身体中の血が、一気に凍りつくのを感じた。

「ふ、副長……」

やつぱりバレていたのだ！

「コンビ二の店長にも確かめてきたぜ。お前のバイト時間は朝九時から昼の三時まで。それなのにお前が帰つてくるのはいつも五時。やつぱりこんなことしてやがつたんだな……。」

「土方さん、何もそんな怖い目でにらまなくて……」

「しめえはちょっと黙つてな、トオル。こいつに言わなきゃなんねえことがある。」

山崎は目を閉じ、覚悟した。子供の前だから手加減はしてくれるだろ？が、きっと今にも、こぶしの嵐が……。

あれ？

何も起こらないので、目を開いてみる。

田の前には土方の顔。しかし、その顔は……。

え！？笑ってる？

鬼より怖い真選組副長の、タバコをくわえた口元が、確かに笑みを浮かべていたのだ。

はつきり言って、怒っている時よりももっと不気味だつた。

「…フン。本当ならボコボコにしても済まねえところだが……今日は特別だ。面白えもん見せてもらつたからな。」

「？？？」

頭の中が疑問符だけになつたのは、山崎だけではなかつた。

「面白いものって何アルカ。」

神楽が大好物の酢昆布をくわえながら、首をかしげた。駄菓子屋で見つけたらしい。

「いや、今日の帰りに公園の前を通りかかつたらよ、こいつが例のごとく、ミントンしてたわけだ。」

山崎は首をすくめた。見られてしまつたのか……。でも、それならおかしい。どうして副長は、自分をいつものようにボコボコにせずにほうつておいたのだろう？

「怒鳴つてやろうと思つて公園の中に入つて、びっくりしたよ。相手になつてる奴が、まさかあの野原しんのすけだなんてなア。」

「ええーっ！？」

新ハと山崎を除く、全員の大声が上がつた。一人はぽかんとして顔を見合わせる。

「あの、副長、何であの子の名前を…」

「野原…………しんのすけつて、なんかどこかで聞いた名前みたいだけど。」

「なんだ新ハ、忘れたのか！？」

銀時が割り込んできた。

「『クレヨンしんちゃん』のアニメの、主人公だらうが！」

「あ…そーいえばしてましたね、そんな話。じゃあこの映画の世界の、主役つてことになるわけですか。」

「そして、トオルの大親友アルヨ。」

「いや…別に親友じゃありませんから。」

小声で否定して、トオルは少し心配そうな表情になり、山崎の方を向いた。

「あの、あいつ迷惑とかかけませんでした？」

「いや…変わった子だけどね。」

山崎は苦笑いした。

「まあ色々と、面白い子だよ。」

「だらうな。」

土方が再び会話に参加した。

「特別サービスだ……他の場合は許さんが、あいつの相手をしてやるなんなら、やってもいい。」

「マジですか！？」

「そのかわり、何であいつに会つたのか説明してもらおうか。」

山崎はなるべく、事細かに話した。しんのすけと公園で出会つた時のこと。ミントンをやるうちに、意氣投合してしまつたこと。それからは暇があることに、一人でミントンをやつていたこと。

「へえ…あいつ、いない間にそんなことしてたのか。」

トオルは目を丸くした。車の上に乗つかり行方不明になつてから、しんのすけが帰宅した時にはもう夕方になつていて、大騒ぎしていたのだ。そういえば、それまで何をしていたのか聞いていなかつた。それより何よりトオルは、あのしんのすけと山崎の意外な組み合せに驚いていたのである。

「にしても、お前としんのすけがお近づきになるとはなア…類は友を呼ぶつての、あれは嘘だな。」

銀時も同じ意見らしく、山崎をじろじろ眺めながら言った。

「ははは……あ、そういえば。」

山崎は何気なく、しんのすけが今日語っていた話を口にした。新しいデパートに行くとかいう話だ。

ところが、別に他意あって言ったことではないのに、みんなが（新ハとトオル除く）深刻そうな顔で黙りこくれてしまったので、山崎は少し焦った。

「え？ お、俺、今何かまずいこと言いました？」

「そうか、明日か……」

「え？」

土方の呟きに、山崎はわけが分からず首をかしげた。

「副長、明日がどうしたんです？」

「ああ、それはな……つーかお前、ちやんと映画見とけよ……話進まねえだろうが！…」

予期せぬところでパンチが飛んできて、山崎はひっくり返った。

「土方さん、子供の前ですよ…」

「大丈夫です、新ハさん。もう慣れましたから。」

慌てる新ハを安心させるように、トオルが言った。銀時たちのキャラの濃さにも、もういい加減慣れてしまったようだ。

「でも土方さん、ここでは我慢してるんですね。」

「あア？ 何のことだ？」

「マヨネーズですよ。漫画の中じや、かけたものが見えなくなつて気持ち悪いぐらいですからね。」

今でも充分気持ち悪いけどな、と、マヨシチューの異様な色彩を眺めながら新ハは思った。

トオルはマサオの提案を受け入れ、古本屋から『銀魂』の漫画を安く買い込んできて、暇があれば読むようになった。新ハやお妙が試しに見せてもらつと、本当に自分たちについての話がページの中で展開していく妙に感動したものだ。あまり公表したくないエピソードまで描かれているのには、少々閉口したが。

そんなわけで、今のトオルはある意味本人たちよりも、銀時らについてのことによく知つていたのである。

「フン……それよりもだな、問題は『パート』のことだ。」

土方が話を引き戻した。

くわえていたタバコに無意識に口を点けようとするが、お妙と神楽のどびきり怖いにらみを受けて手を止める。最強の女二人分の怒りに立ち向かう勇気は、さすがの真選組副長にもないらしい。

二人がこうして怒るのは、タバコの煙がトオルの害になるかも知れないからだ。お情け程度というか、くわえタバコだけは許された。

土方がイライラ氣味なのも、この辺に原因があるのかも知れない……。

「トオル、お前には一度説明したはずだ。……この映画のあらすじの中に、野原一家が新しいデパートに出かけるという話があるんだが……」

「ああ、ありましたよね、そういう話。」

トオルが何か思い出したような顔になつて言った。

「そういや、しんのすけのママの「セモノ」が出てきて、それを女人が追い払ってくれるとか。」

「女人人?」

「この映画の中だけのキャラクターよ。しんちゃんや、他のみんな

を手助けしてくれる人で、ジャッキーっていうの。本名はジャクリーン・フィニーーっていうんだけどね。」

お妙が弟に説明してやつた。トオルが首をかしげる。

「でも、その人に助けてもらえるんでしょう？ だったら大丈夫じゃないですか。」

「かも知れねえ……でも、そうでないかも知れねえ。」

「？」

銀時の発言だった。

「今までそうだった。お前が実際のあらすじより早く捕まりそうになつたりとか、それにマサオのこともだ。あんなふうに一セモノの酔乙女あいに襲われるようなシーンは、映画の中にはない。何かおかしいことが、映画で起つてゐるのは確かだ。だとすると……」

「明日のデパートでの出来事でも、何か変化があるかも知れないと一つことですか。」

山崎が、銀時の言葉を引き取つた。まだ鼻血が出てゐる。

「まあ必ずとは言えねえが。」

「しんのすけにも、危険が迫つてゐるつていうんですか？」

トオルの顔が、不安げに曇つた。

「だから必ずとは言えねえって言つてんだろ。でも何か起つる可能性は大だな。」

「……ち、そこだ。」

土方が再び、山崎の方へ向き直った。びくっと緊張する山崎。

「お前に任務を与えるぞ、山崎退。」

「へ？」

「いいか、お前は明日そのデパートに行つて、野原一家の様子を見張つてるんだ。なんなら一緒にいてもいい。そんで怪しい奴が来たら、しんのすけたちを守つてやれ。」

「ええーっ！」

「なんだ、文句あんのか。」

「それって……俺一人でやるんですか？」

「ああ、しんのすけと仲いいんだろ？それにミントンを特別に許可してやつてるんだ。それぐらいやつて当然だろ？が。」

ミントンは関係ないんじや……と思つたものの、口に出せない新ハであつた。

「俺…………一人ですか？」

「バカかお前。この大人数でぞろぞろ歩いてみる。目立つてしまがねえよ。」

それはそうだが、せめて誰か一人ぐらいは一緒に…………。
と思ったのだが、副長のにらみにあって声が出なかつた。そこへ素つ氣ない声がかかる。

「精いっぱい頑張れよ、ザキ。」

「殉職したら、ちゃんと死体は持つて帰つてやるネ。」

「二人とも、その言い方はひどいですよ…………」

本当にひど過ぎる扱いに、山崎は風邪でもひいて寝込みたくなつてきた…………。

「あ、もうこんな時間だ……それじゃ沖田さん、僕もつ帰りますね。」

「ああ。」

その頃の酔乙女邸では、夕食に招待されたマサオが、さよなら辞去しようとしているところだった。

「またいつでも来いよ。」

「応あいのＳＰである、沖田総悟は言つた。」

「本当においしい夕食でした。ありがとうございます。」

「いやア、うちの「ツクの腕がいいから、なアお嬢様。」

「……ええ。」

酔乙女あい…………の「セモノ」は、沖田をにらみながら小声で答えた。実質沖田に脅迫されているような状況で、一セあいは終始見張られ、いじめられ、それでも給料を払わねばならない。もちろん腹を立てずにいられるわけないのだが、沖田にいつ斬られるか、それともバ

ズーカ砲をぶち込まれるか分かったものじゃないので、ともかく返せないのである…。

「やうだ沖田さん、僕明日、お出かけするんです。」

マサオがどこか嬉しそうな様子で言った。

「へえ、どこに？」

奇妙なことだが、あの事件以来、沖田とマサオは妙に気が合ってしまって、ことあるごとにこうして会っては、話をするようになった。時には、沖田がマサオの家へ行くこともある。自己中心的でどうな沖田と、泣き虫で気の優しいマサオ。ここにも意外な組み合わせが誕生したわけだ。

「うん……ママが言つてたけど、最近できただばかりの『デパート』とか。」

マサオはその『デパート』の名前を言つた。

「『デパート』？」

その時、沖田の頭の中を不吉な予感が通り過ぎた。

それはほんの一瞬よぎつただけだったが、気持ち悪い後味を残すほどに強烈なものだった。

なんだ？ これは。

「沖田さん？ どうしたんですか、難しい顔しちゃって。」

「……ん？ あ、いや……何でもね。よ。」

結局そのままマサオを帰した沖田だったが、さつきの嫌な感覚はまだ消えていなかつた。なぜだ？ マサオが『デパート』に行くことに、何かまずいことでもあるのか？ そつ感じる理由を、沖田は思不出せなかつた。

よし、それなら。

不意に彼の中で、心が決まった。

明日はその『デパート』に行くと決めて。一歩のあいは縛りつけておいて。

マサオに危機が迫った時のために
……。
。

「…………こよいよ、明日だな。」

「はい。」

「全員捕まえろよ。これで春田部の奴らは全員、我々の手に落ちたことになるんだから。」

「分かっておりますわ。」

「ただし……」

あいつだけは、特別サービスでとつておいてやるけどな。

「

笑い声が、ひそやかに広がつていった。

まだ、誰も気づいていない。恐るべき敵が、ついに本格的に動き始めたことを。

彼らのうち一人に、死の危険が迫っていることも……。

その九・似てないものの同士の方が「うまくいく」とが多い（後書き）

最後に登場した敵の正体は誰か、そして彼の狙いは？次回には、敵も予想しない展開が待ってるかも！？乞うご期待！！

その拾・欲張りで最終的に得する奴はない（前書き）

デパートに一人向かうことになった山崎、マサオくんを心配し勝手に行くことにした沖田、そして野原一家やマサオくんの運命はいかに？そしてなぜか、今回はあいつが大活躍！！

その拾・欲張りで最終的に得する奴はない

「へえ、こりゃ予想以上に広いなあ……」

予想外の大きさにびっくりしながら、新しいデパートの中を歩いている人物がいた。

志村新八である。

「こんなに大きかつたら、迷子になる子とか出るよなあ……」
なんて心配をしているところが、いかにも新八らしい。

新八がここにやつて来たのは、夕食の材料の調達（今日はみんなでお鍋の予定だつた）のためであつたが、あともう一つ、山崎のことが心配でたまらなかつたからだ。

初めから、新八は山崎が一人だけでデパートに行くことに反対だつた。得体の知れぬ敵が相手なのに、危険過ぎる。

それなのにあまりにも冷めた銀時たちの様子を見て、愛想を尽かしてしまつた新八は、一人でも山崎の手助けをしてやる決意をしたのだった。

もちろん、みんなには内緒だ。銀時たちには、どこかで買い物してくるとしか言つていない。

「それにしてもしくじつたな……」

こんなにでかいとは思わなかつた。デパート自体がでかいだけでなく、中に入いる人の数も半端でない。この中で山崎と野原一家を見つけ出すなど、至難の技である。

第一自分は、野原一家がどんな顔をしているのか知らないのだとう事実に、新八は今さらながら気がついた。

これじゃ本当に買い物だけで終わっちゃうじゃないか。まったく情けない、もう少しよく考えてから来るべきだった……。

……ん？

えつ！？なんである人が、ここに……！

新八の見開かれた目に、思いもかけないある人物の姿が映し出されていた。

ヒカルが本当にしじんのすけから離れるより先に、自分がいる場所と

「痴ちやん一両方買つて！！」

「ああもひ、あんたなんか連れてくるんじゃなかつた……」

野原みさえは、一つ大きくため息をついた。このデパート行きを、しんのすけがあれだけ楽しみにしていたのは、お菓子や新しいおも

ちゃを狙つてのことだ。

それぐらこのことは、誰にだつて予想がつく。

それでもやはり、面と向かつて大はしゃぎでいはれると、どうな親だつて気が滅入るといつものだ。

さらにお菓子を選ぼうとしているしんのすけを呆れた目つきで見やると、みさえはカートを進めよつとした。少しぐらこぼうつておいても大丈夫だらう。何しろこいつは、迷子にかけてはベテラン（…）だ。

しんのすけを挟んで反対側から、声がかかつた。

「やあ、しんのすけくん。」

「お?」

またもう一つお菓子を取ろうとしていたしんのすけが、手を止めて声のした方を向き、そしてみさえの驚いたことに、ぱつと顔を輝かせて飛びついた。

「山崎お兄ちゃん!」

「しんのすけ…この人、知り合いなの?」

突然現れた人物に、みさえは当然のじとく少し警戒心を抱いた。全く見覚えのない人だ。一体誰だろう?

「山崎退お兄ちゃんだゾ! 最近毎日、オラとクリキントンしてるの。

「バドミントンだよ。」

苦笑しつつ突っ込む青年。恐らく今まで何度も、この間違いを修正してきたのだろう。

「母ちゃん、安心していいゾ。」

しんのすけが重ねて言ひ。懇願するような口調だ。

「お兄ちゃんは悪い人じやないゾ。へーほんで地味で特徴あまりないけど、でもいい人だゾ!」

「…それ、ほめてくれてるの?」

ため息をつく青年。見れば、確かに地味で実直そうな、好感を持てる感じの若い男である。

みさえはほんの少しだけ、警戒を緩めた。ほんの少しだけ。人というのは、見かけによらない生き物だからである。

その時山崎なる青年が、しんのすけがいっぱい抱えているお菓子に目をやつた。

「あれ…それ全部買つてもいいの?」

「うん!」

元気に答えるしんのすけ。

「でも母ちゃんがおケチだから…」

「何ですって…！」

みさえが店内だと「う」と忘れて、怒鳴った。人前でなかつたら、げんこつ攻撃もあつたことだらう。

すると山崎なる青年は、少し首をかしげてしんのすけを見ていたが、やがて言つた。

「しんのすけくん、俺が昨日言つたこと覚えてるかな？」

「お？ 何？ 浜崎あゆみの新曲がどうなるか、心配で仕方がないってこと？」

「そんなこと言つた覚えないし。やうじやなくてほら、君が買い物に行かつて話した時のことで。俺はいつ言つたよな。」

『欲張つたら、買つてくれるものも買つてもらえなくなるよ。』

しんのすけが少し、あつと/or/う顔つきになつた。

「確かに今はみんな欲しいかも知れないけどさ、お母さんだつて買いたいものがあるし、君がそんなにしつこく言つたらあつと困るに決まつてるよ。お菓子は別に今日買わなきゃいけないつてものじやないんだから、今回はどうか一つだけにしておいたら、他のはまた別の時に買つとしてや。」

そこまでいつぺんに言つと、初めて山崎の声に、からかいつぶつな調子が混じつた。

「それにお菓子を食べ過ぎて太つたら、もう女の子にもてなくなる

よ。」

その一言が、しんのすけの心を決めたようだつた。

「母ちゃん！ オラ、チヨ ロビだけにしとく……」

「えつ？ ……あつ、そう……」

みさえは驚きでぼんやりしながら、しんのすけがかごの中にチヨ ロビだけを投げ入れ、あとのお菓子を棚に戻そうとするのを見ていた。そしてそれを手伝う山崎の姿も。

何だか分からぬけど、確かにいい人みたいだわ。しんのすけをいさめる時の言い方が気に入つた。心がこもつていないと、あんな言葉は出ない。

みさえの心の中で、一つ鎧よろいが脱げた。

「あの……」

気がつくと、声をかけていた。

「よかつたら、『』一緒に緒しませんか？」

しんのすけが今にも、浮氣だ浮氣だと騒ぎそつた発言であった……。

「沖田さん！」

新八が呼びかけながら走り寄ると、沖田は本当にびくつとしたらしく、ものすごい勢いで振り向いた。

そして新八だと分かると、少しだけ肩から力を抜いた。

「なんだ、おめえか……何でこんな所にいる？」

新八は山崎が心配で来たことを話し、同じ質問をぶつけた。

「沖田さんこそ、どうしてこんな所に？」

「そ、それはだなア……」

沖田は昨日、マサオがこのデパートに行く予定だと聞いたことを説明した。そしてその時、妙に嫌な感じがしたことも。

「そのマサオくんは、映画の中でもデパートに出かけることになるんですか？」

何気ない質問のつもりだったが、沖田はさらに表情を険しくした。

「……いや、違う。そんなシーンはなかつた。だから、なんか……」

「不安で見に来たというわけですか。」

新ハが先回りをして言った。

「う……ま、まあそういうこいつた。」

この人、本当にマサオのことが気に入つたんだな、と、新ハは改めて驚いていた。自分勝手でサディストな沖田の心に、このような一面があつたとは。

「それで、マサオくんはまだ来てないんですね？」

沖田が出入り口付近でうろつりしているといふことは、彼は明らかにマサオがやって来るのを待っているのだ。当然、マサオはまだ来ていないということになる。

しかし、答える沖田の口調は彼らしくもなく不安げで、迷いがあつた。

「だとと思うが……俺がここに来たのは開店の30分ぐらい後だ。時間を勘違いしちまつてなア。もしそれより早く来てたら……」

顔を曇らせている沖田を見ているうちに、新ハの胸の内にも不安がきざし始めた。何よりも、いつもへらへらして何物にも動じないと思っていた沖田が不安をあからさまに見せたことに、新ハは動搖を感じたのだった。

ふと目を横へやると、一人の怒った顔をした女性が、すぐそばを通り抜けていくところだった。通り抜けるひょうしに彼女の腕が少しふつかつたが、女性は謝りもせずにすんずん行ってしまう。本来穏やかな性格の新ハは、何かよっぽど腹の立つことでもあったんだろ

うなと思いながら、その後ろ姿に目をやるだけだった。

するとその時、沖田がはっと息を呑んだ。その視線が、さつき新ハにぶつかった女に、ぴたと当てられている。

どうしたんですか、と新ハが尋ねるより早く、その女性を待つていたかのように、玄関フロアにある大きな噴水の陰から、現れた人物がいた。

「あいつ…」

沖田が、ほとんど聞こえないくらいの小声で呟いた。

「あいつは…」

むしゃくしゃする。まったく、なんてことだ。

「一体どうしたの？ そんなに怒った顔をして。」

噴水のそばで待っていた相手が、自分の顔を見て、少し驚いた顔になる。

「それに、あの子は？」

その問いに答えようと口を開いた途端、またさつきの煮えくり返るような気持ちが襲ってきた。

「計算外だわ！」

「しつ！ 声を小さく！…」

「ああ、『めんなさ』…」

怒りのあまり、つい我を忘れてしまったのだ。

「何があつたの？」

「それがね…邪魔が入つたのよ。」

「何ですつて？ でもあいつは捕まえたはずでしょ、あの何とかいう女…」

「ええ、でもまた違うのがでてきたのよー。」

「また殴られたりしたわけ？」

「いえ、そうじゃないわ。今度出てきたのは、なんだか地味くさい、若い男だった。あんな奴、いなかつたはずなのに…。とにかくあいつが割り込んだせいでしんのすけが一人きりにならなくなつて、私の出番がなくなつちゃつたのよー。」

「嘘でしょう？ その男、本当に見覚えないのー？」

「ないわ。それに多分、春日部の住人でもない。住んでるといって、も、『じぐじく最近に引っ越してきたのよ、きっと。あいつのせいで、

計画は全てめちゃくちゃだわ！」

「まあ落ち着いてちょうどだいよ。」ソロジヤ田立つわ。」

「ええ… それはそうと、そつちせつまくいつたんでしうね？」

「ええ。」

答えた相手の顔に、人のよくない笑みが浮かんだ。

「今倉庫に閉じ込めてあるわ。縛りつけて、気絶させておいてね。どう、見に来ない？ 大丈夫よ、あの一家を捕まえるチャンスは、いくらでもあるんだから。」

「そうね… そうしましょつか。」

話しながら、歩き始めたこの一人の姿を野原一家が見たら、さぞかしひっくりしたことだらう。

なぜなら一人は、野原みさえとマサオの母親にそつくりだったのだから…。

「いやー、今日は本当にありがとうございました。」

「いえいえ…」

山崎は野原ひろじの感謝の言葉に、軽く手を振つて応じた。もう時刻は昼に近い。山崎を付き合わせ、たつぱりと買い物をした山崎は、一家が車に買つたものを詰め込むのまで手伝つていた。この、ある意味現代では珍しいほど地味な青年を、一家はいたく気に入つてしまつたらしい。なんなら昼食も一緒にどうかと誘われたくらいだ。ですがにそこまでずつずつしきはなれないでの、山崎はやんわりと断つた。

ま、これで土方さんの言つてた任務は果たしたことになるな、と、山崎は軽くため息をついた。

結局なんの危険も現れなかつたし、はつきり言つて彼らと買い物するのもとても楽しいことだつた。こんな任務なら、もつかいやりたいくらいだ。

「ばいばい、お兄ちゃん！」

「たやいやーー！」

走り出した車の窓から身を乗り出し、しんのすけとひまわりが（ひまわりはちゃんとしんのすけに片手でしがみついていた）手を振つ

た。山崎は、笑顔で手を上げ、それに応えた。

そう、彼もまた、平凡そいでいつぶつう風変わりな、この野原一家を好きになり始めていたのである。

向こうにもし帰れたら、俺もクレしん見よつ……ひそかにそう誓つた山崎であった。

やつぱりだ。見失つてしまつた。

「畜生！」

沖田が珍しく感情をむき出しにして、悪態をついた。今日は沖田さんのが、意外なところばかり見せられるなあと思った新八だが、当然口に出しては言わない。

噴水から歩き出した一人の女性が、野原みさえとマサオの母親だと

告げた沖田は、すぐさま後をつけ始めた。どうしようかと一瞬迷った新ハも、置いてけぼりは嫌だなと考えて彼の後を追い始めた。ところがこうして、5分とたないうちに見失してしまったというわけであった。

しかし、決して不用心だったのではない。ただ単に人が多すぎて、その中にまぎれてしまった一人を見つけることができなかつたというだけのことだ。

「くそ！」

沖田は再び吐き捨てる、設置されているベンチにどさつと座り込んでしまった。

「沖田さん…」

「マサオの母ちゃんが、あんな所で一人でいやがつたということは間違いねエ。あいつアニセモノだ。マサオをどこかにやりやがつたんだ！」

「沖田さん、落ち着いて下さい…」

興奮し、憤慨する一方の沖田を見かねて、新ハが言った。

「そうだ、僕がコーヒーか何か買ってきましょ。自動販売機があるはずですから。少し待つて下さいね。」

沖田は返事をしなかつた。少し離れてから振り返つてみると、さつきと同じ姿勢で、ベンチに身体を投げ出していた。

ゴロゴロ、ガツシャン！

自動販売機から缶を取り出し、新ハは軽く息をついた。

「僕のはカルピスで… 沖田さんは濃い目のコーヒー。これでよし、と。」

沖田が「コーヒー」を飲むかは知らないが、気持ちを落ち着かせるには熱い「コーヒー」が一番である。新ハは沖田のいるベンチのある方向へ、歩き始めた。

にしても、なんか変だな、このデパート。

新ハは今さらのように違和感を感じた。いや、ずっと感じていたのだが、色々あつたので気にする暇がなかつたのかも知れない。

何がおかしいんだろう？普通のデパートにある何かが、ここには欠けている。

そう…活気だ。これだけの人の数なのに、まるで活気が感じられない。そういうえばさつき沖田が大声を上げた時も、誰もこちらを見なかつたつけ……。

もしかしたらデパート中の人が、もうニセモノなのかも知れない。このぞつとするような考え方、新ハは振り払えなかつた。

そんなことを考えていたからだろう。すぐ前を通りかかつた扉の中から、微かな声が聞こえてきた時、新ハは反射的に立ち止まつた。普通の声ではない。

泣き声だつた。

「…………！」

深く考えるより先に、身体が動いていた。重そうな大きい扉を、ぐいと押し開けていたのだ。

倉庫だ。一目見て、新ハにはすぐ分かつた。

広々とした空間の中、色々な品物が、箱づめになつて雑多に積み上げられている。清掃係の誰かが置いていつたものらしい、一本の竿ほつきが床に転がつていた。

しかし、そんなものはどうでもよかつた。新ハの目をとらえていたのは、倉庫の奥にたたずむ二つの人影だつた。

両者はお互に、凍りついたようになつて見つめ合つた。

新ハは、彼らの足元に横たわっている小さな影に目をやつた。暗くて見えにくいが、そのシルエットには見覚えがある。

「…マサオくん。」

新ハがそう呟いた瞬間、みさえと、マサオの母親のニセモノが、一斉に襲いかかってきた。

「遅エなア、あいつ……」

沖田はベンチに座つて悶々としたまま、すでに10分以上は待ち続けていた。彼にしてはよく我慢した方である。

「並んでるのか？自動販売機つて並ぶもんなのかイ。」

そして何より気に入らないのは、目の前を通り過ぎていく人々の雰囲気であった。

なんて活気のねエ野郎どもなんでイ。もうちょいしゃべつたり、余所見したりしたらどうなんだ。どこつもここつも、前向いてばつかりで……全く不愉快でしょうがねエ。

「沖田……さん。」

すぐそばでか細い声がして、沖田は通り過ぎていく群衆をにらみつ

けるのをやめた。

「おい、お前遅エ…」

「すみません…でもそれどころじゃなくってね。」

沖田は言葉を失い、大きく目を見開いた。

新ハの腕の中には、今日沖田が何よりも捜し求めていたもの……
マサオの姿があつたのである。

「マサオ…お前、何で……？」

「いや、色々あります…。」

新ハは倉庫の前を通りかかった時に泣き声を耳にし、入ってみたと

ころ中にいた二人のニセモノに襲われたことを順序だてて話した。

「運よく手元に簞がありましてね。何とか一人とも、叩き伏せました。」

「そうだったのか…マ、マサオは無事なのか！？」

「ええ、氣絶してますけどね。それほど大した怪我はしていません
から。」

ちなみに言つておくと、新ハは家が道場ということもあり、剣術は
かなり使える方だ。その年頃の男の子としては、相当強い部類に入
るかも知れない。ただ周りがとんでもない奴ばかりなので、目立た
ないだけである。

「う、うーん…」

「…」

二人は話をやめた。マサオが顔をしかめ、うめき声を上げてくる。
今にも目を覚ましそうだ。

「マサオくん？」

新ハが声をかけると、マサオはつづらと目を開いた。ぼんやりと
こちらを見上げる。

「うーん…誰？」

変な質問だな、と新ハは一瞬首をかしげた。この近さで、自分の顔
が見えないはずはないのだが…。

それとも、地味過ぎて忘れられた?いや、いくらなんでもそんなことは。

「マサオくん、僕だよ。新ハだよ。分かるかい?」

軽く揺すって呼びかけると、マサオはさらに大きく目を開いた。

「あ、新ハさん…マ、ママは?ママのニセモノは?」

「大丈夫。僕がやつつけたから、もう心配いらないよ。」

安心させるような口調で、語りかける。しかし、マサオの顔から怯えの表情は消えなかつた。

「そうですか…あの…ここから出してくれませんか?」

「え?」

「僕、真っ暗なところ嫌いなんです。」

今度こそ、新ハは本気で困惑した。沖田と田を合わせると、彼もわけが分からぬといふ顔をしている。

その時新ハは初めて、マサオの視線が新ハの顔ではなく、その右肩辺りにずれていることに気がついた。恐ろしい認識が、心の奥から這い上がつてくる。

「マサオくん、君もしかして…

目、見えないの?」

くそつ、なんてことだ。

冷たい床に倒れ、みさえのニセモノは悔しげに舌打ちを漏らした。
あの女を捕らえ、あのお方に力を頂いたからには、スムーズに任務
をこなせると思っていたのに。何で邪魔ばかり入るのだ？

あの時しんのすけが迷子にならなくしやがった男かと思ったが、違
つたようだ。自分たちを痛めつけたのは、そいつより若い、むしろ
少年みたいな感じの奴だった。

どつちにしろ、奴らは我々の任務を妨害したのだ。自分たちのこと
を知っていたのか、それとも知らずにやつたのかは分からないが。
身体が動かない。何とかして、あのお方にこのことをお知らせしな
くては……。

倉庫の中に、誰かが入ってくる気配がした。

起き上がろうとした瞬間、背中に鋭い何かが貫通する音を、みさえ
のニセモノは確かに聞き取った。

ほとんど声を上げる間も、痛みを感じる時間すらなく、彼女は絶命
した。

その拾・欲張りで最終的に得する奴はいない（後書き）

新ハと沖田の会話シーンを書くのが大変でした。この二人、原作ではほとんどまともに会話してないんで…これでよかつたかな？次回はさらなる展開が待つていてる予感…どうぞお楽しみにつ…あと感想待つてます。最近来ないので、ちょっと寂しいです…。どんどんお寄せ下さい！！

その拾壹・やたらと他人を責める奴には口クなのがいない（前書き）

マサオくんが失明…思わぬ事態に銀さんたちはどう動く！？そして
いよいよ敵が、本格的に動き出す！

その拾壹・やたらと他人を責める奴には口クなのがいない

「お呼びですか。」

薄暗い部屋の中に、無表情な声が響いた。

「ああ、『ごめんね急に。』」

それに答える軽い調子の声。天井の淡い明かりに照らされた小さなテーブルの上に、とん、と何かが置かれる。

一枚の写真だった。

「でもちよつと、注意しなきやいけない事態が起つたかも知れな
くてね。それで至急君を呼んだわけ。」

「…………この一人を、どうしろと?」

「うん、なんかそいつら、俺たちの計画の一部を邪魔したらしいん
だよね。わざとかたまたまか知らないけど、またそんなことされち
ややだもんね。」

そこで一息つく。そして……。

「どうわけでそいつら、消しちゃってくれる？」

声の軽い調子は変わらなかつた。まるでちよつとスーパーに行つておつかいをしてきてくれないかとでも言つよつた、平坦な口調だつた。

「ああ、それにもう一つ、やつてほしいことがあるんだ。」

「…………？」

「この子をここへさうひてきてくれないかな。」

もう一枚、写真が机の上に置かれた。

「君一人じゃ大変なら、あいつらにも手伝わせてやりなよ。久しづりだから、きつと喜ぶよ。」

「……承知いたしました。」

一拍の間をおいて、もう片方の無表情な声の主はそつ答えると、片手で三枚の写真のうちの一枚を取り、もう片方の手の指をすつと一枚の写真の上にそえた。

写真が、燃え上がった。

揺らめく赤とオレンジの中で、新八と山崎の顔が崩れていった。

「大丈夫? 一人だけで…。」
「うん、へーきへーき。」

双葉幼稚園では、ここにとうていぞない光景が繰り広げられていた。

マサオが失明したという話は、恐ろしいほどのスピードであちこちに知れ渡り、もちろん幼稚園中の子供たちが知っていた。ネネもすぐにそのことを耳にしたらしいが、今回ばかりは性質の悪い好奇心を發揮することができなく、ただただ心配のためだけにマサオ宅に駆けつけ、お見舞いしてくれた。そしてマサオの目が、本当に完全に見えなくなつたことを知ると、なんとぼろぼろと涙をこぼし始めたものである。これにはトオルやボーちゃん、それにしんのすけさえもがびっくりさせられた。

しかしさらに驚いたことには、ネネはマサオが幼稚園に来るようになつても、決してリアルおままごとをしなくなつた。

しかも見ることのできなくなつたマサオのそばにくつついて、手助けするようにすらなつていた。その献身（そう呼ぶのがふさわしいほどの身の尽くしようだった）ぶりは、沖田ですら凌ぐほどのものであった。

マサオが失明した原因は、身体的な怪我というよりも、精神へ加え

られたショックやストレスだろうと医者は言っていた。少し時間がたてば、すぐに戻るだろうとも。これには銀時たちも、大いに安堵のため息をついたものだ。

ショックの理由は、分かり過ぎるほどに分かっている。今はマサオが、立ち直るのを待つしかなかった。

一方マサオは、思いのほか気丈だった。沖田に導かれ、自分の家中を隅々まで歩き回って場所を覚えると、すぐに自宅の中での移動には不自由しなくなった。春田部の中のよく行く所や、そこに続く道のりなども、まさに身体で覚え、体得しているようだった。

一つの機関が潰されると、他の機関がその働きを補うために鋭敏になる。というのはよく聞く話だが、マサオの場合もそうだ。視力を失った代わりに、彼の耳や鼻は格段に鋭くなつた。今や足音を聞いただけで、誰が来たのか分かるまでになつていてる。

もちろん普通にそうなつたわけではない。マサオが苦しい練習を、積み重ねてできるようになつたことだ。トオルもよくそれについていたが、ある時マサオがこう言つたことがあつた。

「僕、こうやって目が見えなくなつて、初めて分かつたんだけどさ。人間つて耳とか鼻よりずっと、目に頼つてるんだね。だつて大体見た目で判断することが多いでしょ？…でも、そのせいで間違っちゃうこともあるんだよね、きっと。」

トオルは、特にその最後の言葉に、はつと胸をつかれるような気持ちになつたのだった。

幼稚園に来るようになつて、もちろんマサオは噂と好奇心の的になつたが、しんのすけたちが団結して彼を守つた。特にネネはすごかつた。一度マサオをからかいに来たいじめっ子たちを、ウサギのぬいぐるみで叩きまくつて追い返したという武勇伝がある。

もつともマサオ本人は、普通に過ごす分には全く支障がない様子だつた。机の周りやロッカーの中は相変わらずきっちと片づけられていたし、トイレにだつて自分で行けるし、声の聞こえる方向で誰かのいる場所を正確に感じることもできる。はた目には目が見える時

とまるで変わらなかつた。

それでもネネは、マサオのそばにい続けた。周りには一人をさかんにはやし立てる、バカでおせっかいな奴もいたが、それでもずっと離れなかつた。トオルたちだけではなく、マサオ当人が戸惑うほどに。なぜだろ？トオルは頭の中を疑問符でいっぱいにしながら考えた。なんでネネちゃんは、こんなに一生懸命にマサオのそばにいようとするんだろう？

驚いたことに、その答えを持つてきてくれたのは、ネネ本人であつた。

「マサオくん、一人で本当に帰れる？危なくない？」

夕暮れの公園。赤い光が遊具を染めている。

二人はもう誰もいない公園を出て、帰途につこうとしているところだつた。ブランコに座つて何となくゆらゆら揺れていたら、いつの間にか他の子供たちは誰もいなくなつてしまつたというわけだ。

マサオはネネを安心させるように、ちらりと笑つた。

「本当に大丈夫だつてば、ネネちゃん。いつも一人で帰つてるもの。平氣だよ。」

それに、正直ついてこられては困るのだ。本物も二セモノも、ママがいなくなつてしまつたので、最近はトオルの家で夕飯を食べることにしている。今日はそのまま彼の家へ行くつもりだつた。

ちなみに朝ご飯は、新ハが夕食の時に一緒に準備してくれた料理を温めて食べることにしており、お弁当もトオルが新ハに頼まれて持つてきたのを、みんなにバレンないようこうそり受け取るようにしていた。簡単な料理なら自分でも作れるが、やはり目が見えない状態で包丁やコンロなどを扱うのは、かなり危ないことだ。

それに新ハの作る料理が、言っちゃあ悪いが自分やママの作るものよりおいしい、といつこともあった……。

「ネネちゃん…本当に心配いらないんだよ。どうしてこんなに気をつかってくれるの?」

実際、どうしてネネだけがこんなに心配そうな様子でい続けているのか、マサオも周りの人たちも不思議がっていた。確かに友達が失明するというのは、ショッキングな出来事かも知れないが……。

「……」「めんね。」

「えつ！？」

一瞬ネネが何と言ったのか分からず、マサオは戸惑った。

「「めんなさい。」

今度はさつきよりはつきりした口調で、ネネが言葉を口にした。

「……なんで謝るの?」

ネネは気が強い分、あまり人に弱みを見せないタイプだ。従つて軽々しく謝罪の言葉を話すような性格でもない。

それなのに、理由も分からぬままいきなり謝られたものだから、マサオは完全に面食らってしまった。

本当にどうしちゃったの？ネネちゃん。

「だつて……」

ネネが、ほとんど聞こえないほど小さな声で言った。

「マサオくんの目が見えなくなつたのは、あたしのせいなんだもの。

」

「ええ？」

マサオは聞き間違えたのではないかと思つた。ビビリしてそんなことを言つのかと尋ねるより早く、ネネがしゃべり出した。

「あたし、マサオくんにいつもひどいことしてたわよね。リアルおままで」と無理やりせせたり、悪口言つたり。

「？」

一体何を言つ出すのだ。

「きつとあたしが嫌なことばかりしてたから、マサオくん、ストレス溜まつちやつてたのね。でも、ネネ全然気がつかなかつた。それでとうとうこんなことになつて…全部あたしのせいよ。」

聞いてこぬつちに、マサオは思わず笑い出しそうになつた。なんてことだらう。ネネはまるで見当違いの予測をして、自分を責め続けていたのだ。

「ネネちゃん、それは違うよ。」

「いいの、『まかさなくたつて。だつてそれ意外に考えられないじゃない。みんなだつてそう思つてるわ。』

一瞬、マサオはネネの言葉の意味を考えなければならなかつた。

「みんなもそう思つてるつて？」

「そうよ。」

ネネの声に、突如つるみがかかる。泣きかけているのだと分かつて、マサオは慌ててポケットからハンカチを取り出し、差し出した。

「ありがとう。」

ネネがハンカチを受け取るのが分かつた。

「少なくとも、幼稚園の女の子はみんな知つてるわ。男の子たちは…あまり知らないみたいだけど。」

「……」

聞いていふうちに、マサオの頭の中で一つの考えがまとまつてきた。しかしごとに言わば、かわりに尋ねた。

「ネネちゃん、そのこと誰に聞いたの？」

すぐさま答えが返つてくる。

「あいちゃんよ。」

マサオは束の間絶句した。あいちゃんだつてー？

「あいちゃん、最近マサオくんのことが好きになりかけてるでしょ？だからあたしのこと、すじぐ怒つてた。じつしてくれるのよつて、すじぐ責めてたわ。」

それは違つよ、ネネちゃん。

マサオは心の中で囁いた。あのあいちゃんは一セモノで、僕を捕まえるためにああやつてただけなんだ。ただの演技だつたんだよ。君を責めるのは、ただ沖田さん捕まつてる鬱憤うつぶんを、そうやつて晴らしたいからだけや。

「それにね、マサオくんとばかりいるのはそのせいだけじゃないわ。」

「じつにひじりと？」

「もう幼稚園の女の子は、誰もネネと遊んでくれないの。」

またしても、マサオは言葉を失つた。

「声かけても無視されるし……寂しいから、ずっとマサオくんやしつちやんたちのそばにいたのよ。」

そこまで言つと、ネネはフツと笑つた。自嘲的な笑い方に聞こえた。「結局あたしつて、自分勝手のままね。自分の寂しさをまぎらわすために、マサオくんのそばにいたんだもの。今までと変わらないわ。」

「ネネちゃん……」

マサオはかけるべき言葉が見つからなかつた。どんな慰めも、宙に浮いてしまいそうだ。

その時一つだけ、マサオは効果的かも知れない方法を思いついた。

「ネネちゃん、これから風間くんちに行かない？」

「えつ？ 何言つてるのよ、迷惑じゃないの。」

「実はね、僕風間くんの家に、夕食に呼ばれてるんだ。」

マサオはなるべく慎重に言葉を選び、土方先生、銀八先生が風間家

の両隣にあること、それをきっかけに互いが交流し合い、一緒に夕食をとっていること、そして今日、母親が留守なためマサオもそれに招待されたということを説明した。あながち嘘というわけでもない。

「へえ、そんな偶然つて、あるのね。」

普段ならそういう話を耳にするといいとばかりに好奇心を發揮するネネであったが、今回は純粋に驚いた表情を浮かべただけだった。

「でも…ママに何も言つてないし……」

「大丈夫大丈夫。風間くんちにいたら、電話すればいいんだよ。」

そう言ってネネを説き伏せ、二人は公園を出た。

夕日の光が作る一つの長く伸びた影が、どちらからともなく互いに手を伸ばしてつなぎ合った。

ネネとマサオが公園を去った約一分後、そこに再び二つの影が現れていた。マサオはもう公園に誰もいないと思い込んでいたが、それは間違いだったのだ。

しかも、その一人は顔も身体つきも服装でさえも、ネネとマサオの姿に瓜二つであった。

二人はしばし黙り込み、ネネたちの消えていった方向を眺めていたが……。

「予言に、間違いはないのね？」

ネネそつくりの少女が、感情のこもつていらない声で尋ねた。もちろん隣の少年への言葉なのだが、そちらを見よつともしない。マサオそつくりの少年は、いつこつに気にする様子もなく声を返した。

「そりゃ大丈夫さ。あいつの予言は外れない…………お前だつて、よく知ってるはずじやないか。何でそんなに怪しむんだ？」

マサオのものと同じその声には、自信と怪訝そうな響きが入り混じつていた。

「念を入れてるだけよ。怪しんでるわけじやないわ。」

相変わらず話している相手には目を向けず、ネネと同じ姿をした少女は無機質に答えを返した。声はおろか、夕日の赤い光を反射している瞳にすら、なんの感情も映し出されていない。まるでただのガラス玉のようだった。

「とにかくあいつは、あの男に連れられて家に送られてくる。その時に捕まえて、男の方は始末しちまえばいい。簡単な仕事だ。」

マサオに瓜二つの少年が、鼻を鳴らした。つまらなそうな感じにとれなくもない。

「まったく何で、あんな何でもなさそーな一人を殺らなきやなんないのかね？俺たちがやらなくても、他のザコどもに任しつければ充分じゃないか。何でわざわざ俺たちが出る必要がある？退屈しおきさ

てくれるためなのか？」

「それもあるかもね。」

「ネネそつくりの声が、ただし本物なら決して出せないような冷え切つた声で告げた。

「でもあのお方は、少しでも障害になるものは消しておかないと気がすまない方だし、あいつらに任したら何かとんでもないことするかも知れないし。」

「ああ、バカだからな。」

「ええ、バカだからよ。」

束の間、沈黙が満ちた。既に夕口は落ちかけ、辺りは柔らかい闇の中に包み込まれようとしている。

再び、マサオと同じ声が言った。

「それじゃあ仕方ない。奴らが来るまで、我慢して待つとするか。退屈だけど、あとでいっぱい楽しめばいいからな。」

「そうね……」

少女は、そつと田を開じた。

「少しば手応えあればいいけどね……」

その拾壹・やたらと他人を責める奴には口クなのがいない（後書き）

新八と山崎…敵の矛先は意外な方向へ！ネネちゃんを風間家に招待したマサオくんだけど、果たしてどうなつちやうのか？いよいよ敵も現れ、危険が目前に…次回は急激な展開が待ち受けの予感！感想もどうぞお寄せ下さい！！

セの捨手・マンシッハの壁やわの部屋へ向かと不便（前書き）

命を狙われた新ハと山崎の運命は…！？一部の敵の名前を明らかになり、事態は突如急展開を見せる…じつもお楽しみ下せ…！

その拾弐・マンショノの壁をわの部屋にて何かと不便

桜田ネネは、幸せな気持ちでいっぱいだった。こんないい気分になつたのは、久しぶりのことだ。最近は家でも幼稚園でも、嫌なことばかりあつたから……。

そのせいだらう。ネネはもう少しで、新ハに曲がるべき角を教えそびれるところだった。

「あ！お兄さん、そこ曲がつて……！」

「そうなの？『めん』『めん』。」

自分が悪くもないのに頭をかけて謝るこのおとなしそうな青年に、ネネは好感を抱いていた。今は彼に家まで送つてもらつていいのだ。風間くんの従兄だつていうけど、あんまり気取つたとこのない、むしろすこぐ地味な人だわ。でもそこがいいのよね……。

夕食は、予想以上にぎやかで楽しかつた。何より面白かったのは、土方先生と銀ハ先生が口ゲンカを始め、やがてそれが酒の飲み比べに発展し、拳句の果てに一人とも酔いつぶれて寝込んでしまつたことだつた。しかも、せいぜい5杯ぐらいのワインだというのに。あれじやうちのパパより弱いわ、と、ネネは思い出し笑いをしていた……。

しかしふと、現実の問題が頭の中に浮かび上がつてきた。

「マサオくんは、誰が送つてくれるんですか？」

「ああ、マサオくんね。神楽ちゃんが送つてくれるから、大丈夫だよ。」

「神楽さん……あの色白で青い目した、チャイナ服のきれいな人？」

「そうそう。」

「服はアレだけど、中国人じゃないわよね？青い目の中中国人なんて、見たことないもの。」

「ううん、まあ……そつだらうね……」

新ハの返答がやや鈍つたが、幸いネネは気づいていなかつた。楽しそうにしゃべり続けている。

「ネネ、神楽さんみたいに綺麗になりたいな。青い目は無理だけど、ああいう白い肌、すつごく憧れるの。」

本当に憧れている口調だつた。新ハが内心、頼むから中身まで憧れないでくれよと懇願しているなどとは思つてもいない。

「でも…大丈夫なんですか？神楽さんと一緒に狙われるかも。」

「大丈夫大丈夫。」

新ハは心をこめて言つた。神楽がついていれば、変なサングラスのボディーガードを一団雇うよりもずっと安全だらう。これに定春がついたら、もう手のつけようがない。

ちなみに定春は、始めは春日部山のある場所に厳重に繋がれていたのだが、沖田が酢乙女家に入つて以来、その庭を好き勝手に荒らし回つている。たまに沖田にけしかけられ、ニセあいの頭にかぶりついたりしているとかいう話だ。

「家はあと少しかい？」

「うん！」

その間も、二人は笑いを交えつつ、色々とおしゃべりしていた。ネネの顔から、今日の夕方見せていた暗い表情は、消し飛んでしまつたかのようだつた。新ハもそれが嬉しく、ネネと話すことに熱心だつた。

そのせいもあつただろう。ネネはもちろん、新ハは少しばかり間をおいてついてくる影に全く気づいていなかつた。

もつとも、辺りはほとんど暗闇で、光源といえば家々からの明かりと、ぽつんぽつんと立つ街灯ぐらいなものだ。気がつかない方が普通だつたかも知れない。

後をつけているのはもちろん、数時間前に公園にいた、ネネとマサオにそつくりな二人組であつた。

「どうだ、やつぱり予言通りになつただろう？」

「ええ、そのようね。」

ネネそつくりな少女の態度は、先刻と変わらず冷淡だつた。

（ちつ…少しばは感情を表に出したらどうなんだ、この不愛想女が。）内心、不快な咳きを漏らしたマサオそつくりな少年だつたが、声に出しては言わなかつた。何と言つても、彼女はおのれの右腕的存続だし、我々の中では一番恐ろしく、そして強大な力を持つてゐるのだ。

「…で、どの辺りでやるんだ？」

先を歩いていく一つの背中を眺めながら、マサオと同じ声の少年は低く尋ねた。

「そうね、ちょうど……あの角を曲がつて、すぐの所にするわ。あそこなら電灯の光が届かないし、すぐそばに家もないし。」

そこまで言つと、ネネと瓜二つの少女は初めて隣の少年の顔を、正面から見た。少年はびくつとなり、無感情な視線から自分の目をひつぺがすことができなかつた。

「あたじがまず、先に攻撃をしかけるわ。十中八九、奴はその攻撃

で死ぬから…………あとはもう一人をゆっくり回収すればいい。」

「何だ、あつさりやつちまうのか？つまんねえ。」

言つてしまつて、少年は後悔した。たちまち氷のよつた視線でにらまれてしまつたからだ。

「あんた、勘違ひしてゐみたいね。これは命令なの。任務なの。遊びでやつてるんじゃないのよ。つまらないとか楽しいとか、そういうことはどーでもいいの、だつて仕事なんだから。」

そして、と続ける少女の目つきが、さらに凍りついた。

「仕事を怠つたら、待つてるのは『死』だけよ。」

「分かつてゐ、分かつてゐよ、そんぐらい。」

少年は慌て、弁解するような口調になつた。

こいつがカツとなるなんて、まずありえないが、それでもなるべく怒らせることは避けたい。彼女はまさに言葉通り、にらむだけで人を殺すことができるのだから。

前を行く一人が角を曲がり、少しの間続く暗がりに入った。やはり不安なのだろう、少し足早になつてゐる。

かわいそうに。少年は哀れみに近い表情すら浮かべて、それを見ていた。そんなに急いだつて、無駄なものは無駄だというのに……。

「行くわよ。」

ネネそつくりな声がそう言つて、冷え切つた瞳が、前を歩いていく二人のうち男の方の背中にぴたりと当てられた。

数秒後には、全てカタがつく…………少年はそう信じて、何の疑念も抱いていなかつた。いや、それは少女の方も同じだつたであらう。

一人は全く足音を立てていなかつたし、呼吸音も最小限にしていた。話すのだつて、囁くのより小さいと言つていい声量でだ。だから氣づかれるはずがなかつた。どう考へても。

「…………？」

少女が突然顔をしかめたので、少年は不思議に思つた。

「どうした？」

「いえ、何だか頭の内側で、妙な感覚がしたのよ。すうつとなでられたみたいな……」

「頭の内側？」

少年が聞き返す。

まさにその瞬間だった。前を歩く青年が、くるりと振り向いたのは。

あまりに突然の動作で、一人は隠れる暇がなかつた。しかも間の悪いことに、一人は角を曲がつたばかりで、まだ街灯の光が届く所にいた。

青年　いや、少年と言つた方がいいかも知れない　　の目が、まつすぐに後ろの一人をとらえた。

その目が大きく見開かれる。隣の小さな人影に、何か慌ただしく叫ぶと、16歳ぐらいのその少年は走り出した。小さな人影の手を引いて。

「く……」

マサオに瓜二つの少年が追いかけようとしたが、

「ダメよ。」

少女に素早く腕をつかまれた。

「何でだよ！？ 今ならまだ間に合ひじやないか！ 今狙つて攻撃すれば……！」

「落ち着きなさい、イリス。」

名前を呼ばれ、少年はびっくりと押し黙つた。今の少女の口調から、明らかに殺氣じみたものがにじみ出でていたからだ。

少女は低く、小さな声で囁いた。

「普通に考えて、あいつが感づくはずがないのわ。きっと、誰かが教えたのよ。」

「教えた？ でも奴のそばに近づいたものは、何も……」

「あんた、忘れたの？」

少女の声は、今やマイナス以下まで温度を下げていた。

「ひつひつ」ことができる奴が、一人だけいたでしょ。」
言われて、少年　　イリスの目が、大きく見開かれた。

「まさか……

テルか。」

少女がゆっくりとうなずく。

「……それ以外には、考えられない。」

「あいつ、閉じ込められてるのに生意氣なマネを……」

イリスの声には、明らかに怒りがこもっていた。

「どうする？ ルビー。」

呼びかけられた少女は、堅く凍った瞳の方向をぐるりと変え、元来た方向を振り返った。

マングースマンションの方へ。

「…………少し、お仕置きが足りないらしわね。」

そつまうづ少女 ルビーの声は、今まで一番寒々としていた。

「あー……」

マングースマンションの一室で、盛大にだみ声を上げながら寝転んでいる男がいた。

土方十四郎である。

別に下手くそなカラオケに挑戦しているわけではない。ただ酒の飲み過ぎで、苦しいだけのことだ。飲み過ぎつたつて、ワインをグラス五杯、飲んだ程度のことなのだが。

まあ、要は一日酔い、であった。

酒は好きなのだが、実はあまりアルコールに強くない。それは宿敵（？）の銀時にも言えることだった。花見の時も、一人で飲み比べをした結果醜態をさらしてしまったことがある。

そうだ……確かにネちゃんが来たんだよな……で、あの野郎と争つていてるうちに……。

それからの記憶はあるでおぼろだが、起き上がってみるとここは自分と山崎の部屋の中だった。とすると、自分は酔いつぶれてから誰かにここへ運び込まれたわけだ。多分山崎だろう。

しかし、当の山崎の姿は見えなかつた。よく聞くと、隣のトオルの部屋から水を流す音や皿がカチャカチャ鳴る音がする。片づけを手伝いに行つているようだ。

頭が痛いのと身体がだるいせいで、寝返りを打つのにも苦労するほどだつた。まったく情けねえ、これが真選組の副長か……。

ふと土方は、だみ声を上げるのをやめた。

音が聞こえる。

それは、土方の寝ているベットが寄せてある、つまり土方が背中を向けている壁の辺りから、聞こえてくる。

微かな物音だつた……常人なら、気がつかないくらいの。

しかしあいにくことに、土方はいわゆる『常人』ではなかつた。そちらの壁は、トオルの家がある側とは反対側だ。逆側に誰が住んでいるのか知らないが、そこの住人がさつきの物音を立てたのだろう。

それにして、妙な音だった。まるで何か重いものが、壁に押しつけられたような。

そう……例えば、人間が。

土方は目を閉じ、布団を引き寄せた。色々あつたからといって、そこまで勘ぐることはない。首を振るうとした途端、頭が割れるように痛んだので、土方はかろうじて大声を上げそうになるのをこらえた。

くわっ、ちょっとカツコつけ過ぎちまたか。ワインなんざやめて、ビールにしどきやよかつた……。

そんなことを考えてこるつちこ、土方は再び意識が遠のいていくを感じた……。

トン、トン。

またしても、物音だつた。

土方ははっと目を開けた。驚くほど氣分がよくなつてゐる。おそるおそる頭を動かしてみたが、何の痛みもなかつた。

随分治るのが早いな、と、土方は心の中で一人ごちた。いつもは翌朝まで苦しんでいることが多いのに…よく寝たせいか？

そういうば真選組では、色々な理由で夜中に叩き起こされたり（普通通土方は叩き起こす側だが）張り込みで徹夜したりすることが普通で、こうやって安眠をむさぼる機会はあまりなかつた気がする。土方自身も、ここまで氣を緩めて眠ることができたのは久しぶりだつた。

それでもほんのわずかな音で目が覚めてしまつのは、彼の戦士としての本能が衰えていない証拠であるつ。

トン。

また、やつきの壁から聞こえてくる。

先程よりは大きいが、やはり控えめで、辺りをはばかっていふゆうな音だ。まるで隣室の人迷惑をかけてはいけないとでもこつよくな。

だつたらなぜ、わざわざ壁を叩いたりする必要があるんだ？

土方は起き上がった。だるものも、頭痛もどこかへ消えていた。壁を小さく叩く音は、まだ小刻みに続いている。誰か知らねえが、ふざけた奴だ。せめて隣の家に言つて、苦情を……。

そこまで考えて、しかし土方はほとんどないことに気づいた。

風間家は、このマンガースマンションの8階にあった。エレベーターカラは遠く、廊下の端っこから数えて2番田の場所に位置している。

風間家のドアに、外側から向かい合つて右側が、銀時と神楽の部屋だ。

そして土方たちが暮らす所は、風間家を挟んでその反対側、廊下の一番端っこに位置しているのだった。

つまり風間家と反対側の壁の向こうには、隣室などない。誰もいな
いはずなのだ。

土方の全身から、じつと冷や汗が吹き出してきた。

必死で隠しているが、実は土方は幽霊とかお化けとか、そういういた
類のものが大の苦手だ。酒に強くないと同様、これも銀時と共通
していることで、真選組で幽霊騒ぎが起こった時にはやっぱり一人
で恥ずかしい様をさらしまくっていた。ついでに言うと、好みは違
うとはいえ味覚の異常さでも二人は共通点を持っている。
だからどう考へても、向こう側に何もないはずの壁から音が聞こえ
てきたのだと理解した時、土方は文字通り蒼白になってしまった。

いや、『聞こえてきた』 のではない。

音は、今も続いている。

悲鳴を上げて風間家に助けを求めたりしなかつたのは、さすがに真選組の鬼の副長としてのプライドがあるからだつた。それに沖田や銀時に、後でネチネチいじられるのもごめんである。あいつらにバしゃるくらいなら、それこそ死んだ方がましだ。

でもいつまでも、この音を聞いている氣にもなれない。

そこで… といふか、半ば自暴自棄になつて、土方はベッドに座つたまま足を伸ばし、壁を蹴りつけてみた。

ドンッ！

隣室の風間家に届くほどではないが、かなり大きな音がした。壁を向こうから叩いていた音が、ぴたつと止まる。

その沈黙の中で、土方は誰かが……あるいは何かが、じつと息をひそめている気配を感じ取つていた。

間違いない。向こうに、何かがいる。

一分ぐらい沈黙が続くうちに、土方はだんだん落ち着いてきた。それが何であれ、壁の向こう側にいるものが、幽霊みたいな超常的な存在の類ではないということを、ほとんど勘らしきもので理解したからだ。

今度はもつと、大胆な行動に出てみた。

「おい。」

自分の声が、沈黙の中で意外と大きく聞こえた。
「そこに誰かいるのか。」

沈黙。

土方が再び声をかけようとした時、不意にまた、壁を叩く音が始まつた。ただし、今度はさつきよりも大きい。隣室に誰かいるのが、分かつたからだろうか。

土方が何か言おうとするが、それを遮るかのように叩く音が強くなる。黙つてこれを聞いてくれ、というよ。

土方は困惑し、考え込んだ。何者かは不明だが、向こうに誰かいるのは確かだ。反応しているということは、こちらの声が聞こえないとか、言葉が分からないというわけではないらしい。それなのに、しゃべらずに壁を叩き続いているということは……。

突如、ひらめいた。

「お前、ひょつとして声が出せないのか。」

すると壁の叩き方が、力強くなつた。肯定の意味がこもつてゐるこ
とが、すぐに分かる叩き方だ。そこで土方は言った。

「いいか、これから俺の質問することに『はい』なら一回、『いい
え』なら一回、壁を叩いて答える。分かつたか？」
トン、と一回、返事が返ってきた。

「お前は……そこに住んでんのか？」

いいえ。

「じゃあ、監禁されたのか。……その、誰かに閉じ込められたのかつ
てことだよ。」

はい。

土方は我知らず、『』くくりとつばを呑んで、質問を続けた。なぜ閉じ
込められているのかとストレートに聞けないもどかしさで、早口に
なつていた。

「閉じ込められているのは、お前一人か。」

いいえ。

「何人いるんだ？その数だけ壁を叩いてくれ。」

壁が叩かれた回数は、2回だった。

「二人、か……」

土方は束の間、考え込んだ。もし実際に、この壁の向こうに誰かを閉じ込めるとしたら、監禁される側は相当狭苦しい思いをしなければならないだろう。しかも一人。それなのに壁を叩けるような余裕があるといふことは、閉じ込められてる者はよっぽど小さい可能性がある……。

そうだ、子供だ。

「なあ……正直に答えてくれよ。

お前、本物の人間なのか？」

今度は、返事はなかった。

「おい、どうなんだ。」

返事なし。聞き方を間違えたのか、それとも答えられない質問だったのか。

「おい……」

言いかけて、土方はびっくりして口をつぐんだ。

声がしたのだ。壁の向こうからではない。頭の中に、直接。

『僕は、あなたたちの「いつセモノ」といつたところですが……もう一人は違います。』

あんまり驚いたので、土方は彼らしくもなく、しばらくぼうつとしていたらしい。気がつくと、壁が繰り返し叩かれていた。もしもし？聞いてますか？大丈夫ですか？

「……今のは……」

なんだ、と言いかけて、それでは相手が答えられないのを思い出し、土方は途中で質問を変えた。

「……テレパシーみたいなもんか？お前がやつたのか。」
ほとんど間をおかずに、肯定の返事が返つてくる。土方は混乱する頭をなだめ、質問を続けた。

「お前は「セモノ」でももう一人は……本物なんだな？」

はい。

「そこへ行く方法はないのか？お前ら、どれぐらい閉じ込められてんだ。叩いてみろ。単位はこっちで考えるから。」

少し間があつた後、壁が叩かれた。1回だった。

「1週間か？1日？」

両方外れだった。

「じゃ、1時間か。」

今度はかなりきつめの否定が返ってきた。

「冗談だよ。…じゃ、一ヶ月か？」

当たりであった。

「一ヶ月…そんなに長い間、か…」

土方は腕を組み、わずかにうなつた。一ヶ月。そんなに長い間、ここに閉じ込められていたとは。もちろん自分たちがこの世界へ迷い込む、だいぶ前のことだ。それにしてもなぜ、わざわざ「こんな所へ？」そういうば、トオルがこの家のことについて、何か言つてたな：土方はいまいち、詳しく思い出せなかつた。まあいい、それはあとで本人に聞くとしよう。

もしそんな長い期間監禁されていたのなら、当然飲み食いなしには生きていけないはずだ。二セモノが食料をどれぐらい必要とするのかは知らないが、少なくとも本物の人間には要るに違いない。つまりどこか、出入り口があるということになる。

壁の向こう側は沈黙して、土方の問いかけを待つていた。

「…なあ、お前らだつて、食べなきゃ生きてけないんだらつ。」

少し虚をつかれたような沈黙が返つてきたが、すぐて壁が一回叩かれた。

「そういう食事は、敵が持つてきてくれるんだよな。」

はい。

「じゃあもうひと、そこへ出入りする所があるってことになる。」

かなりの間をおいて、はい。

「ど二だ？少なくとも、ど二か見当はついてねえか？右か、左か、敵がいつもど二から入つてくるのか。」

答えはない。土方は聞き方がまづかったのだと気づき、急いで言い直した。

「じゃあ俺がその方向を言つたといひで、呪いてくれ。右・左・前・後ろ・上……上か。」

聞き返すと、小さな音で『はい』と返ってきた。

上。なるほど、上なら納得できる。少なくともこの壁には何の仕掛けもないように見えるから、ここから入るつと黙つたら、沖田のバズーカ砲を借りてぶち壊さなくてはならないだろ？ そんなことをしたら、大騒ぎどころではない。

上の部屋だ。この真上の家。そこのど二かに、壁の向こう側へ通じる入り口があるのに違いない。

少なくとも、試しに行つてみる価値はある。

「…今日は、これくらいにしておく。」

まるで殺人犯を尋問している時みたいな口調で、土方は言った。向

「こうは黙っている。

「もしもまくいったら、明日こなはお前らを助け出せるかも知れねえ。

「

「今度は向こうの雰囲気が、明らかに活気づいた。

「だが、あらかじめ言つておく。俺は…ここに住んでるのは、本物の人間ばかりだ。こっちには武器があるし、使うのにも慣れてる。もしこれがニセモノの罠だつたら、俺はためらいなくお前らをぶつた斬るからな…理解したか?」

意外にも、かなり力強く『はい』の答えが来た。

「いいだろつ。そんじゃ、わっせと寝な。」

言い捨てて、壁に背中を向ける。向こう側の誰かも、もう壁を叩いてはこなかつた。

しかし、土方は眠らなかつた。

その顔に、普段の彼が戻つてきていた。ひまわり組の土方先生ではなく、真選組の鬼の副長・土方十四郎に、彼は戻つていたのである。無意識にタバコとライターを取り出し、火をつけて吸い始めた。深く吸い込んで、ふーっと煙を吐く。部屋の中に漂いながら四散していくそれを、瞳孔の開いた目つきでにらみながら、土方はまた一吸い、タバコを吸つた。何か考え込んでいる顔で。

しばらくして我に返つた時、土方は山崎がまだ帰つていないと、時計がもう午前1時半過ぎを指していることに同時に気づいて顔をしかめた。

何してんだ？まさかこんな夜中にノンストップをやつるわけも……。

それに答えるかのよつて、玄関の扉が開く音がし、足音と共に、山崎が寝室に入つてきた。ベッドの上に、土方がしゃんとして座つているのを見ると、少しひくじした顔になる。まだ一日酔いで寝込んでいふとでも思つたのだらう。

そして土方が何か言つ前に、彼は告げた。

「土方さん、新八くんが、話したいことがあるそうです。もし大丈夫なら、今すぐトオルくんの家へ来てほしいと……」

やの拾弐・マンショノの壁わの部屋つて向かと不便（後書き）

えー、本話とは大して関係ないんですが、私、最近yahoo!ブログにて自分のブログを開設いたしました。yahoo!ブログで『青き水晶は月光のことく』と検索すると出てくるはず……。そこでもクレしん、ドラえもんズ、銀魂の小説を公開していく予定です。更新はかなり遅いですが、ここで連載してゐる小説の後の展開の鍵になるかも知れない話もたまに載せますんで、ぜひ覗いて下さると嬉しいです。既に1話、そうしたのを載せております。現時点ではどう関連するのやら分からんと思います（汗）、でも使う予定の話なので、見て損はない……と、思います（アピールし過ぎてすみません）。もちろん無関係の短編や連載小説もやっていきますよ。ブログだから読みにくいと思いますが、お付き合いいただけると幸いです。どうも長々と申し訳ありませんでした……。感想も、まだまだ待つてます！

その拾参・携帯電話を開けっ放しにするかぐ電池切れるぞ（前書き）

新八は襲われずに済んだものの、事態はむしろに深刻さを増していく。
……。土方の行動にも、注目すべし！

その拾參・携帯電話を開け放しにするといぐ電池切れるや

「ああ？」

土方の言葉に、さすがの銀時も顔をしかめた。

「今日は幼稚園を休ませてほしいだと？」

銀時だけではなかつた。新ハもお妙も神楽も山崎もトオルも……つまり風間家の食堂にいる全員が、朝食を中断して信じられないといつように土方を見つめていた。

「何で休まなきゃならないんですか。」

「二日酔いだ。」

新ハの問いに、土方は素っ気なく答えた。

「いや、全然平氣だつたじやないですか……」

控えめながらも、反論したのは山崎だ。途端に神楽の罵詈雑言が飛んでくる。

「オマエ、新ハの話聞いたばかりなのに幼稚園に行かないとは、どういう根性してるアル！さてはオチ氣づいたアルナ！！怖いから行きたくないつていうアルナ！！」

「怖じ氣づいた、です。」

トオルの訂正が入つた。

「るせえ、ガキは黙つてろ。」

土方は、怒鳴りつけこそしなかつたものの、幾分声を低めて神楽をにらみつけた。

「 いひちに色々な事情があるんだ。一日ぐらい休んだだけで潰れるような幼稚園じゃねえだろうが。ごたごた言つた。」

そう言い捨て、土方は立ち上がり風間家からさつさと出て行つてしまつた。まだ半分も食べていないと云うのに。

「 ……行つちゃつた。」

新八が、ぽつりと呟いた。

「 ひどい男ネ！ 私はガキじゃないアル！ ！」

神楽はまだふりふりしていた。

「 つたく…敵がいよいよ現れ始めたかも知れねえってのに、何考えてんだ、あいつは。」

銀時が頭をぽりぽりかいて、フケを数個落とした。それをトオルが、どこか不安げな目で見ていた。

昨夜ネネを送つていいく最中に見たネネとマサオにそつくりな人影のことを、新八はマンションに帰つてくるなりすぐお妙たちに話した。銀時は完全に酔い潰れ、トオルは熟睡していたので、この二人は朝起きてからこの話を聞かされたのだった。

正直銀時はともかく、トオルにこのことを話すのはどうかという懸念も新八の中にはあった。しかし隠しておいて、トオルがもし敵の手にかかるたりしたら取り返しがつかない。それよりは、始めから話しておいて用心させるようがいいと思つたのだ。

トオルはやはり衝撃を受けたようだが、比較的落ち着いて聞いていた。

「 ……後をつけていたつてことは……そいつらの目的はなんなんでしょう。やっぱりネネちゃんでしょうか。」

「 でしううね。」

お妙がうなずき、他の面々も同意した。

全員新八と山崎がロックオンされているなどとは、夢にも思つていないのである。

「 こずれにせよ、新ちゃんが氣づかなかつたらどうなつていたか分

かんないわ。よく気がついたわね。」

この、姉にしては珍しいとも言える讃め言葉に、しかし新八は微妙な表情で答えた。

「はあ…それがなんか、おかしいんですよ。僕が振り返ったのは、耳元で声がしたからなんです。」

「声？」

「危ない、とかなんか叫んでるみたいな…すっぽり差し迫った感じだつたんで、考えるよりさきに振り向いちゃったんです。」

「ネネちゃんじゃないアルカ。」

神楽が尋ねた。

「あの子じや僕の耳元には届かないよ。違う声だつたし、念のために確かめた時もきょとんとしてたからね。……それに今思うと、あれは耳元つていうか、頭の中に直接語りかけてきたつて感じだつたな。」

「頭の中に?まあ、それじやテレパシーみたいじやない。」

「……！テレパシーか。そうだ、そういう感じだつたな。」

「で、誰がその『テレパチン』を出したね。」

「それが分かりや苦労しないよ。あとどういづ耳してんの?」

いかなる時もツッコミを忘れない新八であつた。

「でも神楽ちゃんの言う通りよ。助けてくれたことに間違いはないけど、それ、誰が伝えてくれたのかしら。新ちゃん、自分の声だつたつてことはない?たまにあるじゃないの。自分の心の声が助言してくれて、助かつたつて話。」

「いえ…」

新八は残念そうに、でもきつぱりと首を振った。

「全然違いますよ。確かに女の人の声だったと思います。若い女人です。」

「あ、分かつたヨ！お通の声アル！…」

「ち、違うよ、神楽ちゃん！」

慌てて否定する新ハ。顔が赤くならないよう、懸命に努力する。今はお通ちゃんのことを考えている場合ではないのだ。

「本当に知らない人の声だつたよ。きれいな声だつたけど……それに聞こえたのは、ほんの一瞬だつたし。」

「……でも、どうしましょ。」

「えつ？」

トオルが突然、深刻そうな声を出したので、さらなる問題が発生したのかと思った新ハたちは一斉に向き直つた。

「どうしたんだい？」

「あれ、どうすればいいと思こます？」

トオルが指差す先では、土方が残していった『土方スペシャル』トーストとコーヒーが、まだ半分以上も残つていた。

「… おい、起きてるか。」

土方はベッドに座り、壁に向かって話しかけた。
傍目から見れば頭がおかしくなったのかと思われそうだが、そうではない。

壁が、返事を返してきた。

トン。

「もう一人も、起きてるか？」

はい。トン、と一回叩くことが、肯定の意味になるのだ。
土方はふと思いつき、昨日は聞きそびれたことを尋ねた。
「そういえば、もう一人の奴は何で話しかけてこない？ そいつも口
がきけないのか。」

少しため、ひつねづな間があった。

「それとも、猿ぐつわをかまされたりしてゐるのか。」

「トン、トン、トン、ヒ、二回も壁が叩かれた、そう、そう、そうなんですね！」

「そいつあ櫛やかじやねえな…まあいい、あとは静かにして、待つてみ。うまくいけばそっちに行つてやるからな。」

トン、と壁が鳴った。心なしか、昨日よりは元気な叩き方だった。

「風間くん、マサオくん、昨日はありがとうございました。」

「あ、ああ…楽しんでくれたんならいいけど。」

「もつちろんよ。また行きたいわ。」

二人は曖昧に笑って、顔を見合わせた。マサオにも、昨夜新ハガ目撃したもののことを話してあつた。もしネネの「セモノ」がネネをつけ狙っているとしたら、また暗い夜道を歩かせるような真似は、なるべくしたくない。

しかし本人に面と向かってそういうことを言うのも、何だか気がとがめることだ。もう来ないでと言っているみたいに聞こえてしまうに決まっている。せつかく元気を取り戻してきてくれるのに…。

「ほほーい、みんなー。」

その時まさに絶妙のタイミングで、しんのすけが会話に割り込んできた。見れば、後ろにボーちゃんもいる。彼は常に誰かか何かの陰にいるので、近くに来ないと存在が視認できないのだ。

「なんの話してたの？」

「ううん、何でもないの。今田はどうして土方先生がお休みなのかなあつて、思つただけ。」

すらすらと言うと、ネネはしんのすけたちが見ていない隙に、トオルとマサオに向かって（マサオはどっちにしろ見えないのだが）、ちょっとバツの悪そうな笑みを浮かべて人差し指を口に当ててみせた。昨夜招待されたことは、秘密にしておいてくれと言うのだ。

これはトオルたちにとつては願つてもないことだつた。またごまかし話をする手間が減る。昨日の夜も、新ハはうまくネネをごまかして追つ手から逃げたらしが、そういう話をするのは彼らの得意な領域ではなかつた。腹黒い沖田あたりが適任だらう。

「やつですね、まつたくだらしないですね、土方先生は。
「あら、 しなちやんだって人のこと言えないんじゃない?」

「ボー…」

「ひ、ひどいゾネネちゃん… ボーちゃんまでつなづくなんて…」

やはり、みんなと一緒にいる時間は楽しい。

トオルとマサオは考えていた。

特にしなのすけは、嫌なことを忘れさせてくれる達人だ……逆に嫌な思いをさせられることも多かった。

…それなのに、落ち着かないのはなぜだらう?

しなのすけだけじゃない。ここには銀時だっているのだ。だからもしーセモノたちが襲つてきても、きつと守ってくれるだらう。新ハガ、不真面目だけどとも強い人だと言つていたから。

それなのに、なんで今日だけは、こんなに不安なんだらう?

分からぬ。考へてみても頭が混乱するだけだ。今できるのは、ただできるだけ用心すること。無力な自分たちにできるのは、それしかない。

それだけしか…。

「…風間くん。」

「どうしたの？」

「僕、怖いんだ……目が見えないからかも知れないけど、感じるんだよ。誰かが…誰か悪い奴が、すぐそばで僕らを見張ってるのを。いつもはそんなことないのに、今日は怖くて怖くてたまらないんだ。」

「まさか、気にし過ぎだよ。それに銀さんだつているだろ? あの人といえば、きっと大丈夫さ。そんなに具合悪そうにしてると、またネネちゃんに心配かけちゃうよ。」

「うん……思い過い」しだといいんだけど。」

怖くて不安でたまらないのは、実のところマサオをなだめるトルも同じことだった。

そしてそれは、決して思い過いしなじではなかつた。

実際に簡単だった。簡単過ぎて、つまらないほどだ。

「…………」

感覚的にここいら辺だらうと思つたまさにその場所の床に、真新しい落とし戸みたいなのがあった。

それを覗き込む土方の足元に、この部屋の住人が……いや、恐らくそのニセモノが、気絶して転がっている。

初めは堂々とチャイムを鳴らし、

「お前の部屋から水漏れしてるみてえだぞ。」

だの何だと苦情をつけて上がり込もうと想えていた土方だつたが、しばらくするうちに考えが変わってきた。

もしそんな悠長なことをしていたら、相手が仲間に連絡し、大勢の敵を呼び寄せるか、あるいは閉じ込めてある一人を連れ出したりするかも知れない。別に敵が大量に押し寄せてきたところで怖いわけではないが、やはり敵に悟られないように、事を進めるのが一番だ。それが最も安全だ。

そこで土方がとつた手段は……。

真選組はお江戸の警察だから、当然犯罪者を捕まえる役割を持つ。

逮捕される連中には、もちろん泥棒をした奴も入っているわけで、そういう輩を頻繁に尋問する仕事柄、土方も鍵のかかった家への侵入のし方や、その他もろもろの窃盗犯の技術を、それなりに知っていた。

無論あくまで『知っていた』だけのことだ。悪用したことは一度もない……はずである。

それがこんな時に役立つとは、まるで思ってもよらなかつた。

時刻は8時過ぎだつた。

土方はドアの鍵を尖つた針金みたいなもので開けてしまい、首尾よくその家の中に踏み込んだ。気づいた住人のニセモノが騒ぎ出す前に、当身を食らわせると驚いたことにあつさりと気絶してしまつた。沖田と鬪つた、あの酢乙女あいのニセモノとはだいぶ違う。ニセモノの中にも、格の違いがあるのかも知れない。

そのニセモノは、『ご親切にも落とし戸の所へ一直線に走つてそこを死守しようとしてくれたので、かえつて探す手間が省けた。頭にもかなり違ひがあるようだ。

とにかく、これで入り口が見つかったわけである。

試しに取っ手を握ってみたが、やはり鍵がかけられていた。どこかに鍵が隠されているかも知れないが、探し出すのが面倒くさいので刀を使うことにした。

真選組副長だけあって、彼の剣の腕前は常人の領域を超えている。沖田もそうだ。一いつにぶつた斬るほどの力の持ち主なのだから。そんな土方にとつて、落とし戸の所の床を切り抜くのは気が抜けてしまうくらい易しいことだったのである……。

「おい！」

ぽっかりと開いた穴の中へ、土方は声を投げかけた。

返事はない。穴の向こうは真っ暗闇で、なんにも見えなかつた。でも下の方に、明らかに何かが動く気配が、した。

「いるんだな？ 来てやつたぞ……ちょっと待つてくれ。今何か明かりになるもんさがしてくるから。」

その住人の部屋を引つ搔き回すのはさすがに気が引けたので、二セモノがポケットに入れていた携帯電話を借りることにした。あまり長く、強く照らしてくれないとほいえ、何もないよりはましだ。

穴の縁から、はじごを使って降りるようになつていてる。土方は携帯を取り落とさないようにしつかり口にくわえ（！）、慎重に降り始

めた。

幸い、闇に包まれてからそう長くたないうちに、足がしっかりと堅い、平べったいものについた。

すぐそばで、『ごそごそ』と動く音がした。でもただそれだけで、何も言わない。飛びかかる様子もない。

「ちょっと、顔を見させてもらひづぜ。」

そう言って、土方はカバンと携帯を開け、光を向こう側の闇に当てた。

土方のいつもは細い目が、大きく見開かれた。

「へえ、テルがそいつに知らせたのかい？」

「そうとしか考えられません。そんなことができるのは、テル一人しかいないと……」

「でもさあ。」

軽い口調が、早口の言葉を遮った。

「テルのテレパシー能力は、せいぜい30メートルが限度だろ？それに著しく体力を消耗する。そして奴が『見る』能力を使えないよう、装置を取りつけておいたじやないか。」

声が、ちょっと笑つてみせた。別に怒りは感じ取れないのに、なぜかぞつと身震いしたくなるような笑い方だった。

「やっぱり、君たちの不注意じゃないのかなあ？」

マサオそつくりな顔いつぱいに冷や汗を浮かべ、イリスは隣にいるルビーをちらりと盗み見た。彼女は相変わらずの無表情な顔で、ただ軽い声の主の顔だけを、じっと見つめ続けていた。

何でこいつは、こんなに落ち着いてられるんだろう。いや、本当はこいつも、びびっているのか。ただそれを顔に出さないだけで。

「どうなの？」

返事を促す相手に、ルビーが無機質に返した。

「その可能性も、ないとは言い切れません。しかしあのよつな急な振り返り方をするのは、少し妙だということを申し上げたいのです……あれはまるで、誰かに呼び止められたかのような振り返り方でした。」

「ふうん……」

椅子に座っているその人物は、ふとイリスに目を向けると、突然吹き出した。

「何青い顔して汗びっしょりになつてんのさ、イリス。安心しなよ。君たちは他の奴らとは違う。僕の目的を達成するには、君たちの能力が不可欠なんだ。だからこの前の不良品どもみたいに、消しちやつたりはしないよ。」

その言葉に、イリスの肩から一気に力が抜けた。それを見よつともせず、ルビーが話を続ける。

「しかし、なぜ桜田ネネを狙つたのです？」

「ああ、別に深い意味はないよ。」

相手は面倒くさそうに手を振つて答えた。

「あいつを殺る前に、それに近しい奴をさらつてやつたら、さぞあいつがびびるだろうと思ってね……だつてあつさり終わらせるなん

て、面白くないじゃないか。ねえ、イリス？」

「あ…は、はいっ。」

突然話を振られたイリスは、慌ててうなずいた。くすくす笑いがそれに続く。

「…でもまあ、ちょっとと考え過ぎだつたかも知れないね。おかげで敵を用心させちゃつたかも知れないし。ストレートにいつちやうのが一番手つ取り早いや。」

相手が椅子から立ち上がつたので、イリスとルビーは反射的に身を引いた。ルビーの声が、相変わらず何の感情も交えずに尋ねる。

「どこへ行かれるのですか？リオル様。」

「どうつて？」

笑い声が響いた。

「そうだねえ…それは今から考える事にあるよ。」

身体に電流が走った気がした。

びくんっと身を震わせ、飛び上がる。その拍子に、尻尾で木を一本なぎ払ってしまった。

嫌な匂いだ…。

ここに来てから、ずっと『それ』の匂いが鼻について離れなかつた。人間に見えるけど、人間とは違つもの匂い。次第に数を増していく、その生き物の匂いが…。

気にしないように努めてきたその匂いが、今、無視できないほどに強くなつたのだ。

それに…雷が落ちたかのような、衝撃。

今までとは違つ。その匂いは、明らかに何か恐ろしいものをはらんでいた。

殺意と憎悪。そう、それだ。

何をそんなに憎んでいるんだ?何を殺そうとしているんだ?

混乱と怯えと闘っているその時、ひんやりした風が頭の中に吹き込んだような感覚と共に、声がした。

耳で聞く声ではなく、頭の中に、直接話しかけてくる。思わずじつと黙つて聞き入つた。

そう、あなたの思った通りよ。恐ろしい危険が迫つてゐる。あなたたちが、知り合いになつた人たちの中に、憎しみを受けて理不尽に殺されようとしている人がいるわ。

だから、助けてあげて!

頭の中がすつきりした。首をしゃんと伸ばし、起き上がる。

そして耳を立て、体毛と尻尾を逆立てる、最初は遅めに、やがてだんだん速く、走り始めた。
高い塀に向かつて。

巨大で白い身体が強く地面を踏んで、酢乙女邸を囲む塀を飛び越えた。

その拾参・携帯電話を開けっ放しにするとすぐ電池切れるぞ（後書き）

暗い穴の中に閉じ込められていた一人の正体は！？次回は銀さんと神楽が待望の大暴れ、双葉幼稚園に大騒動が巻き起こる！そして出番がなくて忘れられかけていた（！）アイツが、ついに春日部に乗り込んできた黒幕と…………！？大波乱間違いなし、意外な事実も明らかになる次回に、乞うご期待！！

その拾四・お行儀の悪やは言葉じゃ直せない（前書き）

違う場所にいる、色々な人々のもとで、次々と事件が発生…。いよいよ本格的に異変が始まる14部、どうぞお楽しみ下さい！

その拾四・お行儀の悪わは言葉じや直せない

「おこ、ランド。起きてるか？」

1

「……寝てるな、やっぱり。おこルビー、こいつの頭に火い点けてあらう。

「無理よ。分かつてゐくせに。」

冗談だつておしゃれ超艳のヨーリンナ! 水ふきかけ

バシヤアアアン！

「…………かたやがつた。」

「悪いの？」

別に

「……ん？なんか冷たいなあ……」

「コンディー、やつと起きたかーー。」

「イニスヒルジ」が「アーバン・エレクトリック」

「あと『ぶり』は一回だけよ。」

גַּתְּתָה שְׁמַרְתָּה עַל־יְהוָה

「さうとしか言わねえよ！」

「んもー、そんなに誉めないで、照れるう～」

「……」

「さつさと頭動かしなさい、リンク。リオル様から命令よ。」

「えー、オラ、あいつ嫌い。」

「……怖いもの知らずだな、お前……」

「「」た「」た言わないで、さつさと行つてくれば？」

「そろそろよ。」

誰が言い出したのかは分からぬ。

一人の口から言葉が出た途端、短いその一言はあつという間に幼稚園中へ広まつていつた。

「そろそろだ…」

「そろそろね…」

「そろそろ仲間はずれを、捕まえなくちゃ。」

不安な気持ちは、ピークに達していた。

「マサオくん、大丈夫？本当に顔色悪いわよ。」

ネネが心配そうに眉をひそめ、マサオの肩へ手を置く。その温かさに、マサオは少しひくりした。

「大丈夫だよ、ネネちゃん。平気だか……」

ら、とまで言わないうちに、元気なマサオはまつと口をつぐんだ。

何かを感じたのだ。

「な、何だ！？」

トオルは後ずさりした。ネネがぎょっとして小さく悲鳴を上げ、ボーネちゃんは身を堅くする。しんのすけでや、驚いた顔をした。

どこからともなく現れた幼稚園の園児たちが、ぐるりとしんのすけたちを取り囲んでいた。

「あの……銀八園長先生。」

「はい？」

まつざか先生は、花壇の縁に腰かけてぼーっとしている銀八先生の、少し離れた隣に腰を下ろした。

「こんなことを申し上げちゃ悪いかも知れませんけど……あなたつて、幼稚園の先生になりたがるような人には見えませんね。」

「へえ、そうですか。やっぱ俺、そういう才能はねえのかな。」

「いえ、才能があるとかないとか、そういうのじゃなくて……その……」

まつざか先生は一生懸命、言葉を探している様子だった。

「幼稚園の先生に限らずね、こういう定まった仕事にはむいてない気がするんですよ。一つの仕事にずっと就いているような人に見えないんです。逆に言えば、その気になれば何でもできる人ってころになりますね。」

「誉められてんだかけなされてんだか、分からぬ。」

まつざか先生がくすくす笑った。

「もし先生に一番ふさわしい職業を作るとしたら……そうね、『万事屋』つてところかしら。『万事悩み事承ります』、みたいな。」

銀八先生がかなりびくつとしたことに、幸いまつざか先生は気がつかなかつた。花壇に咲く花へ目を向けたまま、しゃべり続ける。

「すみません、変な話して。でもここに来た時から、ずっと変わつた人だなあつて思つてて……そうそう、土方先生もそつだわ。あの人はむしろ、もつと危険な仕事にむいてるみたい。……警察みたいな。」

「……」

銀八は何も言わなかつた。

「先生。」

まつざか先生は顔を上げ、こいつのまにか田の前にひざら組の子供たちが勢ぞろいしているので驚いた。

「あらみんな、どうしたの？何か困つたことでもあつた？」

「先生…」

不意に子供たちのうちの一人が、まつざか先生の身体にしがみついてきた。

「えつ！？」

びっくりする間もなく、先生、先生と呪文みたいに繰り返しながら、子供たちが足に、手に、腰に、頭に、次々とつかまつたりよじ上つたりしてきた。

「ちよ、ちよっと、やめて！」

立ち上がりうとして、逆に転んでしまつた。うつぶせになつたまつざか先生の身体の上に、さらに重みがのしかかる。

何なの？どうなつてゐるの…？

不意に、重さが消えた。

変わりに悲鳴が聞こえ始めた。子供たちの悲鳴が。

「大丈夫か。」
力強い手につかまれ、助け起されたを感じた。起き上ると、銀八の死んだ魚みたいな目が、すぐ目の前にあつた。もう眼鏡はかけていない。

「な、何だったの、今のは…さつきの悲鳴は？あなた、子供たちに何かしたの！？」

「そう興奮するなって。俺があいつらやつつけなきや、あんたが何かされてたかも知れねーんだぜ。」

そして銀色の髪をぼりぼりかいて、ぼそつとつけ加えた。

「それにあいつら、どつちにじろ本物じゃないしな。遠慮なんかいられぬ。」

え？何を言つてるの？その言葉が喉から出でこないつちに、

「先生！」

向こうから、しんのすけたち5人が走つてくるのが見えた。マサオはネネの手を引かれている。

その後ろには、十数人の園児たちがひしめいて、彼らを追いかけていた。

「銀さん！助けて！！」

トオルは銀八先生と呼ぶことも忘れ、叫んだ。一人の子供の手が、
ネネの髪に届きそうになつてゐる。

それを見た銀時は、服の中にじんじんと手を突つ込み、何かを取り
出した。

木刀である。

ただの木刀ではない。『洞爺湖』と彫られており、その正体は『金
剛樹』という樹齢1万年の大木からできている妖刀・星碎ほしづきなのだ
……と言いたいところだが、実際には通信販売で購入されていたり、
折れるたびに買い直されたりしているというよく分からんシロモノ
である。

まあとにかく、この木刀こそ、銀時愛用の武器なのだった。

「さあお子さんたち、行儀作法を叩き込むお時間ですよ。」

そう言って銀八…ならぬ銀時は、ネネの髪をいましもつかもうとした子供の顔を、こともなげに木刀で殴りつけた。
ぶぎや、といつよつな、潰れた悲鳴が上がった。

「ちょっと、あんた……！」

「いいんですよ、まつざか先生！早く逃げましょーー！」

怒鳴りかけたまつざか先生の袖を、トオルが引っ張つて引き戻す。
その時、ネネの大きな悲鳴が上がつた。

何事かと振り向いた一同は、凍りついた。

ぼろぼろになつた上尾先生が、地面に倒れてい。眼鏡が外れてい
るとこりを見ると、凶暴化して相当暴れたのだろう。
でも結局、大勢の子供たちの前に敗れてしまったのだ。

上尾先生の頭を踏みつけているのは、しんのすけたちもよく知つて
いるばら組の生徒……

チーター 河村だつた。

「上尾先生を離せ！」

飛びかかつたしんのすけに、河村がこともなげに蹴りを入れる。慌
てて身体をそらし、直撃は免れたが、その間に河村のニセモノは上
尾先生を抱え上げていた。

「待つて……」

まつざか先生が駆け寄ろうとした、その瞬間だつた。

河村のニセモノと上尾先生の姿が、一瞬ぼやけた…と思つと、消え
てしまったのだ。

「！？」

みんなは畠然として、さつきまで一人のいた所を凝視した。

何もなかつた。一人は消えていた。

そつくり人間にはこんな力まであるのか？トオルは考えた。
他の奴らは、一体どんな力を持つてゐるんだ？

「あはははは！」

背後の笑い声にびくつとして振り返ると、なんとそこにチーター河
村のニセモノがいた。上尾先生の姿は、ない。

「上尾先生はどこ？」

ネネが金切り声を出すと、河村の顔がにやりと歪んだ。

「さあな、教えるわけねえだろ？」

「この…」

飛びかかるうとしたしんのすけの前からまたしても一瞬で消え去り、
今度は塀の上に、河村の姿が現れた。

河村は、トオルを見ていた。トオルだけを見つめていた。わずかに
笑みの浮かんだ視線で、じつと。トオルは内心怖かつたが、負けて
たまるかという気持ちでにらみ返した。

チーター河村のニセモノは再び、大声で笑った。

「そう堅くなんなつて！安心しな、お前の相手をするのは俺たちじ
やない。あのお方だ。」

あのお方？

トオルの脳裏に、何かが光った。そうだ、確か一セのママも、『あの方』とか言っていたはず…。

「『あの方』って、誰よ！？」

「まあ、そのうち分かるさ。」

ネネの言葉にバカにしたような口調で返して、河村の一セモノは再び姿を消した。

そして、今度はもう現れなかつた。

「何なのよ…」

まつざか先生が座り込んだ。

向こうの方では、銀時がまた一人、子供を打ち倒しているところだった。

自室でまつたりしていた神楽は、突然土方が血相を変えて飛び込んできたので、仰天して飛び起きた。

「な、何アルカ！年頃の娘の部屋にすかずか入つてくるなんて、最低アル！」

それなら鍵でもかけとけよ、と、新八ならつつこむだらう。

しかし土方は、神楽の言葉などまるで聞いていないようだった。

「お前しかいねえのか…新八たちは買い物に行つちまつてるようだ

な。くそつ！仕方ねえ。お前、あの銀髪のとこへ行け！」

「えつ！？何でアルカ。銀ちゃんに何かあつたアルカ？」

「まだないかも知れねえが……おい、これを見る。」

土方が彼の後ろから、『これ』を部屋の中に引き入れた。

神楽の顔色が、さつと変わった。

「これは……どうこう」とアルカ。まさか……

いきなりコンビニの中で取り囲まれ、何とか逃げ出したものの、今
こうして街中の人々に追われているのだった。

「くそあ、どうなつてんだよ！？」

山崎退は、田中の街中を全力疾走していた。

仕事をさぼっているのではない。そうせざるをえなかつたのだ。

多少なりの覚悟はしていたとはいえ、まさかこんな唐突に、異変が始まるとは思つてもみなかつた。

ちらりと振り向くと、追つてくる大勢の人々はさつきより近くなつていた。声も出さず、ほとんど無表情で、足音だけを響かせて走つてくる。しかも全員が全員、自分のことだけを一直線に見つめたま

ま。

その不気味さは、たとえようもなかつた。

向き直るのとした瞬間、疲れた足が思わず反逆を起こした。山崎はどういうふうにしてか、自分の足がからまり、身体ごと地面に倒れ込むのを感じた。息がつまるほどの衝撃が来た。

起き上がろうとしたが、膝が震えて力が入らない。畜生、少し無理して走り過ぎたか……。

どうちにしら、自分はもう終わりだ、と山崎は思つた。

今日のお妙と新八は、えらく「機嫌」だった。

「今日はいいじゃがいもを、安く手に入れられましたね。」

「うねえ新ちゃん、いつもああやつてうまく取れるか分からぬ
もの。予算より少なく済んだのって、久しぶりよ。」

買い物に使った金額で気分を左右されたりするのだから、考えてみ
れば人間とは気楽な生き物である。

……しかし二人共、しばらくマングースマンションへの道を行くうち
に、辺りの様子がおかしいことに気がついた。

「変ね。どうしてこんなに人がいないのかしら。」

お妙がやや首をかしげ、周囲を見回した。平日この時刻だ。もつ
と人がいたつて不思議じやない、いや、むしろその方が普通なのに
……。

嫌な感じが、水が流れ込んでくるように一気に、新八の心を侵し始
めた。

「おいおい、なんだい君は。」

場所は変わつて、ここは春日部山。

リオルは、自分の前に突如姿を現したその生き物を、面白そうに眺めた。

でっかくて白い犬…といったところだ。大きささえ普通なら、ただのつぶらな目をした可愛らしいワンちゃんと変わらないだろう。しかし、その巨大な犬は、今自分の愛らしい目に険を浮かべ、リオルをにらみつけてうなり声を上げていた。

それだけならまだしも、その行き先へ続く道を妨害していた。

「行儀の悪いワンちゃんだねえ。」

一歩、前へ足を踏み出すと、巨大な白犬はびくつと後ずさりしかけ

たが、すぐに踏みとどまつて、威嚇のうなりを上げた。

何でか知らないが、自分の邪魔をしに来るのはいい度胸だ。彼は何者の命令も受けないし、どんなささいなことでも、自分にとつて不愉快なことをしでかした奴は許さない。そして彼には、他の者たちにはない強大な力も備わっている。

憎悪という力が。

「…ぞいてくれないのかな？」

尋ねたその時、白犬の巨体が思わずスピードで、こちらへ飛びかかってきた。

…ズシャツ。

甲高い悲鳴と共に、真っ赤な血しぶきが空へ舞い上がった。

「銀ちゃんアアアん！――」

「！？」

銀時は、一瞬耳を疑つた。何で神楽の声が聞こえてくるんだ？
聞き間違いだろ？と思つたがそうではなく、幼稚園に向かつて走つ
てくる神楽の姿が目に入った。
ものすごいスピードだ。誰かが歩いていなくてよかつた。はね飛ば
されていたかも知れない。

「おう神楽、ちゅうじここと！」

「銀ちゃん、危ないアル！」

「は？」

「その子から、手を離すアル！！」

銀時は、まつざか先生をまず幼稚園の塀の向こう側へ降り立たせ、寄つてくるニセモノたちを殴つたり蹴飛ばしたりひっぱたいたりしつつ、カスカベ防衛隊の子供たちを抱き上げて向こうにいるまつざか先生に手渡していた。出入口はすっかり敵に包囲されており、危なくて手が出せなかつたのだ。

そして今、彼は最後の一人の子供を抱き上げようとしたところだったが……。

その子供が、ぐるりとこりらを向いた。
はつとして身を離すより早く、無表情でのっぺりした顔についた小さな目が、きらりと光つた。

ボーチャンの鼻水が鞭のよけに動き、銀時に襲いかかつた。

あれ？

変だな……何で足音が突然、やんだんだるり?
おやおやの目を開き、半身を起こして後ろを振り返る。
なんと、大勢の追っ手たちは後退し始めていた。逃げるのとは違う
が、波がゆっくり引いていくような感じで、山崎から離れていく。
どうしたんだ?

視線を前に戻した山崎は、驚きのあまり息が止まってしまった。

田の前に、しんのすけ、マサオ、ネネが立ち、自分を見つめていた。

「ここにちは、山崎さん。」

マサオが妙になれなれしい口調で、笑いながら言った。

「あなたの命をもりいに来ました。」

土方十四郎は、風間家の前でふんばっていた。

ザシユツ！

刀の一閃で、また一人のニセモノが絶叫を上げ、倒れる。
土方は辺りに立ちこめる異臭に、顔をしかめていた。マンションの廊下はもう血だらけだ。死体がいくつも転がっている。

しかも氣味の悪いこと、その血は紫色をしていた。

毒々しい紫の色彩は、土方の目の中の奥にしつこく残った。

不快感に、土方は眉をひそめ、次々押し寄せてくるニセモノどもを叩き斬つた。敵は後から後から、まるでキリがないかのように現れる。胸くそ悪いゲームが何かみたいだ。そう思つと余計に腹が立ち、土方はなお一層激しく刀をふるつた。

少なくとも、ここに入らせるわけにはいかない。ここつらがここにあるものを狙いにして襲いかかってきたのは、間違いないのだから。

それにもかかわらずこの紫色の血は不愉快だ。それだけでなく、前にも一度、こんなものを見た覚えがある。

いつだつたか…と考えながらも、土方の刀は確実に敵を捕らえていた。

「くつ…………」「こつあ 神楽、ビーコン」とだ。

「そーこうことね。」

答える神楽の声は、思いの他落ち着いているようだった。

しかし状況的には、落ち着いている場合などではなかつた。周りを二セモノたちでぐるりと取り囲まれ、壁際に追いつめられて、目の前には氷のかけらのように冷たい皿をしたボーチャんがいるのである。

そして、銀時の肩から血が流れていた。

「ど、どうして。」

トオルが動搖のあまり、少しどもりながら言った。

「どうしてボーチャんが、僕らに攻撃を！？」

それに続く神楽の返答は、みんなを驚かせるものだった。

「ボーチャンは一ヵ月ぐらい前から、ニセモノに替わられていたア
ル。」

その拾四・お行儀の悪女は言葉じゃ直せない（後書き）

幼稚園にあいちゃんの「セモノ」と沖田がいないので、『あれ?』と思われた方もいるかも知れませんが、その理由は次回で明らかになります。更新が遅くなる可能性もあるので、すみません。次回では沖田邸じゃなくて酢乙女邸にて、未曾有の恐怖が新ハたちを襲う!? そしてあのキャラが……!! 感想もどしどしお願いします

その拾伍・休みだからって昼寝で時間をつぶすな（前書き）

ボーラちゃんが一セモノだった！？その上酢乙女邸や新八たちにも不
穏な影が……一本づつ当にお待たせしました…ようやく更新スター
トです！

その拾伍・休みだからって昼寝で時間をつぶすな

「ボーチャンが…………そつくりさんだつたなんて……嘘…………」

あまりにも予想外な衝撃に、口を押さえたネネの身体がぐらりと揺れた。マサオがその気配を察し、慌ててネネの肩をつかみ、支える。しかし、動搖しているのは彼もまた同じだった。

ボーチャンが…………一ヶ月も前から、ニセモノに替わられていた！？

じゃあ銀さんたちがここに来る前からつてことになるじゃないか。そんなに長い間、僕らに気づかれることなくなりすましてきたなんて…………。

ボーチャンがニセモノだと見抜けなかつたのが、何よりショックだつた。

「銀さん！大丈夫ですか？」

トオルが肩から血を流す銀時のもとへ駆け寄る。するとニセのボーチャンの小さな目が、ぎらりとばかりに光つてトオルをにらみすえた。

「……風間トオルを、渡せ。」

「え？？」

「風間トオルを渡した？…………お前には、見逃してやつても、いい。何も、手出し、しない。」

銀時や、マサオたちが何か言つ前に、しんのすけと神楽が怒声を浴びせ始めた。

「そんなことできるわけないゾー風間くんはオラの大親友なんだゾー！」

「勝手なことぬかしてんじやねえヨ、ボケホー！」

「アハハ…」

ボーカちゃんの声に、暗い殺氣がこもる。

「じゃあ、お前らから、死ねー。」

新八の中の嫌な感じは、おそれあるどうかますます激しくなつてい
た。
「新ちゃん、大丈夫？顔色が悪いわよ。」「はい……」

相変わらず道を歩く人の姿はない。それなのに、家々の窓やあちことの物陰からこぢらを見張つている視線を、強烈に感じるのだ。

「…！新ちゃん！！」

お妙が突然、金切り声を発した。

「どうしました、姉上…」

返事をし終わらないうちに、新八もそれに気づいた。

前方から、白くて大きな何かが、ゆっくりゆっくりといちからへやって来る。一步一步、身体を動かすのがいかにもつらいといった様子で。

定春だった。

「…」

新八は目を見開いた。

定春の右わき腹が、真っ赤に染まっていた。そこからぽたぽたと血

がしたたり落ち、地面に赤い道を作っている。

「定春…どうして…！」

新ハとお妙が駆け寄ると、定春は力尽きたよつこ、その場に倒れ込んでしまった。

「ひどいわ、一体誰がこんなことを…」

「定春にこんな傷を負わせるなんて…誰にそんなことが…」
定春は一見ただのでかい犬みたいだが、実際は狛神いぬがみというとんでもない力を持つ宇宙巨大生物である。銀時や神楽にさえ、時折手に見えなくなることがあるのだ。

そんな定春にこれほどの傷を負わせるとは、一体どれほどすごい奴なのか…。

「これほどここで手当てしないと…姉上、酢乙女邸に連れていいま
しょう！あそこなら薬とか包帯とか、あるでしょうし。」

「そうね…獣医さんに連れて行くわけにもいかないものねえ。」

確かに見てもらつどころか、獣医の方が倒れてしまうかも知れない。

「それにしても、本当にヒドイことあるわよね。

……………や、酢乙女邸まで乗せてつて、定春ちゃん！」

「いや、姉上も向氣にヒドイことありますよ。」

「…………くつ！」

ちょうど新八たちが酢乙女邸へ向かい始めた頃、酢乙女あいの二セモノは、頭の痛みに必死で耐えているところだった。
(くそつ、あいつ、ただじやおかないんだから…)

頭の痛みの原因は、庭で好き勝手に駆け回る定春であった。

もともと銀時その他の人々の頭にかじりつく癖のあつた定春だが、沖田にかけられて一度彼女の頭に食らいついてからは、その噛み心地（？）が気に入ってしまつたらしく、一セあいが姿を見せるたびに飛びかかつて噛みつこうとするようになつてしまつた。

おかげで外に出ることもままならない。全て、あのいまい景德青年のせいた。

今日はあまりにも噛まれたところの痛みがひどくなつてきたので、一日休むことに決めたのだった。

沖田は意外にも、あつさり承知してくれた。自分も一日休めるのでも、嬉しかつたようだ。

（何とか、あいつをこらしめる方法はないかしら……？）

いつものように、頭の中で復讐方法を考える一セあいだが、バズーカ砲と定春のことを考えると、どうも氣力が萎えてきてしまうのだった……。

リビングの扉が、きいつと音を立てて開いた（あの一件の後、再び直したのである）。

沖田が入ってきたのだと思つた一セあいは、そちらへ不機嫌な顔を向けたが、それがすぐ、驚きの表情へと変わつた。

そして、恐怖に凍りついた。

「リオル、様…！」

「…………？」

沖田はリビングの自分の部屋で、熟睡していた。

顔には愛用の、赤字にぱつちりおめめが描かれたアイマスク。だからどんな表情をしているのかいまいち分かりにくいが、すーすーと安らかな寝息を立てているところを見ると、そう悪い夢を見ているわけではなさそうだ。

何か聞こえたような気がして、沖田は突如眠りから引き戻された。うつすらと目を開けてみる。

真っ暗で、何も見えない。そりやそりや、アイマスクをしたままなのだから。

アイマスクを押し上げ、沖田はぬぼーっとした寝起きの表情で起き上がった。

「……んー……今、何時だ？」

この部屋には時計がない。沖田はポケットから携帯を取り出し、開いて画面に表示された時刻を見つめた。

そして、驚いた。

「もう二三日過ぎかよ……」

今日、沖田はニセあいが休むと聞いて、朝食を食べてから再び嬉々として眠りについた。その時八時ちょっとだったから、七時間近く眠っていたことになる。

そう、沖田は昼飯も食べずに、眠り続けていたのであった。当然ながら、お腹はペコペコを通り過ぎてしまっている。今日が覚めたのも、多分身体が食物を欲してのことに違いない。

いつものように、何か台所に行ってうまい昼飯でも用意させるか。いや、この時間帯ではおやつと言った方がふさわしいかも知れない

が……。

といふえず、西間へ行つてみよ。

沖田は寝ぐせの田立つ髪を直そうともせず、西間の部屋から出た。

沖田の部屋は、リビングの真上にある。そして階段にも近い。そこを降りていけば、リビングの扉は田の前だった。

だから階段を降り始めた時頃で、沖田は下から漂つてくる異臭にいち早く気がついた。

（……氣にくわね匂いだ。）

知らず知らずのうちに、沖田は顔をしかめていた。何の匂いかは分からぬが、いやに不快感をかき立てる匂いだ。

それだけではない。前にもこんな匂いをかいだ覚えがある。ビードルだろう？

考えてくるうちに、階段を降りきってしまった。

リビングの扉が半開きになつてゐる。

しばしめためられた後…沖田は足音をひそめて、そつと扉に歩み寄つた。別にこそこそする必要はないのに、そつしなければならないような気持ちに襲われたのだ。

扉をそつと押し開け、中を覗き込もうとしたその時、

ペチャン。

足元で、液体質の音がした。

「…………？」

床を見下ろした沖田の田に飛び込んできたのは、毒々しいばかりに鮮やかな紫色の液体できた、大きな水たまりだった。

その中に、見覚えのある長い黒髪が、ぷかぷかと浮いていた、

黒髪だけだった。

酔乙女邸の立派な門の前で、お妙が困った声を出した。

「あり?変ねえ、鳴らないわ。」

定春をここまで連れてきたのはいいのだが、チャイムを押しても「んともすんとも言わないのだ。中から応答する声も聞こえてこない。「故障かしら。まったくダメじゃないの、ちやんと修理とかなきや…それでも金持ちなの？」

「仕方ないですよ、姉上。沖田さんがここに来てからは、それどころじゃないでしょ。」

お妙の機嫌が悪くなり出したので、新ハは慌ててなだめにかかつた。定春は自らの治癒力のおかげで、だいぶ元気になっていた。今も新ハの後ろで、どすどすと（犬にはふさわしくない擬音かも知れないが）足を踏み鳴らしている。傷はふさがったようで、もう大した治療をする必要はなさそうだった。

しかし定春自身も、中に入れない」とヒライラしていたらしい。ものも言わずに突き進んでくると、巨大な門を頭でどんと押した。

予想もしなかつたことが起きたのは、次の瞬間だった。

「あら…」

「あれつ？」

新ハとお妙は、ほぼ同時に驚きの声を上げた。門が重々しい音と共に、内側へと開いていく。つまり始めから、鍵などかけられていなかつたのだ。

いくら沖田がいい加減な性格だからといって、いつ敵が現れるかも分からぬ時に、屋敷の門を開け放しにしたりするだろうか…。

「新ちゃん…」

同じことを考えていたのか、お妙も不安そうな顔になつていて。

「姉上…とりあえず、中へ入つてみませんか。沖田さんに何か起こ

つてゐるのかも……」

「……」

「姉上?」

お妙はなぜか何も言わず、ただ新八の服のすそを強く引っ張った。見ると、門のてっぺん辺りをしきりに指をしている。

「え? 何?」

指された方向を見た瞬間、新八ははつきりと曰いた。『何』を。一瞬、自分が幻を見ているに違いないと思った。姉の瞳が恐怖で凍りついている理由が、すぐに分かった。

門の上に、誰かが腰かけていた……子供だ。恐ろしいことに、どこからどう見ても風間トオル そつくりの姿をしている。トオルは今幼稚園にて、ここにいるはずがないのに。だが最悪なのはその部分ではなかつた。

その少年の腕は手の平から肘の辺りまでかけて、不気味な紫色に染まっていた。

そして彼の右手は、全身ずたずたになつた酔乙女あいのーセモノの首根っこをつかんでいた。

「銀さん…」

耳元で囁かれた怯えの混じる声に、銀時は顔を上げた。

トオルは心底怯えた表情をしていた。おまけにそこには、わけが分からぬという混乱の表情もあった。

戦いの形勢は、決して有利とは言えなかつた。銀時の手傷は増え、左腕の肘の辺りからも血が滴つている。神楽でさえ、頬にわずかな傷を受けていた。

敵の ボーちゃんのニセモノの鼻水攻撃は恐ろしく速かつた。少しでも気を抜いたら、あとは心臓を貫かれるか喉を切られるしかない。さすがの超人的な一人にも、つけいるすきがなかつた。

「…何やってんだお前。おとなしく向こうに隠れてろ。敵の標的は、お前なんだからな。」

銀時は右手を強く振つて、トオルをしんのすけたちが隠れている茂みの中へ追いやろうとした。

が、トオルは動かない。

銀時はトオルが、自分の傷ついた左肘を見つめていることにハツと気づいた。しかも、その目つきがおかしい。ぼうっとした、熱に浮かされた時のような視線で、いつものトオルとは別人のようだつた。

そして、うわーことのよう呟いていた。

「腕…腕が…僕のせいだ…」

銀時は一瞬、トオルが敵に何かされておかしくなったのかと思った。胸の奥にひやりとしたものが走った。

「トオル？おいつ、大丈夫か！？」

敵の攻撃の危険をつかの間忘れ、銀時はトオルを激しく揺さぶった。幸い攻撃はもっぱら、神楽の方へ向けられていた。

トオルのぼやけた視線が元に戻った。数回瞬きして、トオルは銀時の顔を見つめた。

「ん…びびったんですか、銀さん。」

いつもと同じ変わりない彼の声にほつとして、しかし外面向には少々きつい口調で、銀時はトオルに背を向けて言つた。

「びびしたんですかじやねーだろ。さつさと隠れてろ、ガリ勉くん。」

ぎりぎりと光る鼻水の刃が、こちらめがけて飛んできた。

ちょうどその頃、春日部山の頂上辺り
所に、たたずんでいる人影があった。

その人影はフードつきの、どう考へても季節外れな（しかも時代
遅れな）長いコートをはおつて、フードも深々とかぶつていたので
顔も身体もほとんど見えなかつた。年齢も、性別すらはつきりしな
い。何とも不気味な印象を与える雰囲気の持ち主だつた。

しばらくして、フードの中から忍び笑いが漏れ、しかも、低い声が
した。

「覚悟してりよ、トオル。」

コートの人物はぐるりと向きを変え、木々の間へと歩いていった。
その拍子に、コートがめぐれ上がつて身体の左側がちらりと見えた。

腕がなかつた。

左肩の付け根から下には、汚れた包帯が無造作に巻かれて、ひらひ
らとはためいているだけだつた。

その拾伍・休みだからって昼寝で時間をつぶすな（後書き）

久しぶりのわりに短くて、申し訳ありません。本当は山崎とか土方のシーンも入れたかったんですが、『ごちや』『ごちや』になりそうだったので（汗）。更新お休みの間も感想をくれた皆様、そしてこの小説を読んでくれる人たち全てに、心から感謝しています。次回は山崎と土方を焦点におき、『ゴート』の人物の目的と正体も明らかにする予定（！？）なので、どうぞお楽しみに！！

その拾六・車を運転する時は乗つてゐる人の「」とを一番に考へる（前書き）

土方、山崎が登場ーでももちろん銀時たちも登場するので、「安心
を（笑）

その拾六・車を運転する時は乗つてる人のことを一番に考えろ

ようやく敵が来なくなつたのを確かめ、土方は刀を見下ろした。べつとりと紫色の液体にまみれている。無意識に顔をしかめて見回すと、周囲の壁や床も同じような有様になつていた。土方は後ろを振り返つた。

「平氣か？」
「ボー……」

土方にぴつたりとついてきている、鼻水を垂らした少年は、曖昧な返事をしてうなずいた。その足元でくんくんと不安げに鼻を鳴らしているのは、小さな白犬だ。奇妙なことに、野原家の愛犬・シロとそっくりな姿をしている。ただし目が空色であることと、首輪をしていないことだけが違つていた。

土方は壁の隙間に監禁されていた者たちを見て、驚愕した。縛り上げられていた鼻水の少年が、本物のボーちゃんなのだと悟ると（ボーちゃんはかなりきつくねられて、相当痛い思いをした）、銀時たちに知らせるためにすぐ神楽を行かせたのだ。

そしてシロと瓜二つの犬のことを問いつめてみたところ、ボーちゃんはその犬がテルという名前で呼ばれていて、なぜかずっと一緒に閉じこめられていたのだと教えてくれた。

なぜこんな所に一人だけで閉じ込められたのかについては、ボーち

やんは何も知らなかつた。分かつてゐるのは、テルといふ名のその白犬が何とも不思議な力を持つてゐるといふことだつた。それが、いわゆる『テレパシー』だつた。

この能力はやたら体力を要するらしく、そう気安くは使えないらしい。あの時土方の頭の中でした声も、まさにテルの仕業だつたのだ。ボーちゃんもこの能力のおかげで、比較的テルと親しくなれたのだつた。

しかしながら、閉じ込められたのかについては、テルは決して話したがらず何も答えなかつた。

二人がちゃんとついてきていることを確かめると、土方は声には出さず、手を下にぐいと向けてすぐそばにある階段を下りるように伝えた。ボーちゃんとテルもまた何も言わずに、じつくりとうなずいてみせた。

下に下りた途端に敵に囲まれるのではないかと予想していた土方は、何も出てこないので却つて氣味悪く感じた。今やマンションの中は、土方たち以外誰もいないかのように静まりかえつていた。土方にとつてはむしろ、お化け屋敷にいるような不気味な静けさよりも斬り合ひの方が歓迎だつた。

「……離れるな。」

低く囁くと、刀をきつく握りしめ、土方は二つの小さな影を伴つて廊下を歩き始めた。

「銀さん！大丈夫！？」

トオルが真っ青な顔をして、一番後ろの座席に寝ている銀時を振り返った。

「お前、何回同じ答えを言わせたら気が済むんだ。」

銀時が面倒くさそうに手を振った。

「どの傷もかすっただけだ。目くじら立てるほどのことじゃねーだろ。」

確かに、心配されている当の本人は頭をボリボリ搔きながら、どこかに隠し持っていたらしいジャンプを読んでいる。実際銀時のことをこんなに心配しているのはトオルだけだった。

「風間くん、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。」

トオルの隣に座っていたマサオが言い、そしてしんのすけたちに聞こえない程度の声で付け加えた。

「銀さんって、漫画でもすつ「じへタフなんだ。あれぐらいじゃへたばらないよ。」

銀時、神楽、ボーチャンを除いた春田部防衛隊、そしてまつざか先生は、今ふたば幼稚園の送迎バスに乗っていた。

銀時と神楽は、このまま戦い続けていてもこちらが不利になるだけだと悟り、逃げる決意を固めた。とはいえ敵がそうあっさり逃がしてくれるのはずもない。そこで一人が目をつけたのが、ピンク色で虎猫型の幼稚園バスだった。

しんのすけたちは一度、このバスで逃亡を計ったことがある。だからみんな奇妙な偶然だなと思ったが、実は偶然でも何でもなかつた。銀時たちはその逃亡シーンを映画で見て、バスを利用するすることを思

いついたのだ。とにかく、敵の気をそらしながらトオルたちにバスに乗るよう合図するのが大変で、それから自分たちが乗り込むのはさらに大変だつた。

しかし乗つてしまえばこゝちのものだ。銀時は疲れたと愚痴をこぼしていたので、ハンドルを握ることにしたのは神楽だつた。これはどう考へても未成年運転だが、そんなとを気にしている場合ではない。しかし神楽の運転が恐ろしく危なつかしいといふことは否定できなかつた。事実幼稚園を出る際に、子供たちのニセモノのうち何人かが犠牲になつたのは確かだつた。

しんのすけは持ち前の脳天氣さを發揮し、神楽の隣の助手席ではしゃいでいた。一方ネネは勇敢にも（と、トオルとマサオは思つた）自分の席でぐつすり眠つてしまつっていた。

そんな中でも、一番混乱した様子でいるのがまつざか先生だつた。先生は銀時の豹変ぶりや神楽の出現に驚くばかりで、質問することも忘れ、不安げに後ろの方に座つて、あつちこちへ目をやるばかりだつた。

「ねつ、だから銀さんのこととは心配しなくていいつてば。
マサオがもう一度、励ますよつて言つと、なぜかトオルは怒つたような口調で言い返した。

「でも、敵が毒を持つてたひどいするんだよ？」
「へ？」

マサオは完全に面食らつた。風間くん、一体どうじちやつたんだろ

う？

「何でそんなこと言いつの？」

「だって……」

だって何なのか、結局聞けずじまいに終わった。トオルが何か言いかけた途端にバスが跳ね上がり、二人とも天井に嫌というほど頭をぶつけてしまったのだ。ほぼ同時に、少し後ろの方で

「きやつ！」

という叫び声がした。ネネが目を覚ましたらしい。

「神楽、もうちょい身体と心とジャンプに優しい運転をしろ！」「一番後ろで怒った声がした。トオルが振り向いてみると、無防備な体制で寝ていた銀時が下に転がり落ちていた。そして彼の手には、さつきの衝撃でまつぶたつに破いてしまったジャンプが握られていた。

トオルは思わず吹き出した。それで胸を支配していた重苦しい気持ちがやや振り払われた。そうだ、今はそんなことを考へてる場合じゃない。それにしてもこんな時に『のこと』を思い出してしまうなんて……。

マサオを見ると、なぜかひどくうつろな目つきをしていた。トオルは少し心配になつた。さつき頭をぶつけた時、何かあつたんだろうか？

「あの、マサオくん……大丈夫？」

「……えつ？ 何？」

マサオがきょとんとしてこちらを向いた。見る」とのできない目は再び正常な感じに戻り、うつむかなどみじんもなくなつていた。

トオルは慌てて、

「ううん、何でもない。」

と答え、窓に顔を向けた。ゴミバケツが一個、大きな音を立てては

ね飛ばされるのが見えた。

「つむつー。」

突然どこからともなく飛んできたゴミバケツを、山崎は間一髪でよけた。それと同時に、ピンク色の大きなものがすごいスピードで走り去つていいくのが、隠れていた路地の隙間から見えた。

何だあれは……車？バスか？何でみんな慌てているんだ？

山崎はため息をついて立ち上がった。なんとか敵をまいてここに隠れたものの、町中一セモノだらけだし、いつここから出られるかと思うとかなり気が滅入った。副長が沖田隊長に連絡したいところだが、運悪く携帯をコンビニにおいてしまったので、彼らに助けを求めるすべもない。そのうち誰かがここにやつてきたら……。

山崎の前に突然現れた三人の子供たちは、びつやらーセモノたちのリーダー格らしい、と彼は見ていた。彼らが一斉に迫ってきた時はもうダメかと思ったが、幸い山崎は腕利きの隠密おんみつでもあった。何とかかんとか逃げ出し、今ここに隠れているというわけである。しかし、一つの場所にずっと隠れているのはまずい……移動するのなら、辺りに人気のない今がチャンスだ。

山崎が一步踏み出すか踏み出さないかのうち、その右肩に後ろから手が置かれた。

山崎は全身の血が流れ去つていくような気がした。振り返るより先に、すぐ後ろで低い声がした。

「……ちよつと聞きたいことがあるんだが、いいかな？」

イリスは怒り狂っていた。

「あのクソ野郎！」ざかしい真似をしやがつて……！」
「ぎゃーぎゃーわめかないでちょうどいい、イリス。そんなことをし
てもあいつが見つかるわけじゃないのよ。」

「ぎゃーぎゃーなんか言つてねえよ。」

ルビーの冷たい言葉に、イリスがむつとした口調で答えた。
「大体リンドの奴はどこ行つたんだ？いつでもどこでも、ひょいつ
といなくなりやがつて！」

彼らが探しているのは、当然山崎退だった。しかしルビーはともかく、イリスはこういう探索みたいなちまちました作業が好きではない。その上リンドもいつの間にか姿を消してしまい、イリスのイライラは頂点に近づきつつあった。

「リンドのことはほつときなさい。」

ルビーが冷静な口調で言った。

「今のは最優先事項は山崎退を始末すること。いいわね？」

イリスはフンと大きく鼻を鳴らした。そんなことは言われなくとも分かっているといわんばかりだった。

「それにも…ただの氣弱そうな奴だと思ってたのに、そんなことなかつたのね。あたしたちから逃げ出すなんて。」

「一時的にだろ。」

イリスがまた怒りを秘めた口調で言った。

「あいつがたまたま、ちょっと幸運だつただけだ。どうせすぐ捕まるさ。」

「そう…」

ルビーの声は相変わらず無表情だつた。イリスはさつきから辺りをしきりに見回していたが、突如何かを見つけたらしく、あつと声を上げた。

「おいつ、あれ…！」

「何？」

イリスの指さす方を向いたルビーが、少しだけ、ほんの少しだけ、目を見開いた。

イリスとルビーが立つてある公園の向こう側の路地に、そろそろと消えていく人影があつた。山崎ではない。人影は二つあり、一つは大人、もう一つは子供のものだろう、イリスとルビーぐらいの大

きさしかない。

大きい方の人影は、右手に何か長くてざらざらするものを持っていた。その後ろにぴたりくつつくようにして、子供が歩いていく。そしてよくよく見れば、子供の足元に小さな犬がいる。真っ白でフワフワの毛を持つ、わたあめみたいな犬だった。

公園の一人の視線は、この白い犬に向けられていた。

イリスが歯の間から、シーッと怒りと嫌悪の吐息を漏らした。

「間違いねえ、テルだ！あの鼻水のガキまで一緒にいやがる……くそつ、テルの奴助けを求めやがった！！」

「驚きね。昨日あんなに脅しつけてやつたのに、まだ抵抗する気力があるなんて。感心しちゃうわ。」

「感心してる場合じやねえだろ。早くあいつを捕まえなきゃ、リオル様に叱られちまつぜ。うまく手なづけりや、テルは使い勝手があるんだからな。」

ルビーはしばらくの間、路地の中に消えていく影を見つめていたが、やがて小さくため息をついた。

「いいわ……山崎退は後回しじましちゃう。」

送迎バスでの旅の状況は、ちつともましにならなかつた。それどころか神楽の運転のし方はますます荒っぽくなる一方で、銀時は少なぐともあれから一回、バスの床に倒れ込んだ。

「僕、まだ生きてるのが信じられないよ。」

マサオが血の氣の失せた顔でネネに言った。ネネはもうとても眠るどころではなく、トオルに席を替わつてもらつてからはマサオの腕にしがみつきっぱなしだつた。助手席にいるしんのすけも、さすがにはしゃぐ余裕がなくなつたのかもう何も言わない。まつざか先生

は前の座席の背もたれにしつかりつかまって、振り落とされまいと必死になっていた。

「つたく、いつまでこんなもんに乗ってなきやいけねーんだ！」

銀時がいまいましげに叫んだ。彼がこの恐怖のバスの旅を続けるよりも、敵との戦いの方がましだと考へてゐることは火を見るよりも明らかだった。

トオルはといえば、マサオとネネの座つている席の後ろで窓の外を眺めていた。全てが恐ろしい勢いで過ぎ去つていくので逆に酔つてしまいそうだったが、春日部がどんな状況になつてゐるのか見たかつたのだ。今のところ、襲つてくる敵の姿は見られなかつた。

キキキキキーッ！！！

突然バスが急ブレーキを踏んで止まつた。不意打ちを食らつた乗客たちは、みんな座席から転がり落ちたり天井や前の座席の背もたれに頭をぶつけたりして、声のない悲鳴を上げた。

「もうたくさんだ！」

床から起き上がつた銀時が、カンカンになつて叫んだ。しかし神楽は別に、いたずらで急ブレーキを踏んだわけではなかつた。ようやく座席に腰を落ち着けたみんなが前方のフロントガラスに目をやると、誰かがバスの真ん前で右手を振つてゐるのが見えた。

よれよれの長いコートを着た、背の高い人物だつた。フードをかぶ

つてゐるので顔は全く見えない。

そしてその隣で、困ったような混乱しているような複雑な表情をしている山崎がいた。

「やあ、どうも。」

フードの人物が近づいてきて、運転席の開いた窓ごしに神楽に話しかけた。さすがの神楽もこれにはどう対処していいのか分からず、ぽかんと口を開けるばかりだった。

「なんか大変なことなつちやつてるみたいだねえ？悪いけど乗せてくんないかな？」

陽気でハスキーで、フードをかぶつた不気味なイメージとはかけ離れた声だった。そのせいが、それとも山崎がいるせいが、みんなが何か言つより早く、しんのすけがドアの開閉ボタンを押してしまつていた。

開いたドアから、コートの人物と山崎が乗り込んできた。山崎は銀時たちがいるのを見て狐につままれたような顔になつたが、それは銀時たちの方でも同じだった。ただしコートの人物だけは、フードに隠れた顔をあつちこつちに動かしてきょろきょろ見回していた。

そして突然叫んだので、全員が飛び上がつた。

「いた！」

そして神楽たちが何か言つ間もなく、コートの人物は大股で歩いていき、後ろから一番目の席のすぐそばに立つた。

ちゅうづ、トオルの座っている席に。

トオルは呆気に取られて目の前の人物を見つめていたが、口が開いていることに気づき、慌てて閉じた。

「久しぶりだねえ……トオル。」

そう言わてもまだ、トオルはわけの分からないという表情をしている。それに気づいたらしいコートの人物が、軽くため息をついてフードに手をかけた。

「やれやれ……あたしの顔を忘れたのかい、トオル。」

ぱさつと落ちたフードの中から現れたのは、なんと若い女性の顔だった。黒髪に、黒い瞳。白い透き通るような肌。くつきりした端整

な目鼻立ち。

すごい美人だ。それなのに、その顔を目にした途端トオルの顔がさつとこわばつた。

「うう……みおり叔母さん……！」

しばし、車内に愕然とした沈黙が満ちた。

「ええええーっ！—叔母さんん！？」

その拾六・車を運転する時は乗つてゐる人のことを一番に考えれ (後書き)

いやあ、ひつひつ出しあやいました、ねつ造キャラ (汗)。風間くんって親戚とかいるのかなあって考えてたら、どうしても作りたくなつてしまいまして (どんな理由だ)。風間くんの顔がこわばつた理由は、次回明らかになります。お楽しみに!

その拾七・粗手が嘗ておもてに腰こじと待たされたので腹立つよな（前書き）

お待たせして申し訳あつませんでした。 今回は銀魂側の創作（要は捏造）キャラが登場します！

その拾七・相手が電話に出るまで長いこと待たされたので腹立つよな

憎い。

ずっと前から、あいつのことが嫌いだった。許せなかつた。

どんな方法でもいい。とにかく傷つけてやりたくてたまらなかつた。あいつの顔が苦痛に歪む瞬間を、命乞いをして泣き叫ぶ姿を、見たくてたまらなかつた。

気の済むまで、思い切り痛めつけてやりたかった。

今、自分の手につかまれてぐつたりしている、この役立たずにしてやつたよつこ……。

しかし最近、それだけではダメだということに気づいた。

あいつ本人を苦しめて殺すだけなら、それでおしまいだ。でもその前に、あいつの『大切なもん』をぶち壊してやるのはどうだらう?

そう、例えば。

考え込みながら下に手をやつたその時、二つの人影がその場に凍りついて、こちらを見上げているのが目に入った。

突然、ズボンのポケットが震えた。

土方は思わずぎくりとしだが、そこに携帯電話を入れておいたことを思い出した。内心自分を叱りながら画面を見ると、酔乙女邸からの電話である。

後ろをちらりと見て、ボーチャンとテルがついてきていることを確

かめる。そして土方が電話の通話ボタンを押して耳に当てるか当てないかのうちに、沖田の声が耳に飛び込んできた。

「土方さん、今どこに元氣ですかイ？・マンションの部屋にかけたのに出ねむんですかイ……」

「外だ。」

土方は簡潔に答えた。今は「ひひひひ」や「ああああ」説明してこる暇などない。

「それより、何の用だ？」

「あア、それが、大変なんで……」

沖田はいつになく切迫した口調で、酔乙女あいの「セモノ」が「になくなつたことを告げた。

しかも、彼女がいなくなる直前にいたと思われるコビングには、紫色の液体と長い髪の毛が数本、落ちていたといつ。

「紫……だと？」

土方はマンションで斬り倒した二セモノたちの血も、紫色だったことを思い出した。それと同時にまた、あれと同じものを確かにどこかで見たような気がしてならなくなつた。どうでどう、もう少しで思い出せそうなの……。

「…………土方さん、あいつのこと、覚えてますかい？」

「…………あ？？」

土方は沖田の聞いの意味が分からず、顔をしかめた。

「何だと？」

「だからあいつはア、ほり…

魔虞蛇博士の」とぞひや。」

「…………一。」

土方は微かに目を見開いた。その名前に心当たりがあつたからだけではない。沖田のいわんとしていることに気づいたのだ。

「そうだ……あの紫の液体は…………」

土方たちが江戸で、近藤らと共に真選組で働いていた頃、といつてもここに来てからせいぜい一ヶ月ぐらい前のことだが、あちこちで連續殺人が発生した。しかも犠牲者はそれぞれひどい殺され方をされており、江戸の人々は皆恐怖のどん底に叩き落とされることになった。

近藤はこれまでにないほど怒り狂つた。真選組の目と鼻の先でこれらの事件が発生したからということもあつたが、何より彼を怒らせたのは、殺されたのが皆子供だったこと、そして死体が発見されからすぐに、何者かに盗まれていることだつた。その何者がが殺人犯であることはほぼ間違ひなかつた。なぜなら死体が消えた後に、『お子様はありがたく再利用させていただきます。ご協力ありがとうございました。』というふざけたメッセージが残されていたからだ。

何としても犯人を捕まえる。そう決心した近藤たちは、一週間懸命の活動を続け、遂に犯人を突き止めた。

そいつが、魔虞蛇博士だったのだ。

彼は「巨脳族」という頭でつかちな天人だつた。この種族は大変頭がよいことで知られていたが、ひねくれた偏屈ものでほとんど他の種族と交流しない。それなのに巨脳族の彼が地球にやってきて江戸に住んでいるということは、それだけで驚きだつた。

しかも同じ種族の仲間と違い、魔虞蛇博士は愛想よく、多くの人と

交流した。病氣にかかつた人のために薬を作つてやることもあつたので、評判はなかなかいいものばかりだつた。

しかしある夜、隠密の山崎が、博士の家のそばに張り込んでいた時、そこから子供の泣き声らしきものが聞こえてきたのだ。

当然山崎は驚愕したが、そこは真選組の隠密である。すぐさま博士の家を囲む塀に身を寄せ、じつと耳をしました。

すると今度は疑いようもなく、子供の泣き叫ぶ声が中から響き、しかしすぐに途切れた。

その日は死体は見つからなかつたが、行方不明の子供が一人出でいた。しかもその子のいなくなつた場所は、魔虞蛇博士の家のすぐ近くだつた。

こうなつてはぐずぐずしてはいられない。山崎は携帯で仲間に応援を求めた。幸いにも、近藤・土方・沖田の三人がすぐ近くにいたので、突入隊はすぐに結成された。

そつして博士の家の中から、これまで犠牲になつた子供たちの遺体と、まだ殺されてはいなかつた行方不明の子供が発見されたのだった。不可解なことに、そして恐ろしいことに、子供たちの遺体は全

て冷凍保存されていた。

しかしその時部屋の奥の方へと逃げていく博士の姿が田撃されたにも関わらず、彼が捕まることはなかった。鍵をかけて閉じこもった自分の研究室の中から、消えてしまったのだ。どこかに秘密の扉や抜け穴でもあるのではと、土方たちはその部屋をそれこそ風潰しに調べたが、何も見つからなかつた。博士が書いた書類といったようなものも全くなくなつていた。

奇妙なことといえば、テレビがつけっぱなしになつており、それにへんてこな装置が接続されていていたこと、そして床に小さなびんが転がつていたことだけだつた。あの装置は今頃幕府の科学班に預けられ、綿密に調べられているはずだ。

そして床に転がつていたびんに入つていたのが……。

「確かに、紫色のどろどろしたやつだつたな。」

土方は今まで思い出すことのできなかつた自分を内心呪つた。

「土方さん、そんで結局あれは何の液だつたんですかイ？」
「いや、知らねえ。あれもあの装置と一緒に、幕府で調べられているはずだ。」

それでも、何で一セモノたちの血が同じような紫色をしていたのか。

土方はボーカリスト、その足元でじっとしてこるトルを見つめた。

そして、魔廻蛇博士の失踪といの映画の中で起きてこる異変には、何か関係があるのでないか……。

「土方さん、俺ア…………」

同じことを考えていたらしの沖田が、珍しく思索しているような口調で言いかけた。しかし結局、最後まで言わずじまいに終わつた。

悲鳴が聞こえてきたのだ。甲高い、いわゆる『縄を裂くよいな』女の叫び声が。

土方はさすがに一瞬ぎくつとしだが、顔色を変えるほどではなかつた。何と言つても血なまぐさい仕事に従事することが多い身として

は、この程度のことに動搖するわけにはいかないのだ。ボーチャンとテルの表情が変わっていないところを見ると、悲鳴は沖田側のものらしい。

「沖田…………！」

「すいやせん土方さん、ちょっとくら見に行つてきまさら。またすぐ電話するんで。」

かかつた時と同様に、電話は唐突に切られた。土方は舌打ちして携帯を耳から離し、閉じてズボンのポケットに突っ込んだ。

「…………知り合いだ。」

ボーチャンがもの聞いたげに見ているのに気づいて、土方はふつきらぼうにそれだけ答えた。

そして、田にも止まらぬ速さで足元の石を拾い上げ、彼らが立つていた場所から数メートルも離れていない所にある茂みに投げつけた。すると茂みが叫んだ。

「いたつ！」

ボーちゃんの口がぽかんと開いた。茂みの中から、マサオそつくりの少年が頭をさすりながら転がり出てきたのだ。その姿を見た途端、テルが怯えたようなうなり声を上げ、ボーちゃんの足にぴったりと身を寄せた。空色の目がぴかっと光った。

「逃げるぞ！」

土方は怒鳴り、まだ啞然としているボーちゃんの腕を問答無用でつかむと走り出した。テルが飛ぶように走り、後に続く。

「！」の野郎！』

後ろの怒鳴り声が、次第に遠ざかっていった。

土方たちが近くに無造作に置かれていたゴミ箱のそばを走り過ぎたまさにその時（テルは匂いをかぐのが嫌らしく、息を止めているような顔をしていた）、土方のズボンのポケットがまた震え出した。土方は無視した。車に乗っているわけではないが、逃げ回りながら携帯で会話するなんて、それこそ自殺行為だ。後ろに殺氣立つた追っ手が迫っているとなればなおさらである。

沖田は相当辛抱強く待っているらしく、携帯はなかなか静かにならなかつた。しかしマサオとネネそつくりな姿をした追っ手たちをまくことに成功し、よつやく一同が狭くてゴリラだけの路地に腰を下ろした時、震えが止まつた。

土方は息をつき、そして今頃向こうはさぞカソカソに怒っているだろ？と思いやりながら、携帯を取り出し、開き、不在着信欄の最新項目を表示した。

これまで何の変化もなかつた土方の顔色が、にわかにさつと白くなつた。田が画面に映し出された文字に、釘づけになつていた。

そこにあつたのは、まるで思いもしなかつた五文字であつた。

「まったく大変だったんだぞ、ここに来るまで……」

再び走り出した送迎バスの中で、長いコートを脱ぎ捨てた女性が独り言のように呟いた。

女は左腕がなかつた それなのに今度は神楽に代わり、その女
が右腕だけでハンドルを握っていた。彼女の運転のし方は神楽のス
リルに満ちたものと比べるとずっとおとなしく、乗客たちは比較的
安心して座席に腰を落ち着けることができた。

そして助手席にいたしんのすけも、今はトオルと交替していた。ト
オルは嬉しいような困っているような複雑な表情を浮かべ、運転席

の方に顔を向けずにじっとフロントガラスを通して見える前方の風景を見つめていた。

女がまたしゃべり出した。

「春日部に着いた途端に変な奴らに襲われてさ。 そんで逃げ回つてたら路地の中でうろうろしてゐる兄ちゃんが（と言ひながら、すぐ後ろに座つてゐる山崎を指さした）いたもんで、どうなつてんのか聞いてみたわけ。 でも彼もいまいち分かんないみたいだつたし……しょーがないから一人で逃げてたのよ。 そしたらさ、急にこのバスが飛び出してきて、しかもあんたの顔が窓から覗いてるのが見えたんだ。だからとりあえず停めてみようと思つて……」

一人でこれだけしゃべると、女はちらつと隣にいるトオルに目をやつた。

「…………」

トオルは黙つていた。後ろにいるみんながこちらへ耳をそばだてているのは分かつていた。

今運転席に座つてゐる女の名は、風間みおり。トオルの父親の妹で、つまりトオルの叔母に当たる人だ。しかし高校を卒業してから世界中を放浪しているため、トオルと会つたのは一回だけ、二年前のことだつた。

トオルは今まで、友達にみおり叔母さんの話をしたことがなかつた。ほとんど会つたことがないのと、母親がみおりを嫌つてゐるからといつこつもあつたが、何より一番の理由は、一度だけ彼女と会つた時の記憶が思い出すのも苦痛なものだからだつた。

みおりもそれを分かつていていたようで、あれ以来春田部に来る」とは
おろか、電話をかけてくることすらなかつた。

それなのにどうして、よつとよつとこんな時に、叔母さんは元気で
やつて来たんだから?」

そしてトオルは、もう一つ考へた。確か叔母さんが来るなんじこと
は、銀さんたちから聞いた『あらすじ』の中にはなかつたはずだけ
ど……。

「叔母さん、どうして急に春田部に来たんですか?」

深く考へもしないうちに、トオルの口から言葉が転がり出た。みお
りがちよつとびっくりしたみたいにトオルを見つめ、それからまた
すぐに視線を戻した。

「ああ。」

返答を考えるのに困つているよつた、曖昧な口調だった。

「それが分からんんだ。何だかどうしてもここに来て、お前に会
わなきやならない気がしたんだ……。」

門は今や、大きく開き切っていた。その向こう側の、沖田に一番近

今の悲鳴^{まじひやう}、外から聞こえてきたようだ。

沖田はそう見当をつけ、急いで酢乙女邸の外に走り出た。すると彼の考えを裏づけるかのように、門の辺りからまた女の悲鳴が聞こえた。

沖田は一層足を速めたが、門の手前辺りまで来た時、はたと立ち止まつた。

い場所に、紫色の液体にまみれた黒い塊かたまりが落ちていた。それが酢乙女あいのニセモノのなれの果てだと気づいた時には、さすがの沖田も背中に戦慄が走るのを感じた。

ニセモノはシュー・シューと嫌な匂いのする煙を立てている。そして見る間に溶け、はつきりした形を失い、やがてはただの紫色の水たまりになってしまった。

そして、その向こうにはさらに恐ろしい光景が展開していた。

沖田はこちらに背を向けている人物を、信じられない気持ちで見つめた。まさか、こいつがここにいるはずがない。

だがしかし、ここ最近親しくしてきた人だ。後ろ姿とはいっても、見間違えようがなかつた。

風間トオルとそっくり同じ姿をした人影が、こちらに背を向け、全身のあちこちを紫に染めて立っていた。

ただしこちらは怪我のためではなく、外から浴びたものらしい。酢乙女あいのニセモノを始末したのはこいつのようだ。しかし、それよりもっと差し迫った問題があった。

トオルそつくりの誰かの足元に、新ハがうずくまっていた。そばに折れた棒が転がっているところを見ると、さつきまでそれを使って応戦していたのだろう。新ハが苦しげに咳込むたびに、その口からポタポタと血が地面に落ちた。

そこからやや離れた所でお妙が、膨らんだ買い物袋を握りしめたまま、恐怖の表情を顔に貼りつかせて立ち尽くしていた。その脇でうなり声を上げているのは、定春だ。

沖田が次の行動に移る間もないうちに、新ハを見下ろしていた少年がぐるりとこちらを振り返った。

沖田は束の間息が止まり、動けなくなつた。覚悟していた通り、そいつの顔もトオルと瓜二つだった。だが、目が違う。五歳の子供の目ではない。そこにあるのは……。

憎悪だ。

見ただけで人をすくみ上がらせてしまうような激しい憎悪の炎が、その瞳の中にはあった。顔の表情自体は笑みを浮かべていることが、それを却つて一層恐ろしげなものにしていた。

「こんにむかは。」

トオルをつくりの少年はこいつした。そして沖田に一歩近づいた。沖田は思わず後ずさりしそうになつたが、氣弱なところを見せまいとぐつとこりえた。

少年はさうこなつた一歩、じかく踏み出しついた。

「あなたも、風間トオルの友達ですか？」

沖田は顔をしかめた。

「それが、どうだつてんدي。」

トオルそつくりの少年の口元が、にやりと笑つた……と思つた瞬間、沖田は手にしていた刀を抜き放つていた。

全身に、泡立つような殺氣を感じたのだ。真選組一番隊隊長の刀がほとんどの田川にも止まらぬ速さで動いた。

しかし

。

ギー

(……なつー?)

沖田の刀が相手に襲いかからぬうちに、彼の腹をすさまじい衝撃が襲つた。内臓をやられたかと思つほど強い衝撃だった。

「トオルのお友達がこれで三人……ふふふ、ちょうどいいや。」

笑い声が、地面に崩れ落ちる沖田の耳に届いた。

そしてその後は暗闇に呑まれ
 もつ、何も分からなくなつた。

しんのすけたちの知らないうちに、壮絶な悪意を持つ者が、静かに行動を起こしつつあった。

そして、風間トオルと風間みおりの過去につながる悪夢も、また……。

その拾七・相手が電話で長いこと待たされたので腹立つよな（後書き）

恐るべき敵を前に、新八、沖田、そしてお妙の運命は！？そして土方にかかってきた電話の意味は……次回をお楽しみに！

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる（前書き）

さあ、離ればなれになつてゐる銀さんたち、果たしてそれぞれの行く末は！？更新いつも遅れて、すみません！ m(—_—) m

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる

気がつくと、どこか暗い場所にいた。

でも一人ではなかつた。誰かが前にいて、自分の手を引いて歩いている。

その人は、自分よりずっと背が高くて髪も長い……女の人だ、と分かつた。

やがて、狭い通路から突然、天井の高い広々とした空間に出た。

どこかの工場の中らしい。壁にはパイプが張り巡らされ、手すりのついた通路やそこへ上つていくためのはしごが設置されているのが、薄く灯つた工場の明かりの中にぼうつと見えた。

しかし、何より興味を引いたのは、部屋の真ん中の床に設置されている大きな筒みたいなものだつた。

好奇心に突き動かされるまま、そばに近づいて筒の中身を覗き込むと、中は黒い液体で満たされていた。普通の水みたいに滑らかではなく、どろりとしている。何ともたとえようのない異臭が鼻をついた。

半ば無意識に液体へ手を伸ばした時、女人が気づいてこちらに歩いてきた。自分に向かって何か言ったようだが、なぜかよく聞き取れない。

自分の腕をつかんで引つ込めさせると、女人は筒の空洞の中を満たす液体に目をやつた。

ちらりと笑みを浮かべ、女人はそつと左手をさしのべて黒くどろりとした液体に触れた。そして手の平に液体をすくい上げて揺らし、液体の感触を楽しむかのように目を閉じた。

が、突如目を開き、疑惑の表情を浮かべて左手の中に溜まつたものを見つめた。

次の瞬間、女人の手の中のものが
え上がった。

そしてめらめらと揺れる青白い炎が、女人の左腕をさあつと、生き物のように這い上がった……。

黒い液体が、ぼつ、と燃

すん、と全身に重い衝撃が来て、トオルはハッと顔を上げた。

「どうやら夢を見ていたらしい。ちょうどどしんのすけが登場する悪夢を見て田が覚めた時のように、全身が汗ばんでだるかった。」

トオルはため息をつき、額の汗をぬぐった。

何てことだ……」この一年間、見ないで済んできたといつのに、み

おりに会つたことでの悪夢が蘇つてしまつたようだ。

隣の運転席にいるみおりに田をやつたのと同時に、トオルは自分がなぜ唐突に田覚めたのかに思い当たつた。

バスは止まつていた。多分ブレーキを踏んだ衝撃が、トオルを田覚めさせたのだろう。どういうわけか、みおりは明らかに呆然とした表情を浮かべて前を見ている。トオルは前方の光景に視線を向けた。

そこにいたのは、定春とその背にしがみついたお妙だつた。

あまりにも驚いたからだろう。土方はテルがけたましく吠え出すまで、襲撃者の接近に気がつかなかつた。

「一。」

頬に熱気を感じたのと我に返つたのがほとんど同時で、土方は半ば無意識のうちにボーちゃんとテルをひとつかんで投げ飛ばし、自分

は地面に伏せた。頭上で爆発音が響いたのは、ちょうどその直後だつた。

ついさっきまで、自分たちが座っていた路地の地面に、大きな火の手が上がっている。しかし見ているうちにそれは小さくなり、まるで最初から火などなかつたかのように、跡形もなく消えてしまつた。

そこへ、さつきまいたはずのネネとマサオそつくりの人影が、走り寄つてくるのが見えた。

二セモノたち ルビーとイリスの二人とも、怒りの度合いが違うとはいえ、先ほど土方にうまく逃げられたことにはそれぞれ腹を立てていた。だから本来の狙いはテルなのだが、何よりもまず、攻撃の目標を別の男に決めていた。今、地面に倒れている一人の男に。

しかし二人にとつては不幸なことに、ルビーとイリスは考えるのと同じくらい、いやそれより速いスピードで行動できる男を相手にしたことことがなかつた。土方はいたずらに倒れていたのではなかつた……伏せるや否や、既に次の行動へと移つていたのだ。

土方に飛びかかるか飛びかからないかのうちに、イリスは焼けるような痛みを右腕に感じてぎょつとなつた。頬に数滴の液体が飛んできたのでとつさに横を見ると、ルビーの肩から紫色の血がしぶいていた。

二人が凍りついている間に、土方は刀を手に飛び起き、地面にわけ

の分からぬまま転がつていいるボーちゃんと恐怖の吠え声を上げているテルを左腕に抱え込んだ。

イリスは地面に転がつていいる自分の右腕と、逃げていく土方の背中を悪夢を見ているような気持ちで眺めていた。

しかしルビーの方は傷が浅いこともあり、やう長くほんやりはしていなかつた。今まで見せたことのないような悪意のこもつた視線をそして力をこめた一撃を、逃亡者の憎い背中に送りつけた。

土方の背中に、炎の華が咲いた。

今しんのすけたち園児に銀時たち、そしてまつざか先生とみおりは、バスから降りてお妙と定春の周りに集まっていた。

みんな、それぞれ違つた意味合いの驚きを顔に浮かべている。トオル、銀時、神楽、そして山崎は、なぜこの奇妙なコンビがこんな所に現れたのだろうと不思議に思つていたし、他の面々は定春の巨大さに睡然としていた。ただししんのすけは別で、彼はお妙のきれいな顔に目が釘付けになつていた。目の見えないマサオはネネに手をつながれ、一人どのような反応をすればいいのか分からぬとい表情で突つ立つていた。

やがて、神楽が彼女らしくもない、おずおずとした口調で話しかけた。

「あの、姉御……何かあつたアルカ？」

すると　　まつたく驚くべきことが起つた。

お妙がわッと泣き出したのである。

「お妙さん！」

「姉御オ！！」

トオルと神楽がそれぞれ仰天して叫んだ。お妙はさらに絶望的にすり泣き、とうとう定春の首に顔をうずめてしまった。

「私…私、どうしたらいいか分からぬの……お願い、助けて、お願ひ……」

トオルは銀時と神楽を見上げた。一人とも、トオルと同じようにお妙の様子から強い衝撃を受けたようだ。お妙は彼らの知つてゐる女性の中で、最もしつかりした人物の一人なのだ。

「ど、どうしたんですか？姉さん、一体……」

山崎は動転のあまりつい、お妙のことを『姉さん』と呼んでしまつたが、お妙はまるで気づいていないようだ。

「大変なのよ…私、怖いの。何が何だか、もう

「何があつた？」

銀時が单刀直入に、普段使わないような鋭い声で問いただした。それに元気づけられたのか、それとも少し気持ちが落ち着いてきたのか、お妙は顔を上げた。

「私…………し、新ちゃんと一緒に、買い物に行つたの。きょ、今日の、タ『』飯のおかずを買って、それで帰ろうとしたら、この子が定春ちゃんが、来るのに会つたの。なぜか分からぬけど、怪我をして血が出ていたわ。」

「怪我？」

神楽が聞き返し、慌てて定春の身体を調べ始めた。とうの定春自信

は黒い皿をくづくづくせめて、珍しそうにしたのすけたちを眺めていたが。

「どうしようか迷ったんだけど……結局、酢乙女邸に連れて行こうことにになったの。でも着いてみたら、チャイムは鳴らないし、ドアも開け放しだし……もつその頃には、定春ちゃんも元気になつてたんだけど。すごく嫌な感じがして、私は新ちゃんに、このまま定春ちゃんを中に入れて帰ろうつゝで、言おうと思つたのよ。そしたら……」

お妙はここで、突然口がきけなくなつたかのように言葉を切つた。見ればその顔が、極度の恐怖で青ざめこわばつているのが分かる。何回か息を吸つたり吐いたりしてから、お妙は絞り出すようにして話を続けた。

「そしたら、ちょうど門の近くの地面に何かがあるのに気づいたの。水溜まりみたいだつたんだけど、何だかどうつとしてて、しかも……紫色だつた。変に思つて上を見上げたら　　ああ、いたのよ、トオルくん。あなたにそっくりな子が、門の上にいたの。」

「えつ？」

トオルはびっくりしてお妙を見つめ返した。

「僕の……そっくりさんか？」

「それだけじゃないのよ。そいつは腕に、何かぼろぼろになつた紫色のものを持つてたの。女の子のようだつたけど、わ、私、あまりにもびっくりして、それに怖くて、動けなかつた……そしたらそ、そいつがこっちを向いて

新ちゃんを打ち倒したのよー！」

「おじちよつと、ちよつと待て。」

銀時が少し慌てた様子で遮つた。

「話の順序つてやつを間違えてねーか? そのトオルそつくりの奴は門のてっぺんにいたつていう話だが、そんならそこからどうやって下にいる新ハを倒したってんだ。バズーカでも持つてたのか?」

「え…ああ、まあそうよね、ごめんなさい。」

お妙はそわそわと前髪をかき上げた。

「でも本当にあつという間だったのよ。門の上からこっちを見た、つて分かつた次の瞬間に、新ちゃんが血を吐いて倒れたんだもの。それに……」

「新ちゃんつて……新ハさんのこと?」

ネネが突然割つて入つた。ショックそのものの表情を浮かべている。「あの…ネネを家まで送つてくれた人?」

その時しんのすけが目を上げ、明らかに怪訝そうな顔つきでネネを見たので、トオルは内心かなり焦つた。しんのすけにはまだ、ネネが風間家の夕食に招待されたことを告げていない。隠していたことを知つたら相当腹を立てるることは確実だ。

しかし幸い、しんのすけが何も言わないうちにお妙が話を再開してくれた。

「お腹を殴られたみたいだつたわ。少しの血だつたから、大したことなかったと思うんだけど……それにしても、あいつはとっても恐ろしい奴よ。それによつても強いわ。　沖田さんを一撃で倒したくらいだし。」

「沖田さんが！？沖田さんが、一撃で？」

山崎が叫んだ。信じられないといふ気持ちを、青い顔にありありと浮かべている。彼は普段から沖田のそばで働いているだけに、彼の恐るべき剣の腕はよく承知していたのだ。沖田を知る銀時と神楽も、同じく驚愕したようだつた。

「そんで……お前はどうなつたんだ。」

銀時がやつとのことで訪ねると、お妙はなぜかうなだれた。

「沖田さんが屋敷の中から走つてきたけど、あいつがさつと動いた途端にばつたり倒れてしまつて、私は何が起こつているのかさつぱり分からなかつた。あのままあそこで突つ立つていたら、間違いなく私が次の標的になつていたでしようね……でも新ちゃんが突然私は、『定春に乗つて逃げろ!』って叫んで我に返つたの。でも私は新ちゃんたちを見捨てて行きたくなかつた……だけど新ちゃんは私の腕をつかんで、定春ちゃんの背中に突き飛ばしたのよ。いえ、投げ飛ばしたつて言つた方がいいかしら。その途端定春ちゃんが走り始めて、後は……ああ、後は分からぬわ!」

「この人が言つてゐること、本当なの?」
一番最初に切り出したのは、風間みおりだつた。黒い瞳にやや疑わしそうな色を漂わせて、お妙と定春を見比べている。

「 もちろんだよ。」

トオルが怒ったように言い返したので、みおりはちょっとびっくりしたよつてトオルを見下ろした。

しんのすけとネネとまつざか先生は、定春に対しても完全に気をとどめている様子だった。

「 ここの犬、一体何なの？」

ネネがこわいわ手を伸ばし、定春の白く滑らかな毛並みに触れながら誰にともなく聞いた。

「 えーっと、まあその…………」

まさか宇宙巨大生物だよ、と教えてやるわけにもいかない。トオルが返答に困つていると、またしてもお妙が話題をそらす助け船を出した。

「 セウいえば……あのトオルくんにセウくりな奴、変な」とを言つてたわ。」

「 変な」と？

お妙はなぜか、トオルの顔をやけにじりと見つめ、そして口を開いた。

「 君たちには風間トオルを苦しめるために協力してもいいのか何とか。」

「何だと…？」

銀時がさつとお妙の方に視線を向けた。トオルは驚きのあまり飛び上がりそうになった。

神楽が言った。

「そういえば……ボーチャンの二セモノも言つてたアルヨ。風間トオルを渡せつて。」

「河村くんのせつくりさんは、風間くんを相手するのは自分たちじゃないとか言つてなかつた？」

ネネがみんなに思い出させた。

「せうか…だとすると、誰かトオルを特別に狙つてる奴がいるつてことになるな……」

「ちょっと待つてよ。」

みおりが少しイライラした口調で割り込んできた。

「トオルが誰かに恨まれるとでも言つの？言つとくけど、この子がそんな人様に憎まれるようなこと、してゐわけな

」

みおりの最後の言葉は、ついに聞けずじまいに終わった。お妙が大きな悲鳴を上げて、みんなの背後を指さしたのだ。

振り返った瞬間、無人だったはずのバスが滑るように、こちらへ向かって進み出すのが目に入った。

土方は激しく舌打ちし、焦げた上着を地面に叩きつけた。

運転席と助手席に、にやにや笑いを浮かべた野原ひろしと野原みさえの顔が見えた。

「へそつー」

携帯を落としてしまったのだ。さつき伏せた時、無意識のうちに放り出してしまったに違いない。せっかく近藤から連絡が来たといつに……。

それにも、どうして突然かかってきたのだらう。そういえば携帯電話を使って近藤たちと連絡するなんて、まるで考へてもみなかつた。大体違う世界同士で電波がつながるなんて考へる方がおかしい。実際向こうの世界からは、ずっと連絡など来なかつたのだ。

土方、ボーちゃん、テルの三人は、春日部山の麓（ふもと）辺りまで逃げてきていた。

幸いさつきの火は、土方の肌に到達するには至らなかつた。しかしあのネネのニセモノは、自在に火を点ける力を持っているのだ。相当用心せねばならないだろう。

春日部山に逃げ込んだのも、そのせいだつた。こんな所で火を起こそうものなら、山火事になりかねない。いくら奴らでもそこまでする度量はあるまい。

しかしあはり、ここでもあまり安穏としているわけにはいかなかつた。

「…つたく、しつこいガキどもが。」

土方はいまいましげに咳いたが、その団はまきらめりと獣のように光つた。ボーチャんとテルに隠れてこらみつ合図し、ゆづくと刀を抜き放つ。

目の前の茂みが、ガサリと揺れた。

いつもは平穏な春日部山の中に、凄まじい殺氣が弾けた。

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる（後書き）

風間くんをつけ狙う敵…………土方にかかってきた近藤からの電話の意味とは？…………状況が複雑になつていく中、次回は大展開を迎える予感！？『うう』期待！！

その拾九・犬つて本当は色分からいんだよ、知つてた？（前書き）

今回は闘いのシーンがメインになります。そういうのが苦手な人は「」注意を（＜—＞）

その拾九・犬つて本当は色分かないんだよ、知つてた？

不自然な揺れ方をした茂みの中から現れた何かをはつきり視認するより速く、斜め右の方向から白い光が走った。

土方の刀がうなり、その光を弾き上げる。キイインという金属音が響きわたった時には、土方の刀はもう弾き上げた勢いを利用して回転し、左から飛びかかってきた襲撃者に斬りつけていた。

（相手が三人に増えたか…）

土方は全く落ち着きを失わずに、一ちらへ迫つてくる敵を見据えていた。さつきからしつこく襲つてきたルビーにイリス、そしてもう一人、ボーちゃんにそつくりな少年もいた。彼の姿を見た途端、土方の後ろで立ち尽くしている本物のボーちゃんの顔が色を失つた。

右側にいるイリスが口を開いた。土方がさつき切り落とした腕は、もう再生している。

「こいつだよ、ギルザ……このクソ野郎がテルとあのガキを助けやがつたんだ。」

その言葉は茂みから現れた、ボーちゃんそつくりの少年に向けられたものだった。ギルザというのは、どうやらこいつの名前らしい。その小さな目はぎらぎらと光り、凄まじいまでの悪意と殺意を秘めていた。

息づまるような沈黙がその場に満ち
りつと/orするのを感じた。

土方は突然、うなじがぴ

ボーちゃんとテルを突き飛ばし、土方は一セモノ三人から大きく飛びすつて離れた。間一髪、さつきまで土方のいた所の地面に、ギルザの刃状化した鼻水が食い込んでいた。

三人が、無言のまま間合いをつめてくる。その間にもギルザの鼻水が飛んでき、土方は刀が刃こぼれしないよう気をつかいながら、それを跳ね上げた。

しかし、ギルザばかり相手にしているわけにもいかなかつた。イスの右腕がみるみるうちに変形し、大きな槍の形になるのを土方は見た。横から絶妙のタイミングで突き出されてくる鋭い先端を、なるべく最小の動きでよけていく。油断した時か疲れた瞬間が、土方の最期だつた。

土方は後ろに下がろうとして、突き飛ばされたまま地面に倒れているボーちゃんにつまずき、仰向けに転びそうになつた。慌てて体勢を立て直したが、大きな隙ができ、間髪入れず突き込まれた槍をからうじてかわした。しかしその結果ボーちゃんをまたぎ越えることになり、ボーちゃんは敵と土方の間に挟まれてしまつた。

(まづい!)

さすがの土方もあせつた。ボーちゃんは混乱と恐怖に捕らわれて動けないらしく、土方に突き飛ばされた時のままの格好でじつとして

いる。ギルザの鼻水がイリスの槍で一突きされたら、それで終わりだ。

一瞬、時間が凍りついたかのようだつた…………しかし次の瞬間、イリスはボーちゃんの上から身を乗り出すよつにして、やはり土方めがけて槍を突き出してきた。

土方ははつと気づいた。ニセモノたちには、春日部の住民を傷つけるつもりはないのだ とりあえず、今のところは。しかし春日部市民でない自分は、ただの邪魔者でしかない。

心に生まれた可能性に、土方は全てをかけることに決めた。

土方はボーちゃんを守ろうとするのをやめ、ギルザめがけて飛びかかつた。予想外の動きに不意をつかれ、ギルザは身体を思い切りのけぞらせたが、刀が額を深く切り裂くのをふせぐことはできなかつた。流れ出してきた紫色の血が目に入り込み、ギルザはうめいて動きを止めた。土方はそのまま刀をふるい、イリスの肩に斬りつけてひるませると、左側にいるルビーに襲いかかつた。

しかし、ルビーはさすがに油断していなかつた。驚くほど素早く、

しかも最小限の動きで刃風をかわし、そのまま土方のふところに飛び込んだ。

ふところに入られてしまうと、特に相手の背丈が小さい場合は、刀が使いにくくなる。土方は焼けるような熱さと痛みが、胸の下から腹に走るのを感じて歯を食いしばつた。

だがここで、さすがのルビーも警戒を緩めた。自分の手に炎の熱をこめて相手に斬りつける攻撃は強烈で、並の人間なら実際には大した怪我ではなくても激痛のあまり氣絶してしまうほどのものだ。だから相手が反撃してくるはずなど、もうないのだった。

しかし、彼女は間違っていた。土方が並の人間ではないことを、失念していたのだ。……攻撃を受けることを覚悟した瞬間にもう、土方は反撃の準備にかかっていたのである。

土方は激痛をこらえて、刀の柄^{つか}を両手で握りしめまっすぐに振り上げた。そしてちょうど顔を上げたルビーの額めがけて、柄の先端 石突^{いしづき}を全力をこめて振り下ろした。

ルビーはぎくりとして首をひねった。が、よけられなかつた。眉間^{みけん}の少し上を石突に強打されて、あつという間に目の前が真つ暗になつた。土方はルビーが倒れるのを見もせずに身をひるがえし、今度は顔を覆っているギルザの脳天を石突で殴りつけた。そして、一人残つたイリスに向き直つた。

イリスは呆然としていた。いくら強い男でも、自分たち三人でかかればあつさり殺せるだろうと思い込んでいたのだ。ことにルビーが氣絶させられた時には、思わず自分の目を疑つた。イリスもギルザも高い身体能力を誇つていたが、ルビーにはとてもかなわない。彼の知る限り、ルビーを敗北せしめることができる者はリンドトリ

オルしかいなかつた。

しかも自分たちは子供の姿をしているのだ。普通の大人なら、とても子供相手に本気で打ちかかっていくことなどできまい。それに斬られたといふのにほとんどひるむことなく、すぐに攻撃へ移つたといふのも信じがたいことだつた。 それができるということは、この男がいかに強い精神力の持ち主かということ、そしていかに命のやりとりに慣れているかということを示していた。

しかし、こいつは傷を負つてゐる。ルビーが斬つた傷はそれほど深くはないようだが、かなり出血してゐるし、痛みも相当あるはずだ……。イリスはそう考へると氣が樂になり、槍を構えよつとした。

ところが次の瞬間、土方は傷を負つてゐるとは思えないほどの速さで走り出し、森の中へと飛び込んでしまつた。

「あつ……おい、待て！」

相手の意外な行動に驚き、イリスが後を追おうとした。途端、すぐそばの木の陰から、土方が刀を振り上げて飛び出してきた。不意をつかれたイリスは、槍を突き出すのが一瞬遅れた。その隙を見逃さず、土方の刀が振り下ろされた。紫の血がしぶき、イリスの槍が真つ二つに斬り割られた。

目を見開いたイリスの右肩に、土方は刀を勢いよく突き刺した。イリスはうめき声を上げ、突き飛ばされたように仰向けに倒れた。刺さつた刀を、土方がイリスの胸を踏みつけながら引き抜いた。

もう、イリスにも動く気力は残っていなかつた。 身体中から力が抜け、ゆっくりと視界が闇に呑まれていった……。

土方は激しくあえぎながら、その場に立つていた。

本当は、ここまでするつもりはなかつたのだ。いくら鬼の副長と呼ばれていようと、子供を平気で傷つけられるわけがない。特にネネにそつくりな少女を殴り倒した時には、傷と無関係の痛みを心に感じた。

しかし手加減する余裕がなかつたのだ。いずれも気を抜いたら殺される相手ばかりだし、実際ルビーに斬られた時は本気で死ぬかと思った。少し身を引いたおかげで、幸い傷はルビーが狙つていたほどには深くないようだ。

「だ……大、丈、夫？」

背後で不安そうな声がしたので振り返ると、本物のボーちゃんが青ざめた顔をこわばらせて立っていた。

「……ああ。お前は、どうだ？」

ボーちゃんは突き飛ばされて倒れた時に、膝をすりむいただけだったので、大丈夫だと答えた。そして、困った顔をして言つた。

「テルが……いなく、なつちゃつた。」「は？」

見回すと、確かに白い毛に空色の瞳をした犬の姿がない。さっきの戦いに怯えて、どこかに行つてしまつたのだろうか。どつちにしり彼を探しに行くのは、今の土方には無理だった。

「まあいい。あいつはほつとけ……わたりと行くべ。」

「ボ……ボニ?」

「山の中だ。決まつてゐだる。」

土方は傷がズキズキ痛むことも、流れ出る血が足を伝い落ちていくことも無視して、戸惑うボーちゃんの手を引っ張り、森の中へと消えていった。

「逃げろー。」

銀時の怒鳴り声で、全員はつと我に返り、一斉に逃げ出した。

さもなくばみんなバスにはね飛ばされていただろう。しんのすけがさすがにびっくりした顔をして、バスを振り返った。

「母ちゃんと父ちゃんが乗つてるゾー！でも、何で…………！？」

「一セモノだよー。」

トオルは簡潔に説明すると、しんのすけの腕をつかんでぐるばの狭い道へ逃げ込もうとした。

しかし不運なことに、バスは一人のいる方向へやつてきた。

ひかれるー。

トオルはしごれるような恐怖を感じた。必死に走ろうとするが、どう考へても追いつかれそうだ。が、その時、思わぬ救世主が現れた。

トオルは突然、後ろの襟首をつかまれて宙に持ち上げられるのを感じた。びっくりする間もないうちに、トオルを持ち上げた誰かはすごいスピードで突進し、目指していた路地の中にさつと飛び込んだ。

まさに間一髪。ちょうど地面に下ろされた瞬間、トオルはバスが壠に激突したような音を耳にした。

トオルは自分の命の恩人を見るため、くるりと振り返った。

「定春ー。」

巨大な白犬が、嬉しそうにトオルを見下ろしている。すぐ横でうめき声がしたので見ると、しんのすけがなぜか、ひどくみじめな姿で地面に転がっていた。

「オラ、風間くんにいっぱい引きずられて痛かったゾ……」

その言葉でトオルは事情を理解した。トオルはずつとしんのすけの

腕をつかみっぱなしだったのだ。そしてトオルが定春にくわえ上げられ、路地に運ばれた時もずっとつかまれていたので、結果的に地面を引きずりれることになつたわけであった。

悪いとは思つたが、トオルは吹き出しそうになつた。

「ええと……とにかく、ここは狭いからもうバスは来ないよね。何とか普通の顔を取り繕いながら、トオルは言つた。
「そうですね。……ところでこの犬、何でこんなに大きいの？」
「でもいつ敵が来るか分からぬしさ。早くどこかに隠れようよ。」
トオルは慌てて話題を変えた。

辺りを見回してみたが、自分たち意外の人影は見当たらなかつた。どうやら銀時たちとはばぐれてしまつたらしい。彼らもどこかの路地へ逃げ込めたのだろうか。

「それじゃしんのすけ、定春を連れて……定春……どこに行くの？」

定春はもう歩き始めていた。鼻を地面にくつつかんばかりに寄せ、くんくんと動かしている。しんのすけとトオルは顔を見合せた。

「匂いかいでるみたいだゾ。」
「そうだね……ついてつてみようよ。」
「オラと風間くんの、愛の逃避行ね~」
「気持ち悪い」と言つた。意味も知らないくせに……」

二人は定春の巨大な尻にぴたりくっつく形で歩き始めた。定春は明らかに何かの匂いをたどっているらしく、迷うことなく進んでいく。時には定春には狭すぎるんじゃないかと思うくらい細い路地を、何とか通り抜けたこともあった。

そのうちトオルは、何だかえらく見覚えのある家々が立ち並んでいるのに気がついた。

「お？なんかここ、来たことがあるようなないような……」「しんのすけも同じ気持ちらしい。不思議そうに周りをきょきょく眺め回している。

やがて定春は、一軒の家の裏手にある生け垣の前で止まった。

「オラん家だゾ……」

この時ばかりはしんのすけも呆気にとられたらしい。それ意外何も言わずに、自分の家と定春とを交互に見比べている。

しかし定春の奇行は、そこで終わりではなかった。

「定春！？」

トオルは仰天して叫んだ。定春が突然後ろ脚で立ち上がり、生け垣のてっぺんに前足をかけて寄りかかつたのである。見た目から分かるように、定春の体重は相当重い。そしてその重みをもろに受けた生け垣は、当然のことく

メリメリメリ…バキッ。

何とも不吉な音が辺りに響いた。

そして最後にドシン！と地響きを立てて、根本から折れた生け垣が、ごつそりと内側に倒れた。

トオルは定春の予想外の行動に、開いた口がふさがらなくなつた。

「母ちゃんに怒られる！」

しんのすけはまるで場違いなことを叫んだ。

そんな一人にかまわず、定春は倒れた生け垣をぐいっと前足で押しやつた。

「あつ！」

今度はトオルとしんのすけが、同時に声を上げた。ちょうど生け垣が生えていた所の地面に、大きな穴が開いていたのだ。人が五人ぐらい入り込めそうな穴だ。

「…………しんのすけ、お前こんな所に秘密基地でも作つたの？」

「オラ知らないゾ。」

しんのすけも啞然としている。こんなところに大穴が隠されているなんて、まるで氣づきもしなかつたのだ。

定春は穴に顔を寄せてしきりに匂いをかいでいるよつだつた。と、不意に身を躍らせ、穴の中に飛び込んだ。

「定春、ダメツ！」

トオルが慌てて駆け寄つて、定春の尻尾にしがみついたが……。

彼一人で引き止めるには、定春はあまりにもでつか過ぎた。しかもさらに不運なことに、定春が飛び込んだ穴には 底がなかつた。

落ち始める瞬間、ズボンを誰かにつかまれたような氣がしたが、それも一瞬だつた。

トオルは定春の尻尾をつかんだまま、落下していった。暗闇の中を、下へ下へと……。

(ダメか……)

土方は、立ち止った。隣にいるボーチャんが、心配そうにこちらを見上げた。

時折気が遠くなる。歩いている自分の身体が、まるで別人のもののように感じられた。このまま無理して動き続けたら、一分もしないうちに倒れてしまうだろう。腹の焼けつくような痛みも鈍くなり、自分の感覚神経が麻痺しつつあるのが分かった。

土方は手近な木の根本に腰かけ、ボーちゃんをすぐ隣に座らせた。いつもの習慣で、ポケットから煙草とライターを取り出す。

「ガキ、よく聞け。……お前、ちゃんと歩けるな？」

ボーちゃんはうなずいた。

「俺がいなくても、帰り道は分かるだろうな？」

ボーちゃんはやや不安げに土方を見つめたが、やがてためらいがちに首を縦に振った。

「じゃあ、すぐに山を降りて春日部に戻れ。そして幼稚園に行くんだ。それに、あの銀髪野郎がいる。チャイナ服の小娘もいるかも知れねえ。とにかく、俺をここに置いてすぐに山を降りるんだ。

」

ボーちゃんが真っ青になつて首を激しく振るのを無視し、土方は言葉を続けた。煙草を持つ指が、頬りなく震える。

「いいか、なるべく木陰や茂みの中を選んで移動しろよ。あいつらがもう目を覚ましているかも知れねえからな。もし見つかったら、とにかく全速力で逃げろ。お前を傷つける気はないはず、だが、

ら……」

そこで限界が来た。土方は崩れ落ちるよつて倒れ、氣を失つた。口にくわえようとしていた煙草がぽとつと地面に落ち、その拍子に火も消えた。

ボーちゃんは泣きそうに顔を歪めて、しばらく土方を揺らぶついたが、やがてその場につづくまつてしまつた。

土方を置いて山を下る氣には、到底なれなかつた。敵がやつてきたら、きっと土方はあつさり殺されてしまつ。ボーちゃんは自分を助けてくれた人をむざむざ見殺しにできるような性格ではなかつた。

しかしだからといって、土方を連れて山を下りることは、子供のボーカちゃんには十分無理な話だった。ここにじっとしていても、いつか敵に見つけられるかも知れない。

ボーカちゃんは完全に途方に暮れてしまった。

「キヤンシ。」

すぐ後ろで犬の鳴き声がした。

ボーカちゃんは文字通り飛び上がり、ぐるりと振り返った。白いふわふわの毛の小さな犬が、じつとこちらを見上げている。テルかと思つたが、よく見ると皿は空色でなく黒だった。

「シ、ロ……？」

半信半疑で問いかけると、白犬　　シロは嬉しそうにボーカちゃんの脚に身をすり寄せ、そして少し離れた所にある茂みの前に立つてこちらを振り返つた。

ボーカちゃんが立ち上がりつて近づくと、シロは茂みと茂みの間に身体を滑り込ませた。ボーカちゃんが同じように通り抜けるとそこへ、シロがさつきと同じ姿勢で立つていた。

これと同じようなことが繰り返し続いた。シロは少し先に立つて歩

き、時折立ち止まって振り向いては、ボーちゃんがついてきていることを確かめた。ボーちゃんはシロの後を追うのに一生懸命で、これが罷かも知れないなどとはこれっぽちも考えなかつた。

気がつくと、ボーちゃんは山の頂上にかなり近いところまで上つてしまっていた。

しかしシロは、頂上まで後數十メートルというところで突然向きを変え、木々の間に入り込んだ。ボーちゃんもそれを追つて中に入つたと、突然、横から右腕をつかまれた。

ボーちゃんは心臓が止まるかと思つた。しかしその時の驚きは、自分の腕をつかんだ者の顔を見た瞬間の気持ちに比べれば何でもなかつた。

野原しんのすけの顔が、目の前にあつた。

しかしその顔は、しんのすけのものとは思えないほど真剣で、緊張していた。声も出ないボーちゃんをじっと見つめながら、しんのすけもまた無言で手を離し、すっと森の奥の方を指さした。つられてそちらを見たボーちゃんは、息を呑んだ。

薄暗い木々の間に、明かりが見える。それだけでなく、話し声もある。

何も言わず、何も考えもしないつむじ、ボーちゃんの足は明かりに向かつて歩き出していた。

その拾九・犬つて本当は色分からいんだよ、知つてた？（後書き）

ふと確認してみると、ユニークアクセスが5000を突破してました！超感謝です！これからも応援よろしくお願いしますm(ーー)m感想も待つてますね！

その武拾・落卜する嘘は時間がゆりへり感じられないこと（前書き）

定春と共に、野原家の大穴へと落ちてしまった風間くん、そして銀
さんたちの行く末は？読み終わったらぜひひぜひ感想をお寄せ下さい
！－同じ人からのも歓迎します（*^-^*）

「あの武拾・落^{ハシ}下^{ハシ}する時^は時間がゆうべつ感じひのむけ

『』とも分からぬ薄闇の中^で、密やかな話^シ声^がして^{いた}。

「本当にすみません、助けていたいたりして……」

「いやいや、お礼などいりませんよ。あなたたちが無事で、本当によかったです。」

「それにしても、あの噂^がまさか本当だなんて……ねえ、あなた？」

「ああ。もし^{この}人たちが来て^{くれ}なかつたら、どうなつて^{いた}か
……そ^{うだ}、それはそ^うと、あんたたちは一体誰^{なん}です？」

「えつ？……あ、ああ、それはそ^の……おや、若^{わか}、どうなつた
のですか？」

「この赤ん坊^が……どうし^{ても}、僕から離^{れない}んだ……」

「たやーい！」

「あらひ、すみません！その子、かつ^こいい男の人に目^がないんで
すよ。」

「さすが麗^{うる}しき若[、]赤ん坊^{をも}とつこにな^つてしまつとは、なん
と素晴らしい魅力^{……}」

「お世辞^はいいから、早く^{この}手^を引き離^{して}くれー……ん？」

「どうしました？」

「上から……何か……落ちてくる……！」

「つおおつー何だあのでかいの！？」

「若あああアアア！危なあアアい！！」

何時間もの時が過ぎたような気がした。

トオルはまだ両手に、定春のふさふさした尻尾の感触をしつかり感じていた。自分の服をつかんでいる、しんのすけの手にこもった力も。

最初は悲鳴とも歓声ともつかない変な大声を出しまくっていたしんのすけだったが、そのうちトオルと同じように落ち着いてきたのか、それとも叫び疲れてしまったのか、もう何も言わなくなっていた。

既に相当下まで落ちてきているらしく、空気がかなりひんやりしてきた。頬をなでる風が冷たい。手がかじかんてきて、トオルは定春の尻尾をうつかり離してしまった。いつの間にか、しんのすけの手も服から離れていた。

そろそろ地球の中心に着いちゃうんじゃないかとトオルが思い始めたちょうどその時、落下の旅は唐突に終わった。

ドフッと鈍い音を立てて、トオルは何か柔らかい毛に覆われたもののに落ちた。自分が着地したのが定春の身体の上だということに気づいた瞬間、少し遅れてしんのすけがすぐ横に落ちてきた。

トオルは急いでしんのすけを引っ張り、定春の上から飛び降りたが、これだけの深さを落ちた上に一人の子供に着地されたというのに定春のタフさは大したもので、ほんの五秒もたたないうちに平然と起き上がってきた。トオルは反射的に辺りを見回した。

「…………ここ、誰か人が住んでるみたいだ。」

トオルは思わず呟いた。自分たちが落ちた所は暗いことは暗かつたが、真っ暗と言うほどではない。トオルの部屋より少し大きめで、天井にはついさっき落ちてきたらしい大穴が開いている。そこから空気が入ってくるからか、穴の中は少しもじめじめしていなかつた。人が住んでいる、あるいは住んでいたのは、どう見ても明らかだつた。穴の壁に寄せるようにして、布団が数枚、きちんとたたまれて置かれている。日本風の小さなタンスや物入れもある。そしてなんと、床には畳が敷きつめられていた。

「お? これ、何?」

しんのすけが、壁のくぼみの中から光が漏れているのをざとく見

つけ、手を突つ込んで中身を取り出した。質問しながら、取り出したものをトオルの鼻先に突きつける。

「ああ、それは提灯かづかねだよ。お祭りとかでよく見るだろ。… そつか、中が少し明るいのはこれのおかげ……」

トオルの言葉は、結局最後まで言えずじまいに終わった。隅の方から、突如大きな叫び声が響いてきたのだ。二人がぎょっとして向き直る間もないうちに、声のした方から黒い影がさつと飛び出してきた。

そして思いつきり、しんのすけを抱きしめた。

「やめろー！」

トオルが呆気にとられて見てくる前で、しんのすけはもがきながら叫んだ。そして。

「母ちゃんー？」

野原みさえが、息子の身体をしつかりと羽交い締めに抱きしめていた。

「しんのすけ！ 一体…………一体どうやつてこいに来たのー？ 心配で心配で仕方がなかつた…………それに、どうして風間くんが一緒になの

？あの…あの大きいのは、何？」

「みさえ、しんのすけが窒息しちまうぞ。」

今度は別の隅っこから、男の声がした。トオルが振り返ると、しんのすけの父・ひろしが苦笑を浮かべて近づいてくるところだった。ひろしもやっぱり、定春の巨大な姿にびっくりしていた。

「一体全体、こいつは何なんだ？」

ひろしは定春を指さしながら、トオルに尋ねた。定春はそ知らぬ顔をして、畳の上に寝そべっている。

「あー……」

トオルが返答につまつたその時　　またもや別の声がかかった。

「ああ、それって新八くんやあの銀髪の男が飼っている犬じやないか？」

「僕……えつ？」

トオルは自分が何を言おうとしたのか忘れてしまった。いつの間にかすぐそばに、二つの人影が現れていた。

一人は茶色の長髪を垂らした男で、細い目をした、見るからにもの柔らかそうな風貌の人物だった。髪は長いが、その顔立ちや雰囲気からトオルは、この人は男だろう、と直感的に悟った。

もう一人も長髪だつたが色は黒で、頭の上でポニー・テールのように一つにまとめている。形よく整つた顔をしていたが、まさ。

その左目には、黒い眼帯をしていた。

トオルは田の前の人々が誰なのかを悟り、愕然とした。
か、銀さんたちだけじゃなく……この人たちまでが？

「と、とうじょう 東城さん？」

考えるより先に口から転がり出てきた言葉は、自分の声とは思えな
いくらいにかすれ、驚きでうわすつていた。

「九兵衛さん！？」

沖田はむづづいぶん長い間、闇の中にいた。意識が朦朧もうろうとして、深い海の中で沈んだり、浮かび上がったりして、いるような気がする。どこかへ運ばれていつたり、腹に激痛が走つてわめいた記憶もあつた。

何回かに眠りの中へ沈んだ時、沖田は夢を見た。

夢の中で、沖田は子供に戻つていた。まだ近藤や、土方と出会つたばかりだったあの頃に。

子供の沖田は畳の上に寝転がっていた。何だか全身がだるくて、起き上がる気になれない。ぼーっと天井を見るともなしに見つめているうちに、どこからか足音が聞こえてくるのを感じた。足音が、すぐそばで止まつた。

「モーちゃん……」

（ああ……姉上の声だ……）

いつでも優しく、親代わりになつて自分を育ててくれた姉・ミツバのことを、沖田は懐かしく思い起こした。ミツバはもう肺炎で亡く

なっているのに、沖田は彼女の声を耳にしても、なぜか全く不思議に思わなかつた。

「そーちゃん…起きて……」

声が近づくと共に、姉が自分のすぐ横に座る気配を沖田は感じた。

「ほり、起きて、そーちゃん。ほり、早く…」

肩に手が置かれ、ゆっくりと優しく身体をさすつた。ただなぜか、その手は恐ろしく冷え切つっていた。

それを感じた次の瞬間、沖田はまた目の前の光景が闇に包まれいくのを感じた。

「じーばらくで初めてはつきりと目覚めた時、沖田は自分が今どうしてここにいるのかはもちろん、この世界に来てからのことすらも全く覚えていなかつた。

目を開くと、まず天井が見えた。どうやらさつきの夢の中と同じような体勢で眠つてゐるらしい。ただ夢の時とは違い、天井は味も素

つ氣もない金属張りだった。

無意識に寝返りを打つと、天井と同じ金属質の単純な壁と、そこに寄りかかって座り込み、うつらうつら居眠りをしている若い男の姿が目に入った。

「…………や、まだや？」

思わず声をかけると、男がはつと目を覚ました。

「あ、お田覚めですか、沖田隊長。」

「…………俺、また土方にやられたのか？」

山崎は少し心配そうな顔になつた。

「隊長、大丈夫ですか？怪我のせいで記憶が混乱してるんですよ、きっと。ほり、よく思い出しても下かい…………」

山崎が言い終わらないうちに、青白い少女の顔が現れ、沖田の顔を覗き込んだ。

「…………ネネ…か？」

ネネの顔を見た途端、これまでの記憶がいつぺんにどつと蘇つてきた。沖田はがばと跳ね起きた。

「やべー！ そうだ、俺ア 確か、トオルにそつくりな奴にやられて……姉さんと新ハはどこ行つた？ それに山崎、お前なんでこいこい……」

一気にまくしたてた沖田を、山崎は慌てて片手を上げて制した。
「待つて、待つて下をいよ、隊長。そんなに急に起き上がつたら、
また腹が痛みますから。」

言われて初めて、沖田は下腹部に鈍い痛みが走るのに気づいた。起きていると痛みが増すらしく、沖田はうめき声を上げてまた倒れ込んだ。沖田は薄っぺらい布団の上に横たえられていた。

「 ここは? 」

しばらく黙り込んだ後、沖田は突如ぶつきあがつて尋ねた。

「 敵の、アジトです。」

山崎が、とても言いにくそうに告げた。沖田はまたしても起き上がりそうになつたが、腹が痛いのでやめた。

「 敵の じゃ、お前ら捕まつたつことか? 」

「 はあ 申し訳あつません。 」

山崎がますます言いづらそうな口調になつた。まるで〇点を取つたことを母親に報告する子供みたいだった。

「 じや マサオは? それに、田那は 」

「 銀髪の田那も、マサオくんも捕まつちいました。今は隣か、そのまた隣の部屋にいるみたいですが あ、やつこえは隊長。 」

山崎の口調が、急に真剣になつた。

「さつや、風間トオルくんにそつくりな奴にやられたって言つてしま
したけど……それ、やっぱり本当なんですか？」

「は？」

沖田は顔をしかめて山崎を見た。しかし山崎は、なぜかそのことを
ひどく重要に考へてゐるらしく、もう一度同じことを尋ねてきた。

「トオルくんにそつくりな子供に襲われたんですね？」

「あア……やつだ。」

沖田はさつやよつもつと顔をしかめ、渋々ながら答えた。されば
あの時のことを、思ひ出しきくなかったのだ。

「やつですか……」

山崎は、なぜか微妙に青い顔をしていた。

「俺たちも、トオルくんにそつくりな男の子にやられて、みんな捕
まつたんですよ。」

「…………へ？」

今度は腹の痛みも構わずに、沖田は身を起こした。

「マジでか？」

「はい……あの田那ですから、まるで歯が立ちませんでした。」

「チャイナ娘も？」

「ダメでした。何しろ速すぎるとですよ。俺だって、身構えようと
した途端に田の前が真っ暗になつりました。何が起こったの

が、やっぱり分からぬいうちに……」「

「ふーん……じゃア結局、俺たち全員捕まつちまつたわけかい。」

「違うわ。」

その時、沖田が目覚めて以来初めて、ネネが口をきいた。山崎と沖田の一人に視線を向けられるとネネは真っ赤になつたが、それでも言葉を続けた。

「ううん、そうじゃないわ。 shinちゃんと風間くんと、あのおつきな白い犬だけが見つかってないつて、マサオくんが マサオくんのニセモノが言つてたもの。」

「マサオのそつくり人間が？」

沖田が尋ねたが、山崎は別のところに強い関心を示した。

「ああ、そういえばあのトオルくんのそつくり人間、トオルくんが見つからないからすゞく不機嫌そうな顔してたな。これじゃ僕らを捕まえた意味がないとか言つてたし……あれつ？」

山崎はふと眉をひそめた。

「そういうやお妙さんも、あいつが同じようなことを言つてたつて……」

沖田は全くその部分に興味を持つていなかつた。

「マサオのそつくり人間がいたのか？」
また同じ質問を繰り返した。

「うん……ボーちゃんのそつくりさんもいたわ。 あつ、そういうえば一人とも、すごく怖がつてゐみたいだつた。誰かを逃がしたから怒られるとか、あたしたちを連れて行く間ずっとしゃべつてた

他の一人がこの話について論じることはない、とうとうなかつた。ちょうどその時彼らのいた部屋の扉がスーと開き（扉は壁と同じ色と質で、ほとんど違いが分からなかつた）、ネネの残りの言葉が悲鳴に呑み込まれてしまつたからだ。

さて、マサオと全く同じ姿をした少年が立つていた。

沖田にも、彼が本物のマサオでないことはすぐに分かつた。見た目は瓜一つなのに、何かが明らかに違う。目に見る鋭い光のせいかも知れない。怒ったような険しい表情をしているせいかも知れない。とにかく、言葉で表しようのない何かが違うのだ。

しばらくの間、誰も一言もしゃべらなかつた。

五分ぐらい経つたかと思われた時、マサオの二セモノが口を開いた。

「…つこつこ。今すぐだ。

お前ら全員を、リオル様の所へ

連れて行く。」

トオルは自分の目が信じられず、しばし啞然として立ちつくしていた。

名前を呼ばれた二人は、びっくりして顔を見合せた　　が、ほんの一瞬のことだった。すぐに黒髪に眼帯の若者がちょっと笑顔になつて、トオルの肩に手を置いた。

「どうか、君が風間トオルなんだね？」

トオルの名前を、もう知っている。

「君が妙ちゃんたちを家に住まわせてくれてたんだね？どうもあり

がとう。礼を言つよ。」

トオルは一瞬焦つて、しんのすけたちの方を振り向いた。彼らに不審に思われたらどうしようと思ったのだ。しかし野原一家は感動の（？）再会中で、トオルと九兵衛との会話にまるで注意を払っていないかった。

「あの、どうして……」

言いかけたトオルを、九兵衛は右手をさつと上げて制した。

「しつ。今はのんきに話している場合じゃない。ここは我が柳生家に隠された、敵襲の時用の地下室の一つなんだが、うまいこと君たちのいる世界に繋げてもらつたんだ……でも、説明は後にしよう。東城、急いで彼らの所へ行くぞ。」

「はつ。」

東城が、壁に立てかけられた戸棚の一つに手をかけた。何をするんだろうと見ていると、戸棚がスッと滑るようにして横へずれて、ぽつかりと大きな穴が口を開けたのだ。

ぽかんとしているトオルたちに向かつて、東城がせかすよつと言つた。

「さあ、早く」ひりへ。」

「急いでくれ……」

特に、君はね。」

わけの分からぬままに、トオルは九兵衛に手をつかまれ、壁の穴の中へと入つていった。

その武拾・落とする時は時間がゆっく感じられない（後書き）

さあて、銀さんたちも捕まつてしまつたようで、大変なことになつて参りました。おまけに風間くんたちの前に九兵衛たちが突如現れ……。九兵衛を知らない人は、銀魂を読むなりして下さい。ともかくコイイ人です 次回もお楽しみに！

その武拾壱・大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時ってある

銀時たちは捕まってしまったものの、しんのすけ・風間くん・定春は無事だった。更になぜか九兵衛と東城が現れて……。大展開の予感！？

その武拾壱・大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時ってある

沖田・山崎・ネネの三人が入れられたのは、これまでいた狭い部屋ではなく広々としたホールのような所だつたが、金属質で無味殺伐とした雰囲気は変わつていなかつた。

そして中には、人が大勢詰め込まれていた。

ネネはすぐさま、知つてゐる顔をいくつか見つけた。マサオは青ざめた顔をして、何かにしがみついているかのようにぎゅっと拳を握りしめている。まつざか先生はまるで寒さを我慢しているかのように、両腕を組んで自分の身体をきつく抱きしめていた。そのそばにはよしなが先生の白い顔も見える。さらに後ろの方に母親や父親の姿が見えることに気づいて、ネネは心が躍つた。

しかし、すぐにその気持ちは失せてしまつた。部屋の隅の方に寄せられるようにして、薄つぺらい布団とでも言つべきものがいくつか敷かれており、その上に人が寝かされていたのだ。全員青ざめた顔で、堅く目を閉じてゐる。氣絶してゐるらしい。

ひくりともしない新八の手を握りしめ、彼の枕元にうずくまつたお妙が泣きじやくつていた。神楽もいる。ただでさえ透き通るように白い肌からますます血の氣が失せていたが、それでも愛用の傘はしつかりと握りしめていた。銀時は普通に眠つてゐるようだつたが、その髪の毛と同じような顔色だつた。

「し、新、ちゃん……」

大勢の人々が集まつてゐるといふのにほとんど誰も口をきかない中、

お妙の震える声だけが聞こえていた。

「新ちゃん……」

突然、沖田たちの真正面にあつた大きな扉が開き、誰かが入つてきた。

人々が怯えた様子でざわざわした。入つてきたのはマサオ・ボーチ
やん・トオルとそつくり同じ姿をした三人組だつた。

マサオとボーチのそつくり人間の方は、怒つてているというよりも怖がつてているような表情をしている。しかもその目が時折ちらちらともう一人の連れの方へ向けられていることに、山崎は気づいた。トオルのそつくり人間は落ち着いているようで、むしろ涼しげな顔をしていたが、その目にある冷たい光には、背筋をヒヤッとさせるものがあった。

かなり後ろの方で鋭く息を呑む音がした。振り返ると、一人の女性

が床にへたり込み、真っ白な顔でトオルのそつくり人間を見つめている。トオルの母親だ、とすぐに分かった。

トオルの二セモノはつかつかと入ってくると、固まっている人々をぐるっと眺め回した。そしてふふっと笑い、後ろに立っている二セモノ二人を振り返った。

「で？ 春日部にいた人たちはこれで全部なの？」

マサオとボーちゃんそつくりの二人は、本物のマサオと同じくらい青い顔になつて、おまけに冷や汗を浮かべていた。

「どうなのさ、イリス、ギルザ。」

名前を呼ばれて、二人はびくつとすくみ上がった。静かな口調で話しかけられているのに、まるで怒鳴りつけられたかのように見える。

「……す、すみません……。」

沈黙の後、口を開いたのはマサオの二セモノの方だった。

「風間トオルと……野原しんのすけが、あの……」

「ああ、それは言わなくていいよ、知ってるから。」

トオルの二セモノが事もなげに遮つた。

「だつてあいつの友達をほとんど捕まえたのは、結局みーんな僕だつたしね。僕が知りたいのは、別の人のことだよ。」

「べ、別の……？」

ボーちゃんの二セモノが、この部屋に入つて以来初めて口をきいた。

「ほ、他の、人は、全員、……」

「へえ、捕まえたの？」トオルのそつくり人間のしゃべり方に、面白がっているような調子が混じった。

「じゃ、土方十四郎はどうにいるんだい？」

沖田と山崎は顔を見合させた。ネネも、マサオも、まつざか先生までがびっくりした顔になつて辺りを見回した。そう言われてみれば、しんのすけとトオルだけでなく土方の姿もない。今日は幼稚園を休むということだつたが、考えてみると、どうして休むのか理由を聞かされていなかつた。

それにボーちゃんの姿も見えないことに、ネネとマサオは今更ながら気づいた。彼は二セモノに一ヶ月近く前から替わられていたとう。それなら当然、ここにいなければならぬはずなのに……。

土方の名前を聞いた途端、さあつと血が引いていく音が聞こえるくらいの勢いで、イリスとギルザの顔から色が消えていった。

「そ、それは、そ、その……」

「逃がしちゃつたんだ、その人も。」

軽い調子でそう言つて、トオルのそつくり人間は一人に向き直つた。

「しかもさ、ギルザ。」

と、ボーちゃんのそつくりさんの方を向いて、

「その土方つて人は、監禁されていた本物のボーちゃんとテルを連れてたつて聞いたよ。本物はまあいいとして、テルを逃がしたのは

かなりやばいと思つけど?」

「そんなことまで…」

「僕は耳がいいからね。」

トオルの「セモノはにつけりした。

「本当なら、すぐここにで君たちを始末しちゃつてもいいんだけどね。」

「

山崎は冷たい指で、背中をなでられたような気がした。笑いながら言つてゐるが、余計に恐ろしいのだ。

「ま、もう一回だけチャンスをあげてもいいよ。」

その言葉に、イリスとギルザの二人は即座に反応した。

「ほ、本当ですか!？」

すがりつくような口調だった。

「うん。あ、でももう次はないからね。」

トオルのそつくり人間は素朴に言つた。

「それじゃ、これから一人にやつてほしいことを言わせてもらひよ。

ここから、トオルの居場所を聞き出すんだ。」

トオルの「セモノは、部屋の中で身を寄せ合つてゐる春日部の人々を無造作に指さした。イリスとギルザが驚いたような顔になる。「でも……ここに風間トオルの居場所が、分かるわけないでしょ?」

「バカだなあ、二人共。」

さげすむ様子もなくあつさりと、トオルの二セモノは言った。

「トオルをよく知ってる奴なら、トオルの隠れそうな場所もよく知つてるはずじやないか。」

あ、と二人が納得したような声を上げた。

「でも、いくら問いつめてもしゃべらなかつたらどうするんです?」「何言つてるのさ。無理やりしゃべらせればいいだろ、痛めつけるなりなんなりして。」

明日のお天気の話をしているかのような話し方だった。

「まあそんなことしないに越したことはないけどね、多分。だからなるべく気弱そうな奴を選んだ方がいいと思うよ。例えばほら……

あの子とか。」

トオルの二セモノが指さす先には 青ざめた、マサオの顔があつた。

「着いた、ここだよ。」

トオルは自分の手を握りしめている九兵衛を見上げた。『ここ』と言わても、何がここなのかさっぱり分からぬ。ただ田の前を堅そうな岩壁が通せんぼしているだけだ。隣のしんのすけは、珍しいものでも見るかのように岩壁をしげしげと眺めている。首筋に生暖かい風が吹きつけてくるので振り返つてみたら、定春の鼻息だつた。

「少しお待ちを。」

と言いながら、東城が岩壁の真ん中辺りをコンコンと叩いた。

トオルの口があんぐり開いた。岩壁の真ん中が、ボコンと後ろに抜け、ぽつかりと大きな穴が開いたのだ。普通の家のドアの、三倍近くの大きさがある。

「入れ。」

中から男の太い声がした。九兵衛と東城に続き、野原一家とトオルはおそるおそるといった感じで中に入つていった。

そして、唖然として立ち尽くした。

岩が削れてできた、天然の洞窟のような広々した空間が広がっていた。壁や天井と同じようなむき出しの岩床に「ゴザ」が敷かれ、十数人の人間がその上に座り込んでいる。全員男だ。

トオルたちが入ってきた途端、男たちの視線が一斉にこちらを向いた。トオルは恥ずかしくて顔をうつむけてしまったが、しんのすけは何のためらいもなく近づいていくと、お決まりの自己紹介を始めた。

「よつ！ オラ野原しんのすけ五歳！ 好きなものはチョ「ゴビ」とおねいさんだゾ！」

「こり、しんのすけ！」

みさえが慌て、男たちに謝りながらしんのすけを引き戻した。男たちがざわざわと低い笑い声を上げる。

しかしうつオルは突然あることに気づき、男たちから目が離せなくなつた。

彼らは全員、同じような黒い服を着ていた。刀を持っている者も多い。そしてトオルはさつきから、この格好に見覚えがあるような気がしてならなかつたのだった。

しかし今、やつと思いついた。彼らの服装は、トオルと初めて会つた時の山崎の服装と、そっくり同じなのだ。

「あの……

皆さん、真選組の人たちでしょつか？」

今度も考えるより先に言葉が出てしまった。

「おう、俺らのこと知ってるのか。確かお前だな？うちの副長と一番隊隊長を家に住ませてくれたのは。」

男の一人に話しかけられ、トオルは黙つてうなずいた。どうして相手がそのことを知っているのかは分からぬが、それなら土方が幼稚園の先生になつていて、沖田が酢乙女家で働いて（？）いたことも知つてゐるはずだ。一人にそんな仕事をさせやがつてと怒鳴られるのではないかと、トオルは一瞬身構えた。

しかし男たちはまるで怒る様子もなく、トオルを心から歓迎しているようだつた。それどころか、土方や沖田と一緒に暮らすのはさぞ大変だつただろうと同情されてしまつた。そんなことないですよトオルが答えると、みんなへえっと驚きの声を上げた。

「風間くん……」

後ろで声がしたので振り返ると、しんのすけたち野原一家が困惑の表情を浮かべ、こちらを見つめていた。

トオルはしまつたと思つた。銀時たちがアニメの世界からやつて来

たことはみんなに秘密にしていたのに、それをうつかり忘れてしまつていたのだ。しかしちょうどその時、男たちのうち一人が大声を上げたので、トオルは「うまい」と言い逃れをせずにすんだ。

「おい、近藤さんから連絡が来たぞ！」

「…近藤さん？」

トオルは思わず呟いた。彼は漫画やアニメのおかげで、近藤勲のこともよく知っていた。真選組の局長つまり、土方や沖田のボスだ。

トオルの反応に気づく様子もなく、男は何か無線機のようなものに話しかけ、無線機から聞こえる声に耳をすましている。トオルのいる所からは離れていたので、何と言っているかは分からなかつた。しかし会話の雰囲気は伝わってきた。初めは何かいい知らせでもあつたのか、男も無線機からの声もほつとしたような口調だったが、だんだんと深刻な内容になつてきたらしく、しまいには言い争いの様相を呈してきた。男の声も無線機からの声も次第に大きくなつてきていたので、トオルや野原一家は切れ切れの言葉を耳にすることができた。

「そうするしかないんですよ……俺らには……」
「…ダメだ、危険過ぎる……」

「でもそれ以外にどうじゅうて……」

やがて、決着がついたらしく、男はよつやく無線機から顔を上げた。
「局長がしぶしぶだが、許可してくれた。 風間トオル、野原
しんのすけ、こっちへ来い。」

何だらうと思ひながら、男たちの足につまづかないように歩いていくと、男は一人にさつき自分が使つていたのと同じような無線機を渡した。

「いいか、お前らにやつてもらいたいことがある。……この穴が見えるか？」

男に指さされて初めて、しんのすけたちは入ってきた所と反対側の岩壁に穴が開いているのに気づいた。一つ、地面に接する形で並んでいる。

男が説明した。

「ここはもともと、別の抜け道として敵が利用するつもりだった場所だった。それを俺たちが奪つて、隠れ家に使つことにしたんだ。で、ここに曰くありげな二つの穴がある。明らかにこれは、自然にできたものじゃない。中に何かあるのか、それともどこかに繋がっているのか、とにかく秘密があるのは確かだと思つんだが、何しろ小さ過ぎるんだ。俺たちじやとても通れん。」

トオルは穴を見つめた。なるほど、しんのすけとトオルでさえ少し身を屈めないと入れないくらいの大きさだ。大人が入るのは、どう考へても無理だらう。

「そこでなんだが……」

男が少しだけ、ためらつのような表情を見せた。

「お前、中を探つてきてほしいんだ。」

「何ですって！？」

「そう叫んだのは、みせえだつた。

「冗談じゃないわ、何言つてゐのよー。しんのすけたちを危険な田にあわすつもりなのー！？」

「ああ、局長もやつ言つた。」

男がますます気まずそうな顔になつた。

「でも他に方法がねえんだ！それに片方の穴からは、」

と、男は向かつて左側の穴を指さした。

「女の声が聞こえてきたことも……」

「オラ、そつちに行くゾ。」

『女』と聞いたしんのすけが、すぐさま反応した。みせえとひらしが息を呑んだが、しんのすけはもう無線機を手に、穴の中へ入るつとしていた。

「お、おい、ちょっと待て。」

男も慌ててしんのすけの腕をつかみ、引っ張り戻した。そしてトオルの方を向いた。

「わりイが、ここは一人ずつ行つてもらおうと思つ。近藤さんも一度に一人を相手にするわけにやいかねえからな。」

「ほうほう、じゃ、風間くん、じやんけんで決めるゾ！」

今のは後出しだったとか負けた方が勝ちだとかしんのすけがグダグダ言つたので、なかなか決まらなかつたが、トオルが先に行くことになつた。無線機と懐中電灯を手に、トオルは穴の中に入つていつた。

心臓がバクバクする音が聞こえる。入つてみると、穴の中は意外と広かつた。トオルなら楽に立つて歩ける。でも大人だつたら、四つんばいになつて進まなければならぬだろう。頭をぶつけないよう時に折天井を照らしながら、トオルはそろそろと歩き出した。

そんなに経たないうちに、無線機から声がした。

「風間トオルくんかい？俺は近藤だ。」

トオルはもちろん知つていた。アニメで声は聞いている。しかしこんなことは当然言えないので黙つていると、また近藤が話しかけてきた。

「悪いな、こんなことをさせて。」

「…いえ、大丈夫です。」

真情のこもつた言葉だつた。この人が気難しやの土方や、ドSの沖

田にやえ慕われてゐる理由が、トオルにはよく分かるよつたな気がした。

「いいか。」

近藤がまた言つた。

「何か怪しいもんを見たら、すぐに大声で叫んで逃げる。」

「はい…」

トオルは息苦しくなつてきた。緊張のせいだ。穴の奥へ進むにつれて、空氣はますますひんやりしてきた。

しかしそのうち、トオルは穴の中の空氣が変わり始めたことに気がした。

匂いがするのだ。トオルが今までかいだいとのない、不可解な匂い。しかも、何だか不快感を伴う匂い。

一体何の匂いだらう？

顔をしかめていたトオルはしかし、思つてはいたよりはるかに早く、匂いの正体を見つけた。

突然懐中電灯の光が、行く手をふさぐ岩壁を照らし出した。ここで終わりらしい。何だ、何もなかつたなと思いながら何気なく明かりを下に向けたトオルは、心臓がひっくり返るようなものを見た。

男が一人、倒れていた。奇妙な体つきで、小柄なのに頭が異様に大きかった。何と身体の半分を頭が占めているのだ。白衣を着ており、うつ伏せに倒れているので顔は分からぬ。

「どうした？」

息を呑む音を聞き取つたのか、近藤が鋭く聞いてきた。答えようとしたトオルはしかし、口を開いたまま何も言えなくなつてしまつた。

男の背中に、光るナイフが突き立てあつた。その部分だけ、白衣が黒っぽく染まつている。

男は死んでいた。

その武拾壱・大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時つてある

最後が少しショックングだったかも知れませんね、すみません（謝）。緊迫感が伝わっていただけたなら、幸いです！風間くんが見つけた遺体は誰なのか……それは次回で明らかになります。あ、でももう見当つく方もいらっしゃるかも知れませんね、この小説を始めから読んで下さっていたら。とにかく、お楽しみに！！

その武拾武・カモフラー・ジユウって英語?え、フランス語なの? (前書き)

風間くんが見つけた死体……指名（変な意味じゃないです）され
てしまつたマサオくん……事態はいよいよ深刻さを増していく!
感想待つてます

その武拾弐・カモフラージュって英語?え、フランス語なの?

あまりにも強いショックを受けると、逆に冷静になってしまつ。頭が驚きについていけないから　　といふ話を聞いたことがある。

今のトオルは、まさにその状態だつた。刑事ドラマや推理アニメなどでは、死人の第一発見者は決まって大きな悲鳴を上げているが、トオルは叫ぶどころか、声を出すことすらしなかつた。ただ懐中電灯の光を足下に倒れる死体に向け、妙に冷めたような気持ちで見つめているだけだつた。顔が見えなかつたからか、それとも血がほとんど流れていなかつたからかも知れない。目の前が暗くなるようなこともなかつた。

「どうしたんだ?大丈夫か?」

返事がないので心配になつたのか、近藤が無線機の向こうから、せき込むような口調で話しかけてきた。トオルは今、男のそばに膝をついていた。

「…死体を見つけました。」

自分でも呆れるくらい、平静な声が出た。

「何だと…？」

近藤は明らかに動搖していた。声が裏返っている。

「男の死体か？それとも……」

「はい、男です。」

答えながら、トオルは男をつぶさに観察していた。本当に変わった体型の人だ。それに何だか……肌の色が……。

トオルが死んでいる男の奇妙な体型のことを話すと、にわかに近藤の口調が緊張した。

「頭がでかい？　まさか、肌が青みがかつたりしてないだらうな？」

トオルはびっくりして、手の中の無線機を見つめた。

「何でそんなこと分かつたんですか？」

今度は驚きが声に出た。近藤は、何か考え込んでいるのかしばし黙つていたが、やがて低い声で、ほとんど呟くように言った。

「……で話せるようなことじやない。すぐに外へ戻ってくれ。」

「どうしました？局長。」

「…………」

「局長？」

「…………見つかったらしい。」

「は？」

「魔虞蛇博士だ。殺されている。」

「ええっ！？」

「間違いない。あんな特徴的な容貌を持つやつなど、そういういな
いだろうからな。」

「それにしても…………一体誰に…………」

「そうだな。ま、予想はついているが。」

「それに、奴はどうやって穴の中に入ったんでしょう？」

「俺が一番気にしてるのはそこなんだ。とにかく、トオルくんが戻
つてきたらすぐに保護してくれ。そういうやうすく出でてくるはずだ
が…………」

「まだ足音とかも聞こえませんよ。」

「心配だな。ちょっと連絡してみるか。」

「トオルくん？大丈夫か？」

「…………」

「どうしたんだ。さっきから足音が聞こえないが。」

実を言うと、トオルは死体を見つけた場所からまだ離れていなかつた。男を発見した時と同じように、懐中電灯の光をあちこちへ遊ばせていたら、また大変なものを発見してしまったのである。

通せんぼしていた岩壁が、動き始めている ゆっくりと、上がり始めたのだ。まるでシャッターのようだ。

ただしシャッターと違うのは、音が全くしないことだった。

逃げなければならぬ。頭ではそう分かっているのに、動けなかつた。

トオルの手から、無線機が落ちた。雑音と共に、通信がぱつりと切れる音がした。

なすすべもなく見守るトオルの目の前で、岩壁のシャッターが開き切った。

「沖田隊長！ もうやめて下れ……」

「うぬせぬ……早くしね」とマサオが……マサオが……

マサオが連れていかれてからずっと、沖田は金属製の扉を拳で叩きまくっていた。いくら真選組一の剣の腕前を謳われていても、素手で鉄の扉をぶち破れるはずはない。しかし手に血がにじんできても、沖田は扉を殴るのをやめなかつた。それを他の人々が、目を見開いて見つめている。

「……ぬせえな……」

「う……ううーん……」

部屋の片隅で、うめき声が上がつた。半ば目を閉じて泣いていたお妙が、ぱっと顔を上げた。

「し、新ちゃん！？」

「う……姉上？」

「新ちゃん！」

新ハたちが意識を取り戻したのだ。お妙はまた泣きながら新ハを力いっぱい抱きしめ、新ハは声が出せなくてモガモガ言つた。

「何だ、こい？」

銀時が半身を起こして、活氣のない目をぱみぱみさせた。

「……もう晩飯アルカ。」

神楽はいまいち目が覚め切つていないうらしい。

「旦那、覚えてないんですか？ほら、俺たちバスに追っかけられて、そこにトオルくんのそつくり人間が現れて、みんなやられて……」

「あー、そーいえばそんなこともあつたな。で、こいどこい？」

「敵のアジトですよ。」

「捕まつたのかよ！ビーしてくれんだ、警察のくせによオ、この税金泥棒がア！！」

「いや、あの展開なら捕まるって予想できるでしょうが、大体警察関係ないし！！」

「こんなとこに誘拐されて閉じ込めるなんて、セクハラアル！もうお嫁に行けないアル！！」

神楽のこの意見は全員に無視された。

「銀さん、山崎さんを責めたつて始まらないですよ。」

ようやく姉の腕から解放された新ハが、会話に参加してきた。自分の言葉に誰も反応しないので、ふくれつ面をしてそっぽを向いた神楽は、ふと扉の所にうずくまる沖田の姿を見つけた。

「あれ、お前も捕まつてたアルカ。そんな所で何してるネ、小便アルカ？」

「神楽ちゃん、やめなよ…」

新ハは慌てた。こんな所で神楽と沖田の闘いが勃発したら困る。それは避けたい。

しかし、沖田はまるで反応しない。扉をじっとにらみつけたまま、血の出ている拳をぶるぶる震わせている。そのただならぬ様子に、銀時たちも何があると感づいたらしい。

「…………お前、どうしたんだ？」

「実は……」

山崎が、沖田の様子を伺いながら早口で、事情を説明した。話を聞くにつれて、三人の顔に衝撃の色が浮かんだ。

「そんじゅ、トオルの居場所をマサオから聞きましたか？」

「まあ簡単に言えばそういうことになりますけど……實際はそんなに穏やかなもんじゅないでしょ。ううね。」

「サイテーアルナ！」

「マサオくんは目が見えないのに。」

「目が見えないですって？」

突然割り込んできた声に、銀時たぬきよつとして振り返った。

マサオの母親が、不審そうにこちらを見つめていた。

「おばさんーおばさんがニセモノたちに捕まつてた間にね、マサオくん、何か事故に遭つたの。それで目が見えなくなつて」

「ネネが助け船を出そうとしたが、マサオのママは銀時たちから目を離さない。あんまりじつと見つめるので居心地悪くなつてきたその時、マサオの母親が突然叫んだ。

「思い出したわー！」

「…？」

わけが分からず目をぱちくつさせる新ハたち。それには構わず、マサオママは続けた。

「あなたたち、さつきからどこかで見たことがあると思ったら、……そりや、マサオの好きな漫画に出てくる人たちと、同じ顔してんじゃない！」

「あ…………」

銀時たちは思わず顔を見合わせた。そうだった。マサオは確かに、『銀魂』が好きでアニメもよく見ていうと言っていた。でも母親が嫌がるので、じつそり見ざるを得なかつたとか……。

そうだ。この中にだつて、『銀魂』を見ている人がいるかも知れない。そして自分たちの姿をよく知つている人たちだつて、何人かいて当然なのだ。今までそれに気づかなかつたとは、なんてうかつだつたんだろう。

新八が予測した通り、マサオのママの言葉に触発されたのか、人々が一斉にざわめき始めた。

そうだ、確かにあいつらは、あの漫画に出てくる奴らと同じ顔をしてるぞ、あいつなんか本物の銀髪だぜ、いやかつらだろ、でも漫画に出てくる奴がこんな所にいるわけないよなあ、わけ分かんねえよ。

ネネも風間みおりも青ざめた顔で、じらりを見つめている。新八はため息をついた。

「これは銀さん……いつへん、ちゃんと説明する必要がありそうですね。」

銀時は、自分たちに刺すような視線を向ける人々をざつと眺め回した。

「 だな。」

銀時の口から、新八のよりももっと重いため息がもれた。

「…………そんじゃあんたたちは、本当に『銀魂』つていう漫画の世界から来たつていうのかい？」

みおりが、これで何回目になるか分からぬ質問を繰り返した。

「本当に？」

「もつぺん同じことを言わせたら」「

銀時は神楽の傘に手を伸ばしながら、大声を出した。いい加減うんざりしていた。

「お前の鼻の穴に突っ込むぞ。」」」」

「確認しただけじゃないか。」

みおりは涼しい声でそう言つて、大きくあくびした。

みおりはもともとものに動じないタイプらしく、リアクションは拍子抜けするほど薄かつたが、他の人々はそうもいかなかつた。特に『銀魂』をアニメでよく見ていたり、漫画で読んでいたりしている人たちがそうだ。みんな混乱した顔で、信じられないという顔で、お互に顔を見合させていた。

当然だろう。銀時たちには彼らの気持ちがよく分かつた。わけも分からぬうちにこの映画の世界へと引き込まれてしまつた時、全く同じような経験をしたからだ。

ネネは片手を頬に当てて、じつと目をつぶつている。そうやって今聞いた途方もない話を、頭の中で整理しているのかも知れなかつた。

「あなたたちが本当に、その……『銀魂』の登場人物だつて分かる方法があるとでもいうの？」

マサオの母親が声を張り上げた。

「ないね。」

銀時はあつたり答えた。

「ただ、分かつてもらいたいのは、」

マサオママがあからさまに不快そうな表情を浮かべたので、新ハは慌てて割り込んだ。

「僕たちが決して、敵じゃないとこりうことです。僕は皆さんの味方なんです。」

「何でそんなこにはつきり言えるのよ？」

ネネの母親 桜田もえ子が、きつこに口調を隠そうともせずに言った。

「まあ少なくとも同じ敵を持つてているのは確かだ。そんで十分じやねえか？」

「いいえ！あなたたちは信用ならないわ！――！」

突然もえ子が大声を上げた。銀時たちも、春日部の人たちも、みんなびっくりしてもえ子を見つめた。

ネネが叫んだ。

「ママ！何を言つてるの！――？」

「ネネ、あなたは黙つてなさい！」

「だつて銀ハ……じゃなくて銀時さんは、最近ずっと幼稚園の園長先生だつたし、土方さんはひまわり組の担任だつたのよ――ママだつて毎朝ネネがバスに乗る時、あいさつしてたじやない！何でそんなに嫌うの！――？」

もえ子はしばらくの間、何も言わなかつたが、その目つきは相変わらず険しいままだつた。それを見ているうちに、新ハの頭に不意にひらめいたものがあつた。

「…………桜田さん。」

何と呼んだらいいかとしばし迷つた後で、新ハは言った。

「あなたが僕たちを嫌うのは……あなたが『銀魂』を嫌っているからですか？」

もえ子は一瞬、ぎくりとしたような表情を浮かべて新八を見たが、すぐにまた堅い表情に戻り、うなずいた。

「あなたたちには悪いですけどね。こうなつたらほつきり言わせてもらいますわ。……私だけじゃなくて、ほとんどの人たちの中でも、『銀魂』の評判はかなり悪いのよ。」

「どうしてアルカ。」

神楽の言葉だ。

「だつて、下品な言葉とか出てくるし。」

「あーなるほど。」

と言いながら、銀時は神楽にちらりと田井をやつた。

「それにサディストな人もよく出てくるわ。」

「ふーん……」

銀時と神楽は沖田の方を、妙にこつそりと見た。
「斬り合いみたいな残酷なシーンまであるのよ。」

「あるな、確かに。」

「どつちかつていうと殴り合いの方が多いね。」「いや、あんたら何納得してんですか。」

こんな時でも新八のツッコミは健在だった。

「とにかく、あなたたちが本当に『銀魂』の登場人物なら……なるべく子供たちを関わらせたくないってことは、分かりますよね？」

最後の問いかけは、周りにいる大人たちに向けられたものだった。

銀時たちにとつては何ともまずいことに、もえ子と同意見の親御さんは多いらしい。そうだそ�だと賛同する声まで聞こえ始めた。

「私はそりは思いませんね。」

静かな声が割り込んできたのは、その時だつた。

「えつ？」

みんなが振り返つた先にいたのは、トオルの母親のみね子だつた。

みね子は驚きをもてはいたが、落ち着いた口調で言葉を続けた。

「この人たちのお話によると、トオルちゃんは私がいない間、色々といふ人たちにお世話になつてゐるようですね。」

新八はやや足をもじもじさせた。どっちかといふと世話になつてゐるのは新八たちの方で、トオルが住む所を提供してくれなかつたら、文字通り路頭に迷つっていたかも知れなかつたからだ。

新八がそれを言つと、驚いたことにみね子はにっこり微笑んだ。

「そうですわね。でもトオルちゃんがあなたたちを助ける気になつたのは、あなたたちが一セモノからトオルを助けたからじゃありません？」

銀時たちが何も言えないでいるうちに、みね子は淡々と話を続けた。

「それにちゃんと働く所を見つけて、生活費を稼いでくれたそうですね。」

それを聞いた新八は、かなり複雑な気持ちになつた。山崎はともかく、沖田が見つけてきた稼ぎ所は『仕事』と言えるかどうか、……。

「ネネちゃん、一つ聞いてもいいかしら。」

急に呼びかけられたネネは、あからさまにびくつとしてみね子を見つめた。

「銀時さんと土方さんが先生だった時に、何か嫌なこととかあった？」

ネネはちょっとびっくりしたみたいだったが、すぐにきつぱりと首を振った。銀時は彼女への感謝念がこみ上げてくるのを感じた。

まつざか先生と、（眼鏡をかけ直して服も着替え直した）上尾先生も口を挟んできた。

「確かに言葉づかいが乱暴だつたり、少しいい加減などこなはりましたけど　　あ、すみません、銀時さん　　悪い人には見えませんでした。ええ、土方さんだつてそうです。」

「土方先生は…………一度、いじめをしている子たちを厳しく叱つてくれまして…………最終的には『腹切りだ!』とか怒鳴つて全員泣かせちゃつたんですけど。」

そりや泣くだろう。こんな時だというのに、山崎は吹き出しそうになつた。幼稚園の先生になつてからも、鬼の副長だつた頃の習性からは抜けられなかつたらしい。

まあそもそも、土方が幼稚園の先生をやるといつこと自体が常軌を逸しているのだが……。

他にも双葉幼稚園の子供たちはたくさんいたが、皆まつざか先生たちに賛成の意を示した。中にはあんな奴大嫌いだと毒づく意地悪そうな男の子たちもいたけれども、あれはおそらく土方に泣かされた子供たちだらう。

しかし、桜田もえ子はまだ負けていなかつた。

「幼稚園でいい人だつたとしても、他のことは分からぬわ。例えばもし、風間くんが本当はこの人たちに脅かされて住む場所を提供してあげてたんだとしたら、どうするの？」

これにはさすがに銀時たちも怒つた。

「ひどいアル！ そんなの嘘ネ！ ！」

神楽の大声に、もえ子は思わずびくつとすくみ上がつた。それに追い打ちをかけるように、銀時が言葉を続けた。

「あんたたちが『銀魂』のことをどう思つていようが、そのせいで俺たちのことをどう思つていようが、俺は何とも思わねえ。だが、トオルのことは別だ。そんな卑怯なことをした覚えは、金輪際ねえ。」

低い声だつた。神楽のように、怒鳴つてゐるわけでもなかつた。

それなのに、銀時の声は、神楽の声よりもずっとすごいがきいて、迫力があつた。その場にいる数人が身震いしたのを、新八は見た。

もえ子は言葉を失つたようだつた。青ざめた顔で、銀時たち一人一人を見回している。そんな母親の様子を、ネネはじつと見つめていた。

た。

「…………あれ？」

張りつめて、重苦しい雰囲気が満ち始めていた部屋の中で突然、間が抜けていると言つていいほど場違いな眩き声がした。

みんなが振り返った先では、いつの間にか扉の前から移動していた沖田が、左側の壁の一点に手を置き、なぞるよつて指を這わせていた。

「…………どうしました、隊長。」

重い空氣から逃れたいといつゝ氣持ちもあって、山崎はすぐさま沖田のもとへ駆け寄つた。沖田は眉の間にしわを寄せ、扉と同じ金属質の壁をにらんでいる。

「違つ…………」

「えつ？」

「音が違つ。」

そう呟いて、沖田は自分が見つめている壁の一点を、曖昧に指し示した。

何気なく、沖田が示した場所を軽く叩いてみた山崎は、驚いて息を呑んだ。

沖田の言つ通り、叩いた場所から聞こえてきた音は、

壁の見た田とは違つて金属質ではなかつた。むしろ、堅い岩を叩いた時の音に近い。そこから少し離れた所の壁は、ちゃんと金属の音を響かせている。注意深く触れてみると、どうやら感触もわずかに違つようだ。

「どうしたアルカ？」

沈黙に耐えられなくなつたらしく神楽が、苛ただしげに問いかけてきた。山崎は振り返つた。

「壁のここ部分だけ、質が違つみたいです。石か何かに塗装して、金属に見せかけてるみたいだ。」

銀時たち三人は一瞬、顔を見合わせたが、すぐに立ち上がって沖田と山崎のこる所へ走り寄つた。お妙は少しだけ迷つたような顔をしたが、新ハの後ろについてきた。

「本當だ……何だか、感じが違つ。」

壁を触り比べながら、新ハは呟いた。銀時は普段滅多に見せることのない、真剣に考え込む表情をしている。神楽は傘で壁をあちこちつつき回し、時折傘に隠された豆鉄砲で壁を撃つたりしてみていたが、壁はまるでびくともしなかつた。

「ここから…………ここまでが、違うのか。」

銀時が、指先で壁を慎重になぞつていきながら言った。それを見ていたお妙が、思わず口が出たといつのような感じで呟いた。

「長四角……まるで、扉みたいね。」

「え？」

「形が扉みたいだつて言ったのよ。まじ、よくあるじやない、壁に隠された隠し扉。」

銀時たちがこの意見に言葉を返せないつまゝ、神楽がひやつと叫んだ。

「じーした神楽、踏まれた猫みたいな声出しあがつて。」

「銀ちゃん、見て！」

切迫した神楽の声につられて、銀時たちは言われるままに壁へ目を戻した。そして、自分たちの見ているものが信じられず立ち戻りした。

さつき周りと質が違うとを確かめた部分の壁がそつくりそのまま、天井へ吸い込まれてこくように上へと上がり始めたのだ。

まるで単純なシャッターが上がっていくかのようだつた。呆然とそれを見つめていた新ハは、上がっていく部分のすぐ右側の壁に、神楽が豆鉄砲で撃つたらしい跡がついていることに気づいた。近づいてよくよく見ると、撃たれた部分の壁が小さな真四角にきれいに区切れ、しかも少しへこんでいる。

新ハははつと思い当たつた。

(……そつか。)

お妙の言つた通り、周りと材質の違う部分はやはり壁に隠された扉だつたのだ。そしてやはり壁と同じようにカモフラージュされていたスイッチを、神楽がたまたま撃つてしまつたのだろう。

そんなことを考えている間にも、扉はゆづくじと上がつていぐ。

みんな無意識のうちに一步下がつた。特に話し合つたわけではなかつたが、中に敵が潜んでいる可能性は充分過ぎるほどにあるからだ。あるいは、もつと恐ろしいものが。

しかし、扉が開ききつた向こう側に見えたものに、新ハたちは思わず目を丸くした。

そこには、恐ろしげなものは何もなかつた。　　ただ、一組の男女が、岩がむき出しの地面に座り込んでいるだけだつた。

その武拾武・カモフラージュって英語?え、フランス語なの?（後書き）

扉が開いた先にいたのは……………一次回はついに、あのキャラが登場
！？「え？」期待っ！！

その余拾參・回想もたまにせここかんなぬべくせむせむにしふた（前書き）

サブタイトルは自分への叱責です。…………（↙_↗） 今回は魔廻蛇博士やニセモノたちについて、色々なことが明かされます！…………といつわけで、回想シーンがやたら多いです。すみませんつ（—） m

その武拾參・回想もたまにはいにかなるべくほひせんこしふた

扉のこちら側と向こいつ側にいる人物たちは、しばし呆気にとられて立ちつくした。

「…………何なの、あなたたちは？」

岩床に座り込んだ二人のうち、女性の方が尋ねてきた。

その

声を聞いた瞬間、銀時は深い驚きに打たれて息を呑んだ。

（…………まさか。）

間違いない。『踊れ！アミーヴー』の中で何度も聞いた、あの女性の声だった。

「僕たちは…………」

言いかけて新八は、二人が手首と足首を縛られていることに気づいた。足首を縛っている縄は、床にしっかりと繋がれている。閉じ込められているのだ。

山崎が一瞬、ためらうよくなそぶりを見せたが、扉の向こう側に入つていつて、ふところから小刀を取り出し、一人を縛つている縄を慎重に切つた。

「ありがとう。」

男性の方が、縛られていた足をさすりながら、咳くよつと言つた。しかしその目は相変わらず、銀時たちにじつとそそがれてい。

その男性の方にも、銀時・神楽・沖田の三人は見覚えがあつた。

「 ジャッキーのパパアル。」

自分がしゃべつたことにも気づいていないよくな表情で、神楽がぽつりともらした。

「 おいつ、神楽……！」

銀時は慌てて神楽の口を押さえようとしたが、もう遅すぎた。二人

の不審そうな表情が、ますます色濃くなつっていく。

「 何で私たちの名前を知つてゐる? 」

銀時は思わず、ため息をついた。

また同じことを繰り返さなければならないのかと、この気持ちの溶け込んだ、重いため息だった。

マサオはリオルのちょうど向かい合う形で机を挟み、同じように椅子に座らされている。ただしリオルと違うのは、椅子に鎖でがんじ

リオルが部屋の真ん中に置かれた椅子に腰を下ろすのを、イリスとギルザは緊張したまなざしで見守っていた。

「あーと……」

がらめに縛り上げられていくことだった。

イリスは内心驚いていた。佐藤マサオは泣き虫で、気弱な男の子だと聞いている。しかも今は視力を失っているのだ。それなのに、うつろな目を自分たちに向けてくるマサオの顔は、意外と冷静だった。怯えていることは確かだったが、取り乱してはいなかつた。

リオルもそれに戸惑つたのかも知れない。ちょっと顔をしかめてマサオを見つめた後、左手で頬杖をつき、右手の人差し指と中指で、机をとんとんと軽く叩き始めた。

これが集中して考え込んでいる時のリオルの癖だということを知っているイリスは何も言わなかつたが、それにしても妙な癖だと改めて思つた。風間トオルにも同じような癖があるのでどうか、それとも

リオルは机を叩くのをやめ、イリスとギルザに視線を戻した。

「……それじゃ始めてよ、二人共。」

「……銀ちゃん、新八！」

神楽の呼ぶ声に、説明に追われていた銀時と新八は、これ幸いとそ
ちりへ逃げた。

「どうしたの？ 神楽ちゃん。」

「五百円玉でも拾つたか？」

銀時の問いを無視し、神楽は傘の先で壁を指し示した。 隠し

扉のあつた所から、三メートルと離れていない所だった。

「……」

「……」

そう言って、神楽は壁を傘で叩いてみせた。返ってきたのは、金属
なら響かせないような鈍い音だった。

「ほんとだ……」

新八は呟き、ふと思いつて、その壁の周辺辺りを手をぐりし始めた。

探していたものは、すぐに見つかった。 質の違う壁のすぐ右
側、ちょうど新八の目線ぐらいの高さの部分の壁に、ほとんど見え
ない真四角の区切れがうつすらと見える。銀時のそのことを伝える

と、彼は少し顔をしかめて言った。

「どうすんだ？……開けるか？」

銀時の考へていることは、よく分かつた。新ハとて、この扉を開ける勇氣はなかなかわいてこなかつた。

しかしせつかく扉とその開け方を見つけたといふのと、それをそのままにしておくというのは一層すつきりしないものであつた。

「……開けましょ。」

わたくしよひこじてやう言つと、新ハはさつとスイッチに手を伸ばした。後ろで誰かが　　多分お妙だろつ　　はつと息を呑む氣配がしたが、新ハは無視した。

新ハの指に押され、壁が小さな真四角に、がくんとへこんだ。

壁がゆっくりと上がり始めた。

壁が開き切ろうとする寸前、数人の悲鳴が上がった。お妙や、ネネの混じっていた。

男が一人、倒れている。それもただ倒れているのではない。死んでいた。うつ伏せになり、背中にナイフを突き立てられて。

異様に頭が大きく、そのくせ背は新ハや神楽より小さい。肌にはやや青みがかっていた。

新ハは目を細め、男を凝視した。

(……まさか、あまんと天人?)

ありえないことだとは思つたが、目の前で死んでいる男の容貌は、人間とは言いづらいものだつた。

それだけではない。少し前　　ここに来る前、こんな姿の男をどこかで見たことがある気がする。どうしてだろう?

しかし、新ハがどこでどうその男を見かけたのか、思い出す機会は

結局失われた。

扉が開き切った瞬間、死体の倒れている向こう側の暗闇に立つている、小さな青い影があらわになつたのだ。

銀時が、呆然と呟いた。

「トオル……！」

暗い部屋の中で、ルビーは冷たい床に座り込み、じっと虚空を見つめていた。

目覚めてからずっと、あの男に殴られた頭が割れるように痛かったが、心を占めている苦痛に比べれば、そんなものは何でもなかつた。

どうしてあの時　　あの男の腹を切つた次の瞬間に、とどめをさしてしまわなかつたのだろう?

自分の力を過信していたことは、よく分かつていて。でも本当はもつと別の理由があつたのではないかと、今になつて思い始めていた。

そう……あの男の顔を見た時から、何か自分の中で異変が起つたのをルビーは感じていた。

あいつと初めて対峙した瞬間、奴の顔に並ぶようにして、もう一人、別の男の顔がぱっと心の中に浮かび上がつたのだ。

それは稻妻がひらめくよりも速い、ほんの一瞬の出来事だった。しかしルビーは、外見は相変わらず無表情を装いつつも、内心激しく動搖していた。それは今まで一度も味わつたことのない、奇妙な感覚だつたからだ。

いや……本当にそうだらうか?

何だか前にも、こんな気持ちになつたことがあるような気がした。

ずっと昔、まだ記憶も定かでない頃に。それをたぐり寄せようとしてみても、すつと遠ざかってしまう。でも確かに、そんなことがあったような感じがしていた。

ルビーはこめかみを押さえ、目を閉じた。ばかばかしい。どうせ頭が混乱したことによる勘違いか何かだろう。自分は生まれた時からずっと、アジトから外と言えば春日部にしか行っていない。あんな物騒な男のような奴と知り合つたのは、後にも先にもあの時だけだ。

湧き上がる頭痛をこらえながら、ルビーはじつと考えをめぐらせていた。こんなに長い間、何もせずにじつとしているのは初めてのことだ。色々考えてみるにはいい機会だった。

ルビーは自分が生まれてからのことを思つていた。　　自分に力を与えてくれた、あの頭でっかちな、変わり者の男のことを。

そして、リオルのことも考えた。

魔虞蛇博士は確かに天才だつた。ルビーは博士がやつて来る前に作り出された二セモノの一人だったので、彼が現れた時のことをよく

覚えている。

あの時、突如ルビーたちは前に出現した魔虞蛇博士は、自分に協力すれば強大な力と生命力、そして意思を与えてやると約束したのだ。あの時はただの操り人形だった自分たちにとつて、『意思』は大して魅力のある言葉ではなかつたが、『強大な力』にはみんなが心惹かれた。それはルビーも同様で、ニセモノたちは深く考へることもなく、博士に協力することを決めたのだった。

ルビーたちは自分たちの生みの親であるアミーゴスズキを襲つた。まさか自分が作り出した忠実な部下たちに襲撃されるとは思つてもいなかつたアミーゴスズキは、呆氣ないほど簡単に捕らえられ、いつの間にか魔虞蛇博士が作つたらしい二つの隠し扉の向こう側に閉じ込められた。

魔虞蛇博士は約束を守つた。 どうやつたのか知らないが、ニセモノたちに力を与え、どうやつたのか知らないが、意思をも与えた。自分たちに多大な変化をもたらしたこの贈り物がどうやつてなし遂げられたものなのか、ルビーは今でも知らない。別に知りたいとも思つていなかつた。魔虞蛇博士の方でも、わざわざ教えるような親切なことはしてくれなかつた。自分のことを恩人として、畏怖すべき存在として、いつまでもあがめさせておきたかったのだろう。今ならそれがよく分かる。

実際、博士は自分がアミーゴスズキの二の舞にならないう、細心の注意を払つていた。ニセモノたちの心臓部分は、常に博士が握つていた。反抗しようとした仲間の一人が呆氣なく倒れ、死んでいく様を、ルビーはこの目で見たことがある。あの時はさすがに恐怖を覚えたものだ。

それほど巧妙に、ニセモノたちを支配下に收めつつあった魔虞蛇博士を破滅に追い込んだもの。それは、風間トオルのニセモノ・リオルを作り出したことだつた。博士は風間トオルの子供らしからぬ思考能力の高さを踏まえて、そのそつくり人間にニセモノ全体を指揮させようと考えていた。ニセモノたちの数も膨大なまでに増え、一人で支配するのにはさすがに無理がでてきたからだつた。だから魔虞蛇博士は、リオルに他のニセモノ全ての力を足しても余るほどの力を持たせることにしたのだ。

でもそのことが、必ずしも博士の命取りになつたわけではないだろうとルビーは考えていた。

リオルは、最初に会つた時から他のニセモノたちとは違つていた。言葉でどうと表現するのは難しいが、何かが違う。顔は笑つていようがどんな表情をしていようが、その内面には何かひやりとするものが、いつも存在している。そんな雰囲気の持ち主だつた。

何よりも、他のニセモノたちと違うところは、自分が入れ替わることになる本物の風間トオルに、強い悪意を抱いているらしいことだつた。始めのうちルビーは、よりためらいなく強大な力を使えるようになり、博士がそのような感情をリオルに植えつけたのだと思つていたが、どうもそうではないらしい。博士が早く入れ替わつてニセモノたちを指図しやすい立場につけと何度も言つているのに、リオ

ルが従わずにいる場面を幾度か目撃している。

そういう時リオルは、眉一つ動かさずに決まりでこいつ答えた。

「ダメですよ。風間トオルを捕まえるのは一番最後です。お楽しみは、最後にひとつでもいいのです。」

そして、ニセモノたちを指揮することになるリオルは、他のニセモノたちは教えてもらえない様々なことを博士から享受していた。

そしてとうとう博士は、ニセモノたちの製造方法まで詳しくリオルに教えてしまったのだった。

リオルが初めからああいうつもりだったのかどうかは、分からぬ。リオルに聞いたって、本当のことは教えてくれまい。

ある日、ルビーが春日部の偵察から帰つてくると、博士の部屋から悲鳴が聞こえてきた。

はつとして、そこへ駆けつけた途端、床に倒れている魔虞蛇博士とそれを見下ろすリオルを目の当たりにしてしまったのだ。博士の背中にはナイフが深々と突き刺さり、もう動かなくなっていた。

凍りついているルビーを振り返つたりオルの端整な顔には、毛ほど
の動搖すら現れていなかつた。

『ああ、そういうことでルビー、これからは僕が一人で君たちを指
揮するから。他のみんなにもそう言つといて。』

それだけ言つと、リオルは手を振つて、ルビーを部屋から追い出し
たのだった。

あの死体をどう処分したのか分からなかつたが、なぜリオルが魔虞
蛇博士を殺したのかは薄々見当がついていた。ここ最近、特に風間
トオルへの対処のし方について、二人は意見が対立しがちだつた。
でも命を握られているリオルは、結局は博士に従わざるを得なかつ
たのだ。

それなのに、突然博士を殺害したということは……。

そう、恐らくリオルは、博士が自分たちの生命力を支配しているそ
の方法を、知つてしまつたのだ。ひそかに探し出したのか、それと

も博士が自分の負担を減らしたいために、うつかり口を滑らせたのか。

いざれにしろ、それさえ分かればもう、博士を恐れる必要はない。

ルビーはふと、思考から意識を引き戻した。

隣の部屋が突然、騒がしくなった。……そちらは確か、春日部から捕まってきた本物の人間たちが閉じ込められている大部屋のはずだが……。

次の瞬間に響いてきた、聞き覚えのある声を耳にした時、ルビーは思わず背筋を伸ばした。

そして顔をしかめて、目の前の壁をじっと凝視していた。

そしていきなり、むしゃぶつづくよつとして銀時の腰辺りに抱きつ

「銀、さん……新ハさん……神楽さん……」
わざやくよつに言って、トオルは死体を慎重にまたぎ越え、じりじりへ歩み寄つた。

「トオル……！」

銀時が喉くど、笛のような細い音を立てて息を吸い込み、風間トオルは近づいてきた。

いたので、新ハはびっくり仰天した。トオルがこんなふうに感情をあらわにしたところなど、ほとんど見たことがなかったからだ。同じように驚きに打たれた人々が、後ろでざわめいているのが聞こえた。

銀時もまた、負けず劣らず驚いていた。自分にしがみつき、腰をつかんでいる手の震えと、その温もりが伝わってきて、銀時は思わず口元をほころばせ、トオルの頭に手を置いた。

「……そうか、心配してたんだな。悪い悪い。」

銀時たちとはぐれてしまってからずっと、トオルは彼らがどうなったのか気にし続けていた。たとえどんな形だろうと、再び会うことができる、トオルの中にため込まれていた感情が一気にあふれ出てきたのだ。

「風……間、くん。どうしてそんなこと……？」

我に返つたらしいネネが、おずおずと聞いかけってきた。

どうやらその時初めて、トオルは銀時たちの後ろにいる人々に気づいたらしい。ぱっと顔を赤らめて、銀時から離れ、ぱつが悪そうに目をそらした。

「う……うん。実はね　　」

トオルが語つて聞かせる話を、銀時たちも、ネネたちも、みんな熱心に聞き入った。どうやらトオルの出現は、自分たちにとつてプラスに働いたらしいと新八は見ていた。トオルが銀時たちと親しくしている様は、新八たちの言葉を裏づけるには充分な証拠だったに違いない。事実お母様方の自分たちに向ける視線が、明らかに柔らかめになつた。トオルはいわゆる『優等生』タイプの少年だから、周辺の人々の間ではなかなか評判がいいのだろう。

「へえ……定春が、そんなことを……」

話を聞き終えた新八が、目をまん丸くしている。神楽も驚いているようだつた。

「定春つて誰ですか？」

酔乙女あいが、不意に口を挟んできた。

「ああ、僕たちの……ペットだよ。」

新八は曖昧に言葉をにごした。定春のことは、説明するよりも実際に見てもらつた方が分かりやすいだろう。

沖田はもつと別の部分に反応した。

「近藤さんと連絡を？無線機はどうしたんだ？」

「あっ、やうだつた！」

トオルは慌てて隠し扉の向こう側に行き、無線機と、懐中電灯を手に持つて戻ってきた。さつき扉がいきなり開き始めたので、びっくりして落としてしまったのだ。

「こきなり切れちゃつたから、近藤さん、心配してゐかも…………」

「ほんとに近藤さんだつたんだな？よーし。」
と、沖田はトオルの手から無線機を取り上げ、そして山崎に突きつけた。山崎がきょとんとして沖田を見る。

「隊長、一体何を…………？…………あ、そつかー！」

何か気づいたらしく山崎は、慌てて無線機を沖田から受け取り、電源を入れた。

「言え！いい加減に何か吐けよーー！」

「だつて……本当に何も思い出せないんだもん。」

「嘘をつくな！何か一つぐらいあるはずだ！！」

「

イリスはあせっていた。そのあせりが、声に出てしまつていてもよく分かつっていた。

あせりは敵に、かえつて余裕を与えてしまつ。それを知つてゐるのにどうしても心が急いでしまうのは、後ろでリオルが見物しているからだった。横にいるギルザも同様だろう。

二人は、リオルの手により作られたニセモノたちだったから、生まれつき他のニセモノたちに比べてより強い力を持ち、より凶暴な性格を有していた。リオルの前には何とかいう博士がニセモノを作り出していたそうだが、詳しいことは知らない。

リオルは強力な配下をそろえるために、恐ろしい手段を行使した。自分が作つたニセモノと、博士が作つたニセモノとを対決させ、お互いに殺し合わせたのだ。

強力かつ凶暴なリオル側のニセモノたちは、博士側のニセモノたちを容赦なく襲い、殺していった。こうしてニセモノたちは全て、リ

オルによつて作り出された者ばかりとなつた。

ただ、一人を除いては。

イリスは今でも、あの鬭いをありありと覚えている。いや、ギルザも、他のニセモノたちも、もしかしたらリオルでさえも、あの時のことを見つけてしまつてはいるかも知れない。

もうその頃には、アジトはリオル側のニセモノばかりになつていた。そんな中、アジトの奥深くにある倉庫の中でひつそりと暮らしているところを見つかり、リオルの前に引き出されてきたのが桜田ネネのそつくり人間　ルビーだつたのだ。

イリスはあの時、ルビーを捕まえて引き立てていつた者の一人だつた。ルビーは全く抵抗しなかつたが、その目に見つめられた瞬間、イリスは思わず背筋を伸ばした。……そうせずにはいられない何かが、彼女の目の中にはあつた。

リオルは自分が作ったネネのニセモノとルビーに、みんなが見てい

る前で闘つよ」命じた。

その場にいる誰もが、ルビーが無惨に敗北して散るだらうと確信していた。しかもリオルは、彼女が放火能力を使うことを禁じた。だからこそ、次の瞬間に展開された光景は、みんなの度肝を抜くものだった。

勝つ気満々で襲いかかってきた相手の攻撃を、ルビーは表情一つ変えずにかわしていった。しかも最小限の動きで回避しているのが、イリスにはよく分かつた。

まずそれで激怒した相手は、すぐさま腕を変形して、ルビーの頭をまっすぐに狙つた。一方ルビーは、武器として『えられた一本のボロ刀を、敵の顔に突き出した。

ルビーの左目の上辺りから、ぱつと紫色の血が飛んだが、敵は刀を余裕でかわし、奪い取り、へし折つてしまつた。

これで勝負が決まつた　　と、その時誰もが思つた。実際次の瞬間、相手の変形した腕が襲いかかり、ルビーはあつという間に肩を深々と切り裂かれた。

斬られたルビーは、ごく自然な動作で、ふわりと敵のふところに入つた。傍目には、倒れ込んだように見えなくもなかつたが……。

相手が首から血を吹き出して倒れたのは、まさにその瞬間だった。

その時の光景を理解するのにしばらくかかったことを、イリスは覚えている。ルビーの手に折られた刀の破片があるのを見ながらも、ただ呆然としているばかりだった。

それはきっと、リオルも同様だつただろう。

敵の上にかがみ込み、息が絶えていることを確かめると、ルビーは全身を紫に染めたまま、刀の破片を拾い集めて出て行つた。

それだけのことをする間、ルビーの顔には何の感情も浮かばなかつた。 今と同じよつと。

背後でため息が聞こえて、イリスははつと我に返つた。慌てて振り返ると、リオルが笑いながらこちらを見ている。

「やつぱりその程度じゃ吐かないみたいだね……仕方ない、やり方を変えてみようよ。」

イリスとギルザは緊張した。『やり方を変える』といつひとは、手荒な方法に切り替えるといつことだ。

「でも……相手は子供ですよ?下手をすれば、死んでしまいます。

「最初は脅すぐらいでいいさ。例えば…………これなんかで。」

リオルがいつの間にか手にしているものを見て、イリスは目を大きく見開いた。

「バズーカ？ 一体…………一体どこから、そんなものを！？」
「うん、これはね…………」

バーン！

突然、けたたましい音を立てて扉が開いた。イリスとギルザは飛び上がつて振り返った。

「誰だ……！？」

沖田総悟が、田を怒りに燃え上がらせりて、そこへ立っていた。

その武拾參・回想もたまにはここかひなゐべくせひせひにしふた（後書き）

銀さんたちは風間くんと再会し、そして危機が迫るマサオの元に、
沖田が駆けつける一次回は激闘の予感…！ 感想待つてます

その武拾四・完全に表情を消せるのってよっぽど心の強い奴か狂人だけだと思ひ

今回は闘いの前章…………みたいになつてます。真選組がこちらへやつて来た理由が明らかに！？

その武拾四・完全に表情を消せるの? とほど心の強い奴か狂人だけだと思ふ

「お前、…………！」

イリスは言葉を失った。自分の目が信じられなかつた。

厳重に鍵をかけて、他の奴らと一緒に閉じ込めておいたはずの茶髪の青年が、今この部屋の中に立つてゐる。歯を食いしばり、目をぎらぎらさせて、彼は部屋の中を見回した。その視線が椅子に縛りつけられたマサオと、リオルが手にしているバズーカ砲に向かふると、青年の顔が凶暴な怒りに歪んだ。

「テメエ！ 汚エ手で人のもんに触つてんじゃねエよ……返せよ……！」

そう怒鳴るなり、沖田は刀を振り回してリオルに飛びかかつた。

リオルはわずかに眉を寄せた以外、ほとんど表情を変えなかつた。沖田の怒りの一太刀をひらりとかわすと、テーブルの上を躍り上がりマサオの座つてゐる側に降り立つ。それとほぼ同時に、リオルの座つていた椅子が真つ二つに斬り割られた。

沖田のバズーカ砲はまだ、リオルの手の中にあつた。

「隊長！」

山崎が刀を手に、部屋の中へ飛び込んできた。それに続くようにして、黒服の男たちがぞろぞろと入つてきた。

「な！？なつ、何なんだよ、お前らはつ？」

イリスは思わず後ずさりして叫んだ。ギルザも目を見開いた。さつき捕まえて閉じ込めておいた奴らの中に、こんな男たちはいなかつたはずなのに……一体、どこからわき出したと詫うのだ？

男たちの後から、銀時・新八・神楽・お妙、ネネヒトオル、さらには定春と野原一家までが部屋に入つてきた。

定春の足元には、二匹の白い犬がぴたつと寄り添つていた。両方ともお互いにそつくりな姿形をしているが、片方は首輪をしており、もう片方はきれいな空色の目をしている。

空色の目をした白犬の姿を見つけた途端、イリスの瞳がカツと見開かれた。

「テル……！」

その声には、明らかに怒りと憎しみがこもっていた。ギルザも嫌悪

に顔をしかめて、テルをにらんでいる。テルは全く動じず、まるで身構えているような格好のまま、じつと一人を見つめ返していた。

リオルが、不意に笑い出した。

「あれ？なんか、急にお客さんが増えたみたいじゃないか。イリス、ちゃんと鍵かけとけって行つただろ。」

リオルに呼びかけられると、たちまちイリスはびくっと緊張した。

「い、いえ！ちゃんと鍵はかけたはずですよーー！」

「じゃあ何でこの人たちが外に出てるんだい？」

「俺のおかげだよ。」

「えつ
？」

何となく聞き慣れた声と共に、部屋の中にちらりと現れた人影を曰にして、イリスたちは凍りついた。リオルでさえ、明らかに驚いた表情をした。

イリスが震える声で呟いた。

「リンド………」

頭のてっぺんから爪先まで、しんのすけとそっくりな姿をした少年がそこにいた。 ただし、その顔に浮かべている表情には、しんのすけらしいところはなかつた。いつもイリスたちがイライラさせられてきた、へらへらしたものでもなかつた。…… 分かりやすく言えば、世話の焼ける子供を前に苦笑いしているような、そんな大人の笑みを口元に浮かべていたのである。

「リンド………お前……」

リンドはますます苦笑を深くして、イリスたちを見つめた。

「まつたく…………あの人たつてのお望みとあつて頑張つてきたが、色々大変だつたぜ。バレないよつに情報も集めなきやならないし、野原しんのすけらしく極力振る舞わなきやならないし。」

口調まで、前までとはがらりと変わつてしまつていて。

その時よつやく、リオルが口を開いた。声が震えている。リオルがこんなに怒りをあらわにするところを、イリスとギルザは初めて見た。

「貴様…………ずっと僕たちを裏切つてたんだな？この恩知らずが！僕がいなきや、お前は今こいつしてこないんだぞ！」

「残念だけど、そりや違つね。」

あつやつと言われて、リオルは一瞬口をつぐんだ。

「…………違う？何が違うんだ？あの博士がいた時の二セモノは、もうルビーしか残つていない。ちゃんと確かめてあるんだ。だからお前は…………」

リンドが薄く笑つた。

「その通りだ、リオル。でも何しろ二セモノは数が多過ぎる。だからこそり俺が紛れ込んで、お前側の二セモノのふりして博士側の二セモノを倒し、ずっとお前らのことを探つてたつことなんか、知る由もなかつたつてわけだ。」

「お、おー、ちゅうと待てよ。」

イリスは我慢できなくなつて割り込んだ。

「その言い方だと、お前は博士側のニセモノでもリオル様側のニセモノでもないつてことになるじゃないか。でもそんなはずないぜ。

俺たち以外にニセモノを作つてた奴がいたとすれば、別だが

……

リンドはいよいよ本格的に笑い出した。

「『』が答だよ、イリス。でも残念ながら、お前らが知るはずもないが、俺はどちら側でもないんだ。厳密に言えば、魔虞蛇博士に作られたのは確かだが……」

「えつ、グダグダ博士！？」

ポカッ！

いきなり話の腰を折つたしんのすけは、みやえのげんこつを食つうひひ頭になつた。

「黙つて聞きなさい！」

しんのすけは頭を抱え、むすつとしてもう何も言わなくなつた。

それにはかまわず、リングは腕を組み、何か思い出すよつな口調になつて話を続けた。

「俺は、博士がこちらの世界に来る前に作られた、ただ一つの成功作の二セモノなのです。」

「…………局長って…………本当に、お人好しだすね。」

「ちょっと、何だ? 何でもいいから話してみる。借金と告白意外なら聞いてやる。」

「…………何だ、じつと見つめたりしゃがって。俺の顔がそんなに面白いか?」
「…………いや、そんなわけじゃありやせん。ただ…………ちょっと…………」

「…………」

「局長、大丈夫でしょうか?」

「あいつの」とか? 大丈夫さ、ちゃんとやつてくれるだろ?」

「…………」

「魔虞蛇博士がなんでこんなことをじょとと思ったのか、その辺のことは俺にも分からぬ。」

部屋は静まりかえっていた。空気までもが息をひそめ、リンクの話

に聞きたがるのよ」だった。

「ただ博士は、多分腕試しかなんかのつもじだつたんだらうな『踊れーミーポー』の映画を見て、それを参考に一体のセモノを作り出した。」

それが俺だったんだと、ロンドはしらけたような顔で呟つた。

「博士は俺も一緒にこちらへ連れて行くつもりだった。でもある日、俺はちよつとしたことで博士の機嫌を損ねちまつて、地下の秘密部屋に閉じ込められたんだ。もしかん一寸で出しちゃうつもりだったんだらうが……」

と、ロンドは「いや」をまた苦笑いした。

「ちよつともの田の夜に、ここからが博士の家に乗り込んできたのや。」

描かれた山崎たちは、ちよつとびっくりしてお互いを見つめ合つた。

「俺は博士が子供殺しをやつてたことなどぞ、これっぽちも知らなかつた。だから地下室の中で、一体何が起こつたんだつて思つたのを覚えてるよ。突然足音がどやどやして、何かをひっくり返すよつな音もして……それからじぢぢへりはりと、上で色々しゃべりやつてゐるのが聞こえた。」

とにかく、このままではずっと閉じ込められっぱなしだ。リンクが監禁されていた場所にはトイレがあつただけで、出る方法を見つければ飢え死にするのは明らかだった。

「でも鍵のかかった上げ戸は天井にあつて、とても俺の背じや届かない。それに鋼鉄製だから、どいちみち壊すこともできやうになかった。もうダメだつて覚悟を決めかけていた、ちょうどその時に……」

「……近藤さんが、見つけて出してくれたんだ。」

「……誰だつて？」

「ああそうか、お前らは知らないんだよな。魔虞蛇博士がここに来る前にいた世界では、ここにいう警察みたいなことをやつてる奴らがいてな、そのリーダーがあいつだつたんだ。……えつと、新星組だつけ？」

「真選組です。」

山崎が律儀に訂正した。

「魔虞蛇博士が前にいた世界？…………あれのことか。」

「リオル様、知ってるんですか？」

「一度聞いたことがある。何とか言つ漫画の世界から、特殊な道具を使つてここに来たつて…………。デタラメだと思って、聞き流してたんだけど。」

「でも残念ながら、デタラメでも何でもないんだよな、これが。」
リンドが笑つた。

「だつてこいつらも、その漫画の世界から来た奴らなんだぜ？」

「何だつて…………？」

イリスとギルザは目を見開いて、銀時たちを一人一人眺め回した。しかし、リオルはそちらに目を向けようともしなかった。ただひたすらに、リンドをにらみ続けていた。

「…………それで。」

リオルの声が、もつ一段階低くなつた。

「面倒くさい話は抜きにして簡単に言つてもらおうか。その近藤とかいう奴に助けられてから、君はどうしたんだ?」

「ああ、そのことか。」

リンンドは頭をかいた。

「まあ俺を作ってくれた博士を裏切ることになるのは確かだけどね、何しろあいつは俺を地下室に閉じ込めて、餓死させかけたような奴だ。その点近藤さんは俺をそこから出してくれたばかりか、ちゃんと飯まで食わせてくれたんだ。……だから俺は、博士がやひつとしていたことをあらかた近藤さんにしゃべったのさ。」

「それって俺たちがいなくなつた後かい?」

山崎の問いに、リンンドは首をかしげてしばらく考え込んだ。

「…………うん。そうだ、確かにそうだったな。近藤さんが、三人も人手が足りないから大変だつていうみたいなことを、誰かに話しているのが聞こえたし。」

山崎はうなずいた。それなら辻褄が合つ。近藤はうまく隠し事をできるよつた性格ではないからだ。

「…………それで、そいつは君に、こっちの世界に入り込んで僕たちのスパイになれて頼んだわけ?」

リオルがほとんど聞こえないくらい低い声で呟きやいた。

「あれ、何で分かるの？ 頭いいな、お前。」

リンドは屈託がない。

リオルは表情を消していた。でもその無表情さを透かすようにして、新八は彼の顔に、激しい怒りの色を読み取った。怒りと、そして……屈辱の色を。

「……して俺から得た情報と、博士が残してつた装置を元に、近藤さんたちはこちらの世界に潜入して仲間を助け出す作戦を立てた……でも、俺が聞いてたよりも早く襲撃が始まっちゃってな。こいつらがアジトに連れて行かれるまでに間に合わなかつたってわけさ。……ま、どつちにしろうまく抜け道を見つけられたからよかつたんだが。」

リオルの顔から、わずかに残っていた色すら消え失せた。

「……あの抜け道を、見つけたのか？」

「俺はお前の知らないところで、こいつの構造とかを探つてた。だから抜け道があることぐらいはとっくのとつに知つてたよ。中に何があるかまでは、調べる暇がなかつたんだが……」

そこまで言つと不意に、リンドの顔から笑みが消えた。

「…リオル、お前は俺が裏切つたことで相当怒つてんだろう？確かに
ちょっとずつかかったかも知れないが…少なくとも、お前こどつこつ
言われる筋合いはないと思うがね。」

「……」

リオルは何も言わなかつた。代わりにすつと皿を繕くした。
まるで心に浮かんだものをそこから読み取られることを、防げりつと
するかのようだ。

イリスが叫んだ。

「お前、一体何が言いたいんだ！？」

「なあ、お前さつさ、俺に『恩知らず』って言つたよな？」

リンクはイリスのことを無視して続けた。

「さつき抜け道を通りていつたら、そこで面白こもんを見つけたん
だ。リオル、何だと思つ？』

返事はない。

「俺に言わせりや、お前こそ本当の恩知らずだよ、リオル……自
分を作つてくれた博士を、自分の手で始末しちまつとはよお。」

その時よつやく、リオルがわずかに反応を示した。血の氣のない顔に、微かな笑みが浮かんだ。…………さつきまでのからかうよつな笑いとは全く違う、かみそりのよつに冷たく薄い笑みだつた。

「僕がやつたとこつ証拠でもあるのか？」

「ないわ、そんなの。」

リンドが肩をすくめる。

「でも一セモノたちを博士と一緒に指揮していたのはお前だつた。他に博士を殺して利益になる奴がビリヒーる？」

リオルは答えなかつた。イリスとギルザは今や、唇からも血の氣を飛ばしてじつと見つめていた。…………リンドでも、銀時たちでもなく、リオルを。

「それに比べりや俺がやつたことなんぞ、ずこぶんおとなしこもんだと思つせ?少なくとも俺は、ちゃんと近藤さんの恩に報つてゐる。お前がやつたよつなバカなことせやつくなつ…………」

リンドせじやべるのをやめた。

リオルが、沖田のバズーカをぴたりとリンドの顔面に向けている。指が少し震えているのが分かつた。

リンドは少し顔をしかめた。……怯えているのではなく、ただたんに不快感を覚えたような表情だつた。

「何だよ、危ないな。そんな物騒なもん、振り回すなよ。」

リオルの口が動いたが、声が小さくて何を言っているのか分からなかつた。

「んん？ 悪いリオル、聞こえなかつた。」

「……て……うな。」

「はつ？」

「バカって言つくなつて言つてんだよー。」

イリスはびくりとすくみ上がり、まるで珍しいものでも見るかのようにリオルをおそるおそる見つめた。笑つていようが何をしていようがリオルが怖いことに変わりはなかつたが、彼がこんなに激昂して感情的になつたところは見たことがない。……その瞳に燃える怒りの炎は、沖田に負けず劣らず激しかつた。

リンドも驚いたようで、腕組みをしたまま何も言わず、リオルを見つめている。

「ああ、確かに魔虞蛇博士の奴は僕が殺したさ。でもそれは、あいつがバカだったからだ。あいつがもう少しでも聞き分けがあれば、僕だって殺したりしなかった！僕はそんな奴でも、バカは嫌いなんだよ！見ていいだけでもかむかする！特にバカなくせにかしこぶつてお前みたいな奴を見てると吐き気がしてくるんだよ！魔虞蛇の奴もそうだった。何回言つても僕の意見を聞こうともしないで、自分の意見だけ通そうとした！それでむかついたから、だから……！」

だから殺したんだよ。

リオルの言葉を聞きながら、自分そつくりの顔が怒りで歪むのを見つめながら、トオルは思った。もう少しで声に出して聞きそうになつた。じゃあ君はどうなんだ？君は自分の意見を通すために、博士を殺した。自分の生みの親を殺した。結局君も、博士と同じことをしているんじゃないの？

それまでずっと、トオルの後ろで黙っていた九兵衛が、右目でじつとリオルをにらみつけながら、言った。

「君はどうして、風間トオルくんを狙うんだ？」

みんなびっくりして九兵衛を見上げた。ニセモノも本物も、その場にいる全員が九兵衛に視線を向けた。

リオルにとつても意外な質問だったのだ。怒りの色が、束の間その瞳から薄れた。

九兵衛が、東城の制止も聞かずに、ゆっくりと一步、踏み出した。

「コンハドくんからの報告書に、君がトオルくんに格別な悪意を持つているらしいということが書かれていた。……他のニセモノたちに、そういうことはないというのに。」

じつと九兵衛を見つめていたリオルが、突然ふつと笑った。

「そんなことまで知らされてたのか？それなら僕がトオルを憎んでる理由ぐらい、分かりそつなものだけどね。」

「？」

「知ったといふでビヒツもなこと。ま、聞かれたつて教えないけど。」

リオルがバズーカを持つて居る手を下ろした。

「君らはいいで、死ぬんだから、や。」

次の瞬間、殺氣のかたまりが勢いよくリオル目がけて飛んだ。

その武拾四・完全に表情を消せるのってよっぽど心の強い奴か狂人だけだと思ひ

次回は沖田が、神楽が、そして銀さんが大暴れ！特に沖田が暴れま
くります。味方まで巻き込んでいます（笑）。お楽しみに！！

その武拾伍・地味な奴つて意外と粘り強いよな、やつぱ田立たないかど（前書き）

いよいよ闘い開始です！雑なところもありますが、そこのへんはざつ
か田をつぶつて下さい（謝）。感想お願いします

その武拾伍・地味な奴つて意外と粘り強いよな、やつぱ田立たないけど

「うおおおおおー。」

沖田があさまじい殺氣を身にまとつて突進してくるのを、リオルは冷静かつ冷ややかに見つめていた。

頃合いを見計らつて素早く身をひるがえし、鋭い刃風を避ける。バズーカで撃退することももちろんできたのだが、せつかく手に入れたいこの貴重な武器は、もつととつておきの時に使いたかった。

沖田はびっくりするくらい機敏に、素早く動いた。テーブルの上に移動したりオルに迫いすがり、勢いあまってテーブルを一刀両断してしまつた。

「…………マジかよ。」

イリスは呆然としているギルザと共に立ち廻りしていると、リオルの

……。

同じく呆然としているギルザと共に立ち廻りしていると、リオルの

……。

言葉が降ってきた。

「何ぼやぼやしてんだ！ わたとこいつを向とかしろ……。」

そう怒鳴りざま、リオルは沖田の刀の峰みねに片足をかけて動きを止め、バズーカ砲で殴りかかった。沖田はさつと飛びssaつてよけた。

リオルに怒鳴られてはっと我に返り、イリスとギルザは慌てて闘つ二人に駆け寄つたが、何しろ沖田の攻撃が激し過ぎるので入る隙がない。リオルでさえ、絶え間なく繰り出される斬撃をかいくぐりながら荒い息をしている。

「ちつ！」

リオルは舌打ちして、バズーカで沖田の顔を突き、ぱつと飛び離れた。

沖田がなおも刀を振り上げながら迫つてくる。嫌悪に顔をしかめて、リオルはバズーカをマサオの足元にほうつた。これの重みが動きを鈍くしていると気づいたからだ。撃たないのならば、こんな重たいものを持ち歩く価値はない。

沖田が一ひりに背を向けているのを見て、イリスは目をきらりと光らせた。

しかし、まだ半歩も踏み出さない「つか」と、不意に田の前に差した影があつた。

「隊長には手出しさせない。」

山崎が、ラケットではなく刀をかまえながら、言った。

それを見てイリスに近寄りかけたギルザの前にも、するりと中国服を着た少女が立つた。傘を持ち、後ろに巨大な白い犬を従えている。

神楽が言った。

「お前には、私と定春が相手してやるネ。死ぬ氣でかかつてくるロシ。」

「く……」

次々と現れる邪魔者たちに、イリスは歯噛みした。このままではこのつらを始末するのに手間取つて、リオル様の機嫌をさらに損ねることになりかねない。

そして、リオル様を怒らせることは、すぐに自分たちの死に繋がる

……！

しょうがない。 イリスは覚悟を決め、 壁際にすりすりと移動する
と、そこに隠されていたボタンを強く押した。

けたたましい音が鳴り渡った。思わず耳を押さえてしまふほどの大
音響だ。…………一体何が起こるんだろう？

銀時たちが入ってきたのは反対側の壁に、すうっと隙間が開いた。

新八が目を丸くして見守るしづか、そこから一セモノたちが、水が
わき出るよじこじて次々となだれ込んできた。

マサオがうるたえ、怯え、青い顔をしているのが見える。

椅子に座られ、しかも鎖でぐるぐる巻かれて縛りつけられているのもよく見える。ネネは今すぐにでもそばに駆け寄つて、早くマサオの戒めを解いてあげたかった。しんのすけやトオルだって、同じ気持ちでいた。

だが、できない。部屋の中には大量のニセモノたちがいて、それぞれ闘いを繰り広げている。うつかりその中へ足を踏み入れたら、巻き込まれてしまうかも知れない。

しんのすけたち野原一家にトオル、ネネ、そして春日部の人々は、部屋の入り口でひしめき合い、中の闘いの様子を食い入るように眺めていた。

銀時たちと、真選組でここにいる者たちは、ほとんど皆残らず闘いに参加していた。新八は真選組隊員たちが持つてきた刀を貸してもらつて闘っていたが、銀時と神楽はいつものように、木刀と傘しか手に持っていない。定春は身体の大きさと鋭い牙があれば充分だったから、何も武器はいらなかつた。

一人だけ、『銀魂』メンバーの中で闘いに参加していない人物がいた。 お妙である。

お妙は、とてもさつきまで泣いていたとは思えない凜とした表情で、しんのすけたちの後ろに控えている。しかしその目から不安の色を隠しきることはできず、視線は常に新八や九兵衛を行つたり来たりしていた。

血みどろの激闘は、あつという間に始まった。

数から言えば敵方の方が圧倒的に優勢だったが、幸いにもというか、こちらは闘いに関しては相当年期を積んでいた。

真選組などは、日々悪者を成敗しているのだから当然だ。それに引き替え、相手側は明らかに戦い方が稚拙で、未熟だった。自らが有する強大な力に自信を抱き過ぎて、技術の方がまるでなっていないのだ。攻撃するにもまっすぐにしかせず、かわすにもまっすぐ後ろに下がることしかない。その点だけ見れば、『銀魂』側の方が有利とも言えた。

銀時は、上尾先生を連れ去ったチーチー川村の二セモノと対峙して

いた。

チーター河村のニセモノは、からかうよつてやで笑いながら銀時を見ていた。

「へへっ…………お前、幼稚園で園長をしてた奴だろ？その木の棒みたいな奴で、俺の仲間を叩きのめしてやるのを見た時には、はっきり言ってびっくりしたぜ。」

「…………」

銀時は答えない。河村のニセモノはかまわずこじこじやべり続ける。

「俺には分かる…………分かるぜーお前が相当できる男だつてことがわかる。」

河村のニセモノの瞳が、獣猛にギラリと光る。

「でも俺のスペード攻撃は、お前にも止められねえぜー。」

次の瞬間、チーター河村のニセモノの姿が消えた。

（あつ……）

トオルは目を見開いた。

（あの時と同じだ……）

上尾先生を連れていった時も、河村のニセモノはああやつて消え失せてみせた。そうして次の瞬間には、全く別の場所に現れていたのだ。

眼鏡を外した状態の上尾先生をボロボロにしたような奴相手に、銀さん、大丈夫だろうか……。

ガシイイツ！

重い音が響いた。

背後に回り込んでいた河村のニセモノの攻撃を、銀時の木刀が受け止めた音だった。

河村のニセモノの顔に、驚きの色が少しだけ浮かんだが、すぐにやりと笑み崩れた。

「ほーう、やるじゃねえか！俺の攻撃を傷一つ負わずに受け止めたのは、今までの中ではリオル様だけなんだぜーー！」

河村の二セモノは、さつと大きく跳躍して銀時から離れた。銀時がゆっくりと動き、こちらへ向き直る。

「…………なつ、何あれ！？」

ネネが金切り声を上げて、トオルにしがみついた。河村の二セモノの姿が一瞬すうっと揺らいだかと思うと、次の瞬間、無数の河村の姿が銀時の周囲を回り始めたのだ。じつと見ていると、二つ目の田まで回つてきそうだった。

「なんか、忍者とかが使う『影分身』とかみたいだね。」

トオルは思つたままのことと言つた。

「此處乃是我一派之發源地也。」

ネネが感嘆の声を上げる。

「オラだつてあれぐらいできるゾ！」
と、しんのすけがぐるぐる円を描いて走り出したが、誰も見ていない
かつた。

「どうだ！？これが俺に与えられた力　　『テレポート能力』だ
！お前もテレポートが何かぐらいは知つてんだろ？」

銀時はやはり何も言わない。銀さん、どうしちゃつたんだろうとト
オルは首をかしげた。いつもならこの辺で、気のきいた一言でも返
しそうなものなのに。そういうばっさりから、死んだ魚みたいな生
氣のない田もほとんど閉じられているような……。

それに気づかない河村のニセモノは、大得意といつた様子で続けた。

「ははっ、俺が本当はどこにいるか、まるで分からねえだろ？。こ
のままお前は俺に、一方的に攻撃されるしかないのさあ！」

次の瞬間に起つた」とは、あまりに一瞬で終わってしまったので、
闘いから田をそらさずに見ていたトオルでさえも、何があったのか
さっぱり分からなかつた。

河村の二セモノの身体が、銀時めがけて飛んだところははつきりと
見えた。 そして何とも形容しがたい鈍い音がしたのと、押し
殺されたようなうめき声がしたのが、ほぼ同時だった。

銀時がすっくと立つて、後ろに、河村の二セモノが大きな音を立
てて落下した。

トオルは銀時の手にある木刀と、鼻と口から紫色の液体を流しながら無様に横たわっている河村の二セモノの姿をしばらく交互に見つめてから、ようやく銀時が河村の二セモノを殴り倒したのだということを理解した。

他の者たちも驚いたらしい。突然闘いの音がやみ、敵も味方も、みんなが目を見開いて銀時を見つめた。

「 銀さん、やすがですね。」

長い沈黙の中、第一声を発したのは新八だった。

「 珍しいな、ぱつつかん。お前が俺にお世辞使つなんてよ。」

銀時が言つた。活気のない目はもう開かれている。

「お前、何してやがるつー。」

イリスの鋭い声が、突然空気を切り裂いた。 みんなが今度はそちらを振り返つた。

沖田がいつの間にか、他のみんなが銀時に気をとられている間に、マサオの縛られている椅子に近寄つていた。 その背後に回り、刀を使って何かしている。そばにいたはずのリオルもまた、真選組の人々と鬪つているうちにマサオから離れてしまつていた。

見つかつた途端に、沖田はすぐつと立ち上がつた。しかし何しろ突然のことだったので、刀をふるつのが一瞬遅れた。ちょうどそこへ襲いかかってきた、ギルザの鼻水をかわし切れず、沖田の肩から血

が噴き出した。

見ているトオルたちは思わず目をそらした。が、沖田は動きを止めなかつた。さらに来る猛攻から、大きく横に跳躍して逃れる。そして体勢を建て直しづま刀をふるつて、ギルザの鼻水をはじき返した。

沖田はマサオの足に巻かれた鎖を切るのには間に合わなかつたが、手と上半身の鎖は切つてやれた。マサオがそろそろと手を動かして足を探り、鎖を自分でほどいていくのを、ネネはややほつとして見つめていた。

(ああくそつ！バズーカさえあれば……！…)

沖田はこの闘いが始まつてからずっと思つていたことを、再び心中で吐き出した。

刀の腕で有名な沖田だったが、本人は刀で闘つよりもバズーカを使う方が好きだつた。彼いわく、『気に食わねエもんを一気にぶつ飛

ばせるから』である。沖田といえばバズーカ、バズーカといえば沖田と言われるぐらい、沖田とバズーカは切っても離せぬ組み合せなのだ。

それなのに、今愛用のバズーカが敵の手に渡つてしまつていると思うと、はらわたが煮えくり返る思いだつた。

バズーカはリオルの足元に置かれていた。リオルは再び余裕の笑みを取り戻し、すでに真選組の隊員五名を撃退している。今はなんと、神楽のもとから離れた定春と向き合つていた。

リオルの笑みがますます深くなつた。

「あれ？君つてもしかして、春日部山で僕の邪魔をしようとしたワンちゃんかな？」

定春は何も言わない。

犬なのだから、当たり前だ。

「あの時痛い目に遭わせてあげたつていうのに……まだ足りないのかな？」

リオルの言葉を耳に挟んだ神楽が、はっと振り返った。

「お、お前が定春に怪我させたアルカ！」

「うん、そうだよ。」

リオルはあつさういうなずいた。神楽を見ようともしていない。

「許さないアル！」

神楽は傘をかまえてリオルに飛びかかるうとしたが、また別の二セモノたちに行く手を阻まれた。

「邪魔ネ！」

見事な傘さばき（？）で、神楽は二セモノたちを次々に殴り倒していくが、何しろ数が多く過ぎる。いくら倒しても後から後からわいてきて、いつまでたつてもリオルに近づけそうになかった。

他のメンバーたちも、それぞれ苦戦していた。それを横目で眺めながら、リオルはほくそ笑んだ。

「ふふ、みんな悪戦苦闘してるみたいだね…………あの茶髪の人も。」
と、リオルは沖田の方を指しながら、こちらをにらんでいる定春に話しかけた。

「 」のバズーカさえあれば、すぐにケリをつけられるのに、とか思つてゐるんだろうな……」

ようやく足の鎌を完全にはずし終わったマサオは、ため息をつき、鎌の跡がついた足首をさすりながら立ち上がった。

バズーカはまだ、リオルの足元に置かれていた。しかしリオルは定番を見つめついて、そちらには何の注意も払つていなかつた。

マサオが突然身をひるがえしてリオルに駆け寄り、バズーカをひつつかむと、近くにいた沖田に走り寄つてその手に押しつけた。

しばらくの間、しんのすけたちも、銀時たちも、リオルたちも、そしてバズーカを受け取った時の沖田までもが、ぽかんとして田をぱちくりさせていた。

「な、な。」

よつやくとこつた感じで沖田が声を発したが、田せ足元のマサオに釘づけのままだった。なんとマサオは微笑んでこむ。

「な、何だ? マサオ、こつや 一体どひこつことなんディ?」

マサオは答えず、かわりにますますこつこつした。 その田がまっすぐ自分の田を見つめてこむことに、沖田は今さらながら気づいた。

「お前、田が見えるよくなつたのかー?」

信じられない思いで問いかけると、マサオの笑みが滅多に見せない
よつないたずらっぽいものに変わった。

「うそ、そうだよ。」

マサオは沖田から少し離れると、同じく呆氣にとらわれているトル
を振り返った。

「ほら、バスに乗ってて、僕が頭をぶつけた時があったでしょ。そ
の時のショックで、だんだん見えるようになってきたみたいなんだ。
」

なんとこうことだ。

「でも、見えないふりをしてる方が何か役に立つかも知れないなあ
って思つて……。」

リオルは凍りついたよつになつて立ち廻くしていたが、次の瞬間、
定春を捨ててマサオに飛びかかった。

「このオニギリ、よくもなめた真似を…………」

しかし、沖田が吠えた。

「マサオに手出すな！」

轟音と共に、バズーカが放射された。リオルは舌打ちして弾をぎりぎりのところでかわしたが、ちょうどその時飛びついてきた定春の頭突きを食らい、壁に叩きつけられてしまった。

神楽がかけ声を上げた。

「定春、そのままやつつけるアル！」

「アン！」

バズーカが沖田の手に戻ってきたことで、戦況は明らかに大きく変化していた。『銀魂』サイドは意気高揚し、逆にニセモノたちはいつドカンとやられるか分からぬ恐怖にとらわれて、闘うどころではなくなってきていた。

そんな中、イリスとギルザだけはまだ戦意を全く失っていなかつた。

山崎はイリス相手に大奮闘し、ところどころに傷を負わせていたが、何しろすぐに回復してしまう。イリスの手を変形させた槍の猛攻で、山崎の肩やわき腹に血がにじんでいた。

ギルザは今、新ハと対峙していた。新ハを初めて見た時は、ただの眼鏡をかけた地味でおとなしそうなガキだと思っていたのだが、どうしてどうしてその刀を使う手並みは堂に入ったもので、ギルザの鼻水をはじき、巻き上げながらじりじりと間合いをつめつつあつた。鼻水をはじき返される音が響くたびに、ギルザの顔に浮かぶ嫌悪の色がますます濃くなつた。

沖田は本領を發揮していた。バズーカをぶつ放し、それで混乱した敵をぶつた斬り、予想外の暴れようにマサオも目を丸くするほどだつた。

「沖田さんつて…………いつも、あんな感じなの？」

そばにいた真選組の隊員に、マサオはおそるおそる尋ねた。

「まあな…………でもさすがに、あんなに荒れてるところは見たことがないかな。」

(まざいな………)

イリスは山崎と押し合いながら、仲間が一人、また一人と倒れてい

くのを声もなく見つめていた。

銀時や九兵衛、東城も、部屋の中を駆け回って沖田に負けないくらいの数の敵を討ち取っていた。 今や部屋の中のニセモノは、リオルを除いてイリスとギルザだけ、という状況になっていた。

沖田が自分に目を向けるのを見たイリスは、思わずぞつとした。

(やばい……)

にやりとサディスティックな笑みを浮かべ、沖田が近寄ってくる。バズーカをまっすぐ、イリスの顔面に向けて……。

(ちつ、仕方ない……『あれ』を使うとするか。)

『あれ』はイリスだけに与えられている、大変特殊な能力だった。主立ったニセモノたちには、こうした特殊能力がある。例えばルビーは放火能力、ギルザは予知能力というように。 もつとも今 のギルザには、それを使う余地などないようだが。

そして、イリスが持つ特殊能力は……。

突然イリスが後ろに下がり、腕を元の形に戻してそばに落ちている刀を拾い上げたので、山崎は目を丸くした。

何をする気だ？

刀を拾い上げたイリスの目が、まっすぐに山崎の顔を見つめた。

山崎は田を見開いた。まばたきするほどの間にイリスの姿がかき消え、そして……目の前に、自分そっくりの男が立っていたのだ。

顔も、背格好も、服装も、全て同じだった。おまけに身体に負っている傷まで一緒なので、傍目から見れば全く見分けがつかない。あちこちから驚きの声が上がった。

そう、これがイリスの特殊能力だった。一度見た人物の容姿や服装をコピーして、そつくりに化ける。いわば擬態能力とでも言つべきものだ。

ちらりと沖田の方を見ると、やはりびっくりした顔をして、突然現れた二人の山崎を交互に見比べている。

（ふん……どっちがどっちか、分からなくなつたようだな。）

いくら乱暴者でも、仲間にバズーカを打ち込むようなことはできまい。

しかし。

「…くつ、甘Hぜ。」

「！？」

「そんぐらいの小細工で俺をだませると思つてんのか？」

顔に出さないよう必死に抑えたが、イリスは動搖した。見破られたのか？バカな、リオル様でも分からぬくらい完璧な、俺の擬態を……！

沖田はバズーカを下ろし、助走をつけるように超スピードで走つてくると、

「ロケットキーック！」

と、飛び蹴りを食らわせた。

二人の山崎、両方に。

「ぐべらばー。」

お腹にもうひり食ひった本物の山崎は、血反吐を吐いて床に倒れ込んだ。

「がつ……」

イリスもあまりの衝撃に動けない。はづみで元の姿に戻ってしまった。

「どーでイ、ちゃんと見破つてやつたぜイ。」

「いや全然見破つてませんよね、それ。」

こんな状況でもじつかりツツツミを入れる新ハであった。

「くそ……」

何とか起き上がったイリスは、ふとすぐ横で自分を見ている神楽に気づいた。周囲には撃退されたらしいニセモノの残骸が散らばっている。

「…それならここつでどうだ!」

イリスは再び一瞬にして、今度は神楽の姿に擬態した。

「イイイヤツホオオオイ！…！」

沖田が叫んだかと思うと、バズーカ砲が大爆裂し、無数の弾が一人の神楽めがけて飛びかかった。

「そ、そんな……俺の擬態は完璧なはずだ……何で見破られるんだ……」

（見破つてないんだよ……実のところ……）

トオルはボロボロになっているイリスと悶絶している山崎を見やりながら、心中だけでそつと呟いた。

彼のそばでは、

「お前、何してるアルカ！もうちよつとで私までやられるところだつたネ！殺すぞ、テメエ、死ねヨ！…！」

「るせエ！ テメエが死ね！」

「お前がもつと死ね！」

「テメエがもつともつと…………」

味方同士の闘いが勃発していたのであつた。

あの役立たずが……。

リオルはイリスの無様な姿を一瞥いちべつすると、すぐに目をそらした。

あんなザマで、僕の側近が務まるとも思つてゐるのか？せっかくチャンスを貰えてやつたていつに……。

ギルザも同程度だ。あんな眼鏡の地味くさい奴に手こずつている。

まあ僕だって、そう偉そうなことは言えないかも知れないけどな……。

定春は、前にやられたことでこりたのか、闇雲に突つ込んでくるようなことはしなかった。もっと賢く、用心深くなり、隙をみてはリオルの身体にのしかかろうとしたり、噛みつこうとしたりする。

いまいましく感じながらも、リオルはこの犬の存在を、少しばかり面白くも思つていた。

こんな奴がいるってことは、あいつらは本当に漫画の世界から来たのかも知れない。あのバカな博士の言つていたことも、まるつきりデタラメではなかつたということになる。

それにしてあいつ、厄介な奴らを味方につけやがつたもんだな……。

リオルの視線の先では、自分とそつくり姿をした少年が、不安そうに闘いのなりゆきを見守っていた。

その武拾伍・地味な奴つて意外と粘り強いよな、やっぱ田立たないけど（後書き）

沖田に暴れさせました。徹底的に暴れさせた結果、味方まで攻撃しちゃいました（笑）。次回も闘いですが、もうちょっと個人をクローズアップした感じになると思います。お楽しみに！

その武拾六・どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる（前書き）

今回はどうかって、いと新ハガメインです。リオルの主要配下の二人がどつなるのかも、注目しておいて下さい！ 感想お願いします

その武拾六・どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる

あれだけいた一セモノたちが、もうほとんどいなくなつてしまつていた。

床にも壁にも銀時たちの身体にも、紫色のビビビビしたものが飛び散り、部屋の中にはたとえようもない強烈な異臭が立ちこめている。今、この部屋で闘いを繰り広げているのはたつた四組になつていた。

イリスと九兵衛、ギルザと新八、リオルと定春……そして、まだケンカ中の沖田と神楽である。

東城は九兵衛の後ろで、いつでも助太刀に回れるような体勢をとり、銀時は木刀を左手でつかんで右手でここをなでながら、やんちゃな弟を見守つているような表情で神楽たちの激闘（？）を眺めている。山崎は仲間たちの手でしんのすけたちがいるのと同じ場所に運ばれだが、まだ意識がぼんやりしているようだつた。

槍の形に変形した

紫色の血しぶきを上げて、イリスの右腕が
腕が、斬り飛ばされて宙を舞つた。

(二二二……一)

強い。だが少し前に、同じように自分の腕を切り落とし、昏倒せし
めたあの男とは別種類の強さだ。あの男には野獸が牙をむきだして
飛びかかるような、そんな獰猛さを秘めた力強さがあつたが、
今闘っている若者の動きはすつと整つており しかも、無駄が
ない。

休む間も、息をつぐ間すらなく、九兵衛の神速の刀が襲いかかってくる。上から、下から、横から、正面から。

それに何だ？さつきから感じる、この妙な違和感は。こいつと闘い始めてから、ずっとその感覚が胸を押さえている。この若者と他の奴らとの間に、何か徹底的な差があるような気がしてならないのだ。

腕を斬られ、こちらが動きを止めざるを得なくなつたところへ、上から刃風が迫る。ところが身をよじつて逃げようともしないうちに、突如刀がイリスの頭上5センチぐらいのところに止まつた。

目を丸くして見上げると、九兵衛の顔が目に入った。

鼻筋の通つた、きりつとした印象を与える整つた顔立ち。鋭い光をたたえた右目。しかしその奥に、イリスはわずかにだがためらいの色を見て取つた。そして、男にしては長く黒々とした髪の毛に、色白の肌……。

え？男にしては？

「お前……女、か？」

九兵衛の瞳が揺れた。
それが、イリスがこの世で見た、最後の光景となつた。

九兵衛の刀とは違つ、硬く鋭い何かが、背中から胸へと貫通した。
それはまっすぐに、イリスの心臓部分を深く貫いていた。

「
貴様。
」

九兵衛は呆然としていた。何もできないまま、溶けていくイリスの身体と彼にどごめをさした者とを交互に見比べていた。

「なぜだ……こいつは、お前の仲間だつたんじゃないのか！？」

「まあね。」

リオルが九兵衛の方を見ずに答えた。なんと、片手で定春の頭を押し、動きを止めている。

「じゃあ、何で殺したんだ？」

「あれ、さつき言わなかつた？僕、バカは嫌いだつて。そいつもバカだから殺したんだよ。闘いの最中に、腕を落とされたつていうのに再生しようともせずに、ぼんやりしてゐるなんてさ。　　ま、人間

一人片づけられない時点で処分決定だけど。」

今まで通りの軽い口調の中に、ひやりと冷たい刃が感じられるようになしゃべり方だつた。　　九兵衛は金縛りにあつたようになつて、リオルの顔を見つめていた。仲間をあんなふうに殺すなんて、彼には……いや、彼女にとつては考へるだに嫌なことだつた。

それなのに、今そこにいる少年は小さな虫を踏みつぶすような軽い気持ちで、仲間を殺している。

「ああもう、いい加減にじいてよ。」

リオルが舌打ちして、定春の顔に蹴りを繰り出した。定春がぎやつと叫んで後ろに下がった隙に、リオルは一瞬にしてそこから姿を消し、次の瞬間、今度はギルザのそばに姿を現した。

ギルザはイリスがやられた時から真っ青になっていたが、リオルの姿を間近で見た途端、唇まで真っ白になってしまった。

「ギルザ、分かってると思つたが。」

リオルが言った。ギルザが怖がっていることは百も承知らしく、からかうよつた薄い笑みを浮かべている。

「さつさとやいつを倒しちゃわないと……君も、イリスと同じことになるよ。」

新ハは、ギルザの身体が震えるのを見た。 しかしその次の瞬間、顔を上げたギルザを見て、思わずぎくつとなつた。

単純なのがけりした顔に、激しい敵意がみなぎつている。普段ボーチャンがそんな顔をしているところを見たことがないだけに、変化が余計はつきりと見えた。しかし一番新ハの目を引きつけたのは、表情の変化ではなかつた。

鼻水が、真つ黒に変わつていた。

リオルが手を打ち、弾んだ声を上げた。

「あはは、やーっと本気になつてくれたみたいだね。 その黒い鼻水にちょっとでもかすつたら、確かあつという間に毒が回つて死んじゃうんだっけ。」

お妙が息を呑み、震える手で口を覆つた。

「新ちゃん……」

耐えがたい緊張をはらんだ沈黙が、広い部屋の中に、煙のよつに充満していった。

新八は、自分の喉めがけて、鋭い風が襲いかかってくるのを感じ、さつと身をかがめてよけた。瞬間、黒い鼻水が消えた……と、思つた途端、下から鼻水がはね上がってきた。

反射的に刀で鼻水を弾き飛ばし、新八はすくい上げるように刀を振り、ギルザの膝に叩きつけた。

ギルザは飛び上がって回避し、上から攻撃を繰り出してきた。何とか受け流したが、手がしびれるほど激しく重い衝撃が来た。

(もう一……)

全身が、氷のように冷え切つてゐる。今まで何度となく危険な出来事に巻き込まれてきただが、これほど死を身近に感じたことはなかつた。汗だくになつて刀を振る新八の姿は、まるで舞をまつてゐるようを見えた。 が、それは氣を抜いた途端に命を失う、命がけの舞だつた。

新八は、攻撃を必死に受け流しつつ、じりじりと前に出た。

しんのすけたちも、沖田と神楽も、真選組の隊員たちも、ようやく目を覚ました山崎も、凍りついたように動きを止めて、お互いの生きかけた、すさまじい闘いを見つめていた。

振り下ろされた新八の刀を弾いて軌道をずらすと、ギルザの鼻水が新八の刀の刃にぐるぐると巻きついてきた。応戦する間もなくぐいっと引っ張られ、引き寄せられた新八の喉に、ギルザの手が伸びてきた。

首を強く締めつけられる前に、新八はぐいとあごを引き、ギルザの手首を思い切り噛んだ。一瞬、ギルザがひるんだのを見逃さず、全身の力をこめてギルザを突き放すと、新八は刀をかまえ直した。

新八が噛んだ手首から、床に紫色の血がしたたつていたが、ギルザは全く表情を変えず、再び黒い鼻水を繰り出してきた。

わずかな動きで攻撃を弾き、軌道をずらすと、新八はギルザとの間合いをするりとつめた。

それから自分がやったことは、半ば無意識のうちにやつたことなので、新八自身にもどのようにしてやつてのけたのかよく分からなかつた。ただ、自分がもう無我夢中の心境でいたことは覚えている。

新八は自分の脇から襲いかかってきたギルザの鼻水を弾き、その勢いを利用してくるりと刀の向きを変えると、刀の刃ではなく柄の方をギルザに向け、勢いよく跳ね上げてギルザのあごを下から叩いた。

刀を握る手に、鈍い衝撃が伝わってきた。

血を吐きながら、

ギルザはのけぞり、飛びのいた。

口からだらだらと紫色の液体を垂らし、ギルザはますますせまじい形相になつて、一気に飛びかかってきた。

二人の身体が交差した瞬間、ギルザの首から血がしぶいた。

それとほぼ同時に、新八がよろめいた。 その左肘に黒く光る破片が深々と突き刺さっているのを、トオルは悪夢を見ているような気持ちで眺めていた。

ひと呼吸の後、ギルザが首を押さえてどさつと倒れた。新八も膝をつきそうになり、刀をつつきかいぼうにして身体を支えながら、ギルザが動かなくなり、ただの紫色の水たまりになるまで見守っていた。

敵を討ち果たしたのを確かめると、新八は腕に刺さったギルザの鼻水のかけらを、力をこめてぐいっと引き抜いた。……しかし、もう遅すぎるのは分かっていた。傷口が奇妙な具合にしびれ始め、それが次第に全身へ広がっていくのが感じられる。

僕は、ここで死ぬんだ……。

誰かが身体を抱きかかえてくれるのを感じた。顔を上げようとしたが、力が入らない。目がかすんできたらしく、眼鏡を通して見える風景に霧がかかり始めていた。すぐ近くで泣いているのは、お妙だろうか。

何だか眠かった。全てが霧に覆われている中、何か温かくて柔らかいものが怪我をした肘辺りに触れるのを感じたが、別に何とも思わなかった。

遠くの方から聞こえる声に包まれながら、新八はゆっくりと目を閉

じた。

「嘘よ、いさんのおなだわ……

「嘘よ……

お妙な、これで今日三回目の涙を流してこた。

「残念ながら、嘘じやないよ。」

リオルがギルザの残骸に目を落としたまま、静かに言った。

「ギルザの黒い鼻水にほんのちょっとでも傷をつけられたら、それでもう終わりなのさ。毒が染み渡つて息絶えるまで、多分一分もかからぬだらうな。」

リオルがよつやくこちらを向いた。 その顔が嬉しそうに輝いているのを見て、トオルは自分の目を疑つた。

「ちよつといいや。前にギルザが動物を殺したのを見たことがあるけど、人が死ぬことは初めてなんだ。ここでじつくり見させてもらいうとするよ。」

楽しそうな口調から、しんのすけたちはリオルが本気で新八の死を楽しんでくるらしいことを知つた。

トオルは激しい怒りがわき上がりてくるのを感じたが……だからといって自分に、何ができるだろう？沖田を一撃で倒したような相手だ。イリスを呆気なく、見えない攻撃で殺したような相手だ。

人の死を、顔色一つ変えずに見ていられるような奴なのだ。

怒りが冷えていく中、突然不思議な気持ちに襲われた。

笑っている、リオルの顔。それと同じ笑みを、いつか、どこかで、前にも見たことがある気がする。霧がかかったように曖昧で、ぼやけた記憶の向こう側で、これと同じ笑顔が自分に笑いかけているのを見た気がする……。

足元に柔らかいものが触れ、トオルは我に返った。

シロと、シロにそっくりだけど空色の目をした犬が 確か、テルという名前だ 新八の近くに寄ってきていた。シロはじつと新八の顔を見つめて動かなくなつたが、テルは新八の怪我した腕に身を寄せ、座り込んだ。

始めのうちは、なめられるたびに鈍い痛みが走っていたが、次第に何も感じられなくなつていつた。麻痺してきているのかも知れない。世界がぐるぐる回りながら、遠ざかっていくようだった。

新八は、湿つたものが傷口に繰り返し触れるのを感じた。
目を細め、必死に焦点を合わせようとすると、白い小さな犬の姿が見え、またぼやけた。目が空色に光っているのが分かる。　テル
が、腕の傷をなめているのだ。

これが死ぬつてことなら、そんなに悪いことじやない 新ハは
そう思つた。むしろ、これまでにないくらい、とてもいい気分だ
……。

だが……！ これが本当に死なのだろうか？

霧の中に消えかかっていた辺りの光景が、またはつきりと見え出した。身体の感覚も次第に戻つてくる。何気なく、自分の腕に手を下ろすと、テルがまだ肘をなめているのが見えた。

傷は、消えていた。

「どけ。」

突然、尖った声がした。トオルと同じ声だが、これはおそらくリオルのものだろう。

「聞こえないのか、このクソわたあめ。 どけ！」

周囲の空気をビリビリと震わすような大声がした。テルはびくっと顔を上げ、再びシロと一緒に、しんのすけのそばへ戻った。

リオルは顔を真っ白にして、新八の左腕を見つめていた。 彼は明らかに、しんのすけたちと同じぐらい驚愕しているようだった。

「テルの……唾液……」

リオルがかすれた声で、呟いた。

「そうだ……博士が言っていた……強力な……癒しの力……」

リオルが新ハを見つめた。彼の顔にこれほどのショックが浮かぶところを、みんなは初めて見た。

しばりくして、リオルがまた咳くよひと言つた。

「だがあ、そんなことはどうでもいい。ギルザはどうせ殺すつもりだつたし……お前らぐらいい、僕一人で充分倒せる……。」

リオルが近づいてきた。神楽と沖田が歯を食いしばり、傘を、バズ一力を、そろそろとかまえる。真選組隊員たちもはつと我に返つたようになり、しんのすけたちを守るような体勢へと動き始めた。

起き上がるうとした新ハは、姉に押さえられた。

「ダメよ、新ちゃん。さつき死にかけるほど頑張つたんだから、もうゆつくつしてなさい。」

リオルは何も持つていない。素手だった。それなのに、何のためらいもなく、刀をすらりとかまえる男たちの方へ歩み寄ってきた。

何が起こったのか、誰にも分からぬうちに、隊員の一人が吹っ飛び、くるくる回りながら壁に激突して動かなくなつた。

沖田は脇をすり抜けしていくリオルの髪を捕まえようとしたが、手に熱い痛みを感じて引っ込めてしまつた。神楽がすっと動き、見事な身のこなしで飛び上ると、傘を滑らかな動きでリオルの頭に叩きつけた。

リオルはひょいと傘の下をかいぐぐり、信じられないような跳躍力で神楽の頭を越えそなぐらいにまで飛び上がつた。そして、神楽に反撃する間をとえず、さつき打ち倒した隊員から奪つた刀を、神楽の肩に突き刺した。

神楽がうめいた。リオルは宙に舞い上がつたまま刀の柄に両足を乗せて体重をかけ、さらに刃を深々と神楽の身体に食い込ませた。

そして、刀を踏み台にして神楽を飛び越え、向こう側に降り立つた。トオルの、目の前に。

トオルは動けなかつた。目の前で展開される、恐ろしい闘いを田の当たりにして、沖田の手や神楽の肩から血が噴き出すのを見て、身体がしびれたようになつてゐた。

リオルが自分を見て、また微かに笑つた。
たれたような感覚がトオルを襲つた。

間違いない。僕は前にもこんな笑いを見たことがある。

その瞬間、雷に打

「…………まづは、君からだよ。」

リオルの手が、トオルの喉へと伸びた。

風間くんが、やられぬ……！

しんのすけは今までに味わったことのない、激しい恐怖を感じた。何もできないまま、田の前で友達が殺されるなんて、考えるだに恐ろしいことだった。

しんのすけは我を忘れ、リオルの腕にしがみついた。

その途端、顔を殴りつけられた。この細い腕にこれほどの力があるのかと思えるほど強烈な一撃で、しんのすけは床に倒れ込み、それでも強く頭を打つて束の間息がつまつた。口の中に、血の味がする。

「しんのすけー！」

ひろしが震える手で、とめどなく鼻血を流してぐつたりしているしんのすけを抱き起こした。瞬間、何かが耳をシュツとかすめるのを、ひろしは聞いた。

リオルも何か感じたのか、振り返りうつとした。しかし、ろくに後ろを見ないうちに、何か細いものが背中に激突した。リオルは、しんのすけのようすに床に倒れ込みはしなかつたが、完全に不意をつかれてよろけ、もうちょっとで膝をつきそうになつた。トオルの首をへし折ろうとしていた手は狙いからそれ、その隙を見逃さなかつた山崎はトオルの腕を引っ張つて、リオルの手が届かないところへと連れて行つた。

怒りと屈辱と動揺とで震えながら、リオルはゆっくりと振り返つた。

銀色の髪をした男が、少し離れた所に立っていた。 その活気
のない死んだ魚のような目には、普段滅多に見せることのない光が
……鋼のような冷たさと鋭さを秘めた光が、宿っていた。

その武拾六・どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる（後書き）

書いている途中に、新ハつてこんなに強かつたつけつてふと思つた
んですが、ま、サブタイトルと同じような意味で受け流して下さい
（おい）。イリス、リオルの二人も倒され、残るはリオルだけ……
…次回は皆さんお待ちかね（？）、銀さんが大暴れします！…そして
リオルもとうとう本気を…………！？お楽しみに！…

その武拾七・脇役があつて」」主役はひき立つんだよな（前書き）

銀時とリオルの決闘……勝利は一体どちらの手に……？今回はち
よつヒグロテスクな描[写]がありますので、ご注意下さい。

その武拾七・脇役があつてこそ主役はひき立つんだよな

銀時はじつとリオルをにらんだまま、すっと前に一歩踏み出したかと思つと、一気に駆け寄ってきた。

飛びかかつてくる氣かと思つたりオルははつと身構えたが、銀時はリオルの脇をわざと通り過ぎ、何かを拾い上げた。

木刀だつた。『洞爺湖』と書かれているが、今までの闘いでべつとりと紫色に染まつてゐるためにほとんど読めない。

銀時はこれを投げてリオルの氣をそらし、トオルを救つたのだった。

「……」

リオルは無言で、銀時をにらみつけた。燃えるような怒りが全身を駆けめぐり、かえつて言葉を出なくさせてゐるかのようだつた。

「ううして今日は、こんな邪魔ばかり起こるんだ？」リオルは心の中で呟いた。

「ううてこんな奴らが、漫画の中からやつて来たりしたんだ？」

そうだった。こいつらがいたせいで、リオルが仕組んだ出来事が次々と「破算」になつたのだ。新八、山崎、沖田がいなければ、トオルの友達はずつと前に捕まえられていたはずだし、トオルを孤立させることも可能だった。土方がいなければ、本物のボーチャンとテルが救出されることなく、結果的にテルが新八の命を救うことなどなかつたはずだ。

いや、そもそも神楽に邪魔されなければ、トオルの母親の「セモノ」が、とっくのとうにトオルを捕まえていたはずだったのだ……！

全部、こいつらのせいだ そう思った瞬間、リオルの胸の中に渦巻いていた怒りと憎悪が、一気に噴き上がってきた。

（殺してやる…………この世から、消えていなくなれ……）

銀時は心臓目がけて無数の殺気が飛ぶのを感じ、何を考える間もなく、思い切り飛びすさって逃げた。

と、今度は喉元めがけて、鋭く光るものが一直線に迫ってきた。

びくっと首をすくめた途端に、熱い痛みが走った。攻撃が、ほんのわずかにだが、首の横の皮を切り裂いたのだ。

深く息を吸い、木刀をかまえ直して、銀時は次の攻撃へと備えた。

リオルの武器は、自由に伸び縮みする爪だった。それだけだった。何だかイリスやギルザと比べても、ずいぶんオリジナリティに欠けている気がする。確かに自由にしなり、四方八方から襲いかかって

くる十の爪は、厄介ではあつたが……。

爪にかすられながらもたじろがず、徐々にリオルに迫っていた銀時は、ふと目を上げて驚いた。

リオルの瞳が、真っ赤に光っている。

血の赤だった。危険を知らせる、不吉な赤だった。しかもその奥には、真剣な殺意と悪意がうごめいている。

銀時は気持ち悪くなり、目をそらそうとした。が、できなかつた。不気味な力を秘めたその赤い光を見るつちに、奇妙な震えが腹の底からこみ上げてきた。

顔が冷たくこわばり、周囲の景色が白茶けて見え、無数の光の粒がちうぢらと視界を覆っている。息が苦しかった。

倒れではいけない。必死で気を保ち、体勢を立て直した瞬間、視界がさあっと晴れた。銀時は目を大きく見開いた。

自分の見ているものが、信じられなかつた。

銀時は、果てしなく広がる野原の中にいた。薄暗い中を舞い飛ぶ鳥の羽音が聞こえ、胸の悪くなるような匂いが漂つている。そして地面には、とてもこの世のものとは思えない光景が広がつていた。

るいろいろいと、見渡す限りに死体が散らばっている。ほとんど全てが鎧を身にまとい、刀を手にしているものもあった。

矢が何本もつきたつた死体。全身を無惨に切り裂かれた死体。ほとんど白骨化し、ごくろの虚ろな眼窩がんかが宙をにらんでいる死体……。

そしてその中には、銀時がよく知っていた者たちに、よく似た死体もあった。

銀時はあえいだ。手足も首も顔も、全てが冷たい。胸に分厚い板を押しつけられているような気がした。

息苦しきの中、銀時の目に見えている光景から、色が消えていった。

「お、お前銀ちゃんに何したネー！」

神楽が、床に膝をついた銀時を見て金切り声を上げた。

「別に。なんにもしないよ。」

軽い口調で答えるリオル。その目はまだ赤く光り、足元の銀時を見下ろしている。

「ただちゅうと、僕の力を思い知らせてやつただけさ。」

「お前の……力……？」

新ハが首をかしげて呟くと、リオルがようやくこちらを向いた。

その瞬間、新ハは嫌な匂いでもかいだかのように気分が悪くなつた。走馬灯のように、色々な光景が目の奥にちらついている。どれも借金取りに苦しめられていた時に実際に味わつた、つらい経験ばかりだった。

一瞬にして新ハは我に返り、まるでマラソンをたつた今走り終えたかのように、荒い息をしていた。

何だつたんだ、今のは？

「分かつたかな？」

リオルは再び銀時に視線を戻した。

「僕のこの瞳をまともに見た奴は、みんな無理やりに記憶をひっかき回されて、最終的には最悪な記憶を目の前に突きつけられることになるんだ。」

リオルはしゃべり続ける。あざけるような、からかうような、軽い笑みを口元に浮かべて。

「君はそもそもなかつたらしいけど、この銀髪の男の最悪の記憶は、どうやらひどいものらしいね。こんなにも動搖するなんて。

ま、すぐにその苦しみからも解放してあげるよ。」

新ハははつと気づいた。銀時の木刀が、いつの間にカリオルの手の中にあつた。

銀時は木刀を奪われたことに、まるで気づいていないらしい。目をカツとばかりに見開き、顔から血の気を飛ばして、今やガクガク震え始めている。

その頭上で、リオルが木刀を振り上げた。

新八はしゃにむに立ち上がろうとした。神楽も傘をかまえようとした。沖田もバズーカを持つ手を上げた。だが、どう考へてもリオルの動きの方が早かつた。

(間に合わない!)

新八は、血が出るほどに強く唇を噛みしめた。あの木刀が振り下ろされれば、全てが終わる……。

その時、しんのすけが勇敢とも無鉄砲とも言える行為に出た。

リオルが大きく木刀を振りかぶった瞬間、しんのすけはみさえの制止を振り切つて前に飛び出し、勢いよく右足を蹴上げた。リオルを蹴ろうとしたのではない。その顔面に、自分の靴を飛ばしたのだ。

さすがのリオルにも、これは予想外だった。はつとして、リオルがとつさに木刀で弾き上げたしんのすけの靴が、銀時の頭にこつんとぶつかった。

銀時の、焦点が合っていなかつたまなざしに、不意に光が戻つてきた。束の間眉をひそめ、それからはつとなつて、銀時は顔を勢いよく上げた。

意識がこちら側に戻つてきたのを感じた。さつき見た光景は、ただの悪夢に過ぎなかつたのか……リオルが自分の木刀を手にしているのを、銀時は目とした。

リオルが次の攻撃を始める前に、銀時はこぶしをリオルの胸に叩き込んだ。

防ぐ隙を与えないよう、唐突に腕を突き出したので、銀時が与えた一撃は通常なら肋骨をへし折るほどの威力を持っていた。リオルは完全に不意をつかれてのけぞり、仰向けに倒れた。

しかし、さすがにそのまま倒れてはいなかつた。見事な身軽さでぱつと跳ね起き、リオルは銀時と向かい合つて、動きを止めた。

リオルは無言だったが、その真剣な殺意は言葉で聞くよりもはつきりと伝わってきた。もう瞳の赤い光は消えている。小細工など使わ

ず、今握りしめている銀時の木刀で、直接銀時を始末することに決めたようだつた。

銀時は武器を持つていない。さつと周りに目をやつて、代わりになりそうなものが何もないのを確かめると、銀時はため息をつき、左手をすうつと顔の前に持つてきた。

銀時が何をしようとしているかに気づき、新八は全身に冷水を浴びせられたかのような気持ちになつた。

（左手を犠牲にする気だ……）

それで相手が気をそらした隙に、飛びかかつて木刀を奪つつもりなのだ。

リオルはそれに気づいているのかどうか、銀時をにらみ、再び木刀を振りかぶつた。その瞳には笑みのかけらもなく、氷のかけらのようになく冷やかだつた。

左腕をやられた瞬間に、リオルの喉を右手で一撃する。 そう

銀時が心に決めた瞬間、リオルの顔にまた何かが飛んだ。しかし、今度飛んできたものは明らかに靴より小さく、しかも光っていた。

リオルが右手を上げたが、間に合わなかつた。次の瞬間、リオルが恐ろしいわめき声を上げ、右目を押された。激しい苦痛を訴える叫びだ。　彼がそんな声を出すところを、初めて聞いた。

リオルが右目を押さえていた、その指の間から見えたのは、小さなコンパスだった。

その一瞬が、銀時の運命を変えた。銀時はさつとリオルに近づくと、その左手首に手刀を食らわせ、木刀をもぎ取り、その勢いを利用しでリオルの肩からわき腹にかけて、斜めにすっぱりと切り裂いた。

リオルが再び叫んだ。今度は獣が吠えるような声だった。

紫色の血を全身に浴びながら、銀時は木刀を振り上げ、リオルの喉元に、まっすぐ突き込んだ。

リオルの口と首から、紫色の血が噴き上がつた。それはまるで、グロテスクな噴水のようにも見えた。

リオルは白目を向き、今や本物の風間トオルとはかけ離れた形相となつてのけぞり、床に倒れていった。

「銀さん！」
「銀ちゃん！」
「旦那ア！」

新八や神楽、沖田たちが、叫びながら駆け寄ってきた。銀時は木刀をぶらさげたまま、ぼんやりと床に倒れたりオルを見つめていた。

リオルの顔は死ぬ間際にあつても、まだ怒りと憎悪の色を失つていなかつた。喉の奥から「ごぼ」、「ぼ」と耳障りな音を立て、次第に人としての形を失つていきながら、リオルはふところをまさぐり、何かを取り出した。

ところが定春は、リオルの不審な行動を見逃してはいなかつた。その巨体からは想像できないほどの速さで、さつとリオルの手からその何かをかすめ取り、ぱとりと床に落とした。

リオルが再び怒りと失望のわめき声を上げた。神楽が床に落ちたものを拾い上げる。

「…………何アルカ、コレ。リモコンみたいアル。」

突然はつと息を呑む音がした。そちらを見ると、外国人の男がこの映画の、本来の黒幕になるはずだつたアミーゴスズキが、大きく目を見開いて神楽の手の中にあるものを見つめていた。

ジャッキーがその腕に手をかけた。

「パパ、それが何か知ってるの？」

「こざという時のために作つておいた、このアジトの自爆スイッチだよ。スイッチを押してから十分で起動する……そうか……これもそいつが持つっていたのか……」

沖田が半ば呆れたような、半ば感心したようなまなざしを、足元に広がるリオルの残骸に向けた。

「どうせ死ぬんなら道連れに、つてわけか……まったく往生際の悪い奴でイ。」

「定春、お手柄アルネ。」

神楽はぽんぽんっと定春の巨大な頭を叩いた。

銀時は、リオルが痙攣^{けいれん}し、やがて動かなくなり、ただの紫色の水たまりに変わつていくまで、目をそらさずに見つめていた。そしてよつやく、しんのすけたちが固まつている方へと目を向けた。

しんのすけと目が合つと、銀時はちよつと笑みを浮かべてうなずきかけた。

「…………さつきは助かつたぜ、野原しんのすけくんよ。」

しんのすけは頬を紅潮させて、銀時を見つめていた。

「先生、すいへカッ！」よかつたゾー！」

銀時はふんと鼻を鳴らした。

「俺は先生なんかじゃねえ。だから、先生って呼んでもらひ必要もねえ。…………まあとにかく、あの靴がなかつたら正直俺は危ないとこだつた。どうもあんがとよ　　トオル、お前もな。」

ぽかんと口を開けて、リオルのなれの果ての姿に見入つていたトオルは、え？というような声を出して銀時を見上げた。

「あれはお前だろ？コンバスをリオルの目に当てたのは。」

トオルの頬が、しんのすけと同じぐらい赤くなつた。銀時から皿をそらし、トオルは呟くよつと言つた。

「ポケットの中にたまたま入つて……でもまさか、あんなにまともに当たるなんて思つてませんでした。」

「俺だつてできねえよ。まぐれつてのは恐ろしいねえ。」

そう言つてから、銀時はふと思いついてリオルの残骸のそばにいき、紫色の血だまりの中からあるものを拾い上げた。紫色に染まつた、トオルのコンパスだつた。

銀時はそれをつまむと、トオルを見た。

「…………」いやあダメだ。汚過ぎて使えねーよな。」

トオルはコンパスを見て、思わずといつた感じで笑つた。

「…………新しいのを買わなきゃ…………」

「銀ちゃん。」

突然後ろから呼ばれたので振り返ると、目の前に神楽が立っていた。
なぜか妙にばつの悪そうな顔をしている。

「…どうした？」

尋ねると、神楽は手に持っていたものを、そつと銀時の方へ差し出した。

リオルから奪い取った、あのリモコンだった。

「コレ…………いじつてたらスイッチ押しちゃったアル。」

「 イレーチだー早くこれに乗れ！！」

銀時は鬪いの最中にも止となかつたよつな怒鳴り声を上げて、混乱した春日部市民たちを次々に簡易エレベーターのよつなものに押し込み、上に運んではまた下げてを繰り返していた。

「 つたく、神楽のバカやろ？ がー！ ていうかずっと前にもなかつたつけ、こんな展開？」

「 銀さん、しゃべってる場合じゃないんですよ。」

手伝つてこむ新ハガ、釘をさした。

もつ春日部市民のほとんどが、安全な外へと脱出していった。
あと残っているのは、しんのすけたち春日部防衛隊とその家族たち、
幼稚園の先生方、風間みおり、ジャッキー親子、そして銀時たちと
真選組だった。

「よし……これで終わりだな。」

「あと三分五十秒ですよ。」

山崎が、やや神経質に言つた。

「早く乗つましょ、つー！」

みさえの声にせかされたよつこして、一回はエレベーターのような
乗り物に足を踏み入れた。ぎゅうぎゅうつづめで、何とかほとんどが
乗り込んだが……。

「……俺は乗れねーみてーだな。」

銀時が、ただ一人エレベーターの外に取り残され、頭をぐりぐりか

きながら言った。

確かにエレベーターの中はもう誰もいなかったので、もう一人乗れそうな余地はない。

みんなは顔を見合せた。

「銀さん……」

何か言いかけたトオルを遮るようにして、銀時が突然、エレベーターの上昇ボタンを強く押した。

「銀さん！？」

重たそうに上がり始めたエレベーターの上から、新八が叫んだ。銀時もまた、下からこちらを見上げて叫んだ。

「タイム・イズ・マネーだ！着いたらさつと下りよう……」

まさかあの銀時に、『時は金なり』と諭される時が来るとは思っていなかつた新八だったが、言われるまでもなくエレベーターが地上

の倉庫のような所に出るなり飛び降りた。神楽などは慌て過ぎて、つまづいて沖田の腰につかまり、二人で派手に転倒した。

また大ゲンカを始めた二人を尻目に、新ハたちはエレベーターが再び下がっていくのを不安げに見守っていた。とつさに腕時計を見て、トオルは青ざめた。　あと三十秒しかない。

エレベーターが下りていく音が、異様なほどゆっくりに聞こえた。トオルはぎゅっと目をつぶつた。今まであんなに頑張って闘つたのに……こんなふうに終わるなんて……そんなはず……。

ドガアアアアアン！

耳をうつする大音響が、春日部山中に響きわたった。

同時に爆風が吹き上がる。熱気が押し寄せてきたかと思うと、炎が高く高く燃え上がり、アジトの入り口になっていた小さな小屋を吹っ飛ばした。

爆風に髪をなぶられながら、トオルは涙を流していた。

銀時がどうなったか、考えるまでもなかつた。

周りにいる全ての人々が、凍りついたように動きを止めている中、神楽がトオルと同じように涙を流しながら、前に進み出でた。

「銀ちゃん！」

神楽はかすれた声で叫び、深く息を吸つた。そして、せつせつと大きな声でまた叫んだ。

「銀ちゃん！」

「…………ひめせーな。出びいじめやつほーだらうが。」

背後から聞こえてきたぶつきらぼつた声に、みんなは弾かれたように飛び上がり、一斉に振り返った。

坂田銀時が、木立の中に立っていた。

髪も服もボロボロだった。あまりにひどい様子なので、新八は一瞬幽霊になつてでてきたのではないかと思つたほどだ。しかしこう

「火の焼け焦げた服と、身体中にくつついた木の葉を見て、新ハは命がいった。

爆発が起じた時、エレベーターで上がりかけていた銀時は、爆風によって一気に押し上げられ、地上へ飛び出したのだ。そして運良く、木の茂みの中へと落|下した。

何ともみすぼらしくなつてしまつた銀時の姿を見ていのひかこ、新ハの視界が涙でにじみ始めた。

トオルはまた泣いていたが、それとは全く違ひ、喜びを押さえかねた涙だった。袖で目をめりやくめりやにこすりながら、銀時に近寄ろうとする。しかし、神楽の方が早かった。

「銀ちゃんアアアん！」

叫びやも、神楽は銀時の身体にしがみつき、力いっぱい抱きしめた。

「いてええええ！――！」

炎の明かりに照らされた春日部山に、叫び声が響きわたった。

その武拾七・脇役があつて、僕はひき立つんだよな（後書き）

銀時たちとしんのすけたちの冒険も、次の次ぐりこで一応の終結となる予定です。これまで応援してくれた皆さま、どうもありがとうございます。最後まで、どうかお付き合ってください（。o^—^o）

その式拾八・別れの時には振り返るな（前書き）

サブタイトルからも分かるかも知れませんが、今回で銀時たちはしんのすけたちと別れることになります。何で銀時たちがそもそもこの世界に来たのかも、ある程度明かされます！

その武拾八・別れの時には振り返るな

日が柔らかに注ぎ、あちこちで小鳥がチュンチュンとさえずつていろ。もうややそろ暑くなつてくる頃だといふのに、春日部は春まつさかりのように穏やかな空氣と天氣に包まれていた。

銀時たちが帰る時が来たのは、そんな日のことだった。

二セモノ事件のせいで破壊された生け垣や塀が全て元通りになつた中で、定春に倒された野原家の生け垣の一部はそのままになつた。そこに隠されていた大きな穴も、今なおぽつかりと口を開けていふ。

「……本当に、行ひやうの？」

穴のそばに立つてゐる銀時たちに、ネネが呟くよつて言つた。

銀時はネネを見下ろして、少し笑つた。

「ああ。……………だいぶぬっくつしきついたからな。」

ニセモノたちのアジトから出てきた時、銀時たちは身体の色々な部分に傷を追い、しかもニセモノたちの返り血を浴びたせいでそれぞれすさまじい有様になっていた。

特に銀時はひどく、全身紫色のネットネットまみれだった。このままだとくさくてたまらないと神楽が言い出したので、真選組の隊員の一人がみんなを案内し、敵のアジトの入り口近くに設けられた真選組の陣地へと導いた。

陣地に入ったしんのすけたちは、驚いて声を上げそうになつた。

土方が腹から胸にかけて包帯でぐるぐる巻きにされて横たわっているのにもびっくりしたが、何より彼らを驚かせたのは、土方のそばに影のようにして寄り添つているボーちゃんの姿だった。

そうして銀時たちは、土方が壁の隙間からボーちゃんとテルを助け出して逃げ、敵と闘い気絶するまでのいきさつと、その後の出来事を説明するボーちゃんの話を聞いたのだった。

土方が倒れた後、シロとリンドに導かれてボーちゃんは真選組の元へと連れて行かれた。そして隊員たちはボーちゃんの話を聞くやいなや、すぐさま土方の救出と手当を行い、ボーちゃんにはじこから離れないようにと語りつけた。

ちなみにシロとしんのすけを除く野原一家は、ニセモノたちが現れる間際に真選組と九兵衛たちの手により救出されていたのだ。

新ハたちが一番知りたかったのは、九兵衛たちがどうやってこの世界にやって来れたのかということだった。その答えはなんと、そもそもどうして銀時たちが突然、クレしんの映画の世界の中へ引っ張り込まれることになったのかということにも繋がっていた。

幕府は魔虞蛇博士の家のテレビに接続されていた機械を綿密に調べ、やがてこの装置が、テレビで放送している番組の中へと実際に潜入できるようにする機能を持つということを突き止めた。一緒に調査していた近藤はさつそく真選組駐屯所に帰り、そのことを土方や沖田に知らせようと思つた。……それが、ちょうど銀時たちがいなくなつた金曜日の夕方のことだったのだといつ。

ところがここで、問題が起つた。^{他でもない、警察庁長官} であり『破壊神』の異名を持つ、^{まつだいらかたくりこ} 松平片栗虎のせいで。

何でも彼は、

「これさえありやエロビートオの中にでも入れるじゃねえか、めつけるんだな。」

とか言って、それだけならまだしも装置を手の平でバンッと思いつきり叩いたらしい。

案の定といふか何といふか、装置は奇妙な音を立てて震え、しかも

……光り始めた。

爆発するかも知れない そう考えた近藤たちは、反射的に部屋の外へ逃げようとした。しかしそうこうしていのうちに、装置の光はみるみるおさまっていき、やがて震えも止まってしまった。

やれやれと冷や汗をぬぐつた近藤たちだが（松平は二つの間にやら姿を消してしまつていた）、近藤はふとあることに気づき、不安になつた。

調べていた時、装置の電力が急になくなつたりしないよう、その機械は巨大な充電器に繋がれていた。そしてその充電器は、江戸の人間たちが使う電気の供給源でもあるのだ。

そんな大切なものを一つの装置のために使つてしまつようなどころに、松平片栗虎という男の性格が現れている。

それはともかく、その充電器は江戸中に電気を送つてているのだ。さつき機械が変なことになつた時に、何か有害な電波などがその中に混じつたかも知れない。そう考えて、近藤は不安な気持ちになつたのだった。

そして急いで帰つてきてみると……土方と沖田と山崎の姿が消えて、大騒ぎになつていたというわけであつた。

その後の調べで、銀時たち三人に定春、お妙もいなくなつていてることが判明した。しかも行方不明になつた者たちが最後にいたと思わ

れる部屋ではテレビがつけっぱなしになつており、しかもクレしんの映画が流れっぱなしになつていたのだ。

「こつは何かある」と考えた近藤は、ふと思いついた。

魔魔蛇博士の家に踏み込んだ時、あの装置が接続されていたテレビのDVDプレーヤーに、クレヨンしんちゃんの映画のディスクが入っていたのだ。名前は、確か……。

その映画の名と土方たちが見ていた映画が一致したことを知り、さういふの装置の件のことも考え合わせて、近藤はほととぎし確認した。

トシたちは、博士と同じく、映画の世界に入ってしまつてゐる。

「…………で、僕らがいなくなつてから、どれぐらい経つんですか？」
新八が我慢しきれなくなつたように口を挟んだ。

「さうだな…………ようじ一週間ぐらいだ。」

なぜすぐに助けに行けなかつたのかと言つと、先の松平に食らつた一撃のせいで機械が狂い、すっかり使い物にならなくなつて、直さざるを得なくなつたからだ。何しろ見たこともない機械なので、綿密に調べたとはいってもすぐに修理できるはずがない。しかしきるなら、早めに助けてやりたい。近藤のその気持ちをばねにしたかのように、修理は順調に進んで予定よりも三日も早く終わった。そうしてこの世界に、真選組の面々が投入されたというわけであつた。

九兵衛はお妙がいなくなつたと聞いていても立つてもいられなくなり、幕府から情報をつかむとすぐに近藤の元へ走つて自分も連れて行つてくれるようになつた。

初め、近藤は首を縦に振らなかつた。当然だろつ。警察の仕事に、一般人を巻き込むなど論外だからだ。しかし九兵衛の滅多に見せない熱心さや、その剣術の腕を見込んで、最終的には協力してもらうことに決めた。

近藤はあの装置を慎重に操作して、クレヨンしんちゃんの映画に通じる道を何とか作り出した。その出口がなんと、定春が見つけた野原家の生け垣の下の大穴だつたのだ。

入り口は目立たぬよう、九兵衛の家である柳生家の地下室に設置された。そこへ行つて天井の大穴の下に立ち、装置のスイッチを押してもらえば一気にクレヨンの世界へ直行といつわけだ。

しかし、彼らが敵のアジトに通じる抜け道を見つけたり、陣地を作つたりと色々している間に、ニセモノたちの本格的な攻撃が始まつてしまい　　後はしんのすけやトオルが知つてゐる通りだつた。

ただ近藤は一度だけ、ここに来たことがあつたらしい。土方に電話がかかってきたのは、その時だつたのだ。

土方は、アジトでの闘いのことを横たわつたままで聞いた。

つい先刻に目を覚ましたこともあつて、土方の顔は血の気がなく真っ青だつたが、意識は驚くほどはつきりしていた。顔を山崎たちの方に向け、ボーちゃんの小さな手に右手を握られたまま、自分の部下たちがそれぞれ興奮した表情で闘いにどんなふうに勝利したのか話すのを黙つて聞いていた。

話がイリスとギルザについてのところまで来た時、土方は初めて口を開いた。

「…………マサオと、こいつの二セモノを……倒した?」

「はい。イリスの方はリオルにやられたんですが……」

「…………そして、そのリオルも、死んだわけか。」

「はあ…………」

副長がわずかに眉を寄せているのを見て、山崎は不思議に思つたが、多分自分が戦闘に参加できなかつたのを不満に感じているんだろうなと考えて、何も言わなかつた。そして服や身体に染み着いた汚れと匂いを落とすために、真選組の陣地に設置されたいくつもの五右衛門風呂の一つへ、向かつていった。

しんのすけたちは五右衛門風呂を珍しがり、面白がつた。しんのすけは

「ネネちゃんも」一緒に

などと言つてみさみにげんこつを食らつた。

風呂から出て身体をふき、いつの間にか用意されていた浴衣を着ると、トオルは陣地から少し離れた場所に立つて、深々と息を吸い込んだ。

終わったんだ そんな思いが、何だかすがすがしい気分と一緒に胸いっぱいに広がつた。

怪我にもかかわらず、銀時たちはすぐ「あの穴を通りこむらの世界に戻るよ」に言われた。

「急で悪いんだが。」

と、近藤は本当にすまなそづて言つた。

「実を言うと、あの装置はまだ不完全で不安定なんだ。だいぶ早急に修理したんでな。いつまた故障して、穴がふさがつちまうか分からないんだ。」

そつ言われた銀時たちは、しばらく考えた後に答えを返した。

「三日だけ、こちらにこさせてほしい。四日目の朝になつたらすぐ

に帰るから、と。

しばし迷つた後、近藤は承諾した。

銀時たちは残された三日間を、昼は幼稚園で、夜はトオルの家で、ゆっくりと身体を休めて過ごした。特に怪我のひどい土方は、刀を手に届くところに置くこともなく、ただとろとろと居眠りしていることが多くなつた。……身体が抜け殻になつてしまつたかのように、だるかつた。

土方が幼稚園でいる時は、ボーちゃんがいつもそばにいた。二人は大した会話を交わすわけでもなかつたが、ボーちゃんは土方のそばにいるだけで満足らしく、いつも近くで集めた石をしげしげと眺めたり、鼻水芸の練習をしたりしていた。土方もまた、そんなボーちゃんを追い払おうとはしなかつた。

沖田はマサオをそばに連れて、バズーカの撃ち方を教えようとして山崎にたしなめられていた。一方で山崎は、しんのすけとのミントンの試合に熱中していた。

二セモノたちの暴走のせいで、あちこちの塀や家の一部が壊されていたが、主に神楽と定春の協力のおかげで、それらは驚くべきスピードで復旧されつづつあった。神楽の力に春日部の人々が目を丸くし

ているのを見守りながら、新ハとお妙はのんびりと散歩したり、話をしたりとゆつたりした時を過ごした。

みおりはあの騒動が終わつてから、一日だけ春日部に滞在しただけで、トオルのマンションの部屋の前に置き手紙を残し、さつさと旅立つていった。 今どこにいるか、それはトオルも知らない。

テルとリンドは、なんとジャッキーたちMRHに、彼女の父親と共に引き取られることになった。

ジャッキーも計画の初期のうちに捕まり、父親と共に監禁されたのだ。ワゴンに乗つて爽やかな笑みを浮かべながら去つていたジャッキーの顔を、しんのすけは今も心の中に焼きつけていた。

「あの一人を……処分する気にはなれないの。」

ジャッキーは肩をすくめてそう言った。

「いい奴みたいだし……なんか、調べてみたら面白いことが分かるかも知れないから。」

「田たつと、土方はむづめとんど元氣を取り戻していた。そして銀時と顔を合わせた途端に早速、一人でいがみ合いを始めた。

「俺がネネの夫役をやつてやる。だからお前はガキ役でもやつてやる。

「何言つてんだ、てめーは犬役だろーが。」

「じゃ、じゃあ一人共ネネちゃんの夫役になればいいんじやない?」

マサオが慌てたように口を挟んだ。助け船を出したつもりだったのだろうが、とんでもない。

「何だお前は?」こつは俺の女だ、とつとと压ていかねえと斬るぞ
「...」

いつもにましてす」に内容のおまけになってしまった。

「ああ、俺を斬るだあ? てめー誰に向かって口をきこてやがる、このマコラーが。」

「うむセラーマリーラー関係ねえだらうがーー！」

ネネもびりゅうて翻り込んだものか、困った顔をしてこる。

結局その日のリアルおままで、銀時と土方ののじり合いだけで終結したのだった。

「…つたぐ、あのマリ野郎のせいでネネとの最後の時間が楽しめなかつたじゃねーか。」

自分のことば棚に上げてぶつぶつ言つていた銀時の視線が、ふと少し離れた所に座つて本を読んでいるトオルの姿をとらえた。

表情が明るくなっている。それを見て、たとえうわべでは平氣そうに装つていても、今までこの少年がいかに怯え、氣を張つてきていたかがよく分かつた。

不意に、視線に氣づいたかのよつにトオルが目を上げてこちりを見た。

銀時をみとめて、その大きく黒い瞳が、揺れた。

銀時は歩み寄ると、そつと手を伸ばしてトオルの頭に置き、呟いた。

「…………悪いな。」

トオルがけげんそつこひらを覗上げる。そのままなざしを、銀時はまっすぐに受け止めた。

「勝手に上がり込んできたかと思つたら、また勝手に帰ることになつちまつてよ。」

トオルは顔を歪め、またあの時のように、銀時の腰に手を回して抱きしめた。

「俺らがいなくなつても、ちゃんと俺らの活躍は見守つとこ

てくれよ……俺たちも、やつするかひな。」「

トオルがうなずいた。

その腕から伝わる温もりを、銀時は長いこと感じていた。

最後にみんなで記念写真を撮って、その日の幼稚園は終わりになつた。

気持ちよく晴れた日だった。

野原一家の穴のところへは、しんのすけたちはもちろん、幼稚園の先生やひまわり組のほとんどの園児が見送りに来てくれた。

ネネとマサオはおみやげにと、手作りのクッキーをみんなにプレゼントした。しんのすけは何もあげるものなど考えていなかつたので困つてしまつたが、悩んだ挙げ句に半ケツダンスを披露して、その場を大いにわかせた。

トオルは銀時たちのそばにより、銀時の袖をつかむようにして（銀時たちは『銀魂』の登場人物である時の服装に戻つていた）一言二言、わよならとこうよくなことを呟いていたが、それだけですぐに身をひるがえし、しんのすけたちの間へと戻つていった。

最後にボーちゃんが、彼らしくもなく何だかもじもじしながら、そつと土方に何かを差し出した。 それはボーちゃんの手の平よりも大きな、一個の石だった。

「…………あの…………」れ、僕が拾つた、とつておきの、石。土方さん に、あげる。」

心をこめて磨いたのだろう。その石は、まるでダイヤモンドのよつにきれいに輝いていた。

さて副長はびくびくしながら、と山崎ははらはらしながら見つめていたが、土方は少し首をかしげてボーちゃんを見下ろし、ふん、と言つて石をつかみ取るとそのまま上着のポケットに突つ込んでしまつた。そして、沖田と山崎を振り返つた。

「…………行くぞ。」

もつ他の真選組の隊員たちは、帰つてしまつてゐる。お妙ちゃんが帰るまではここに残ると言い張つていた九兵衛も、東城の説得に負けてつい昨日、向こに帰つていつた。

今ここにいるのは、最初にトオルと会つた七人と一匹だけ 万事屋一行に真選組の三人、そしてお妙だけだつた。

土方はもう穴の縁に立ち、中を覗き込んでいる。

「まずは俺たちからだ。それからお妙さん、万事屋の順に、それぞれの家の中へ直接送り届けてもらうことになつてる……俺らが飛び込んでから穴が光つたら、すぐに飛び込めよ。 総悟、後ろで何してる。」

「いや、何でもありやせんぜ、土方さん。」

沖田がさりげなく、しかしさやせんぜ、土方さん。

土方の隣に移動した。反対側の隣には、山崎が立つ。

「じゃあな、あばよ。」

まるでついでみたいに言われた一言に、トオルがはっと顔を上げると、三人の背中が穴の中へ消えていくところだった。すぐそばを誰かが通り過ぎたので見上げると、お妙だった。

「お別れね、トオルくん。」

「お妙さん……」

声をかける暇すらない。穴の中が光ったかと思うと、お妙は何のためらいもなく、後ろを振り返りもせずに、穴へ飛び込んだ。

今度は神楽が、定春に乗つて進み出た。

「定春、みんなにバイバイするアル。」

神楽に言われ、定春は尻尾を振りながらつぶらな瞳でみんなを順々に見回していつたが、突然身をひるがえし、さつきのお妙と同じよ

ついに脇田もふらすに穴に飛び入った。

「神楽わ…………！」

新ハが眼鏡をしつかり押さえながら、悲しげな目でトオルを、みんなを見つめた。

「悪いけど、振り返らないよ…………別れが余計つらくなるからね。」

言い置いて、新ハもさつと飛び込んだ。

穴の縁に、銀髪の男が一人だけ残った。

「銀さん！」

トオルは我慢できなくなつて叫んだ。しんのすけもネネもマサオもボーちゃんも、ほとんどみんながそう叫んだ。

「銀さん！」

「銀八先生！」

銀時は、てんでに泣きそつた顔をしている子供たち
組の園児たちを、一人一人眺め回して「ヤッとした。

「じゃあな、園児諸君。」

そう言いながら、一歩一歩背を向け、するつと穴に歩み寄る。

「 いい子ならジャンプはちゃんと、買って読めよ。」

銀時が穴の中に足を踏み入れた瞬間、視界が涙にかすんできて、ト
オルはぎゅっと田をつぶった。

ようやく田を開くと……そこには穴がなかつた。生け垣は倒れた

まだつたが、穴があつた場所にはまつ平らな地面があるだけ。大きな穴など、どこにも見えなかつた。

銀時の姿もまた、見えなくなつていた。

トオルの話から、だいぶ長いこと落ち続けるんだろうと覚悟していた銀時だったが、闇の中の落下の旅はあつという間に終わった。

「……あ、来ましたね、銀さん。」

少し先に立っていた新八が、振り返った。その横には定春を連れた神楽の姿も見える。

彼らが今いるのは、夜の暗闇につつすらと包まれた町だった。

春日部のようじれいな、きちんと整頓された場所ではない。居酒屋やら、キヤバクラやらのいかがわしげな店や、ゴミが積み上げられた路地、雑多につめ込まれたように見える家々……。

銀時たちのいた場所

そして、これからもずっとここるべき町だ。

「帰つてきましたねえ……」

呟くと、新八が首をねじ曲げて、銀時を見た。その目には、明るいそれでいて、わずかに悲しげな光があった。

新八は、微笑んだ。

「銀さんも、やつ思ひでしょひへ帰つてきたなつて。」

銀時は小さくうなづいた。

そう、自分たちの居場所はここなのだ。たとえ別世界に引き込まれたとしても、そしてその世界にいる人々のことを、どんなになつかしく思つていいとしても、自分たちが本当にいるべき場所、いたい場所はここに他ならない。

そのことが今になつて、胸にしみ入つてこくよくな氣がした。

暗くて狭くて人気のない路地を、新ハたちはゆっくりと歩いていった。

やがて、家と家の隙間から見慣れた建物が見えてきた時、新ハは胸に熱いものが突き上げてくるような気持ちになった。神楽も同じなのだろひ。何も言わず、ぼうとした顔をしている。

しばらくの間、誰も動じつとしなかった。
時が顔を上げた。
そして不意に、銀

「
ん？」

袖の中で、カサカサと何かがするよつた音がわずかにする。無作為に手を突つ込むと、大きくて固めの紙片みたいなものが手に触れた。

引っ張り出してそれを眺めた銀時の顔色が、一瞬変わった。

そしてふと笑い、新ハと神楽の方にそれを差し出した。不思議そうに受け取った二人の顔にも、驚きと、自然な笑みが浮かぶ。

それは、昨日幼稚園で最後に撮った集合写真だった。

(そ う か ……)

トオルが銀時の袖をつかんだあの時 そつと中に、この写真を忍ばせたのだ。そういえば集合写真を撮りうと言つ出したのも、トオルだった……。

(… バカだな、お前は。)

銀時は心の中で呼びかけた。

(「とにかくしなくても、忘れたりしねえよ。」)

[写真の中のしんのすけたちは、笑っている。そのそばには銀時たちがいる。 今も、これからも、ずっと。]

よつやく写真から顔を上げて、もう一度前方の建物を見やつた。

一階は電気が消えているが、一階は明るい。中からがやがやと、人の声もしてくる。今夜もスナックお登勢は、それなりに繁盛しているようだつた。

銀時は後ろに新八たちを連れて、一階の入り口の戸に近寄り、手の平でバンバンと叩いた。

「おーい、帰つたぜ、ババア。なんか食つもん用意してくれ。」

声をかけると、聞き慣れたふつきりぽつな怒鳴り声が、返事を返してきた。

三人は顔を見合させてちょっと笑い、定春も入れるように大きく戸を開け放つと、中に入つていつた。

その式拾八・別れの時には振り返るな（後書き）

最後になつて、銀時たちを彼らの世界へ帰すことができた時には、私も思わず胸が熱くなつてしましました（笑）。話自体はこれで完結ですが、最後にエピローグみたいなものと後書きを兼ねた次回予告みたいなものを書いて終わりにしたいと思います。……長きにわたつて私の書く未熟な話に付き合つてくれた皆さん、評価感想を下さつた皆さん、本当にありがとうございました（――）ここからもよろしくお願いします

その武拾九・夕陽を見ると昔の「ひを急に思ひ出しあつたる（前書き）

始めが銀魂だったので、終わるのはクレしんとこづれとこづれ……。エ
ピローグなので、特に読まなくても差し支えはありませんが、興味
があるなら読んでトドコ（爆）。

その武拾九・夕陽を見ると昔のことを急に思い出したりする

夕陽が春日部を、一面の赤に染め上げていた。

その赤い光が降り注ぐ、狭い路地の中で、カスカベ防衛隊の面々はたたずんでいた。

「ねえ、風間くん…」

「ん？」

トオルは何だか焦点の合っていないような瞳で、少し離れた所の地面を見つめている。ネネが重ねて聞いた。

「何で急に、ここに来ようと思ったの？」

ああ、とこりよつた声を出して、トオルは少し笑った。

「…」じで、初めて銀さんたちと会つたんだよ。」

「…」

ネネは息を呑んでトオルを見つめた。マサオもボーチャンも、普段

は全く空気を読まないしんのすけまで、みんな黙りこくれてトオルの横顔を見つめていた。

今、トオルの視線の先には、初めて会った時の銀時たちの姿が見えているのかも知れない。

夕陽が傾いていく中、トオルはそばに銀時たちのいない、ぽっかりと心に穴の開いたような寂しさを感じていた。

銀時たちと共に暮らしたのはわずか一ヶ月にも満たない間だったといつのに、その時にできた思い出はなんと多いことか。彼らとここで出会ってからのことをつけつづ、頭の中で確かめるようにしてトオルは思い出していく。

不意に出会い、また不意に別れることになってしまった人たち。これからは実在しない一次元の存在として、漫画やテレビを通してしか見ることのできない人たち……もう一度と、ああやつて実際に会つことはあるまい。

今銀時たちは、どこで何をしているのだろう。どんな思いで、どんな暮らしを営んでいるのだろう。……もうその人生に、自分が関

わることはないのだ。そう考へると、ちくちく針で刺されたような鋭い痛みが、胸の中にさづいた。

（僕は結局、あの人たちに助けてもらひにじしかできなかつた…）

それでもいつか、トオルが彼らを思うのと同じような気持ちで、銀時たちが自分のことを思い返してくれる時が来るかも知れない。

本来なら決して交じり合つともなく、知り合つことすらなかつたはずの人たちが、運命の糸にたぐり寄せられたかのように引き合つことがある。…………しかしそれでも結局別れ、自分たちの生活へと戻らなければならぬ時は必ずやって来る。銀時たちは向こうの世界に、そして自分たちは春日部でのいつも通りの生活に、帰らなくてはならなかつたようだ。

（…ああ、またみんなでごはんを食べれたらな。）

夕陽を見上げて、トオルは微笑んだ。

オレンジ色の光が作る五つの影が、長く、長く、路地の中に伸びていた。

その武拾九・夕陽を見ると昔の「」を急に思い出しちゃう（後書き）

これにてクレしんと銀魂の融合作品は、一応の終了です。

…さて、次は後書きと次回作の発表といつわけですが、Jリで一つ、勝手に思いついたことがあります。

私一人で回想をグダグダ述べるのもアレなので（笑）、読者の皆様から質問を取りたいと思っております。

ただし質問の内容はこの作品に限るもので、例えば

・あなたは何歳ですか？

みたいな個人情報とか（爆）次回作についての質問には答えません。それと答える質問は先着10個までです。だから質問は、一人一個ということでお願いします。…まあそれだけ質問が来るとも限りませんけど。

多分後書きを書き始めるのが明後日ぐらいになるので、期限は短いですが、明日の真夜中までとします。日付が変わるまでならオッケーです 感想・評価の所に送っちゃって下さい。

…なんか急ですいませんが、皆さんの「」協力を、どうぞよろしくお願いします（礼）。

そして次回作の情報も、どうぞお楽しみにっ！

終わつ…」それでみんな「うわー…」ああ、どうかな? (前書き)

意外な事実が明らかになりますー…………あれ、後書きなのに前書き
書いていいんだらうか (爆)。

終わつた…………。何だか、そんな気持ちでいっぱいです。

書き始めた当初は、どのようなストーリーになるのか詳しいことは何も考えていませんでした。本当に、その時その時に頭に浮かんできた内容を書きつづつていつただけです。こんなふうに進めていつた小説を完結せらえたことができたのも、ひとえに皆様のおかげだと思っています。

……さて、最終話の後書きで募集した質問ですが、やはり急過ぎましたね…………というわけで、とりあえず集まつてきた質問だけでも取り上げさせていただきたいと思います。

まず、ヴァイスロンド様の『質問』『リオルはなぜ風間くんを憎むのか?』ですが、残念ながらここではお答えできません…………最初からいじめんなさい(へへへ)

実はこの質問…………次回作のメインテーマともなつてくるのです……（いきなりネタバレ御免）。

さて、では次へ参りましょ。

鯰に太鼓様からの『質問』…………『映画での一セモノはコンニャクでできたクローンだったが、この小説ではどうだったのか?』

確かに、あまりこの部分については追求していなかつたので、戸惑つた方も多いかたも知れません。

魔虞蛇博士は、二セモノたちに力と意志を「えたわけですが、その二セモノたちを始めに作り出したのはもちろん、アミーゴスズキです。よつて博士も二セモノ製造のやり方に関しては、基本的にアミーゴスズキと同じ手段をとつてゐるのです。

つまり二セモノを作り出す技術はアミーゴスズキのもの、それにさらに改造を施したのが魔虞蛇博士、といえば分かりやすいでしょうか。

つまり二セモノたちは、基本的にはコンニャクローンと同じものだというわけです。

……分かりにくいでですか？だつたらすみません（汗）。

そして、次は最後の質問（早つー）。

B様の「質問　『26話がハリー・ポッターと秘密の部屋のリストに似過ぎてないか？』

……はい、確かにまるで意識しなかつたと言つたら嘘になります。

ごめんなさい（――）

私の小説には、私の好きな本の内容が反映されてしまうことがあるので……確かにあれはそのまんま過ぎでしたよね。次回は気をつけようと思つてます。

ところわけで、質問コーナー、あととこいつ間に終わっちゃいました（笑）。

ではこれから、本格的な後書きへと移る」といたしましたよ。

銀魂とクレしんを融合させるという、無謀な挑戦を行ったわけですが、そもそもこの小説を書き始めたのが去年の1~2月。なんとセンター試験の直前、受験シーズンの真っ只中！その時点で既に、かなり無謀な試みだったというわけです。

それでもちゃんと大学に入れたといつのですから……これから何が待つていいかと思うと、何だか逆に怖くなってしまいます（汗）。

そして、執筆の中で大変だったことといえば　もちろん執筆自体が大変でしたが　何と言つても、一話」とのサブタイトルを考えることでした。

銀魂の漫画やアニメのものと同じようこそ、教訓っぽいものこじょつとかしいのも多々あったことと 있습니다。

話番号には古い漢数字を使うといつよつな工夫もしてみました。

そんな中、感想を下さる皆様の言葉がどれほど助けになつたことか……最後にはほとんど一日一回のペースで更新することができますが、お待たせしたこともあつたと思います。本当に感謝の気持

ちでこつぱーです。

それではそろそろ、皆様お待ちかね（？）の次回作発表に移りたいと思います。

次回作は本作品の続編となる作品です。皆様お気づきになつてingかと思われますが、本作ではいくつかの謎が、まだ残つたままになつています。

例えば、

・魔虞蛇博士は「セモノたちごと、元よりして力と意志を『えた

のか？

・『春に呼びかけてきた女の声は、誰のものなのか？

・ルビーが土方の顔を見て、思い浮かべた男とは誰か？

などです。

それらの中でも重要なのが、ヴァイスロンド様もおっしゃっていた

・リオルはなぜ、風間くんを憎んでいるのか？

そしてもう一つ……。

皆さん、リオルの闘いのシーンからラストまで読んで、何か引っかかりませんでしたか？

リオル、イリス、ギルザは倒されました。リンンドは味方だったと分かりました。ところが、これら二セモノたちの中枢の中で一人だけ、闘いに参加していない者がいます。

……そう、ルビーです。

彼女はその式拾参の回想シーン以来、闘いに顔を出すどころか、ぱつぱつと姿を見せていません。ルビーは一体どうなってしまったのか？

爆発に巻き込まれてリオルたちの後を追つたのか？それとも……。

これらの謎を全て解き明かすのが、次回作の続編となるわけです。

そしてもう一つ、大変重要なお知らせがあります。

本作同様、次回もしんのすけたちと銀さんたちが大暴れするのですが……実はもう一つのアニメが、次回作には参入します。

そう、なんと二作品のクロスオーバーとなるのです！

でも驚くことはそれだけではありません（一矢弓）。

……話は変わりますが、私が書いていいるもう一つの小説、『クレ
しん&ドリえもんズ』の小説を読んでらつしゃる方はいますか？

あれももう完結済みですが、最終話の後書きで、続編を書くということをちらりと書きました。

そして、本作『クレしん&銀魂』の続編に参入するのは、なんと…

…

ザ・ドライブもんズの盟友です。

もつ分かりましたか？（イハシ ときたらすこません）

そうです、次回作では『クレしん&銀魂』と『クレしん&ドライブもんズ』の二つの小説が、融合するのです！（一人で興奮）

…………正直言つて、これらの小説を書き始めた時にはそんな発想はありませんでした。でもこの三つのアニメを融合せたら、面白いかも知れないぞと思ったのです。

よつて、アリスの気になる終わり方をしていますが、それも次回作品の伏線だと思つていただければ……。

それでは、あらすじ紹介と題名発表へ。

あらすじ

事件は終わったと、誰もが思つていた。
しかし本当の事件は、
まだ始まつてすらいなかつた……。

『銀魂』の世界ではここ最近、クレヨンしんちゃんが放送休止になつていた。気になつた銀時たちは近藤にこねて、彼らを春日部に送ることになつた魔廻蛇博士の一次元転送装置をひそかに借り、春日部へと再び訪れる。

再会を楽しみにしていた彼らを待ち受けていたのは、胸をえぐられ

ぬよつなつりい知らせだつた……。

「トオルが……死んだ？」

あまりのことに茫然自失とし、為すべを知らぬ銀時たち……しかし彼らがトオルの部屋を訪れた時、突如事態をひっくり返すような出来事が起つる。

「トオルは生きてるよー！」

トオルの机の引き出しから飛び出してきた黄緑色のロボットは、出てくるなりそう叫んだ。しかもトオルは何者かに、命を狙われているという。そして隠されたトオルからの手紙を読んだしんのすけたちは、愕然とする。あの事件はまだ、終わっていなかつたのだ……

…！

姿を消したトオルの後を追い、『銀魂』メンバーたちとネコ型ロボット、そしてカスカベ防衛隊の、決死の攻防が始まる…！

…………とまあ、こんな感じです。なんか映画のあらすじ紹介みたいになってしまった…………（笑）。

ちょっとでも気になるなら、読んでいただきたいです。今回の始め辺りでは、実際に風間くんが登場するシーンがほとんどないですが、物語はやはり、彼を中心に回っていきます。しんのすけも大活躍させたいと思ってます。

またお登勢とか桂とか、新しい銀魂キャラも多々登場します ドラえもんズでは、ドラパンなども出す予定です。

前作で残された謎を知りたい方、どうぞ次回作にご期待を…！

……あ、そういうえば、題名を発表してませんでした（爆）。

銀魂は一応江戸時代の話なので、『過去』。

クレしんは『現代』。

ドラえもんズは『未来』、といつわけで…。

『過去』？『現代』？『未来』！？大爆風を呼ぶ三つどもえ大合戦！！！

内容もめちゃくちゃなら、題名もめちゃくちゃであります（汗）。

近々、連載開始の予定です。こんな私、虹純晶の小説を、これからもよろしくお願いしますつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846d/>

~銀魂しんちゃん~ 大嵐を呼ぶ！踊る暇がありや映画を救え！！

2011年8月3日01時46分発行